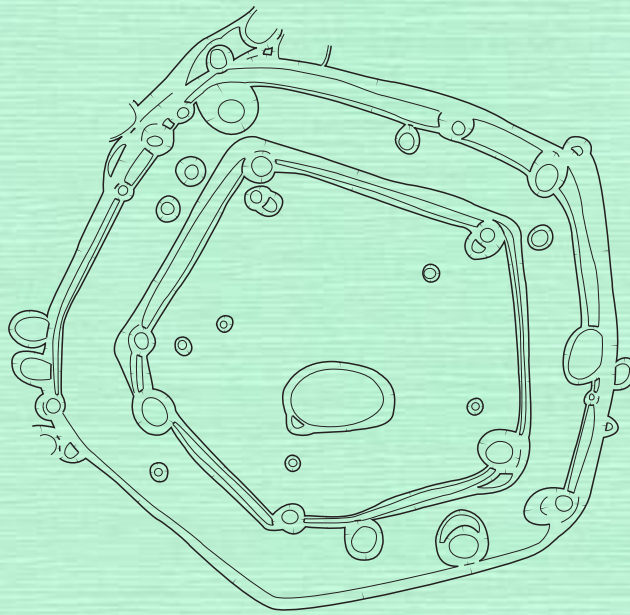


伏原遺跡Ⅰ

都市計画道路高知山田線発掘調査報告書Ⅰ



2010.1

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

伏原遺跡Ⅰ

都市計画道路高知山田線発掘調査報告書Ⅰ

2010.1

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

序

都市計画道路高知山田線は県の中心部と土佐山田町を結ぶ幹線道路として整備が進められており、一部はあけぼの道路としてすでに開通しています。今回の調査は都市計画道路高知山田線建設に伴うもので、平成18年度に調査を実施しました。伏原遺跡が所在する長岡台地は県内でも特に多くの遺跡が所在し、古墳時代には須恵器の窯跡や県内最大の伏原大塚古墳を始めとして多くの古墳など土佐の歴史を担ってきた地域であり古くから歴史と文化の息づく街として知られています。

伏原遺跡は以前から遺跡であることは知られていましたが、今回初めて発掘調査を行ったことによりこれまで知られていなかった地域の歴史がわかってきました。調査では弥生時代や古墳時代の土器が多量に出土し、また竪穴式住居跡も多数確認することができました。また、遺跡の周辺には多数の古墳があることが知られており、これらの古墳と関連のあった集落であることも窺われ、貴重な成果が得られました。

永く土の中に眠っている埋蔵文化財は発掘調査を行うことにより先人の知恵や文化を語り出します。本報告書が多くのの人々に埋蔵文化財や歴史により関心と理解をもたらし、地域の歴史研究の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査を実施するにあたってご配慮とご協力を頂いた地域の皆様方や関係者の方々に厚く御礼申し上げます。

平成22年1月

財団法人高知県埋蔵文化財センター
所長 小笠原孝夫

例言

1. 本書は(財)高知県文化財団が高知県中央東土木事務所より委託を受けて平成18年に実施した伏原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターが委託を受け実施した。
3. 伏原遺跡は高知県香美市土佐山田町楠目字伏原に所在する遺跡である。
4. 調査面積は1,593㎡、調査期間は平成18年9月26日から平成19年2月19日であった。整理作業及び報告書作成は平成19～21年度に実施した。
5. 発掘調査・整理作業は以下の体制で行った。

平成18年度

総括：埋蔵文化財センター所長 川島博海
総務：次長 森田尚宏, 総務課長 戸梶友昭, 主任 池野かおり
調査総括：調査課長兼企画調整班長 廣田佳久
調査担当：主任調査員 坂本幸繁, 主任調査員 徳平涼子

平成19年度

総括：埋蔵文化財センター所長 汲田幸一
総務：次長 森田尚宏, 総務課長 戸梶友昭, 主任 谷真理子
調査総括：調査課長兼企画調整班長 廣田佳久
調査担当：主任調査員 徳平涼子

平成20年度

総括：埋蔵文化財センター所長 小笠原孝夫
総務：次長 森田尚宏, 総務課長 恒石雅彦, 主任 谷真理子
調査総括：調査課長兼企画調整班長 廣田佳久
調査担当：主任調査員 徳平涼子

平成21年度

総括：埋蔵文化財センター所長 小笠原孝夫
総務：次長 森田尚宏, 総務課長 里見敦典, 主任 弘末節子
調査総括：調査課長兼企画調整班長 廣田佳久
調査担当：主任調査員 徳平涼子

6. 本書の執筆・編集は徳平が行った。現場写真は坂本と徳平が撮影し、遺物写真は徳平が撮影した。
7. 遺構については通し番号とし、SB(掘立柱建物跡)、ST(竪穴式住居跡)、SK(土坑)、SD(溝跡)、P(ピット)等の略号も使用した。掲載している挿図の縮尺はそれぞれに記載しており、方位Nは世界測地系による座標北である。
8. 遺物については縮尺1/4を基本とし、一部の遺物については、1/2(鉄製品等)に縮尺を変えているが、各挿図にはスケールを表示している。遺物番号は通し番号とした。
9. 発掘作業、整理作業は次の方々に行って頂いた。また、同センター諸氏より貴重な助言を頂いた。記して感謝する次第である。

発掘調査： 測量補助員 上松和彦, 現場作業員 池宣宏, 猪原昭二, 窪田泰昭, 黒岩幸子, 清藤滯
唯, 小松一仁, 小松清一, 小松悠悦, 佐々木龍男, 澤本昌明, 竹村君子, 田中穰, 中沢二男,
中沢英子, 西村多加, 久竹孝, 溝淵進一郎, 吉川誠喜, 吉川徳子

整理作業： 整理作業員 井澤久未, 門田美知子, 久家朋子, 高橋加奈, 高橋由香, 田村奈織美, 土居
初子, 永森亜紀, 西田由紀, 西村香織, 藤原ゆみ, 森睦美, 山崎由理, 山中美代子

10. 調査にあたっては、高知県中央東土木事務所、高知県教育委員会、香美市教育委員会に御協力を
頂いた。また、地元住民の方々に遺跡に対する深い御理解と御援助を頂き、厚く感謝の意を表し
たい。

11. 出土遺物は「06-10KF」と註記し、高知県立埋蔵文化財センターで保管している。

目次

第Ⅰ章 調査の契機と経過	
1. 調査の契機と経過	1
2. 確認調査	2
3. 調査の概要	2
4. 調査日誌抄	3
第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境	
1. 地理的環境	5
2. 歴史的環境	8
第Ⅲ章 調査の成果	
1. 層序	11
2. 堆積層出土遺物	12
(1) 西部第Ⅱ層出土遺物	13
(2) 中央部・東部第Ⅰ層出土遺物	13
(3) 中央部・東部第Ⅵ層出土遺物	14
(4) 中央部・東部第Ⅶ層出土遺物	18
3. 遺構と遺物	22
(1) 弥生時代～古墳時代初頭	22
(2) 古墳時代後期	70
(3) 古代	84
(4) 近世	92
第Ⅳ章 自然化学分析	
1. 試料	95
2. 分析方法	95
3. 結果	95
4. 考察	95
第Ⅴ章 考察	
1. 弥生時代から古墳時代初頭	97
2. 古墳時代後期	98
3. 古代	98
4. 近世	99
5. 多角形の竪穴式住居跡について	99
6. カマド跡について	102
7. まとめ	103

挿図目次

図 1	都市計画道路高知山田線関連遺跡及び調査区位置図(S = 1/5,000)	1
図 2	調査区位置図(S = 1/2,000)	2
図 3	作業風景	3
図 4	現地説明会風景	3
図 5	香美市位置図(300万分の一)	5
図 6	遺跡位置図(S = 1/50,000)	6
図 7	調査区西部セクション図	11
図 8	調査区東部セクション図	12
図 9	西部第Ⅱ層出土遺物実測図	13
図10	中央部・東部第Ⅰ層出土遺物実測図	14
図11	中央部・東部第Ⅵ層出土遺物実測図1(弥生土器・土師器)	15
図12	中央部・東部第Ⅵ層出土遺物実測図2(須恵器)	16
図13	中央部・東部第Ⅵ層出土遺物実測図3(土師質土器・黒色土器・土製品)	18
図14	中央部・東部第Ⅶ層出土遺物実測図1(弥生土器)	19
図15	中央部・東部第Ⅶ層出土遺物実測図2(弥生土器・土師器)	20
図16	中央部・東部第Ⅶ層出土遺物実測図3(須恵器・土製品・石製品・鉄製品)	21
図17	ST-1	23
図18	ST-1埋土1出土遺物実測図(弥生土器)	24
図19	ST-1埋土2出土遺物実測図1(弥生土器)	25
図20	ST-1埋土2出土遺物実測図2(弥生土器・土師器・土製品・石製品)	26
図21	ST-1埋土2集石出土遺物実測図(弥生土器・土師器・石製品)	27
図22	ST-1埋土3出土遺物実測図(弥生土器)	29
図23	ST-1埋土3～5出土遺物実測図(弥生土器・土師器・土製品・鉄製品)	31
図24	ST-1ピット出土遺物実測図(弥生土器・土製品)	32
図25	ST-2	33
図26	ST-2出土遺物実測図(弥生土器・土師器)	34
図27	ST-3	36
図28	ST-3出土遺物実測図(弥生土器・石製品)	36
図29	ST-4	37
図30	ST-4出土遺物実測図(弥生土器・土師器・土製品)	38
図31	ST-4ピット出土遺物実測図(弥生土器)	40
図32	ST-5	40
図33	ST-5出土遺物実測図(弥生土器)	41
図34	ST-6	43
図35	ST-6出土遺物実測図(弥生土器・土師器)	44

図36	ST-7	46
図37	ST-7出土遺物実測図1(弥生土器)	47
図38	ST-7出土遺物実測図2(弥生土器・土製品)	48
図39	ST-8	50
図40	ST-8出土遺物実測図(弥生土器・土師器)	52
図41	ST-9	54
図42	ST-9出土遺物実測図(弥生土器・土師器・石製品・鉄製品)	55
図43	SK-1～3・6出土遺物実測図	57
図44	SK-11	59
図45	SK-13	59
図46	SK-17	60
図47	SK-13・18出土遺物実測図	60
図48	SK-19	60
図49	SK-20出土遺物実測図	61
図50	SK-24	62
図51	SK-30	63
図52	SD-1	63
図53	SD-2	63
図54	SD-2出土遺物実測図	64
図55	SX-1・2出土遺物実測図	65
図56	P-1・2・4～10出土遺物実測図	67
図57	P-11～18出土遺物実測図	69
図58	ST-10	71
図59	ST-10カマド跡	71
図60	ST-10埋土1出土遺物実測図(弥生土器・土師器・須恵器・土製品)	72
図61	ST-10埋土2・3出土遺物実測図(弥生土器・土師器・須恵器)	73
図62	ST-10埋土4・5出土遺物実測図(弥生土器・土師器・須恵器・石製品)	74
図63	ST-10カマド跡出土遺物実測図(土師器)	76
図64	ST-11	77
図65	ST-11カマド跡	77
図66	ST-11出土遺物実測図(弥生土器・須恵器)	78
図67	ST-11カマド跡出土遺物実測図(土師器・須恵器)	78
図68	SK-32	79
図69	SK-34	79
図70	SK-34出土遺物実測図	79
図71	SD-4	79
図72	SD-5	80
図73	SD-5出土遺物実測図	80

図74	SX-3カマド跡	81
図75	SX-3出土遺物実測図	82
図76	SX-4カマド跡	82
図77	SX-4出土遺物実測図	83
図78	P-19～23出土遺物実測図	83
図79	SB-1	84
図80	SB-2	85
図81	SB-3	85
図82	SB-4	85
図83	SK-35	86
図84	SB-1・SK-35・37出土遺物実測図	86
図85	SK-38	87
図86	SK-38出土遺物実測図1(弥生土器・須恵器)	87
図87	SK-38出土遺物実測図2(土師質土器)	88
図88	SK-38出土遺物実測図3(土師器・黒色土器)	89
図89	SD-6	90
図90	SD-7	90
図91	SD-6・7出土遺物実測図	91
図92	P-24～26出土遺物実測図	92
図93	SD-11	93
図94	SD-11・13出土遺物実測図	93
図95	県内の多角形住居跡及び多角形のベット状遺構(S=1/200)	100

表目次

表1	遺跡一覧表	7
表2	竪穴式住居跡一覧表	94
表3	樹種同定結果	96

遺物観察表目次

遺物観察表1	107
遺物観察表2	108
遺物観察表3	109

遺物観察表4	110
遺物観察表5	111
遺物観察表6	112
遺物観察表7	113
遺物観察表8	114
遺物観察表9	115
遺物観察表10	116
遺物観察表11	117
遺物観察表12	118
遺物観察表13	119
遺物観察表14	120
遺物観察表15	121
遺物観察表16	122
遺物観察表17	123
遺物観察表18	124
遺物観察表19	125
遺物観察表20	126
遺物観察表21	127
遺物観察表22	128
遺物観察表23	129
遺物観察表24	130
遺物観察表25	131
遺物観察表26	132
遺物観察表27	133
遺物観察表28	134
遺物観察表29	135
遺物観察表30	136

写真図版目次

図版 1	調査前風景(西より)	図版 4	2区遺構完掘状態(西より)
	調査前風景(東より)		2区遺構完掘状態(東より)
図版 2	1区遺構検出状態(東より)	図版 5	3区上面遺構検出状態(南より)
	1区遺構完掘状態(東より)		3区上面遺構完掘状態(南より)
図版 3	2区遺構検出状態(西より)	図版 6	3区下面遺構検出状態(南より)
	2区遺構検出状態(東より)		3区下面遺構完掘状態(南より)

- 図版7 4区遺構検出状態(東より)
4区遺構完掘状態(東より)
- 図版8 5区遺構検出状態(南西より)
5区遺構完掘状態(南西より)
- 図版9 6区遺構完掘状態(西より)
調査区西部下層確認トレンチ(西より)
- 図版10 調査区西部北壁セクション(南より)
調査区中央部北壁セクション(南より)
- 図版11 ST-1完掘状態(南東より)
ST-1セクション(南より)
- 図版12 ST-2完掘状態(南より)
ST-4・5・11完掘状態(南東より)
- 図版13 ST-4完掘状態(南東より)
ST-6・7完掘状態(南より)
- 図版14 ST-8完掘状態(南より)
ST-8セクション(南より)
- 図版15 ST-8炭化物出土状態(南西より)
ST-9完掘状態(南西より)
- 図版16 ST-10完掘状態(南より)
ST-10セクション(南より)
- 図版17 SX-3完掘状態(東より)
SX-3カマド遺物出土状態(東より)
- 図版18 ST-10カマド完掘状態(南より)
ST-10カマド遺物出土状態(南より)
- 図版19 ST-4セクション(南より), ST-6セクション(南より), SK-35(東より), SK-35セクション(西より), SD-3(北より), SD-1セクション(西より), SD-7セクション(南より), SD-10セクション(南東より)
- 図版20 ST-11カマド袖石検出状態(南より), SX-3P-1半裁状態(南より), SX-4カマド検出状態(東より), 中央部・東部第Ⅵ層弥生土器甕(18)出土状態, 中央部・東部第Ⅵ層土師質土器杯(63)出土状態, 中央部・東部第Ⅶ層弥生土器鉢(101)出土状態, ST-1弥生土器鉢(149)出土状態, ST-1土師器器台(157)出土状態
- 図版21 ST-1弥生土器鉢(206)出土状態, ST-1鉄鏃(217)出土状態, ST-1弥生土器鉢(219)出土状態, ST-2弥生土器甕(224)出土状態, ST-2弥生土器鉢(227)出土状態, ST-2弥生土器鉢(229)出土状態, ST-2弥生土器甕(232)出土状態
- 図版22 ST-2弥生土器鉢(240)出土状態, ST-2土師器鉢(242)出土状態, ST-2P-1弥生土器(243~245)出土状態, ST-2P-1弥生土器手捏ね土器(246)出土状態, ST-3弥生土器壺(247)出土状態, ST-3弥生土器(248~250)出土状態, ST-4鉄鏃(272)出土状態, ST-4P-1弥生土器甕・鉢(273・275・276)出土状態
- 図版23 ST-5弥生土器甕(286)出土状態, ST-5弥生土器高杯(290)出土状態, ST-6弥生土器鉢(301)出土状態, ST-7弥生土器壺(306)出土状態, ST-7弥生土器鉢(335)出土状態, ST-8弥生土器鉢(353)出土状態, ST-8弥生土器鉢(361~363)出土状態, ST-8P-1弥生土器鉢(364)出土状態
- 図版24 ST-8P-15弥生土器鉢(368・369)出土状態, ST-9弥生土器甕・鉢(371・377)出土状態, ST-9弥生土器鉢(376)出土状態, ST-9土師器壺(378)出土状態, ST-9鉄鏃(380)出土状態, P-10土師器鉢(436)出土状態, P-18土師器鉢(444)出土状態, ST-10須恵器杯(456)出土状態
- 図版25 ST-10須恵器高杯(459)出土状態, ST-10須恵器壺(471)出土状態, ST-10須恵器蓋(480)出土状態, ST-10須恵器蓋・壺(481・484)出土状態, ST-10須

- 恵器高杯(488)出土状態, ST-10 カマド土師器甕・高杯(489~491)出土状態1, ST-10 カマド土師器甕・高杯(489~491)出土状態2, SD-5 弥生土器甕(504・505)出土状態
- 図版26 SX-3 土師器甕(514)出土状態, SX-3 土師器甕(515)出土状態, SX-3 土師器高杯(517)出土状態, P-19 須恵器杯(520)出土状態, SK-35 土師器盤(527)出土状態, SK-38 土師質土器杯(546)出土状態, SK-38 土師器甕・土師質土器杯出土状態, P-25 須恵器杯(577)出土状態
- 図版27 弥生土器(壺), 黑色土器(椀)
- 図版28 弥生土器(甕)
- 図版29 弥生土器(甕), 土師器(高杯)
- 図版30 弥生土器(壺・鉢), 土師器(器台), 須恵器(蓋・高杯)
- 図版31 弥生土器(壺・甕・高杯), 土師器(器台), 土製品(杓子形土器)
- 図版32 弥生土器(壺・高杯), 土師器(器台)
- 図版33 弥生土器(壺・甕), 土師器(甕), 須恵器(甗), 鉄製品(鉄鏃)
- 図版34 弥生土器(甕), 土師器(甕・高杯・甗)
- 図版35 弥生土器(壺・鉢), 須恵器(壺), 土師質土器(蓋・杯), 黑色土器(鉢)
- 図版36 弥生土器(鉢), 土師器(高杯), 鉄製品(鉄鏃)
- 図版37 弥生土器(鉢・手捏ね土器), 土師器(鉢)
- 図版38 弥生土器(鉢・手捏ね土器), 土師器(高杯), 石製品(石包丁), 鉄製品(鉄鏃)
- 図版39 弥生土器(壺・鉢)
- 図版40 弥生土器(壺・鉢)
- 図版41 弥生土器(壺・甕・鉢), 土師器(鉢・高杯), 須恵器(壺・甗)
- 図版42 弥生土器(壺・鉢・高杯・手捏ね土器・ミニチュア土器), 土製品(土錘), ガラス製品(小玉)
- 図版43 弥生土器(甕・鉢), 土師器(鉢), 土製品(有孔円盤・支脚)
- 図版44 弥生土器(鉢・手捏ね土器), 土師器(鉢), 土製品(土錘)
- 図版45 弥生土器(壺・ミニチュア土器), 土師器(甗), 須恵器(蓋・杯), 鉄製品(短刀)
- 図版46 弥生土器(鉢), 須恵器(蓋・杯・甕), 土師質土器(杯・皿), 鉄製品(刀子)
- 図版47 炭化材

付図目次

- 付図1 伏原遺跡 I 区弥生時代・古墳時代遺構平面図(S=1/200)
- 付図2 伏原遺跡 I 区古代・近世遺構平面図(S=1/200)

第 I 章 調査の契機と経過

1. 調査の契機と経過

国道195号道路改築事業は高知市周辺における幹線道路の慢性化する交通渋滞の解消、また歩道の整備により交通安全対策や幹線道路の機能を充実させ、地域の発展に重要な役目を果たすものと考えられ、建設工事が進められている。高知市から香美市土佐山田町中組までの区間は通称あけぼの道路として建設が進められており、すでに一部が開通している。工事区域は県内でも有数の遺跡地帯である長岡台地を通り、工事区域内に所在する遺跡の事前の発掘調査が行われている。平成6・7年には小籠遺跡、平成7年には山田三又遺跡、平成7・8年には陣山遺跡など多くの発掘調査が行われ、報告書も刊行されている。⁽¹⁾

今回の調査は、あけぼの道路の延長として高知県が計画している都市計画道路高知山田線の建設に伴う部分であり、工事区域内には伏原遺跡、ひびのきサウジ遺跡⁽²⁾など多くの遺跡が所在している。伏原遺跡は以前より土器が採集されており、周知の遺跡として知られている。平成18年に高知県中央東土木事務所より高知県埋蔵文化財センターに試掘調査の依頼があり、その結果を受けて土佐山田町伏原の用水路より東約80mの区間について本発掘調査を行うこととなった(伏原遺跡第I調査区)。また、今回の調査区の東側については平成19年から20年にかけて調査を行い、一部JRの東側も含め伏原遺跡第II調査区とし、平成19年度に調査を行ったひびのきサウジ遺跡についてもそれぞれ報告書を刊行する予定である。

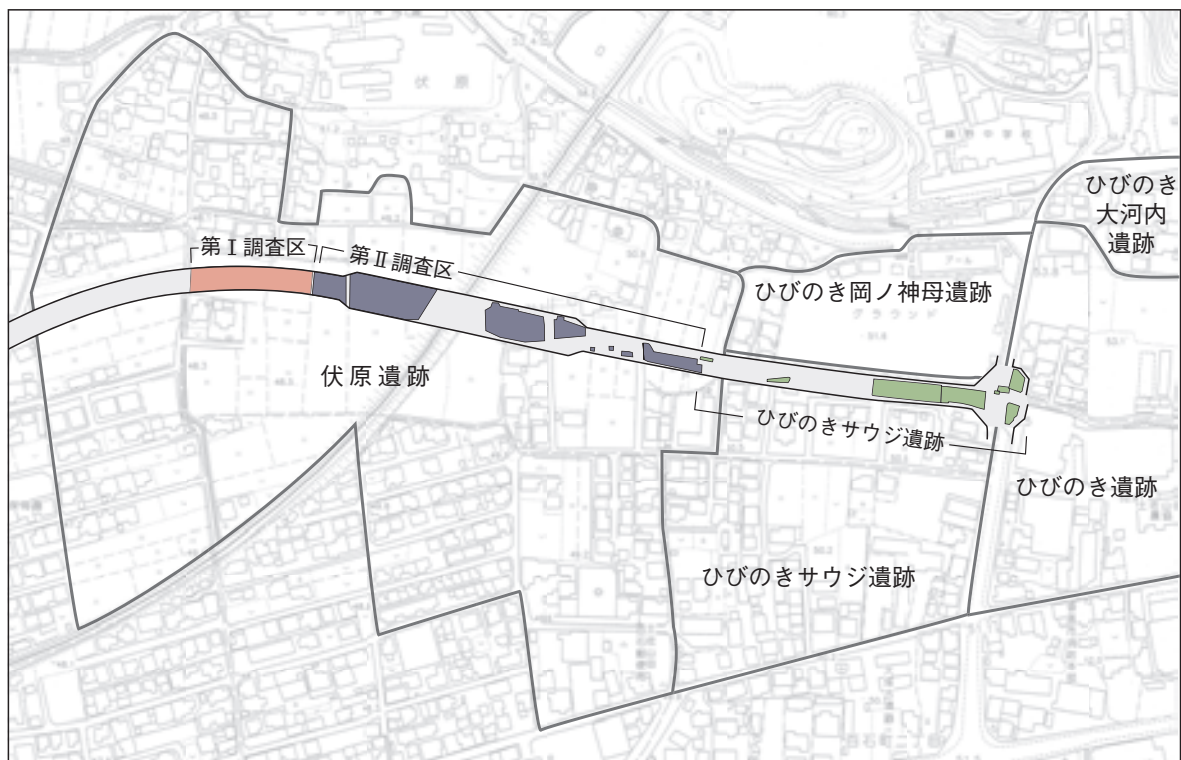


図1 都市計画道路高知山田線関連遺跡及び調査区位置図(S=1/5,000)

2. 確認調査

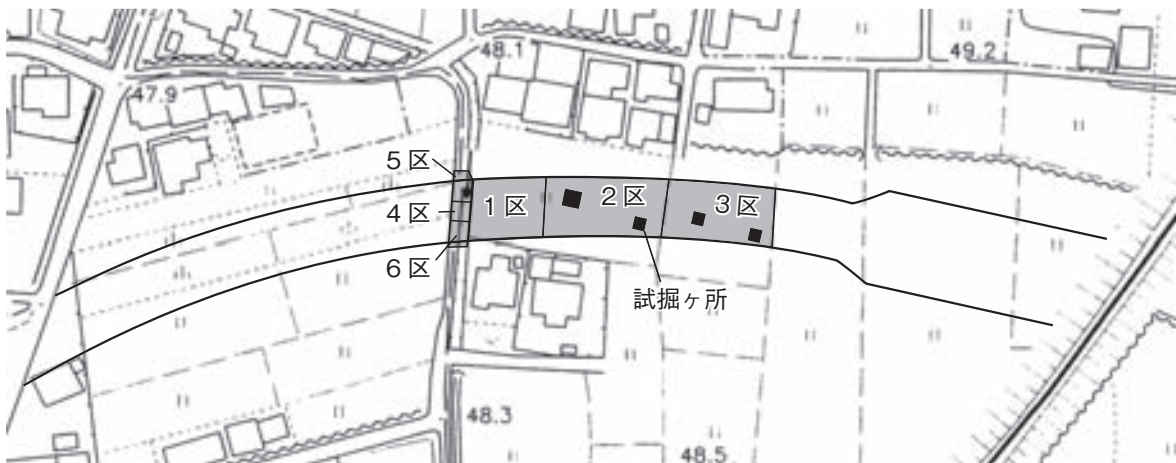


図2 調査区位置図(S=1/2,000)

2. 確認調査

確認調査は調査対象地に5m×5m, または4m×4mのトレンチを4箇所を設定した(TR-1~4)。掘削は機械力(ユンボ)と人力, 遺構検出については人力で行った。遺構は検出に留め, 測量した上で埋め戻した。

調査の結果, すべてのトレンチにおいて地表下21~30cmで弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての遺物包含層を確認した。また遺物包含層を除去した段階で, 遺構を検出した。遺構は比較的密度が高く, 竪穴式住居跡や溝跡, 土坑, 柱穴など多くの遺構が検出された。遺物は弥生土器や古墳時代の土師器のほか, 古代の遺物も出土し, 古代の遺構も存在する可能性がみられた。これらの状況より, 対象地の約1,220㎡について本調査が必要であると判断された。調査期間は平成18年9月26・27日の2日で, 調査面積は73㎡であった。

また, 今回の調査区の西側については, 平成14年度に試掘調査を行ったが, 遺物包含層及び遺構は検出されず, 本調査は必要ないものと判断された。

3. 調査の概要

伏原遺跡は以前より遺物が採集されており, 周知の遺跡として知られていたが, 発掘調査が行われるのは今回の調査が初めてである。調査では主に弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての遺構が確認され, 竪穴式住居跡などが確認された。竪穴式住居跡は円形と方形のものがあり, ベット状遺構を有するものもみられた。中でも注目されるのが, 五角形を呈する竪穴式住居跡で, ベット状遺構も五角形を呈していた。その他の時期では古墳時代後期の竪穴式住居跡, 古代の掘立柱建物跡, 近世の溝跡などが確認された。古墳時代後期の竪穴式住居跡は作り付けのカマドを有しており, カマド内より6世紀後半の甕や甌などが出土している。古代の遺物包含層は殆どが削平を受けたものとみられ, 検出された遺構は少ないが, 比較的規模の大きい掘立柱建物跡や, 幅1.5mを測る溝跡も確認されている。また, 隣接するひびのきサウジ遺跡では伏原遺跡と同時期の竪穴式住居跡などの遺構が確認されており, 東に調査が進めば一連の遺跡となる可能性が高い。

調査は土置き場や工事等の関係より1区, 2区, 3区の3箇所と, 西側の水路部分(4~6区)についても3回に分けて行い, 計6箇所行った。また, 3区は遺物包含層の残存状態が良く, 上層と下層の2回遺

構検出を行い、調査面積は1,163 m²(延べ面積1,593m²)であった。調査期間は平成18年10月16日から平成19年2月19日で、実働77日であった。

4. 調査日誌抄

平成18年

- | | | | |
|-----------|-------------------------------|-----------|-----------------------------|
| 10.16(月) | 安全柵を設置、機材を搬入し、1区の機械掘削を始める。 | 11.14(火) | 引き続き調査区東部の遺物包含層掘削及び遺構検出を行う。 |
| 10.17(火) | 機械掘削を終了し、遺物包含層の人力掘削を始める。 | 11.15(水) | 引き続き調査区東部の遺物包含層掘削及び遺構検出を行う。 |
| 10.18(水) | 引き続き遺物包含層掘削を行う。 | 11.16(木) | 調査区北部の遺物包含層掘削及び遺構検出を行う。 |
| 10.19(木) | 引き続き遺物包含層の人力掘削と遺構検出を行う。 | 11.17(金) | 引き続き調査区北部の遺物包含層掘削及び遺構検出を行う。 |
| 10.20(金) | 遺構検出を終了し、遺構検出状態の写真撮影を行う。 | 11.20(月) | 引き続き調査区北部の遺構検出を行う。 |
| 10.23(月) | 雨のため作業中止。 | 11.21(火) | 作業中止。 |
| 10.24(火) | 調査区西部より遺構の調査を始める。 | 11.22(水) | 調査区北西部の遺構検出及び遺構配置図の作成を行う。 |
| 10.25(水) | 引き続き調査区西部の遺構の調査を行う。 | 11.24(金) | 調査区の精査を行い、遺構検出状態の写真撮影をする。 |
| 10.26(木) | 調査区南部の遺構の調査を行う。 | 11.27(月) | 調査区南部より遺構の調査を始める。 |
| 10.27(金) | 調査区中央部の遺構の調査を行う。 | 11.28(火) | 調査区東部の遺構の調査を行う。 |
| 10.30(月) | 調査区北部の遺構の調査を行う。 | 11.29(水) | 引き続き調査区東部の遺構の調査を行う。 |
| 10.31(火) | 作業中止。 | 11.30(木) | 引き続き調査区東部の遺構の調査を行う。 |
| 11. 1 (水) | 調査区東部の遺構の調査及び遺構平面図の作成を行う。 | 12. 1 (金) | ST-2の調査を行い、ベッド状遺構を確認する。 |
| 11. 2 (木) | 引き続き調査区東部の遺構の調査及び遺構平面図の作成を行う。 | 12. 4 (月) | 調査区中央部の遺構の調査を行う。 |
| 11. 6 (月) | 調査区全面精査を行い、遺構完掘状態の写真撮影を行う。 | 12. 5 (火) | 引き続き調査区中央部の遺構の調査を行う。 |
| 11. 7 (火) | 1区の調査及び測量が終了し、埋め戻しを行う。 | 12. 6 (水) | ST-10よりカマドを確認する。 |
| 11. 8 (水) | 2区の機械掘削を始める。 | 12. 7 (木) | 4区の調査を行う。 |
| 11. 9 (木) | 引き続き機械掘削を行う。遺物包含層の人力掘削を始める。 | 12. 8 (金) | 引き続き4区の調査を行う。 |
| 11.10(金) | 機械掘削終了。引き続き人力掘削を行う。 | 12.11(月) | ST-1・10の調査を行う。 |
| 11.13(月) | 調査区東部の遺物包含層掘削及び遺構 | 12.12(火) | ST-1の調査を行う。 |
| | 検出を行う。 | 12.13(水) | 雨のため作業中止。 |



図3 作業風景



図4 現地説明会風景

4. 調査日誌抄

12.14(木)	雨のため作業中止。				う。5・6区の調査を行う。
12.15(金)	ST-1・10の調査を行う。	1.19(金)			調査区西部より下層の遺構の調査を始める。5・6区の調査を終了する。
12.18(月)	ST-1の調査を行う。				
12.19(火)	引き続きST-1の調査を行う。	1.22(月)			ST-4・5・8・11の調査を行う。
12.20(水)	引き続きST-1の調査を行う。	1.23(火)			ST-4・8の調査を行う。
12.21(木)	ST-1・10のバンクの写真撮影をする。	1.24(水)			ST-8の調査を行う。
12.22(金)	2区の全面精査及び平面測量を行う。	1.25(木)			引き続きST-8の調査を行う。
12.25(月)	遺構完掘状態の写真撮影及び平面測量を行う。	1.26(金)			ST-8の床面より炭化木が出土し、写真撮影を行う。
12.26(火)	雨のため作業中止。	1.29(月)			平面測量を行う。
12.27(水)	引き続き平面測量を行う。	1.30(火)			ST-7・8の調査を行う。
12.28(木)	平面測量及びレベル測量を終了し、2区の調査が完了する。	1.31(水)			調査区中央部の遺構の調査を行う。
平成19年		2.1(木)			ST-6・7の調査を行う。
1.4(木)	3区の機械掘削を始める。	2.2(金)			引き続きST-6・7の調査を行う。
1.5(金)	機械掘削を終了し、上面の遺構検出を行う。	2.5(月)			ST-6・7・9の調査を行う。
1.9(火)	引き続き遺構検出を行い、上面の遺構検出状態の写真撮影を行う。	2.6(火)			ST-9の調査及び平面測量を行う。
1.10(水)	上面の遺構の調査を始める。	2.7(水)			引き続きST-9の調査及び平面測量を行う。
1.11(木)	上面の遺構の調査及び測量が終了し、遺構完掘状態の写真撮影を行う。	2.8(木)			遺構の調査がほぼ終了する。
1.12(金)	東より遺物包含層の人力掘削を始める。	2.9(金)			全面精査を行い、遺構完掘状態の写真撮影を行う。
1.15(月)	調査区中央部の遺物包含層の人力掘削を行う。	2.13(火)			平面測量を行う。
1.16(火)	調査区西部の遺物包含層の人力掘削を行う。	2.14(水)			雨のため作業中止。
1.17(水)	引き続き遺物包含層の人力掘削を行う。3区に併行して5・6区の調査を始める。	2.15(木)			前日の雨のため、水汲みを行う。
1.18(木)	下面の遺構検出が終了し、写真撮影を行	2.16(金)			精査を行い、記者発表を行う。
		2.18(日)			現地説明会を行う。
		2.19(月)			下層確認調査を行い、調査をすべて完了する。

註

- (1) 『小籠遺跡-あけぼの道路建設工事に伴う発掘調査報告書-』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第20集 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1995
『小籠遺跡Ⅱ-あけぼの道路建設工事に伴う発掘調査報告書-』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第24集 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1996
『小籠遺跡Ⅲ-あけぼの道路建設工事に伴う発掘調査報告書-』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第29集 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1997
『山田三又遺跡-あけぼの道路建設工事に伴う発掘調査報告書-』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第33集 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1997
『陣山遺跡・陣山北三区遺跡-あけぼの道路建設工事に伴う発掘調査報告書-』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第31集 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1997
- (2) 『ひびのきサウジ遺跡Ⅱ-土佐山田観光開発株式会社寮建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第7集 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1992
『ひびのきサウジ遺跡発掘調査報告書』土佐山田町埋蔵文化財調査報告書第8集 土佐山田町教育委員会 1990

第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境

1. 地理的環境

伏原遺跡が所在する香美市土佐山田町は平成18年3月に香北町、物部村と合併し、香美市となった。県都高知市の東方約15kmに位置し、西は南国市、南は香南市と安芸市、北は大豊町、東は徳島県と接している。

香美市の面積は538km²を有し、その約9割は森林が占める。大きく山間部と平野部に分かれ、北部の山間部は分水嶺を越えた吉野川系にもおよんでおり、太平洋側は急斜面をなし、小さな谷が入り込みながら平野部に接している。平野部は高知県下最大の穀倉地帯である香長平野の北東部に位置する。一級河川である物部川流域に位置し、年間降水量の多い地域でもある。物部川は剣山山系の白髪山を源流とし、中上流域にかけては急峻な山地に囲まれた峡谷をほぼ南西に流れ、流路に沿った上流への道は古来阿波国への最短ルートとして知られている。物部川に沿う山間部は河岸段丘が発達し、土佐山田町神母ノ木付近で流路を南に変える。下流域は山間部から急激に開けた扇状地である香長平野を南流して土佐湾に注いでいる。香長平野は不整形の扇状地で、物部川の両岸には古期扇状地の砂礫層からなる洪積台地を形成しており、長岡台地と称される。長岡台地は南国市から土佐山田町まで約5km連なり、標高は土佐山田町付近では約50mに達し、南西に向かって緩やかに傾斜し、南国市後免付近では約15mとなる。長岡台地は県内でも極めて遺跡が集中する地域であり、縄文時代から近世にかけての各時代の遺跡が連綿と営まれており、古来集落の立地として格好の地であったものとみられる。伏原遺跡も長岡台地上に立地し、物部川河口から約12km上流に位置する。

香美市の産業は農業を中心とする第一次産業であり、物部川と国分川流域の沖積平野は水田地帯が広がる。台地面には自然の河川がなく江戸時代以前は開発が遅れていたが、江戸時代初期に野中兼山によって灌漑水路が設けられたことにより、かつては米の二期作や畑作が盛んであった。現在も水田地帯の一部であるが、野菜やたばこの栽培も盛んであり、近年ではビニールハウスの施設園芸も増加してきている。また、市域のほとんどを森林地帯が占めていることもあり、林業が盛んで良材

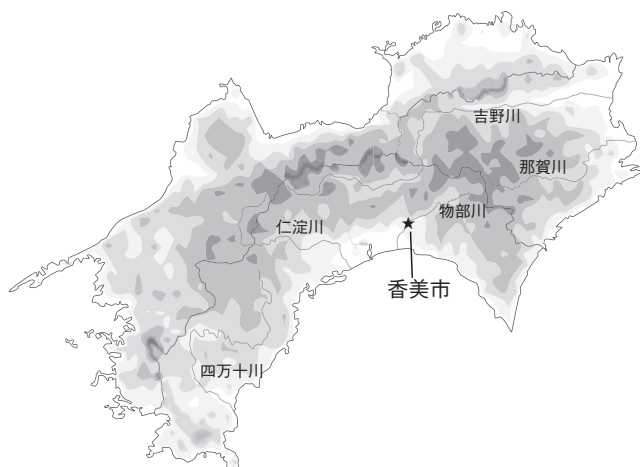


図5 香美市位置図 (300万分の一)

1. 地理的環境



図6 遺跡位置図 (S = 1/50,000)

表1 遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	東谷1・2号窯跡	奈良・平安	51	林田シタノチ遺跡	古墳～平安
2	小山田1号墳	古墳	52	林田1・2号墳	古墳
3	小山田2・3号窯跡	古墳・奈良	53	林田遺跡	弥生～中世
4	林ノ谷1・2・3号窯跡	古墳～平安	54	林田城跡	中世
5	西ノ内1号墳	古墳	55	加茂ハイタノクボ遺跡	奈良～平安
6	西ノ内窯跡	古墳	56	日吉神社遺跡	平安
7	椎山1・2号墳	古墳	57	山本前田窯跡	平安
8	新改2・3・4号墳	古墳	58	加茂遺跡	古墳～中世
9	亀ヶ谷1・2号墳	古墳	59	賀茂神社西遺跡	古墳～中世
10	田村氏古墳	古墳	60	加茂城跡	中世
11	次郎ヶ谷西古墳	古墳	61	烏ヶ森城跡	中世
12	西久保古墳	古墳	62	町田遺跡	弥生～中世
13	須江ツカアナ古墳	古墳	63	町田堰東遺跡	縄文～中世
14	屋舗田丸遺跡	中世	64	野村丸遺跡	弥生～平安
15	タンガン古墳	古墳	65	包末井ノ内遺跡	縄文・古墳～平安
16	タンガン窯跡	飛鳥	66	金地遺跡	弥生・平安・中世
17	須江上段遺跡	古墳～近世	67	芝田遺跡	古墳～中世
18	前山1・2・3号墳	古墳	68	垣添遺跡	古墳～中世
19	三島遺跡	弥生～平安	69	岩村遺跡群	弥生・中世・近世
20	山田三ツ又遺跡	古墳～平安	70	大領遺跡	古墳～中世
21	深坂古墳	古墳	71	西佐古遺跡	平安・中世
22	中沢古墳	古墳	72	龜山窯跡	平安
23	杖坂東古墳	古墳	73	アゴデン白岩窯跡	平安
24	溝測古墳	古墳	74	溝測山古墳	古墳
25	桜ヶ谷古墳	古墳	75	母代寺遺跡	平安・中世
26	前行山1号墳	古墳	76	深測北遺跡	弥生～中世
27	前行山2号墳	古墳	77	横落遺跡	弥生～平安
28	大元神社北古墳	古墳	78	平杭遺跡	弥生・古墳
29	大元神社古墳	古墳	79	高添遺跡	弥生～平安
30	神母古墳	古墳	80	修理田遺跡	弥生～平安
31	予岳古墳	古墳	81	深測遺跡	縄文～近世
32	旧予岳寺跡	弥生～中世	82	西上野遺跡	弥生
33	山ノ間遺跡	中世	83	深測城跡	中世
34	山ノ間古墳	古墳	84	大谷城跡	中世
35	メウカイ遺跡	弥生～中世	85	大谷古墳	古墳
36	長谷川丸遺跡	古墳～平安	86	曾我遺跡	弥生～中世
37	伏原遺跡	弥生～古代・近世	87	下分遠崎遺跡	弥生
38	鏡野学園古墳	古墳	88	西野遺跡群	弥生・古墳・平安
39	小倉山古墳	古墳	89	下ノ坪遺跡	弥生～平安
40	ひびのきサウジ遺跡	弥生～近世	90	北地遺跡	弥生
41	楠目城跡	中世	91	田村遺跡群	縄文～近世
42	ひびのき遺跡	弥生・古墳	92	田村城跡	中世
43	伏原大塚古墳	古墳	93	千屋城跡	中世
44	楠目遺跡	弥生～近世	94	中屋敷遺跡	弥生
45	稻荷前遺跡	弥生～近世	95	高田遺跡	平安
46	黒土遺跡	弥生	96	野口遺跡	弥生～中世
47	原遺跡	弥生～近世	97	浜口遺跡	弥生・古墳
48	原南遺跡	弥生～近世	98	住吉砂丘遺跡	弥生
49	高柳遺跡	弥生～中世	99	東野土居遺跡	古墳～平安
50	宮ノ口遺跡	古墳～平安	100	平井遺跡	古墳～平安

2. 歴史的環境

を多く産出する。工業では地場産業の打刃物などがある。現在の市街地は長岡台地上に広がり、台地に横断するようにJR土讃線や国道195号が通っている。また、東に位置する三宝山の中腹には国指定遺跡および天然記念物である龍河洞があり、県下でも有数の観光地となっている。

2. 歴史的環境

物部川流域の歴史は後期旧石器時代まで遡ることができる。旧石器時代の遺跡は少なく、発掘調査が行われた遺跡は皆無である。物部川右岸に位置する佐野楠目山遺跡では角錐状石器が十数点採取されているほか、中流域の長野南遺跡では旧石器時代の可能性のある石器が採取されている。

縄文時代の遺跡は早期に出現する。香美市繁藤に位置する飼古屋岩陰遺跡⁽¹⁾では早期の押型文土器や中期、後期の遺物と多数のサヌカイト製の石鏃が出土している。物部川中流域の香美市美良布遺跡⁽²⁾では厚手無文土器が出土している。最近の調査では香美市刈谷我野遺跡⁽³⁾で集落が確認されており、遺物がまとまって出土している。前期の遺跡は物部川流域では少なく、香長平野北端の山麓に位置する南国市栄エ田遺跡⁽⁴⁾などで少量の遺物が出土している。中期の遺跡も少ないが、香美市林田シタノヂ遺跡⁽⁵⁾では土坑より中期末の遺物が出土しているほか、下流域の南国市田村遺跡群⁽⁶⁾では舟元式土器が出土している。後期になると県下でも遺跡数が増加し、香長平野では田村遺跡群のほか、栄エ田遺跡などで遺物が出土している。田村遺跡群では後期中葉の片粕式土器とともに多量の打製石斧や石錐が出土しているほか、鐘崎式土器も出土している。晩期には美良布遺跡で土坑を確認しており、また栄エ田遺跡や林田シタノヂ遺跡では突帯文土器が出土している。

弥生時代になると香長平野では県下でも遺跡が集中するが、長岡台地では前期の遺跡は確認されていない。香長平野に位置する田村遺跡群では前期初頭の松菊里型住居を含む集落が確認されているほか、大陸系磨製石器や初期の遠賀川式土器などが出土している。中期から後期にかけても集落は存続し、特に中期後葉から後期前半にかけては竪穴式住居400棟以上、掘立柱建物跡200棟以上が確認されており、拠点集落として盛況期を迎える。この時期には周辺においても集落が増加し、物部川左岸の香南市下ノ坪遺跡⁽⁷⁾や上岡遺跡のほか本村遺跡⁽⁸⁾など丘陵や山腹にも集落が出現する。また、この地域の青銅器は銅鐸と中広形・広形銅矛が混在して出土するという特徴がみられる。弥生時代後期後半になると集落遺跡の立地に変化がみられ、台地上またはその周辺地域に多くの遺跡が展開する。伏原遺跡が所在する長岡台地には岩村遺跡群⁽⁹⁾、金地遺跡⁽¹⁰⁾、小籠遺跡⁽¹¹⁾、東崎遺跡⁽¹²⁾、ひびのき遺跡⁽¹³⁾、ひびのきサウジ遺跡⁽¹⁴⁾など多くの遺跡がみられ、遺跡数が飛躍的に増加するが、ほとんどの遺跡は古墳時代初頭には終焉を迎える。

古墳時代の集落は少ないが、伏原遺跡に隣接するひびのきサウジ遺跡では古墳時代後期の竪穴式住居跡が確認されている。古墳が出現するのは後期からで、香美市の山麓部には横穴式石室を有する古墳が多くみられ、県下では最も密に分布する。伏原遺跡の周辺でも鏡野学園古墳や小倉山古墳、四国最大の方墳である伏原大塚古墳⁽¹⁵⁾など多くの古墳が築かれている。

古代においては長岡台地北西部に位置する国分・久礼田地区周辺には土佐国衙跡⁽¹⁶⁾や土佐国分寺跡⁽¹⁷⁾、比江廃寺跡⁽¹⁸⁾、野中廃寺跡等の官衙関連遺跡が所在し、古代土佐の政治の中心地として展開する。国分川流域の土佐山田町須江や新改には窯跡が多く所在し、比江廃寺跡の瓦を焼成したとされるタンガン窯跡や土佐国分寺の平瓦を焼成した東谷窯跡などもみられる。物部川右岸に位置する大領遺跡は「大領」の地名が残り、香美郡の郡衙推定地とされている。また、物部川下流域の香長平野に

は条里地割が残っており、古代の遺跡が多くみられる。また、下ノ坪遺跡では大型の掘立柱建物跡などが確認されているほか、全国でも珍しい四仙騎獣八稜鏡や円面硯、緑釉陶器などが出土している。その他、香南市では郷家の存在が推定される曾我遺跡⁽¹⁹⁾や平安京大極殿や藤原氏の氏寺である法勝寺に使用された瓦を焼いたとされる亀山窯跡、二彩陶器の出土や瓦窯跡、工房跡の遺構が検出された深淵遺跡⁽²⁰⁾、田村遺跡群では大型の掘立柱建物跡が確認されるなど官衙関連遺跡が多くみられる。

中世には山田氏が楠目城を拠点として領主制支配を行うが、天文年間には長宗我部氏に攻められて滅亡する。寺院跡としては山田氏が建立したとされる旧予岳寺跡⁽²¹⁾、屋敷跡では高柳土居城跡⁽²²⁾、岩村遺跡群⁽²³⁾など多くの遺跡がみられる。高柳遺跡⁽²⁴⁾では12～13世紀の遺構が検出されているほか、高柳土居城跡や岩村土居城跡では堀跡が確認されている。

近世には現在の市街地を中心に町作りが行われるようになり、物部川には野中兼山によって山田堰や用水路が築かれ、長岡台地の開発が進んだ。発掘調査では岩村遺跡群で屋敷地を囲む堀が検出されているほか、屋舗田丸遺跡⁽²⁵⁾などでも国産陶磁器や貿易陶磁器が出土している。

註

- (1) 『飼古屋岩陰遺跡発掘調査報告書－四国横断自動車道開設に伴う発掘調査報告－』日本道路公団・高知県教育委員会 1983
- (2) 『美良布遺跡』香北町埋蔵文化財発掘調査報告書第2集 香北町教育委員会 1991
- (3) 『刈谷我野遺跡Ⅰ－個人住宅建築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』香北町埋蔵文化財発掘調査報告書第3集 香北町教育委員会 2005
- (4) 『栄エ田遺跡－四国横断自動車道(南国～伊野)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第22集 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1995
- (5) 『林田シタノヅ遺跡－農業基盤総合整備事業に伴う発掘調査報告書－』土佐山田町埋蔵文化財報告書第13・16集 土佐山田町教育委員会 2004
『林田シタノヅ遺跡』土佐山田町埋蔵文化財報告書第15集 土佐山田町教育委員会 1993
- (6) 『田村遺跡群Ⅱ－高知空港再拡張に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第85集 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター・高知県教育委員会 2004
- (7) 『下ノ坪遺跡－本文編－農業農村活性化農業構造改善事業上岡地区区画整理工事に伴う発掘調査報告書－』野市町埋蔵文化財発掘調査報告書第6集 野市町教育委員会 1998
- (8) 『高知県野市町本村遺跡調査報告書』野市町埋蔵文化財調査報告書第3集 野市町教育委員会 1993
- (9) 『岩村地区県営圃場に伴う岩村遺跡群発掘調査概要』南国市埋蔵文化財調査報告書第15集 南国市教育委員会 1996
- (10) 『金地遺跡』南国市教育委員会 1992
『金地遺跡Ⅱ－土佐精機新工場建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第14集 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1994
- (11) 『小籠遺跡－あけぼの道路建設工事に伴う発掘調査報告－』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第20集 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1995
- (12) 『東崎遺跡－県立高知農業高校体育館建設に伴う発掘調査報告書－』(財)高知県文化財団 1991
- (13) 『ひびのき遺跡』高知県土佐山田町教育委員会 1977
- (14) 『ひびのきサウジ遺跡Ⅱ－土佐山田観光開発株式会社社寮建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第7集 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1992

2. 歴史的環境

- 『ひびのきサウジ遺跡発掘調査報告書』土佐山田町埋蔵文化財調査報告書第8集 土佐山田町教育委員会 1990
- (15) 『伏原大塚古墳』土佐山田町埋蔵文化財調査報告書第14集 高知県土佐山田町教育委員会 1993
- (16) 『土佐国衙跡発掘調査報告書第10集－金屋・神ノ木戸地区の調査－』高知県埋蔵文化財調査報告書第28集 高知県教育委員会 1990
- (17) 『史跡土佐国分寺跡－現状変更に伴う発掘調査概要報告書－』南国市教育委員会 1989
『土佐国分寺跡－第一次発掘調査概報－』南国市教育委員会 1988
『土佐国分寺跡－第二次発掘調査概報－』南国市教育委員会 1989
『土佐国分寺跡－第三次発掘調査概報－』南国市教育委員会 1991
- (18) 『比江廃寺跡発掘調査概報』高知県埋蔵文化財報告書第33集 高知県教育委員会 1991
『比江廃寺跡Ⅲ－平成6・7年度の確認調査報告書－』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第97集 (助高知県文化財団埋蔵文化財センター 2007
- (19) 『曾我遺跡発掘調査報告書』野市町埋蔵文化財調査報告書第2集 野市町教育委員会 1989
- (20) 『深淵遺跡発掘調査報告書』野市町埋蔵文化財調査報告書第1集 野市町教育委員会 1989
- (21) 『旧予岳寺跡・予岳遺跡ツエガ谷地区－山田北部県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告書－』土佐山田町埋蔵文化財報告書第25集 土佐山田町教育委員会 2003
- (22) 『高柳遺跡・高柳土居城跡発掘調査報告－明治地区圃場整備工事関連遺跡発掘調査－』土佐山田町埋蔵文化財報告書第11集 土佐山田町教育委員会 1992
- (23) (9)に同じ
- (24) (22)に同じ
- (25) 『屋舗田丸遺跡－新改中部地区圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』土佐山田町埋蔵文化財報告書第33集 土佐山田町教育委員会 2002

参考文献

- 『土佐山田町史』土佐山田町教育委員会 1979

第三章 調査の成果

1. 層序

調査地は東から西に緩やかに傾斜し、遺構検出面の高さは約50cmの比高差が認められた。調査区西部は遺跡の縁辺部であり、調査区中央部及び東部とは異なる堆積状況であった。調査区西部は遺物包含層は一層で、一部は攪乱及び削平を受けており、薄い堆積であった。調査区中央部及び東部は弥生時代から古墳時代にかけての遺物包含層と古代の遺物包含層を確認し、遺物も調査区中央部及び東部で非常に多く出土した。

調査区西部では厚さ20～40cmの客土下に以下の堆積がみられた。(図7)

- 第Ⅰ層 黒色シルト質細粒砂層で、多量の3mm大の礫と少量の1cm大の礫を含む。
- 第Ⅱ層 暗褐色礫質細粒砂層で、8cm大の礫を多く含む。
- 第Ⅲ層 にぶい黄褐色極粗粒砂質礫層で、3～10cm大の礫を多く含む。
- 第Ⅳ層 褐色細粒砂質シルト層で、1cm大の礫を多く含む。

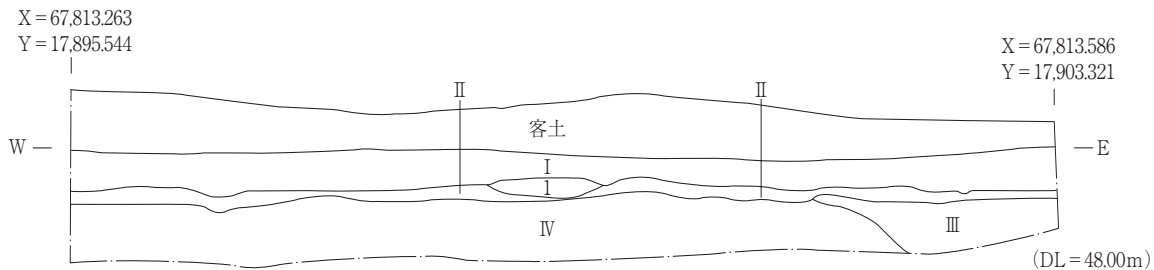
第Ⅰ層は耕作土で、調査区西部及び中央部でみられた。厚さ10～15cmを測り、調査区西部と中央部では約35cmの比高差がみられた。

第Ⅱ層は遺物包含層である。調査区西部では厚さ5～10cmを測る。

第Ⅲ・Ⅳ層は自然堆積層で、礫を非常に多く含んでいた。遺構検出は第Ⅲ層の上面で行った。

調査区東部では以下の堆積が認められた。(図8)

- 第Ⅰ層 黒褐色シルト質細粒砂層で、5mm大の礫を含む。
- 第Ⅱ層 暗褐色シルト質細粒砂層で、5mm大の礫と炭化物を含む。
- 第Ⅲ層 黒褐色シルト質細粒砂層で、粗砂を多く含む。
- 第Ⅳ層 黒褐色シルト質細粒砂層で、粗砂を少し含む。
- 第Ⅴ層 暗褐色シルト質細粒砂層で、粘性が弱く、粗粒砂を多く含む。



層位

- 第Ⅰ層 黒色(10YR2/1)シルト質細粒砂層で、多量の3mm大の礫と少量の1cm大の礫を含む。(耕作土)
- 第Ⅱ層 暗褐色(10YR3/3)礫質細粒砂層で、8cm大の礫を多く含む。(遺物包含層)
- 第Ⅲ層 にぶい黄褐色(10YR5/4)極粗粒砂質礫層で、3～10cm大の礫を多く含む。
- 第Ⅳ層 褐色(10YR4/4)細粒砂質シルト層で、1cm大の礫を多く含む。

遺構埋土

- 1. 黒褐色(10YR2/2)シルト質細粒砂層で、多量の3mm大の礫と少量の1cm大の礫を含む。

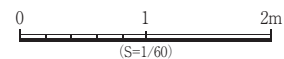


図7 調査区西部セクション図

2. 堆積層出土遺物

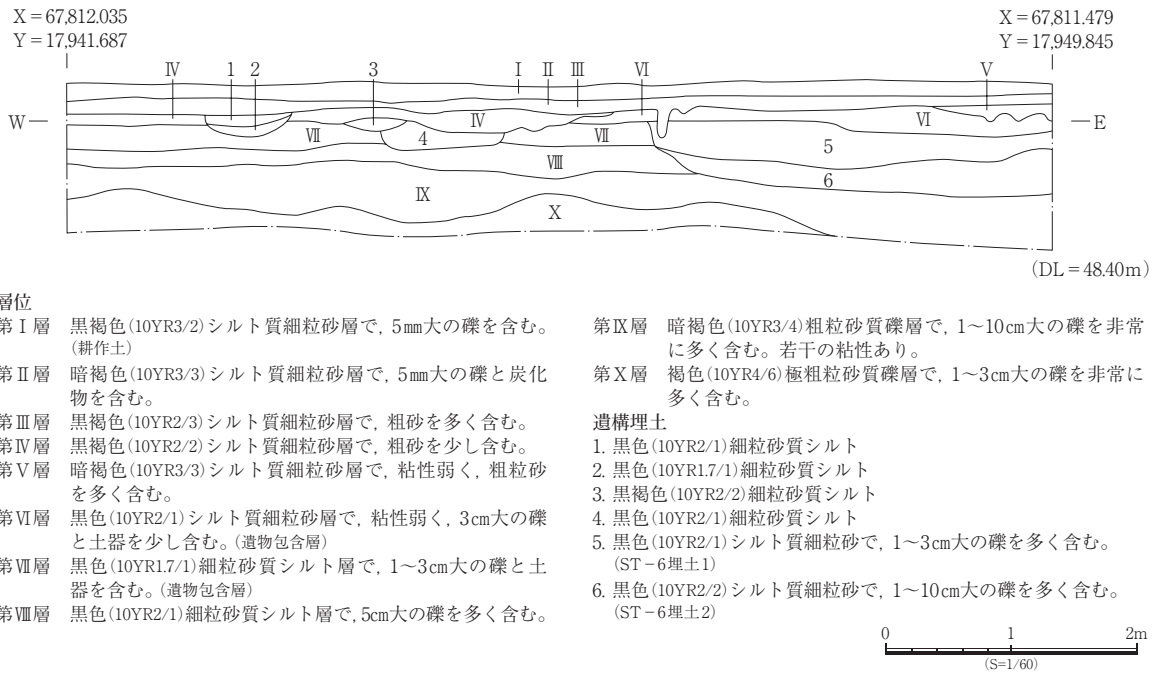


図8 調査区東部セクション図

第Ⅵ層 黒色シルト質細粒砂層で、粘性は弱く、少量の3cm大の礫と土器を含む。

第Ⅶ層 黒色細粒砂質シルト層で、1~3cm大の礫と土器を含む。

第Ⅷ層 黒色細粒砂質シルト層で、5cm大の礫を多く含む。

第Ⅸ層 暗褐色粗粒砂質礫層で、若干の粘性があり、1~10cm大の礫を非常に多く含む。

第Ⅹ層 褐色極粗粒砂質礫層で、1~3cm大の礫を非常に多く含む。

第Ⅰ層は耕作土で、調査区東部でみられた。厚さは5~15cmを測る。

第Ⅱ層は旧耕作土で、一部でのみみられた。厚さは5~15cmを測る。

第Ⅲ・Ⅳ層は調査区東部でのみみられた土層で、厚さは5~20cmを測る。

第Ⅴ層は調査区東部の極一部でのみみられた土層で、厚さは5~15cmを測る。

第Ⅵ層は遺物包含層で、一部でのみみられた。厚さは約10cmを測り、ほぼ水平に堆積する。第Ⅵ層の下面で一回目の遺構検出を行った。

第Ⅶ層は弥生時代後期後葉から古墳時代初頭の遺物包含層で、調査区全面でみられた。調査区東部では厚さは約20cmを測り、東から西に緩やかに傾斜する。

第Ⅷ層は自然堆積層で、上面で二回目の遺構検出を行った。調査区東部の一部でみられ、厚さは約10~25cmを測る。

第Ⅸ・Ⅹ層も自然堆積層である。砂礫層で、非常に起伏が激しく、第Ⅷ層がみられない地点では第Ⅸ層の上面で遺構検出を行った。

2. 堆積層出土遺物

今回の調査では、調査区西部と中央部・東部で土層の堆積状況が異なっており、調査区西部と調査区中央部・東部の堆積層出土遺物について分けて記述する。なお、調査区西部の第Ⅱ層と弥生時代から古墳時代にかけての遺物包含層である調査区中央部・東部の第Ⅶ層は対応するものとみられるが、

調査区西部は攪乱及び削平を受けており、調査区中央部・東部の第Ⅵ層に対応する遺物包含層が確認されず、第Ⅱ層中より弥生時代から古代にかけての遺物が出土した。

(1) 西部第Ⅱ層出土遺物

弥生土器(図9-1~4)

1~3は壺である。1・2は広口壺で、口縁部が大きく外反する。1は口縁部の約1/5が残存し、調整は粗いハケで、口縁端部はヨコナデ、外面の下半にはナデを施す。2は口縁部の約1/8が残存する。口縁端部を若干拡張し、ハケ調整の後櫛描の波状文を施す。内外面ともハケ調整を施すが、内面は摩耗するため不明瞭である。3は底部の約1/2が残存する。平底を呈し、内面はナデ調整、外面は胴部がタタキ後ハケ調整、底部がタタキ後ナデ調整である。

4は鉢で、底部の約3/4が残存する。平底で、内底面が落ち込む。調整は内面がナデで指頭圧痕が残る。外面は体部がタタキ後ナデ調整、底部がナデ調整である。

須恵器(図9-5~10)

5~7は杯蓋である。5は天井部が平らになるもので、約1/4が残存する。調整は回転ナデで、天井部外面には回転ヘラケズリを施す。6・7はつまみが付くタイプのものである。6はつまみが完存する。調整は内面が回転ナデで、外面は回転ヘラケズリである。7は口縁部の約1/6が残存する。天井部は平らで、口縁端部は丸く収める。調整は回転ナデである。

8は杯で、低く直立する高台を有する。調整は内面がナデ、外面は体部が回転ナデ、高台内は回転ヘラ切り後ナデを加える。

9は小型の高杯で、脚部の一部が残存する。調整は回転ナデで、一部に自然釉が付着する。

10は壺とみられ、口縁部の一部が残存する。口縁部は受け口状を呈し、端部は四角く収める。調整は回転ナデで、外面には櫛描の波状文を二条施す。

(2) 中央部・東部第Ⅰ層出土遺物

弥生土器(図10-11・12)

11は甕の底部で、約1/2が残存する。平底を呈し、調整は内面が横方向のハケで底部にナデを加える。外面は胴部がタタキ後ナデ調整で、底部はナデ調整である。

12は高杯で、脚部の約1/2が残存する。脚部はハの字状に開く。調整は杯底部と外面がミガキ、脚内面はナデで、裾部にはわずかにハケが残る。

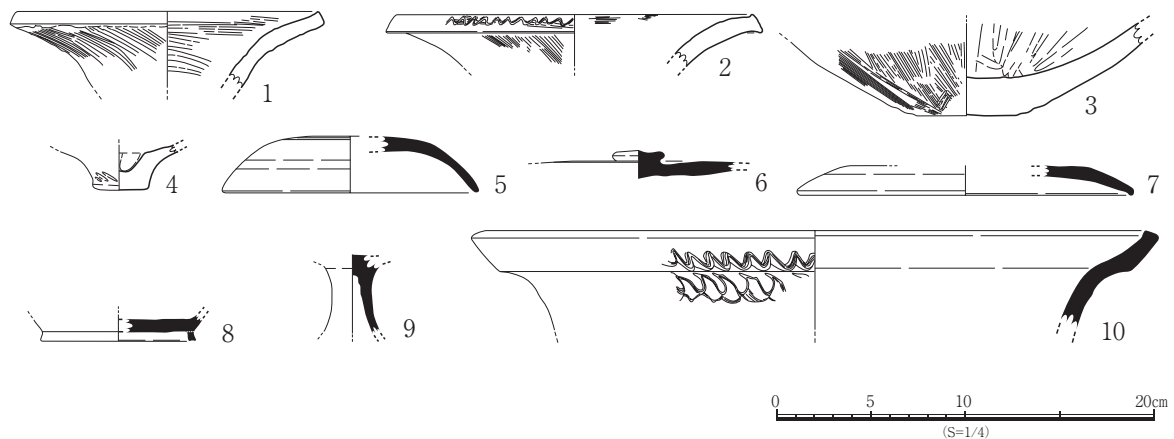


図9 西部第Ⅱ層出土遺物実測図

須恵器(図10-13・14)

13は蓋で、約1/4が残存する。調整は回転ナデで、天井部は内面にナデ、外面に回転ヘラケズリを加える。

14は杯で、底部には細く直立する高台を有する。調整は回転ナデで、内面と高台内はナデを加える。

近世磁器(図10-15)

15は丸椀で、約1/2が残存する。全面に透明釉を施し、見込を蛇の目釉ハギ、畳付の釉ハギを行う。釉ハギした部分には砂が付着する。内面には圈線と松葉とみられる染め付けがみられる。

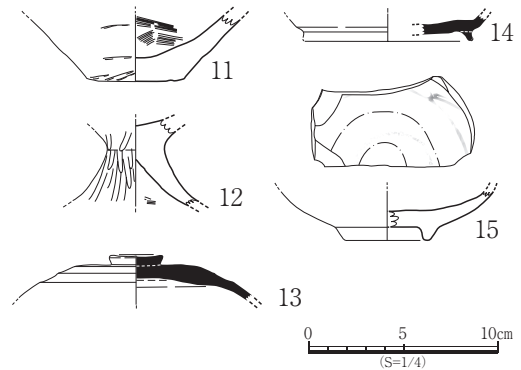


図10 中央部・東部第I層出土遺物実測図

(3) 中央部・東部第VI層出土遺物

弥生土器(図11-16~25)

16は壺で、底部の約1/3が残存する。調整は内面がハケ後ナデ、外面が縦方向のハケ後ナデまたはミガキを施す。底部外面は摩耗するため調整は不明である。外面には黒斑がみられる。

17~19は甕で、いずれも底部の破片である。17は底部が完存する。調整は内面がハケ後ナデ、外面はナデである。18は底部が完存する。調整は内面がナデ、外面は胴部がタタキで、底部はナデである。外面には被熱の痕跡が残る。19は底部の約1/4が残存する。調整は胴部内面が強いナデで指頭圧痕が残り、底部はナデでしぼり目が残る。外面はタタキ後縦方向のハケ調整、底部はナデ調整を施す。

20~23は鉢である。20は口縁部の約1/4が残存する。内面は斜め方向のハケ調整を密に行い、一部に煤が付着する。外面は口縁部がヨコナデ調整、体部がナデ調整で指頭圧痕が残る。21は口縁部の約1/5が残存する。内面は斜め方向のハケ調整を行い、外面はナデ調整で亀裂が入る。22は底部の器壁が厚いもので、底部が完存する。調整は内面が横方向のハケで、外面は摩耗するため不明である。底部外面には木葉痕が残る。23は器壁が薄いもので、約2/3が残存する。内面は横方向の板ナデ後ナデ調整、外面は体部がタタキ後丁寧なナデ調整、底部にはケズリ調整を施す。

24は高杯で、脚柱部が残存する。器面は著しく摩耗するため調整は不明である。内面にはしぼり目が残る。

25は手捏ね土器で、高杯形を呈する。約1/2が残存し、調整はナデで、指頭圧痕が顕著に残る。

土師器(図11-26~33)

26・27は高杯である。26は杯底部が残存する。器壁が厚く、口縁部は若干外反する。調整は杯内面はわずかにミガキが残存し、外面は口縁部がナデ、杯底部が縦方向のハケ、脚柱部がハケ後ナデである。27は脚柱部が残存する。中実で、裾部はハの字状に開く。調整は杯底部がヘラナデ、脚外面はナデ、脚内面はナデで裾部は横方向のナデである。

28・29は甕で、長胴になるものとみられ、口縁部は上方へつまみ上げる。28は口縁部の約1/5が残存する。調整は胴部内面がナデで指頭圧痕が残り、頸部は横方向の粗いハケ、口縁部がヨコナデ、胴部外面がタタキ後横方向の粗いハケを部分的に施す。29は口縁部の約1/3が残存する。調整は胴部内面がナデで指頭圧痕が残り、頸部は横方向の粗いハケ、口縁部がヨコナデである。胴部外面は横方向のハケ後縦方向のタタキ調整を施し、その後ナデ調整を行い、指頭圧痕が残る。

30は釜で、胴部の一部が残存する。胴部は真っすぐ立ち上がり、外面には断面三角形の小さな鍔が

付く。調整は内面が横方向のハケ、外面は摩耗するため不明である。

31～33は甑の把手で、端部は上方へつまみ上げる。調整はナデで、指頭圧痕が残る。31は断面が楕円形を呈する。32は胴部及び把手が残存する。把手は上面が強いナデ調整によって凹む。胴部内面は粗い縦方向のヘラケズリを施す。33は胴部及び把手が残存する。把手は断面が楕円形を呈し、端部を細く上方へつまみ上げる。胴部内面は粗い縦方向のヘラケズリを施す。

須恵器(図12-34～57)

34～39は蓋で、34・35はつまみがないもの、36～39はつまみを有するものである。34は約1/4が残存する。調整は回転ナデで、天井部は内面にナデ、外面は回転ヘラ切りのち回転ヘラケズリを加える。35は約1/2が残存する。調整は回転ナデで、天井部外面には回転ヘラケズリを加える。36は天井部が完存し、輪状のつまみを有する。調整は全面に回転ナデを施す。37はつまみが完存する。調整は回転ナデで、内面にはナデを加える。外面には扁平なつまみを貼付する。38は約3/4が残存する。扁平で小さなつまみを有し、口縁端部は短く直立する。調整は回転ナデで、天井部は内面にナデ、外面に回転ヘラ切りのち回転ヘラケズリを加える。39は約1/5が残存する。天井部は歪み、扁平である。調整は回転ナデで、天井部内面にはナデを加える。外面は器面が荒れる。

40～47は杯で、40・41は受け部を有するもの、42～44は高台を有するもの、45～47は平底を呈するものである。40は器高が高く、口縁部の立ち上がりが短いもので、約1/4が残存する。調整は回転ナデで、底部外面には回転ヘラケズリを行う。41は器壁が厚く、器高が低いもので、約1/5が残存す

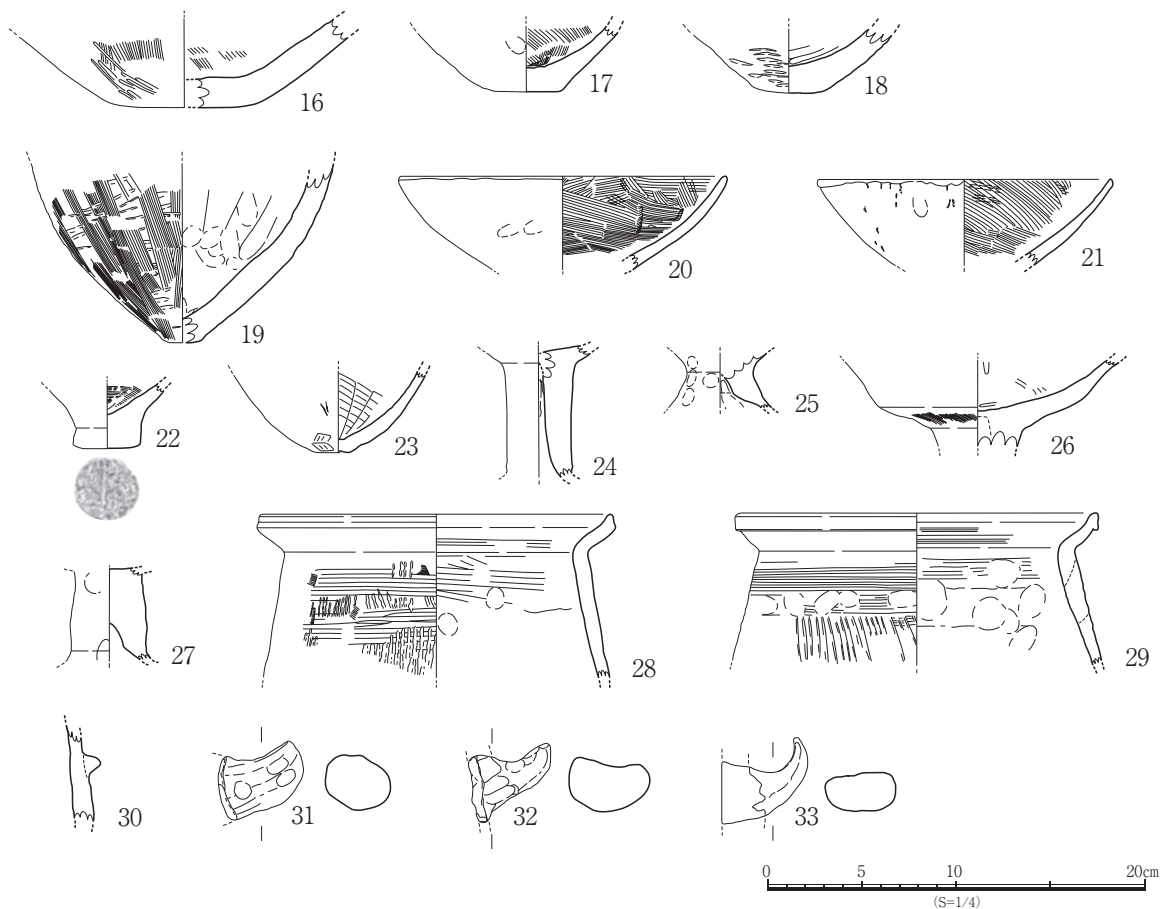


図 11 中央部・東部第Ⅵ層出土遺物実測図 1 (弥生土器・土師器)

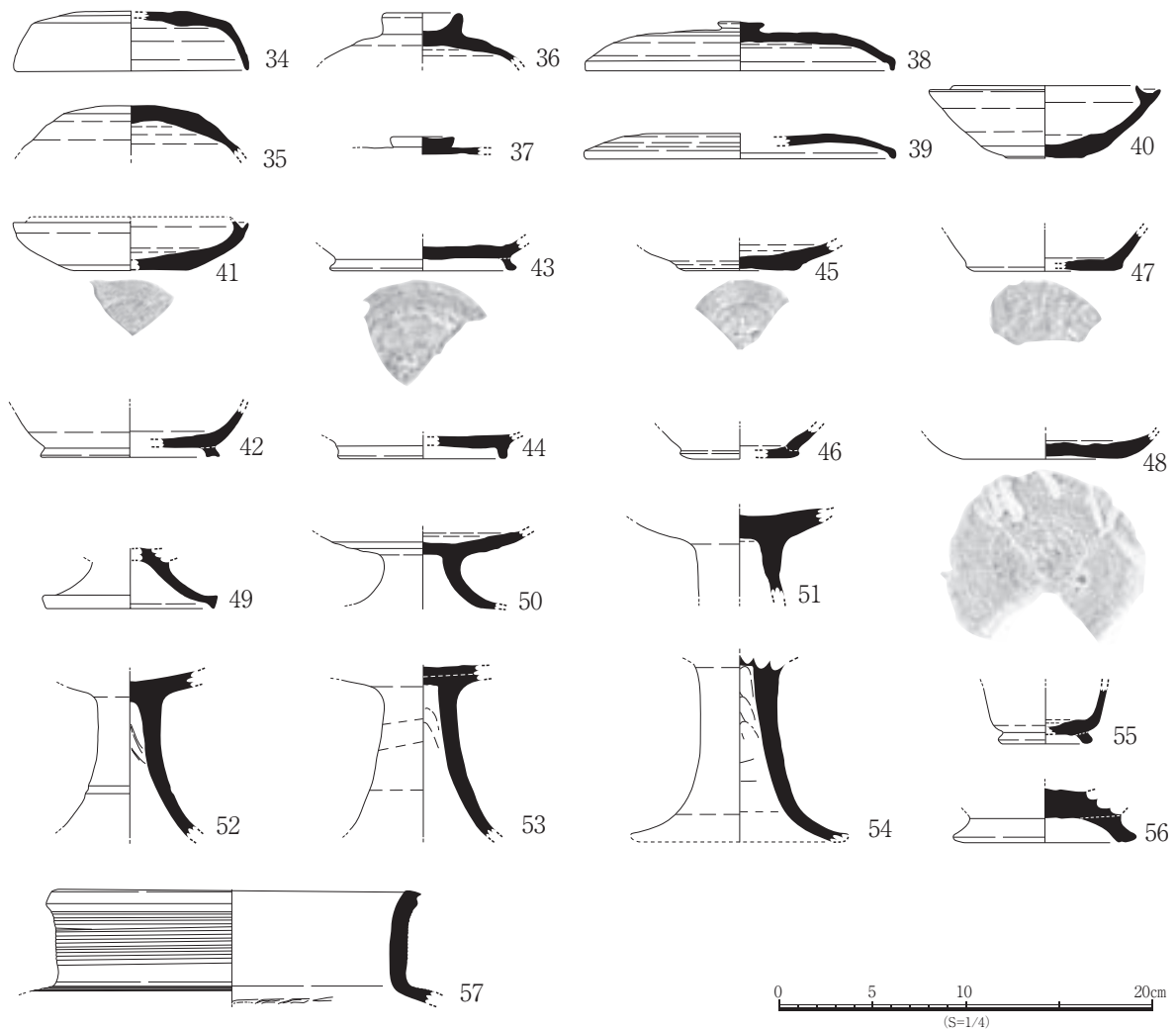


図 12 中央部・東部第Ⅵ層出土遺物実測図 2 (須恵器)

る。調整は回転ナデで、底部には回転ヘラケズリを行う。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。42は約1/4が残存し、低く太い高台を有する。調整は回転ナデで、内面と高台内にはナデを加える。43は約1/4が残存し、やや細い高台を有する。調整は回転ナデで、内面にはナデを加える。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。44は約1/4が残存し、直立する高台を有する。調整は回転ナデで、内面にはナデを加える。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。45は約1/4が残存する。平底を呈し、体部は大きく開く。調整は回転ナデで、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。底部外面には板状圧痕が残る。46は約1/6が残存する。底部と体部は別成形で、底部と体部の境には段を有する。調整は回転ナデである。底部の切り離しは摩耗するため不明である。47は約1/4が残存する。底部と体部の境には段を有する。調整は回転ナデで、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。

48は皿で、約3/4が残存する。底部と体部の境は不明瞭で緩やかに立ち上がる。調整は回転ナデとみられるが、外面は摩耗するため不明瞭である。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。

49～54は高杯で、49・50は低脚のもの、51～54は長脚のものである。49は脚部の約1/6が残存する。脚端部は肥厚し、四角く収める。調整は回転ナデだが、脚内面は自然釉が付着するため不明瞭である。50は杯底部から脚柱部がほぼ完存するものである。調整は回転ナデで、杯外面には回転ヘラ

ケズリを加える。51は杯底部が完存するものである。器面は著しく摩耗するため調整は不明である。52は杯底部から脚柱部の一部が残存する。調整は回転ナデで、杯内面にはナデを加え、脚内面にはしほり目が残る。脚外面には凹線が1条巡る。53は脚柱部が残存する。調整は回転ナデで、内面にはしほり目が残る。54は脚柱部がほぼ完存するものである。調整は回転ナデで、脚内面の上部はナデを加える。

55は小杯で、底部の約1/3が残存し、ハの字状に開く低い高台を有する。調整は回転ナデで、底部の切り離しは回転ヘラ切りとみられる。

56は壺の底部で、約1/4が残存する。器壁が厚く、ハの字状に開く高い高台を有する。調整は内面がナデで、指頭圧痕が顕著に残る。外面には高台を貼付し、高台内はナデ調整を行う。

57は甕で、口縁部の一部が残存する。調整は回転ナデで、外面には回転カキ目を施す。頸部内面には当て具痕または工具の圧痕とみられる痕跡が残る。

土師質土器(図13-58~72)

58~60は蓋で、いずれもつまみを有するタイプのものである。58は宝珠形を呈するつまみが完存する。調整はナデとみられるが摩耗するため不明である。59は扁平なつまみで、器面にはナデ調整を施す。60は口縁部の約1/8が残存する。口縁部は短く水平に伸び端部を丸く収める。調整は内外面に横方向のミガキを密に施しており、丁寧な作りである。

61~71は杯で、61は口縁内面に段を有するもの、62は高台を有するもの、63~71は平底を呈するものである。61は大型の杯で、内外面にベンガラを塗彩する。調整は内外面に横方向のミガキを施す。62も大型の杯で、細く直立する高台を有する。器面は著しく摩耗するため調整は不明である。63~67は平底で器高が低いタイプのもものとみられる。調整は回転ナデで、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。63は底部が完存する。底部外面の一部には板状圧痕が残る。64は約1/8が残存する。器壁が薄く、口縁部は緩やかに外反する。65は底部の約1/2が残存するもので、口縁部は緩やかに外反する。体部は著しく摩耗するため調整は不明瞭である。66は底部がほぼ完存する。体部は著しく摩耗するため調整は不明瞭である。67は底部が完存する。器壁が薄く、口縁部は真っすぐ伸びる。体部は著しく摩耗するため調整は不明瞭である。68~71は底部と体部の境に段を有し、器高が高く、口縁部が真っすぐ伸びるものとみられる。調整は回転ナデで、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。68は底部が完存し、体部は内湾して立ち上がる。体部は著しく摩耗するため調整は不明瞭である。69は底部が完存する。器壁が薄く、体部は真っすぐ伸びる。底部内面にはナデ調整を加える。70は底部の約1/3が残存する。底径が小さく、体部は外へ開く。体部は著しく摩耗するため調整は不明瞭である。71は底部が完存する。器壁が薄く、体部は若干内湾する。体部は著しく摩耗するため調整は不明瞭である。

72は椀で、口縁部の約1/4が残存する。調整は回転ナデとみられるが摩耗するため不明である。

黒色土器(図13-73~76)

73~75は椀で、いずれも内面にはミガキを行った後黒化処理を施す。いずれも在地産とみられる。73は口縁部の約1/6が残存し、口縁端部に浅い段を有する。調整は内面が幅の太い横方向のミガキ、口縁部はヨコナデ、外面は摩耗するため不明である。74は底部の約1/6が残存し、太く直立する高台を有する。調整は内面が緻密な横方向のミガキ、外面がナデである。75は底部の約1/4が残存し、断面が逆台形を呈する低い高台を有する。調整は内面がミガキ、高台内は輪状にナデを施す。体部外

2. 堆積層出土遺物

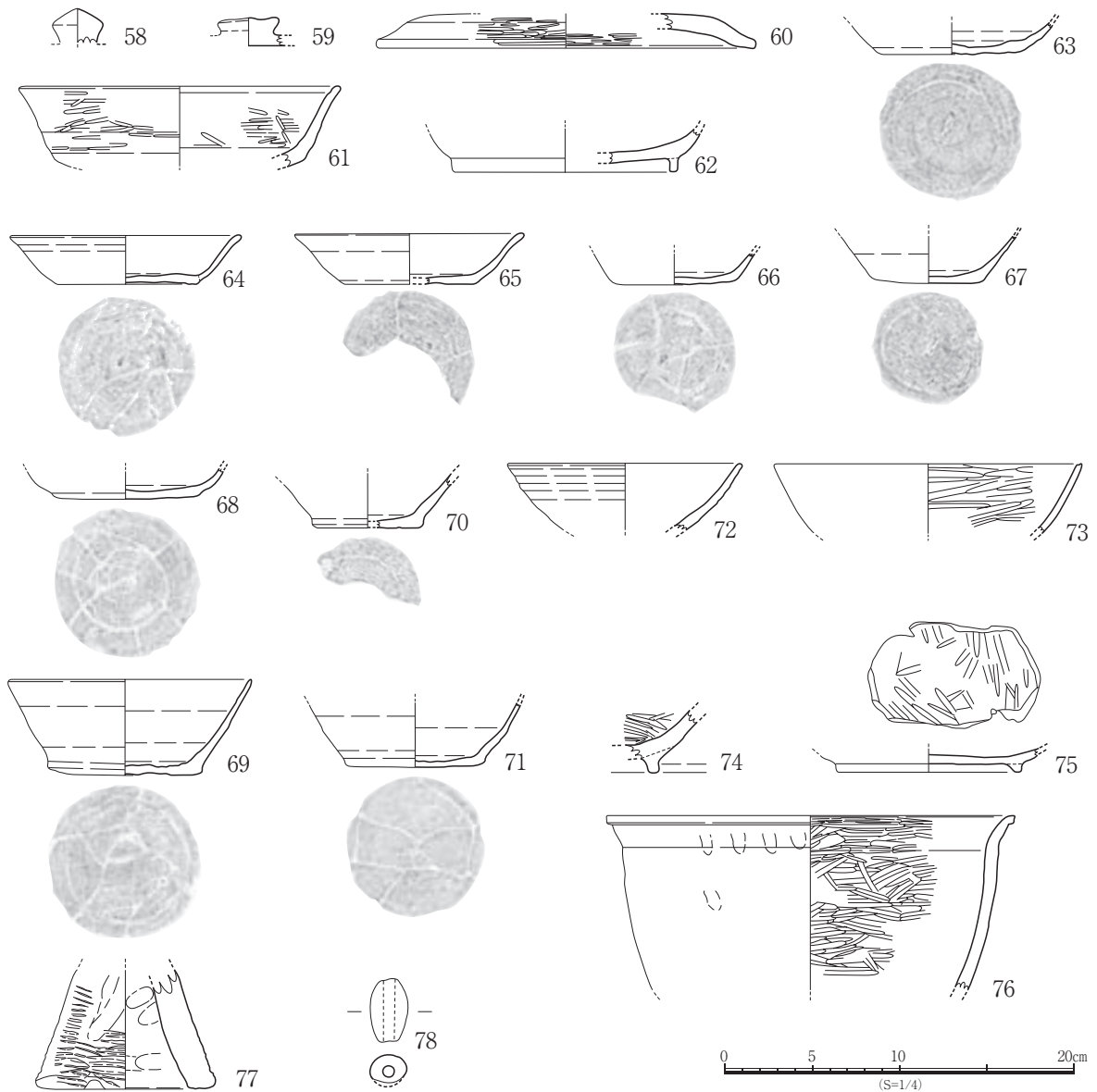


図13 中央部・東部第Ⅵ層出土遺物実測図3(土師質土器・黒色土器・土製品)

面は摩耗するため調整は不明である。

76は鉢とみられる形態で、内面に黒化処理を施す。内面は緻密な横方向のミガキ、口縁部はヨコナデ、外面はナデで指頭圧痕が残る。在地産とみられる。

土製品(図13-77・78)

77は支脚で、約1/3が残存する。器壁が厚く、内傾して立ち上がる。調整は外面が横方向のタタキで、断面はタタキによって多角形を呈する。内面は横方向のナデ調整で、指頭圧痕が残る。外面には煤が付着する。

78は土錘で、一部を欠損する。調整はナデである。

(4) 中央部・東部第Ⅶ層出土遺物

弥生土器(図14・15-79~104)

79~89は壺で、79・80は頸部に粘土帯を貼付するものである。79は約1/8が残存する。器壁が厚く、

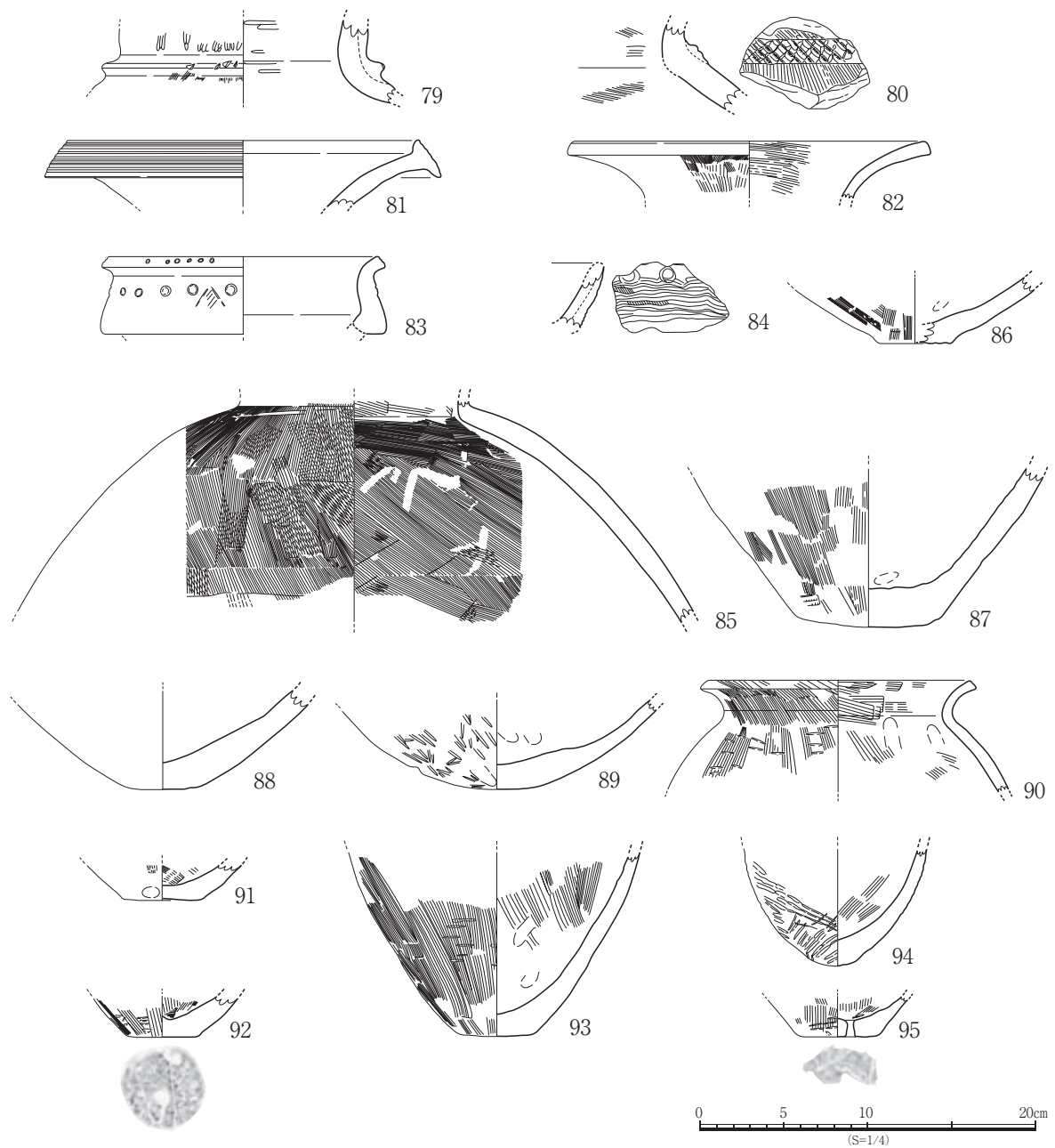


図14 中央部・東部第Ⅶ層出土遺物実測図1 (弥生土器)

断面三角形の突帯が付く。調整は頸部内面がナデ、口縁部内面が横方向のミガキ、口縁部外面が縦方向のミガキ、頸部外面が縦方向のハケである。頸部の突帯には刻み目がみられる。80は頸部に幅の広い粘土帯を貼付するものである。調整は内面がハケまたはナデ、外面は縦方向のハケである。粘土帯には櫛状原体による斜格子文がみられる。81・82は広口壺である。81は口縁部の約1/6が残存する。口縁端部は上下に大きく拡張し、凹線を7条施す。調整は口縁部上半がヨコナデ、口縁部下半がナデである。82は口縁端部を四角く収めるもので、口縁部の約1/8が残存する。調整は内面が横方向の粗いハケ、口縁部がヨコナデ、外面が縦方向のハケである。83・84は二重口縁壺である。83は口縁部の約1/5が残存する。口縁部は内傾した後外反して端部を四角く収める。器面は著しく摩耗するため調整は不明である。口縁部外面には竹管文と鋸歯文、口縁端部には竹管文がみられる。84は口

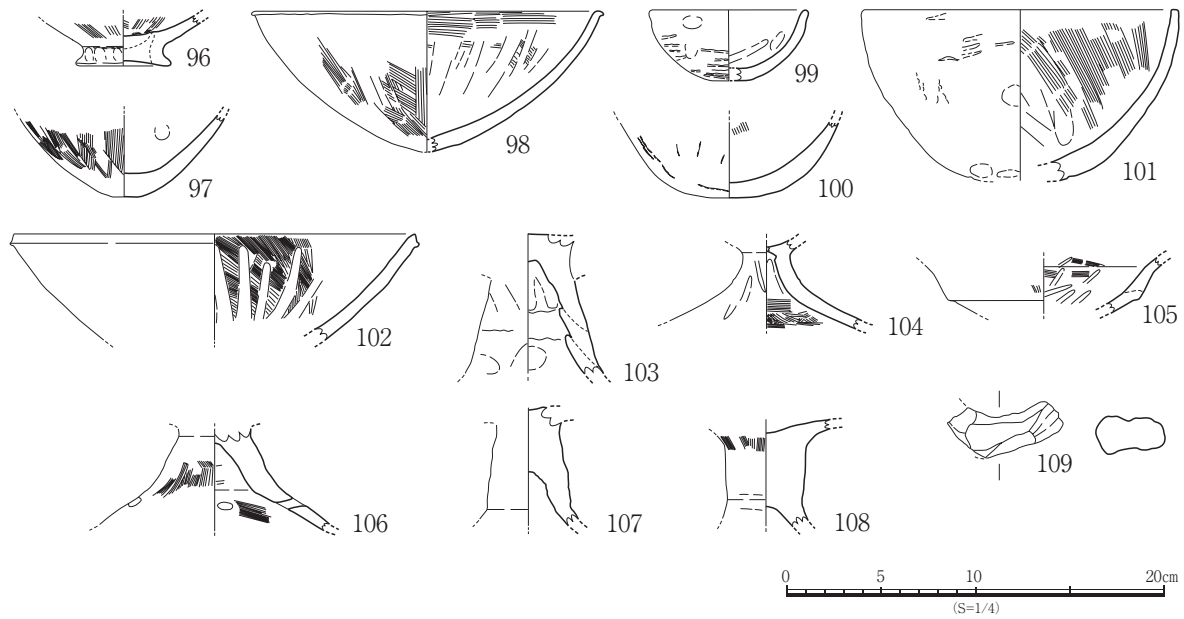


図 15 中央部・東部第Ⅶ層出土遺物実測図 2 (弥生土器・土師器)

縁部の一部が残存する。調整は内面が横方向のハケ、口縁部がヨコナデ、外面が横方向のナデまたはハケで、外面には竹管文と櫛描の波状文がみられる。85は大型の壺の肩部で、約1/4が残存する。調整は内外面に緻密なハケ、外面は胴部にナデを施す。86～89は壺の底部とみられる。86は平底を呈し、約1/4が残存する。調整は内面がナデ、胴部外面がハケまたはナデ、底部外面がナデである。87も平底を呈し、底部が完存する。調整は外面が縦方向のハケで、その他は摩耗するため不明である。88も平底を呈し、約1/2が残存する。調整は内面がナデで、その他は摩耗するため不明である。89は丸底を呈し、底部が完存する。調整は内面がナデとみられるが摩耗するため不明瞭である。外面はナデ後縦方向のミガキ調整で、底部には工具の圧痕が顕著に残る。

90～94は甕である。90は口縁部の約1/5が残存する。口縁部は緩やかに外反し、端部は面取りを行い四角く収める。調整は胴部内面がハケ後一部ナデ、口縁部内外面がハケ、胴部外面がタタキ後縦方向のハケである。91～94は底部の破片である。91は平底を呈し、約3/4が残存する。調整は内面が横方向のハケ後ナデ、外面がナデである。92も平底を呈し、底部が完存する。調整は内面が横または縦方向のハケ、胴部外面がタタキ後縦方向のハケ、底部外面には木葉痕が残る。93も平底を呈し、底部が完存する。調整は内面が胴部に縦方向のハケを行った後底部にナデを施す。外面はタタキ後縦方向のハケ調整を密に行う。底部外面はナデ調整である。外面の下半は黒斑、上半には煤の付着がみられる。94は尖底を呈し、約1/3が残存する。調整は底部内面がナデ、胴部内面が縦方向のハケ、胴部外面はタタキ、底部外面はナデである。

95は甑の底部で、約1/3が残存する。底部の中央よりやや外側に径5mmの焼成前の穿孔がみられる。調整は内面が粗雑なハケ、胴部外面がタタキ後縦方向のハケ、底部外面がハケまたはナデである。

96～102は鉢で、96は台付き鉢、97・98は尖底を呈するもの、99～101が丸底を呈するもの、102が口縁部の破片である。96は底部の約1/2が残存する。底部にはベタ高台状の低い台が付き、外面はアーチ状に凹む。調整は内面が粗雑なハケ、体部外面はタタキ後ハケまたはナデ、高台はナデで、指頭圧痕が顕著に残る。97は底部が完存する。調整は内面がナデ、体部外面が縦方向のハケ、底部外面

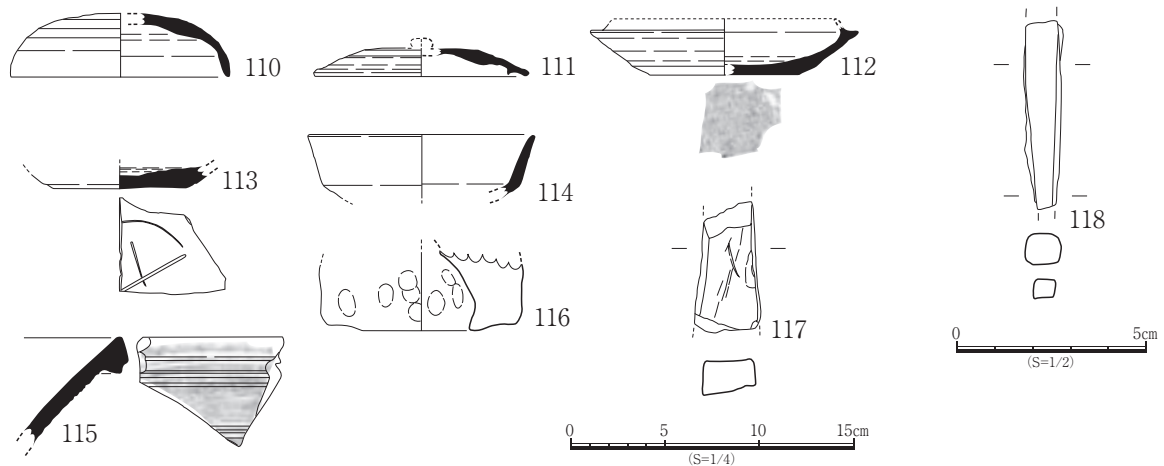


図16 中央部・東部第Ⅶ層出土遺物実測図3 (須恵器・土製品・石製品・鉄製品)

がナデである。98は約1/5が残存する。口縁端部は面取りを行い四角く収める。調整は内面がハケ後縦方向のナデ、口縁部外面がナデ、体部外面がハケである。99は約1/4が残存する。小型で、外面には煤が付着する。調整は内面が縦方向のナデ、口縁部がヨコナデ、外面はタタキ、底部外面にはナデを施す。100は底部が完存する。調整はナデで内面にはわずかにハケが残る。外面には亀裂が入る。101は約1/4が残存する。調整は底部内面がナデ、体部内面がハケ、口縁部がヨコナデ、外面がタタキ後ナデである。外面には亀裂が入る。102は約1/8が残存する。調整は内面が斜め方向のハケ後縦方向のナデ、口縁部がヨコナデである。外面は著しく摩耗するため調整は不明である。

103・104は高杯で、いずれも脚部の破片である。103は脚柱部が残存し、ハの字状に開く。調整はナデで指頭圧痕が残る。脚内面は接合痕が顕著に残る。104は約1/4が残存する。脚部はラッパ状に大きく開く。調整は外面にわずかにミガキが残る。内面は脚柱部がナデ調整、裾部が横方向のハケ調整である。

土師器(図15-105~109)

105~108は高杯である。105は杯底部から口縁部の一部が残存する。口縁部は緩やかに外反する。調整は杯底部がナデ後ミガキ、口縁部内面が横方向のハケ後ミガキ、外面がナデで口縁部にはハケがわずかに残る。106は脚部の約2/3が残存する。裾部はわずかに屈曲して開く。調整は外面の脚上端がナデ、脚柱部が縦方向のハケである。内面は脚柱部がナデ調整、裾部は横方向のハケ調整である。裾部には径8mmの円孔を4箇所に通っていたとみられるが、内2箇所が残る。107・108は直立する脚柱部が残存する。中実で、裾部はわずかに開く。107は器面が著しく摩耗するため調整は不明である。108は杯底部がナデ調整、外面の杯部と脚部の接合部が縦方向のハケ調整、脚柱部と裾部内外面がナデ調整である。

109は甌の把手で、全面にナデ調整を施す。断面は扁平な楕円形を呈し、上面は指頭圧痕によって凹む。被熱の痕跡が残る。

須恵器(図16-110~115)

110・111は蓋である。110は天井部が丸いもので、約1/8が残存する。調整は回転ナデで、天井部外面には回転ヘラケズリ、内面にはナデを加える。111はかえりを有するもので、約1/8が残存する。調整は回転ナデで、天井部外面には回転ヘラケズリを加える。

3. 遺構と遺物

112・113は杯である。112は受け部を有するもので、約1/8が残存する。調整は回転ナデで、底部外面には回転ヘラケズリを加える。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。113は平底を呈するもので、約1/4が残存する。調整は回転ナデで、底部内面にはナデを加える。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。底部外面には「×」とみられるヘラ記号を施す。

114は無蓋高杯の口縁部で、約1/6が残存する。調整は回転ナデである。

115は甕である。口縁部の一部が残存し、端部は肥厚する。調整は回転ナデで、外面には凹線が5条と櫛状原体の圧痕による文様がみられる。

土製品(図16-116)

116は支脚とみられ、脚部の約1/3が残存する。器壁が厚く、輪高台状を呈する。調整はナデで、指頭圧痕が顕著に残り、粗雑な作りである。

石製品(図16-117)

117は砥石で、両端を欠損する。残存部で4面を使用しており、使用面は摩耗して凹む。石材は泥岩である。

鉄製品(図16-118)

118は釘で、両端を欠損する。断面は方形を呈する。全面に錆化がみられる。

3. 遺構と遺物

(1) 弥生時代～古墳時代初頭

i 竪穴式住居跡

ST-1(図17)

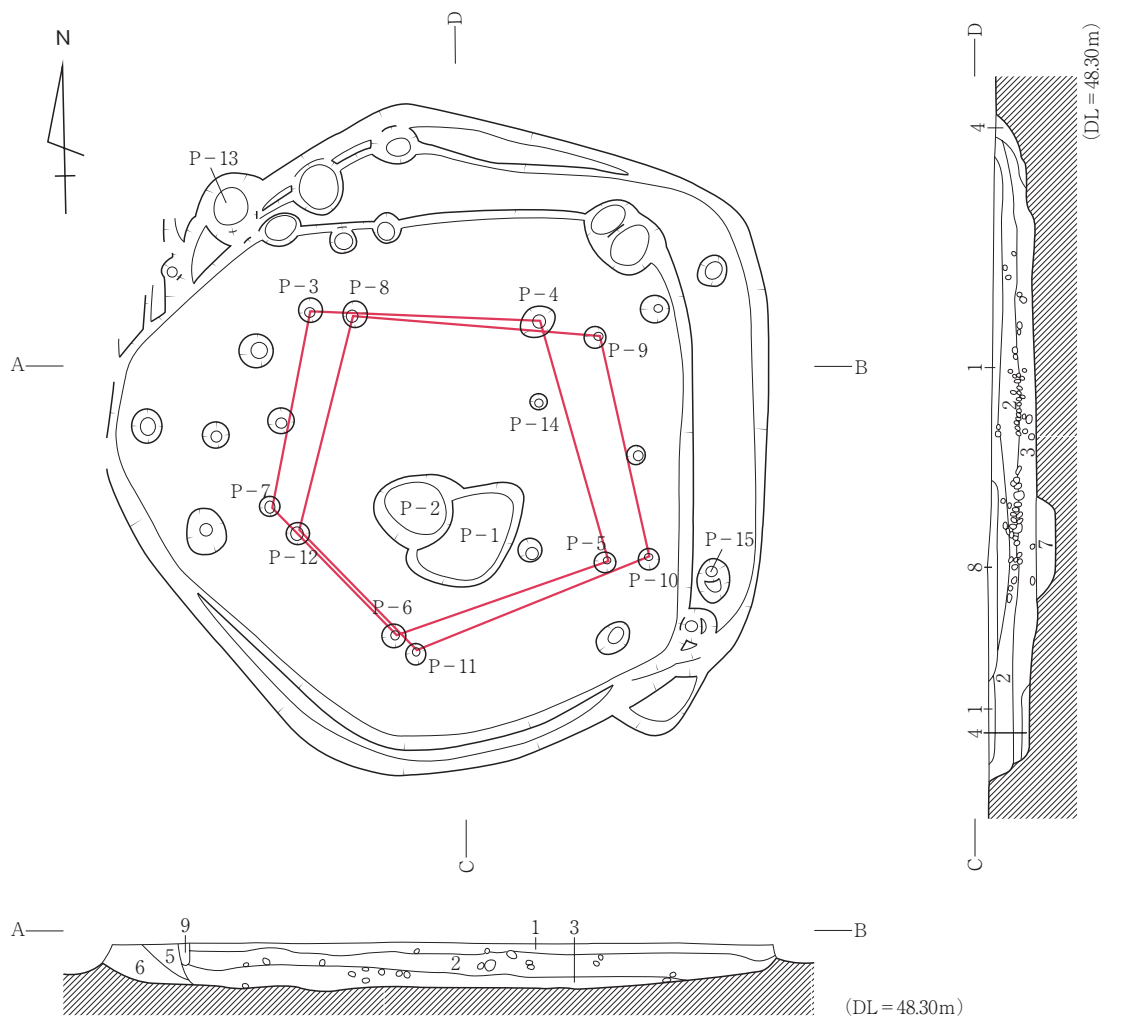
調査区中央部で検出した五角形を呈する竪穴式住居跡で、ST-2の南側に位置する。東西6.93m、南北6.95mを検出し、深さ0.52m、面積33㎡を測る。一辺の長さは3.85～4.80mを測る。建て替えを行っているものとみられ、西側を除き壁際が一段高くなっている部分があり、床面との高さは13cmを測るが、床面まで緩やかに下がり、ベット状遺構ではないものと考えられる。

埋土は6層に分かれ、黒色または黒褐色シルト質細粒砂で5～15cm大の礫を多く含んでいた。住居跡南側の埋土2には特に多くの河原石と遺物が含まれており、意図的に投棄されたものとみられる。埋土5・6は住居跡西側にのみみられ、埋土1・2・3とはやや異なる様相であり、埋土5・6を意図的に埋めた状態で一時機能していた可能性が高いが、遺物を見る限りではほとんど時期差はないものとみられる。

中央ピットはP-1とP-2がみられ、P-1がP-2を切っていた。いずれも中央よりやや南に位置する。P-1は不整形を呈し、長辺1.10m、短辺0.90m、深さ13cmを測り、埋土は黒褐色シルト質細粒砂で、多量の5cm大の礫と炭化物を含んでいた。P-2は楕円形を呈し、長径0.95m、短径0.72m、深さ16cmを測り、埋土は黒褐色シルト質細粒砂で、2cm大の礫を多く含んでいた。出土遺物はP-1が弥生土器片51点、P-2が弥生土器片32点みられたが、図示できるものはなかった。

支柱穴はP-3～7とP-8～12がみられ、建て替えを行っているものと考えられる。いずれも五角形に並び、竪穴式住居跡のコーナー部の内側に並ぶ。柱間寸法はP-3～7が1.90～2.65m、P-8～12が1.85～2.65mを測る。埋土はいずれも黒色細粒砂質シルトで、5mm大の礫を多く含んでいた。

出土遺物は弥生土器の壺、甕、鉢、高杯、手捏ね土器、土師器の高杯、器台などがみられ、特に住居跡



埋土

1. 黒褐色(10YR2/2)シルト質細粒砂で、5mm大と5cm大の礫を多く含む。(ST-1埋土1)
2. 黒褐色(5Y2/1)シルト質細粒砂で、5~15cm大の礫を非常に多く含む。(ST-1埋土2)
3. 黒色(7.5YR1.7/1)シルト質細粒砂で、多量の10cm大の礫と炭化物を含む。(ST-1埋土3)
4. 黒褐色(10YR2/3)シルト質細粒砂で、黄色シルトのブロックを多く含む。1cm大の礫を少し含む。(ST-1埋土4)
5. 黒褐色(10YR2/3)シルト質細粒砂で、黄色シルトのブロックを多く含む。1cm大の礫を少し含む。(ST-1埋土5)
6. 黒褐色(10YR3/2)シルト質細粒砂で、黄色シルトのブロックを少し含む。3cm大の礫と炭化物を含む。(ST-1埋土6)
7. 黒褐色(10YR2/2)シルト質細粒砂で、5cm大の礫を多く含む。炭化物を含む。(P-1)
8. 黒色(10YR1.7/1)シルト質細粒砂で、5cm大の礫を多く含む。(SK-20)
9. 黒色(10YR1.7/1)シルト質細粒砂で、黄色シルトのブロックを含む。

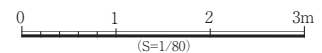


図17 ST-1

の南側で多く出土した。弥生土器86点, 土師器10点, 土製品5点, 石製品3点, 鉄製品1点, ガラス玉1点が図示できた。その他, P-13より出土した杓子形土器(220), P-14より出土した弥生土器の甕2点(221・222), P-15より出土した弥生土器の鉢(223)が図示できた。

埋土1 出土遺物

弥生土器(図18-119~127)

119~121は壺である。119は複合口縁壺の口縁部の一部が残存する。調整は内面がハケとナデ, 口縁部がヨコナデである。外面は著しく摩耗するため調整は不明瞭だが, 櫛描の波状文が残る。120は二重口縁壺の口縁部の一部が残存する。著しく摩耗するため調整は不明瞭だが, 外面には沈線による鋸歯文が残る。121は底部の約1/2が残存する。調整は内面がハケ後ナデ, 胴部外面がタタキ後ナ

3. 遺構と遺物

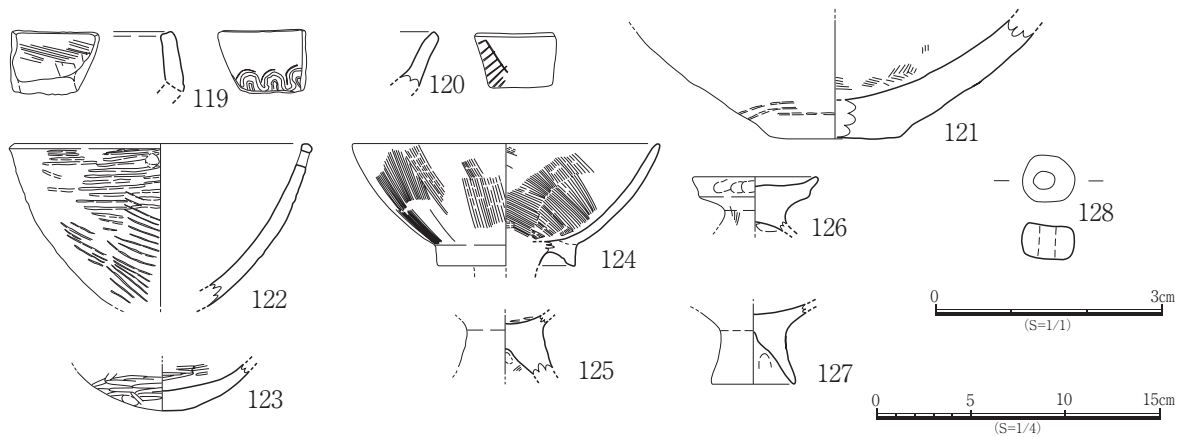


図 18 ST-1 埋土 1 出土遺物実測図 (弥生土器)

デ、底部外面がナデである。

122・123は鉢である。122は口縁部の約1/4が残存する。器高が高いもので、口縁部には径8mmの円孔が1孔残存する。調整は内面がナデ、外面がタタキである。123は丸底を呈する底部が完存する。調整は底部内面がナデ、体部内面がミガキ、外面はナデ後ミガキである。

124・125は高杯である。124は高杯の杯部とみられる。調整は内面がハケ、口縁部がヨコナデ、外面は摩耗するが縦方向のハケが残る。脚部との接合部はナデ調整である。125は杯底部から脚柱部が残存する。調整は杯底部がナデ後一部ミガキ、脚内面がナデでわずかにハケが残る。脚外面は摩耗するため調整は不明である。

126・127はミニチュア土器で、いずれも高杯形を呈する。126は浅い杯部が残存する。調整はナデで、指頭圧痕が残る。脚部との境には一部ハケが残る。127は細くハの字状に開く脚部が残存する。器面は著しく摩耗するため調整は不明である。

ガラス製品(図18-128)

128は青緑色を呈する小玉で、検出時に出土した。完存し、全長0.6cm、全厚0.5cm、孔径0.25cm、重量0.3gを測る。

埋土 2 出土遺物

弥生土器(図19・20-129~155)

129~134は壺である。129~133は広口壺である。129は口縁部の約1/4が残存する。口縁部は直線的に伸びる。調整は内面がハケまたはナデ、口縁部はヨコナデで指頭圧痕が顕著に残る。外面は縦方向のハケ調整である。130は口縁部の約1/5が残存する。口縁部は外反する。調整はナデで、口縁端部はヨコナデである。131は口縁部の約1/6が残存する。口縁部は外反し、端部は肥厚する。調整はナデで、口縁端部はヨコナデである。132は口縁部の約1/5が残存する。口縁部は上方へ立ち上がった後大きく外反する。調整は内面が横方向のハケ、口縁部がヨコナデ、外面がハケ後横方向のナデである。133は口縁部の約1/5が残存する。器面は著しく摩耗するため調整は不明である。外面には一部煤が付着する。134は複合口縁壺で、口縁部の約1/5が残存する。口縁部は水平方向に伸びた後上方に立ち上がる。調整は内面がハケ、口縁部がヨコナデ、外面はハケまたはナデである。外面にはヘラ描きによる波状文を施す。

135~145は甕である。135は口縁部の約1/4が残存する。口縁部は頸部からくの字状に屈曲してや

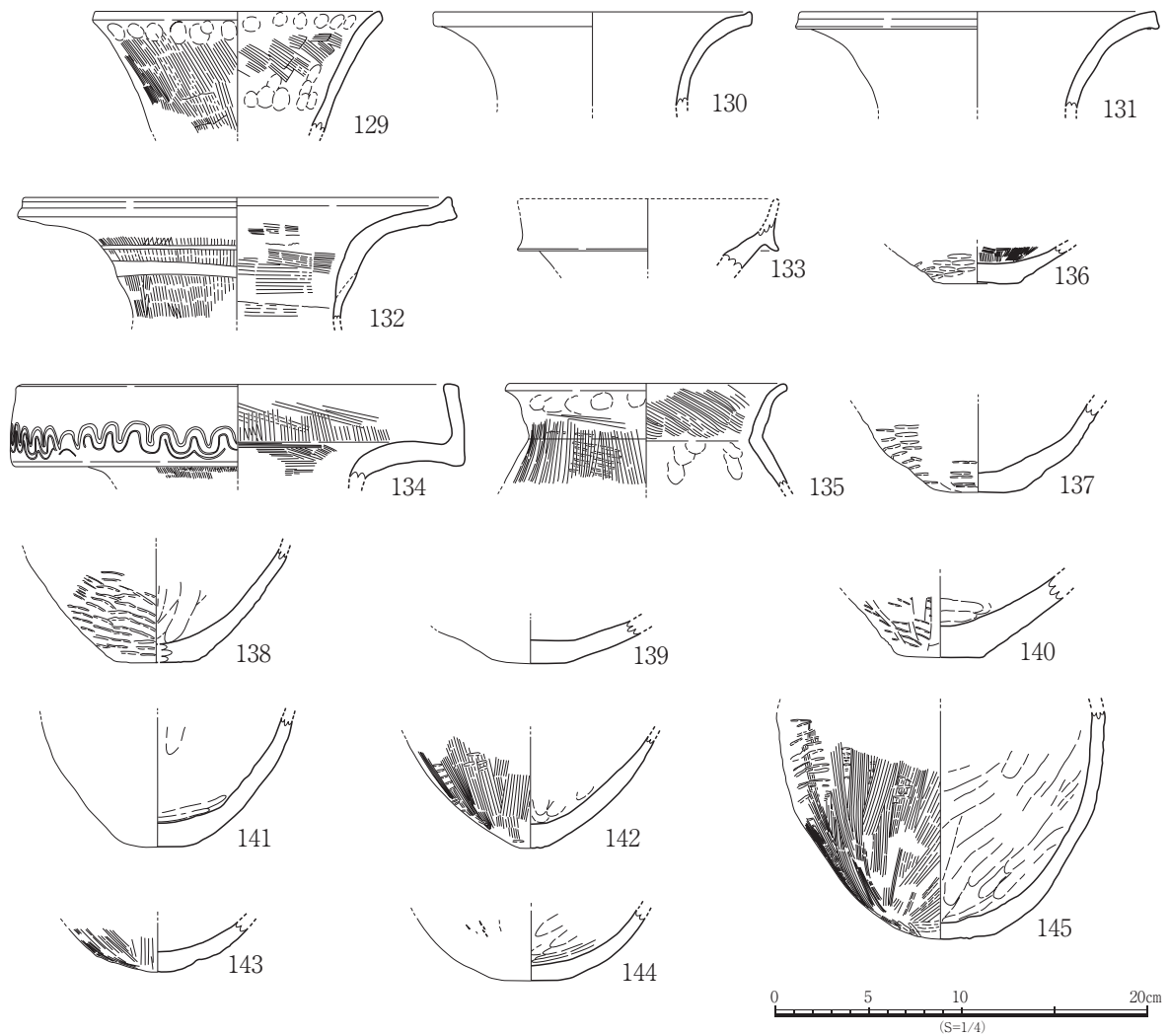


図19 ST-1埋土2出土遺物実測図1 (弥生土器)

や外反する。調整は胴部内面がナデ、口縁部内面がハケ、口縁部がヨコナデ、口縁部外面がナデ、頸部から胴部がタタキ後ハケである。136～141は平底を呈するものである。136は底部が完存する。調整は内面が細かいハケ、外面がタタキである。137・138は底部の約1/2が残存する。調整は内面がナデ、外面がタタキである。139は底部が完存する。器面は著しく摩耗するため調整は不明である。140は底部の約3/4が残存する。調整は内面がナデ、外面がタタキ後ナデである。141は底部が完存する。調整はナデで、胴部外面には煤が付着する。142・143は尖底を呈するものである。142は底部の約1/2が残存する。調整は内面がナデ、外面がタタキ後ハケである。143は底部が完存する。調整は内面がナデ、外面がハケである。144・145は丸底を呈するものである。144は底部が完存する。調整はナデで、外面には細かい亀裂が入る。145は底部が完存する。調整は内面がナデで、外面がタタキ後ハケである。

146～153は鉢である。146～148は平底を呈する。146は底部が完存する。底部端部が張り出す。調整は内面が横方向のハケ、外面がタタキ後ナデで亀裂が入る。147は底部が完存する。底部の器壁が厚い。調整は内面がハケ後一部ナデ、外面がタタキ後ナデで、亀裂が入る。148は小型のもので、底部の約1/3が残存する。調整は内面が細かい横方向のハケ、外面がタタキである。口縁部は摩耗する

3. 遺構と遺物

ため調整は不明である。149～153は丸底を呈するものである。149はほぼ完存する。調整は内面がハケ、口縁部がヨコナデ、外面が螺旋状のタタキで亀裂が入る。150は小型のもので、底部が完存する。調整は内面にわずかにハケが残るが、内外面とも著しく摩耗するため調整は不明瞭である。151は底部が完存する。調整はナデで、口縁部はヨコナデである。152は底部が完存する。調整はナデで、口縁部はヨコナデである。外面には亀裂が入る。153は小型のもので、口縁部が屈曲して外上方に短く伸びる。調整はナデで、口縁部はヨコナデである。外面にはわずかに亀裂が入る。

154は手捏ね土器である。154は卵形を呈するもので、底部が完存する。調整はナデで、指頭圧痕が残る。155はミニチュア土器で、高杯形を呈し、脚部の約3/4が残存する。調整はナデで、指頭圧痕が残る。

土師器(図20-156・157)

156は高杯で、脚部の一部が残存する。調整は脚柱部外面が縦方向のミガキ、裾部が横方向の緻密なミガキ、内面がナデである。胎土は比較的精良で、雲母が入る。搬入品とみられる。

157は器台で、脚部が完存する。脚部は直線的に伸び、径9mmの円孔を2箇所につ。調整は外面がナデ後ミガキ、脚端部はヨコナデ、内面がハケである。脚内面上端には竹管状の圧痕が残る。杯底部は摩耗するため調整は不明である。胎土には雲母と石英が入り、搬入品とみられる。

土製品(図20-158・159)

158・159は支脚で、約1/2が残存する。158は低脚で、上部は浅い皿状を呈し、脚部は中心に棒状のものを差して中空にしている。調整はナデで、指頭圧痕が顕著に残る。159は上端が片口状を呈し、中心には径7mmの円孔を穿ち中空となっている。調整は縦方向の強いナデである。

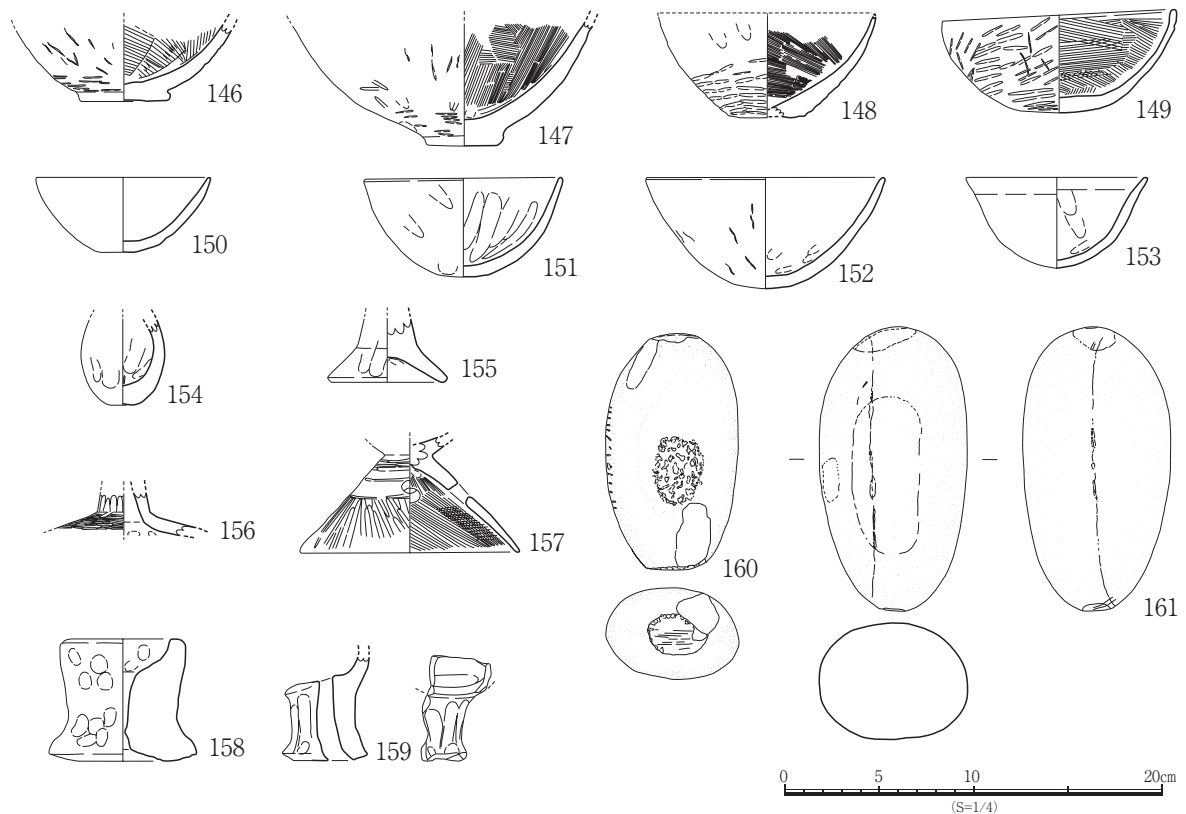


図20 ST-1埋土2出土遺物実測図2(弥生土器・土師器・土製品・石製品)

石製品(図20-160・161)

160・161は叩石で、いずれも石材は砂岩の河原石である。160は一部を欠損する。両端に敲打痕が残る。161は完存し、両端に敲打痕が残る。片端には朱が付着する。

埋土2 集石出土遺物

住居跡南側の埋土2からは河原石と遺物がまとまって出土しており、意図的に投棄されたものとみられるため、埋土2出土遺物とは別に記載した。

弥生土器(図21-162~167)

162~164は壺である。162は広口壺で、約1/2が残存する。口縁部は短く直線的に伸びる。調整は胴部内面が粗い縦方向のハケ後縦方向の強いナデ、頸部内面はナデで指頭圧痕が顕著に残る。口縁部はハケ調整、口縁端部はヨコナデ、胴部外面は螺旋状のタタキで、胴部下半には縦方向のナデ調整を加える。163は複合口縁壺で、口縁部の約1/8が残存する。調整は口縁部内面がハケ、口縁端部がヨコナデ、外面はナデである。外面には櫛状原体による斜格子文がみられる。164は壺の底部とみられる。丸底で、完存する。調整は内面がナデである。外面は著しく摩耗するため調整は不明である。

165~167は甕で、いずれも平底を呈し、底部が完存する。165は調整は内面がナデ、胴部外面がタタキ、底部外面がナデである。166は内面に煤が付着する。167は底部外面にタタキ後ナデ調整を施す。

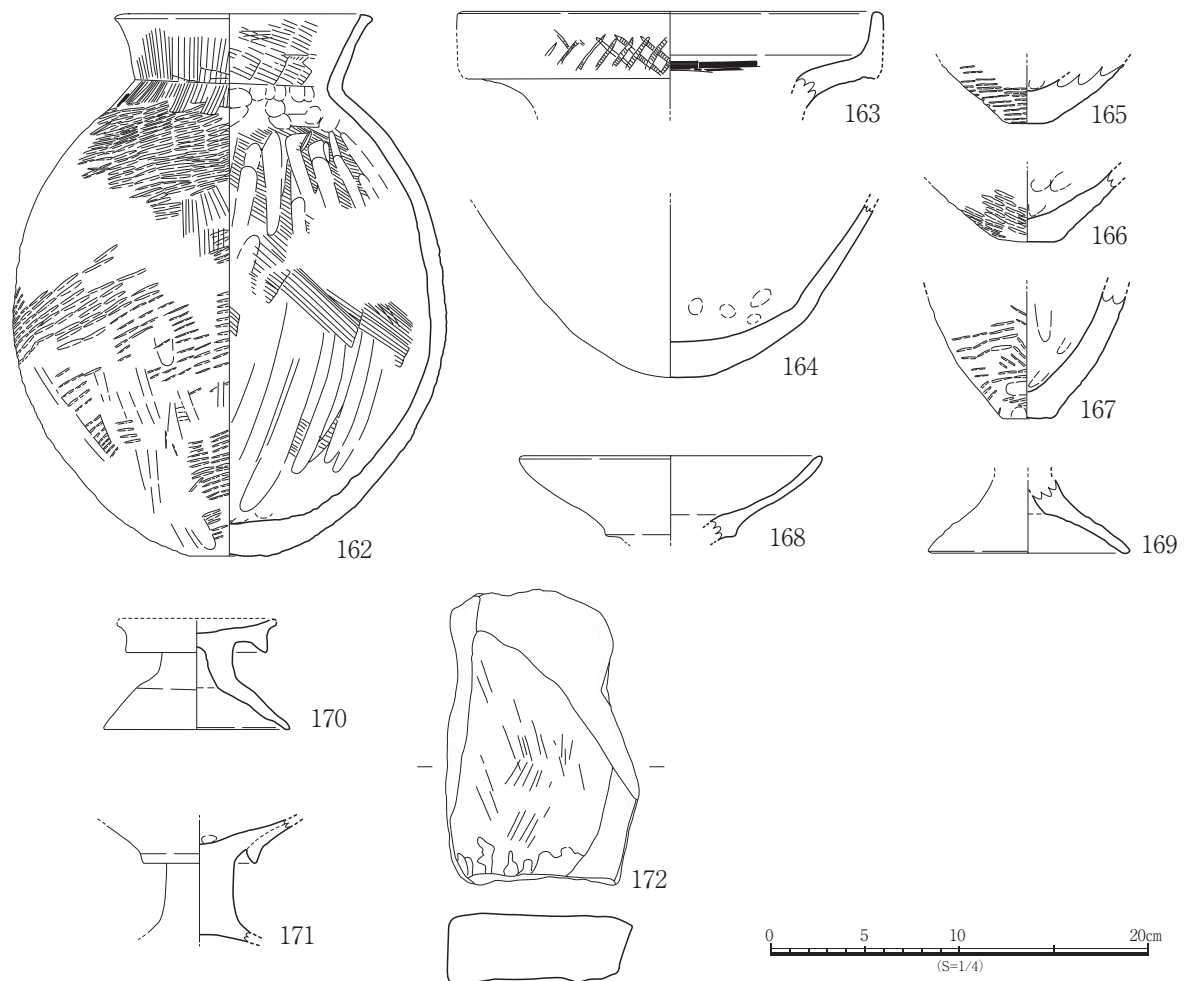


図21 ST-1埋土2集石出土遺物実測図(弥生土器・土師器・石製品)

3. 遺構と遺物

土師器(図21-168~171)

168・169は高杯である。168は口縁部の約1/8が残存する。杯部は浅く、外面には稜をもって口縁部に至る。器面は著しく摩耗するため調整は不明である。169は脚部の約1/3が残存する。脚柱部は中実になるものとみられ、裾部は緩やかに開く。器面は著しく摩耗するため調整は不明である。

170・171は器台で、口縁部を上下に肥厚させるものである。170は脚柱部がほぼ完存する。脚柱部は中空で、裾部は緩やかに屈曲して真っすぐ伸びる。調整はナデで、杯内面は摩耗するため不明である。171は口縁部に粘土を貼付して肥厚させる。脚柱部は中実で、裾部はハの字状に開く。器面は摩耗するため調整は不明である。

石製品(図21-172)

172は砥石である。砂岩の割れ石を使用し、残存部で一面を使用する。使用痕は非常に細く浅いが、使用面は摩耗して若干凹む。

埋土3出土遺物

弥生土器(図22・23-173~209)

173~183は壺で、173~177は広口壺である。173は約1/6が残存する。口縁部は真っすぐ上方に立ち上がる。調整は胴部内面がハケで、口縁部は横方向のハケまたはナデ、外面は摩耗するが縦方向のハケが残る。174は約1/6が残存する。口縁部は外反し、端部は若干肥厚する。調整は外面にわずかに縦方向のハケが残るが、内面は著しく摩耗するため不明である。175は約1/6が残存する。口縁部は外反し、端部を細く仕上げる。調整は口縁部がヨコナデ、外面はわずかに縦方向のハケが残るが、内面は著しく摩耗するため不明である。176は口縁部の一部が残存する。口縁端部に粘土帯を貼付し、上下に拡張する。調整は内面が横方向のミガキ、口縁部がヨコナデ、外面が縦方向のハケ後ナデである。外面には沈線による文様を施す。177は口縁部の一部が残存する。口縁部は水平方向に伸びた後、上方に真っすぐ立ち上がる。調整は外面に細かいハケがわずかに残るが、その他は著しく摩耗するため調整は不明である。外面には沈線による鋸歯文と竹管文を施す。178は複合口縁壺で、口縁部の約1/8が残存する。調整は内面が横方向のハケ、外面がタタキ後縦方向のハケである。179は直口壺で、口縁部の約1/8が残存する。調整は胴部内面が丁寧なナデ、頸部がハケ、口縁部がヨコナデ、胴部外面がナデ後ミガキである。180は受け口状を呈するもので、口縁部がほぼ完存する。調整はナデで、口縁部はヨコナデである。口縁部外面には擬凹線が3条巡る。讃岐からの搬入品とみられる。181は底部の約1/2が残存する。平底を呈し、器壁が非常に厚い。調整は内面がナデ、胴部外面がタタキ後細かい縦方向のハケ、底部外面がタタキである。182は底部の約1/3が残存する。平底を呈し、胴部は外上方に大きく開く。調整はナデで、底部外面には粗いハケを施す。183は底部の約1/4が残存する。平底を呈し、器壁が薄く、胴部は内湾して立ち上がる。調整はナデで、胴部外面には一部ヘラケズリを施す。胎土には金雲母と石英を含み、瀬戸内からの搬入品とみられる。

184~193は甕である。184は口縁部の約1/8が残存する。口縁部はくの字状に屈曲し、肩部は若干張る。口縁部は叩き出し成形で、端部は面取りを行う。調整は内面がナデ、外面がタタキで、胴部下半にはナデを加える。185は口縁部の約1/5が残存する。頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は叩き出し成形である。調整は内面がハケ、口縁部がヨコナデ、外面はタタキで口縁部にはハケを加える。186は口縁部の約1/5が残存する。口縁部は外反し、肩部は張る。調整は内面が粗いハケ、口縁部がヨコナデ、外面がタタキで口縁部にはハケを加える。187~190は平底を呈するものである。187は底部

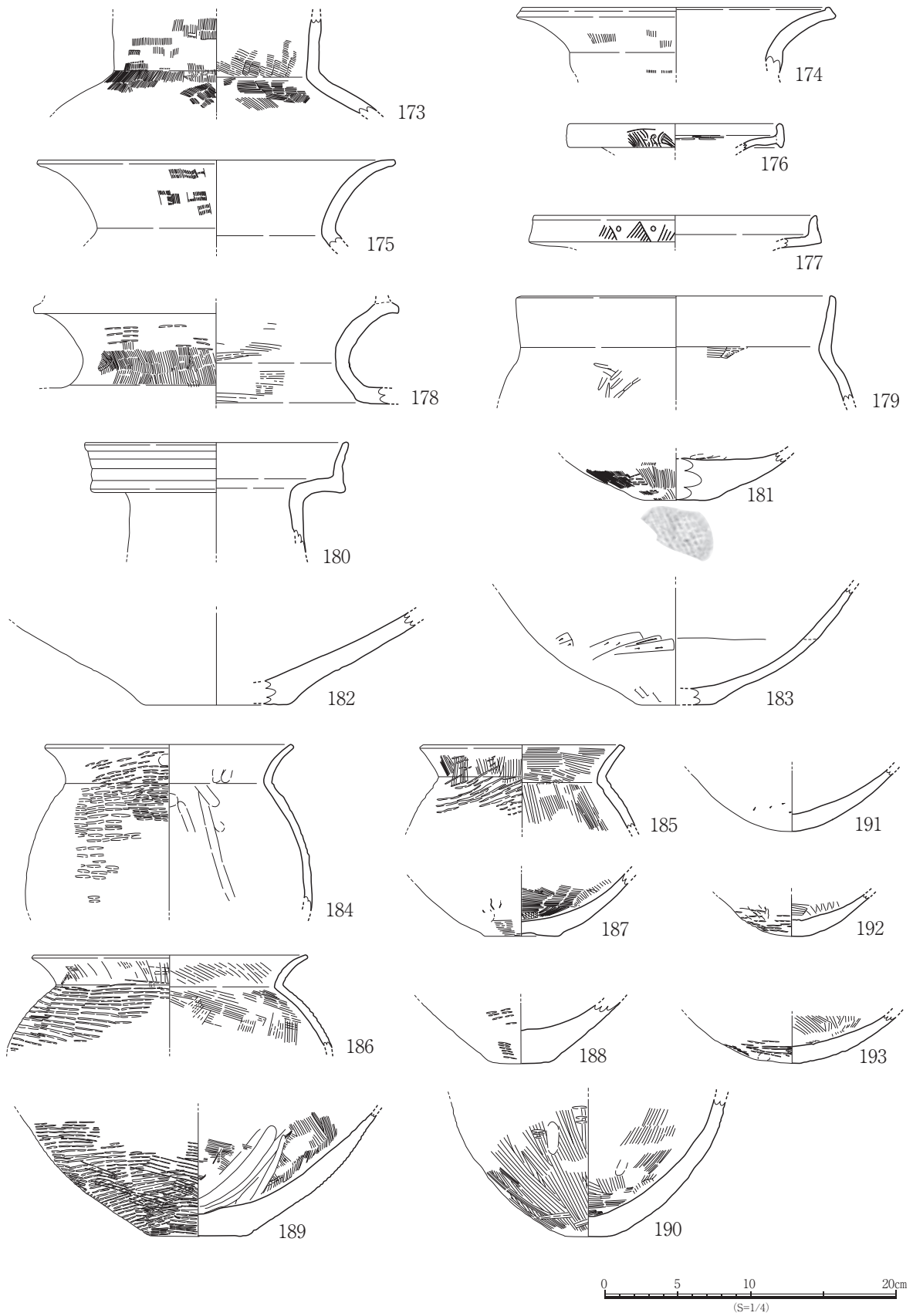


図 22 ST-1 埋土 3 出土遺物実測図 (弥生土器)

3. 遺構と遺物

の約1/4が残存する。調整は内面が密なハケ、外面は一部ハケが残るが摩耗するため調整は不明瞭である。外面には亀裂が入り、底部外面は一部ナデを施す。188は底部の約1/2が残存する。調整は内面がナデ、胴部外面がタタキ後ナデ、底部外面がナデである。胴部内面には煤が付着する。189は底部の約1/4が残存する。調整は内面がハケ後ナデ、胴部外面はタタキ、底部外面はナデである。190は底部が完存する。調整は内面が粗いハケ、外面がタタキ後粗いハケ、底部外面がナデである。191～193は丸底を呈するもので、底部が完存する。191はナデ調整で、外面には一部ヘラケズリの痕跡が残る。胴部外面には被熱の痕跡が残る。192は内面が粗いハケ調整、外面がタタキで亀裂が入る。底部外面はナデ調整である。193は内面が粗いハケ調整、胴部外面がタタキ後ナデ調整、底部外面がナデ調整である。

194～206は鉢である。194は口縁部の約1/4が残存する。調整は内面が粗いハケ後底部に縦方向のナデを加える。外面は口縁部がナデ調整、体部がタタキ後ナデ調整である。195は台付き鉢で、約1/3が残存する。調整は内面が粗いハケで、底部はナデである。口縁部はヨコナデ、外面はナデ調整を行う。196～203は平底を呈するものである。196は底部がほぼ完存する。調整は内面が細かいハケ、外面はナデで亀裂が入る。197は底部が完存する。内面は横方向の板ナデ、外面はナデ調整である。198は底部の約1/2が残存する。調整は内面が横方向の板ナデ、外面はタタキ後ナデで著しく亀裂が入る。底部外面はナデである。199は約1/4が残存する。調整は内面がナデ、体部外面がタタキ、底部外面がナデである。体部外面は著しく摩耗するため調整は不明瞭であるが若干亀裂が入る。200は底部の約1/2が残存する。器壁が厚いもので、口縁端部は四角く収める。調整は内面が粗いハケで、底部は粗雑で凹凸が顕著に残る。外面はナデ調整とみられるが、摩耗するため不明瞭である。201は底径が大きいもので、底部の約1/4が残存する。器面は著しく摩耗するため調整は不明である。202は非常に器壁が厚いもので、底部が完存する。調整は内面がナデ、外面がタタキ後ナデである。底部には内面と外面に凹みがみられるが、貫通はしていない。203は底部の約1/2が残存する。器壁が薄く、体部は内湾する。調整は内面がナデまたは板ナデ、外面はナデで体部には亀裂が入る。204は尖底を呈するもので、底部が完存する。調整は内面がハケ後ナデ、外面はナデとみられるが摩耗するため不明瞭である。205・206は丸底を呈するもので、ほぼ完存する。205は底部内面がナデ調整、体部内面がハケ調整、口縁部がヨコナデ調整、外面がナデ調整で指頭圧痕が残る。206は口縁部内面にハケを施した後底部にナデ調整を加える。外面は口縁部がナデ調整、体部がタタキ後ナデ調整、底部がナデ調整である。

207は高杯で、脚部の約1/2が残存する。調整は内面の裾部にわずかにハケが残るが、その他は器面が著しく摩耗するため不明である。

208・209は手捏ね土器である。208は鉢形を呈するもので、ほぼ完存する。調整はナデで、指頭圧痕が残る。209は高杯形を呈するもので、約1/2が残存する。調整はナデで、指頭圧痕が残る。

土師器(図23-210～213)

210～212は高杯である。210・211は脚部があまり開かないものである。210は脚部がほぼ完存し、径5mmの円孔が5箇所に残る。調整は外面が縦方向のハケ、内面がナデで、端部には指頭圧痕が顕著に残る。器壁が厚く粗雑な作りである。211は脚部の約1/4が残存する。調整は外面が縦方向の強いナデで、一部ハケが残る。脚端部はヨコナデ調整、内面はナデ調整で、裾部は横方向の粗いハケ調整を行う。212は杯部が碗形を呈するもので、脚部が大きく開き、径1.1cmの円孔を5箇所につ。調整

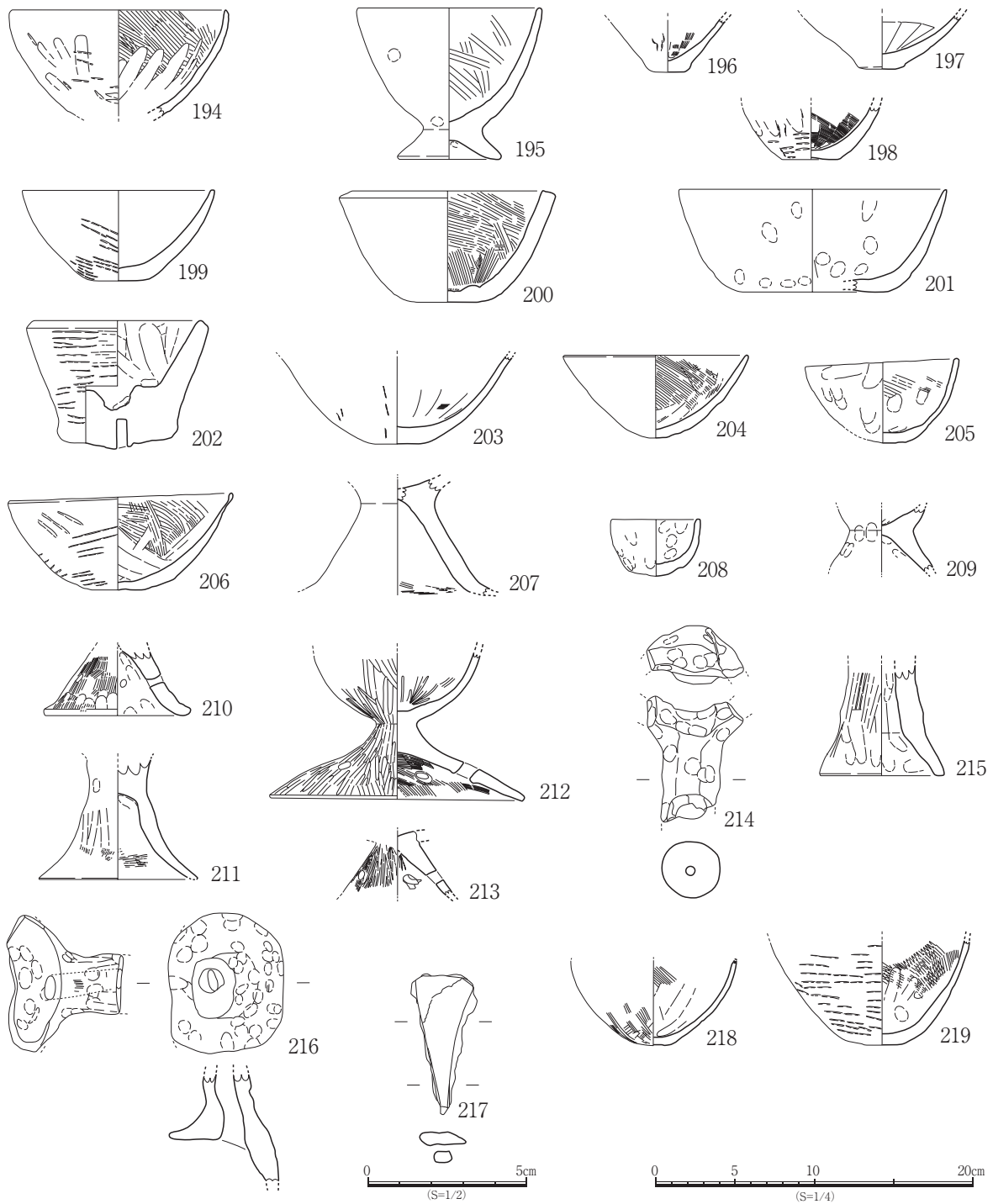


図23 ST-1埋土3～5出土遺物実測図(弥生土器・土師器・土製品・鉄製品)

は杯部と脚外面が緻密なミガキ,脚内面はハケ,脚端部はヨコナデである。

213は器台で,約1/3が残存する。調整は外面が縦方向の緻密なミガキ,内面がナデでしぼり目が残る。脚部には円孔が2箇所に残存する。杯部は摩耗するため調整は不明である。

土製品(図23-214~216)

214・215は支脚で,いずれも長脚のものである。214は先端が2股に分かれ,脚部は中空でしぼり目が残る。調整はナデで指頭圧痕が残る。215は脚部の約1/3が残存する。調整は外面が粗いハケ,裾

3. 遺構と遺物

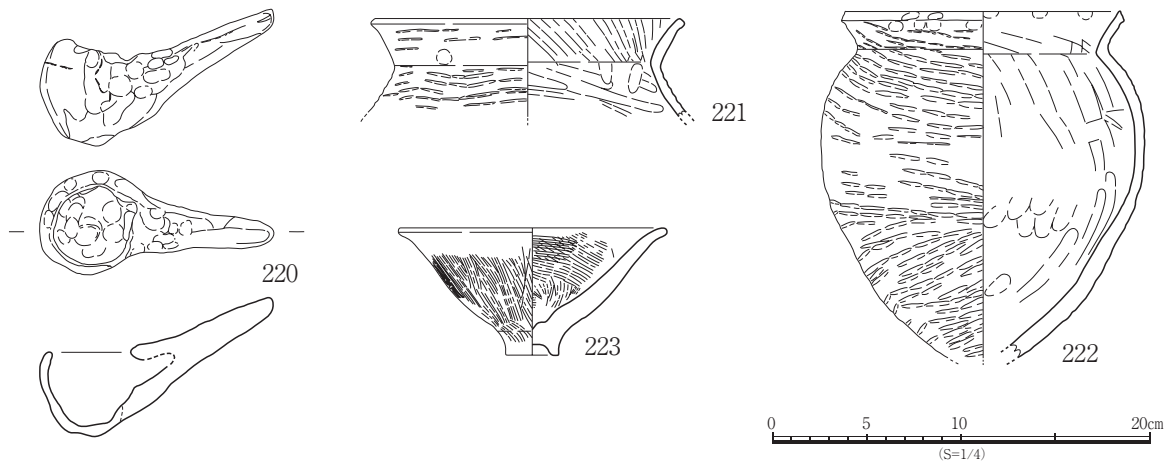


図 24 ST-1 ピット出土遺物実測図（弥生土器・土製品）

部と内面はナデである。

216は先端がラッパ状に広がるもので、用途は不明である。口縁部は高さが異なり、基部は中空である。手捏ね成形で、指頭圧痕が顕著に残る粗雑な作りである。

鉄製品(図23-217)

217は鉄鏃で、床より約3cm上で出土した。圭頭式とみられるが一部が欠損するため不明瞭である。全面に銹化がみられる。

埋土 4 出土遺物

弥生土器(図23-218)

218は鉢で、底部が完存する。調整は内面がハケ後ナデ、外面がナデ後細かいハケで若干亀裂が入る。

埋土 5 出土遺物

弥生土器(図23-219)

219は鉢で、底部が完存する。調整は内面がハケ後ナデ、外面がタタキ後ナデで若干亀裂が入る。

P-13 出土遺物

土製品(図24-220)

220は杓子形土器で完存する。身部は円形を呈し、柄は身部より上方に伸びる。調整はナデで、指頭圧痕が顕著に残る。

P-14 出土遺物

弥生土器(図24-221・222)

221・222は甕である。221は口縁部の約1/4が残存する。調整は胴部内面がナデ、口縁部内面がヨコナデ後粗いハケ、外面がタタキである。口縁端部は面取りを行う。222は約1/2が残存する。口縁部は叩き出し成形で、調整は内面がナデまたはヘラナデ、外面はタタキである。外面には一部煤が付着する。

P-15 出土遺物

弥生土器(図24-223)

223は高台を有する鉢で、約3/4が残存する。高台は低く直立し、体部は大きく開く。調整は底部内面がナデ、体部内面がハケ、口縁部がヨコナデ、外面はハケで、高台はナデである。

ST-2(図25)

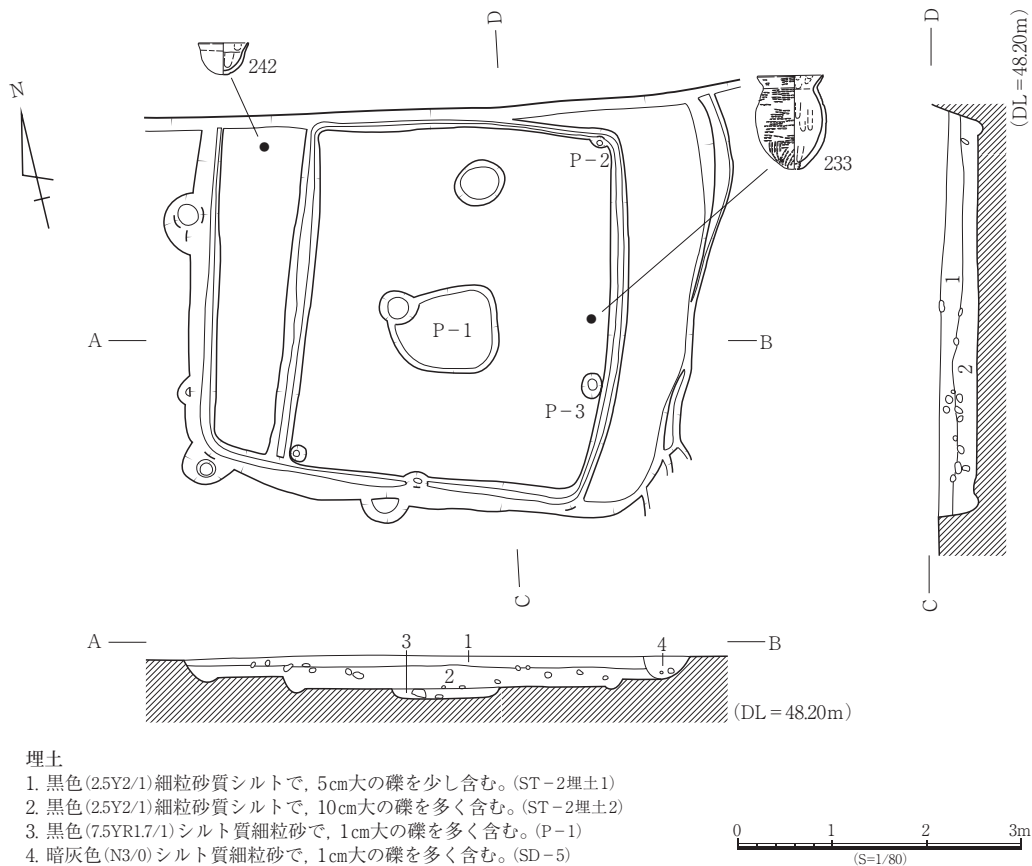


図 25 ST-2

調査区中央部で検出した隅丸方形を呈する竪穴式住居跡で、北端は調査区外へ続く。東西は4.50m、南北は3.50mを検出し、深さ32cmを測る。南壁を除く三辺にはベット状遺構を有し、ベット状遺構は地山削り出しで、幅0.50～0.81m、床面との比高差は4～17cmを測る。西側のベット状遺構上には壁溝がみられ、幅約18cm、深さ3～6cmを測る。床面は長方形を呈し、東西3.40m、南北4.00mを測り、周囲には幅8～17cm、深さ3cmの浅い溝がめぐる。

埋土は2層に分かれるが、上層と下層の境は非常に不明瞭であった。いずれも黒色細粒砂質シルトで、上層は5cm大の礫を少し含み、下層には10cm大の礫が多く含まれていた。

主柱穴は4本とみられるが、P-2・3のほか西側の柱穴は確認できなかった。P-2・3の柱間寸法は2.55mを測る。P-2は楕円形を呈し、長径20cm、短径16cm、深さ33cmを測る。P-3は円形を呈し、径25cm、深さ33cmを測る。埋土はいずれも黒色細粒砂質シルトで、3mm大の礫を多く含んでいた。

中央ピット(P-1)は隅丸方形を呈し、中央よりやや南側に位置する。長辺1.14m、短辺0.87m、深さ12cmを測り、埋土は黒色シルト質細粒砂で、1cm大の礫を多く含んでいた。

出土遺物には弥生土器の壺、甕、鉢、高杯がみられ、北西部で特に多く出土した。上層より出土した弥生土器7点(224～230)、下層より出土した弥生土器11点(231～241)、土師器1点(242)、P-1より出土した弥生土器4点(243～246)が図示できた。

埋土 1 出土遺物

弥生土器(図26-224～230)

224は甕で、ほぼ完存する。調整は胴部内面がハケ後ナデまたはヘラナデ、口縁部内面が横方向の



図 26 ST-2 出土遺物実測図 (弥生土器・土師器)

ハケ後ヨコナデ, 外面は口縁部がハケ, 胴部がタタキ後ハケ, 底部はナデである。

225~229は鉢である。225~227は平底を呈する。225はほぼ完存する。調整は内面がハケ後ナデ, 口縁部がヨコナデ, 体部外面がタタキ, 底部外面がナデで, 底部と体部の境にはヘラケズリを行う。226は約1/2が残存する。調整は内面が細かいハケ後ナデ, 口縁端部は面取りを行う。外面はタタキ後ナデ調整で底部との境にはヘラケズリ調整を行う。底部外面には板状圧痕が残る。227は完存する。調整は内面が放射線状にハケを行い, 口縁部はヨコナデ, 体部外面はタタキ, 底部外面はヘラケ

ズリを行う。228・229は尖底を呈する。228はほぼ完存する。調整は内面が細かいハケ後底部にナデを加える。外面は体部がタタキ調整, 底部がナデ調整である。229はほぼ完存する。調整は内面が密なハケで, 底部にナデを加える。外面は丁寧なナデ調整を行い, 亀裂が入る。

230はミニチュア土器で, 高杯形を呈する。脚部の一部が残存し, 脚柱部は中実で, 裾部は短く伸びる。調整はナデで, 外面にわずかにハケが残る。

埋土 2 出土遺物

弥生土器(図26-231~241)

231~233は甕で, ほぼ完存し砲弾形を呈する。231は平底を呈する。口縁部は叩き出し成形で, 調整は胴部内面がナデ, 口縁部内面が横方向のハケ, 外面はタタキで, 胴部下半にはハケを加える。外面の下半には煤が付着する。232は尖底を呈する。口縁部は叩き出し成形で, 調整は内面の胴部下半がナデ, 上半と口縁部が粗いハケである。外面の調整はタタキ後ナデ, 底部はナデである。233は住居跡北東部の床面から出土した甕で, 尖底を呈するとみられる。口縁部は叩き出し成形で, 調整は内面がナデ, 外面はタタキ, 底部はナデである。

234~240は鉢である。234は高台を有するもので, 約1/3が残存する。体部は真っすぐ外上方に伸び, 底部にはハの字状に開く高台を貼付する。調整は内面が板ナデ, 外面がタタキ, 底部はナデである。235~239は平底を呈するものである。235は底部が完存する。調整は内面が横方向の強いナデ, 外面はタタキ後丁寧なナデ, 底部外面はナデである。236はほぼ完存する。調整は内面がハケで底部にはナデを加える。外面はタタキ後ナデ調整, 底部外面はナデ調整である。237はほぼ完存する。調整は内面がハケ後ナデ, 外面はタタキ後丁寧なナデ, 底部外面はナデである。体部外面には著しく亀裂が入る。238はほぼ完存する。調整は底部内面がヘラナデ, 口縁部内外面が丁寧なナデ, 底部外面はナデで, 外面の体部と底部の境にはヘラケズリを加える。239は大振りの鉢で, 約1/4が残存する。内面の調整はハケ後底部にナデを加える。外面の調整はわずかにタタキが残るが, 摩耗するため不明瞭である。240は西側のベット状遺構上より出土した鉢で, ほぼ完存する。小型で, 丸底を呈する。内面の調整はヘラナデで, その後底部にナデを加える。外面は体部がタタキ後ナデ調整, 底部が強いナデ調整で一部粘土を掻き取っている。体部外面には亀裂が入る。

241は手握ね土器で, 約1/2が残存する。鉢形を呈し, 口縁部は短く外反する。調整はナデで, 指頭圧痕が顕著に残る。

土師器(図26-242)

242は鉢で, ほぼ完存する。小型で丸底を呈し, 口縁部は緩やかに屈曲して短く伸びる。調整はナデで, 口縁部はヨコナデである。

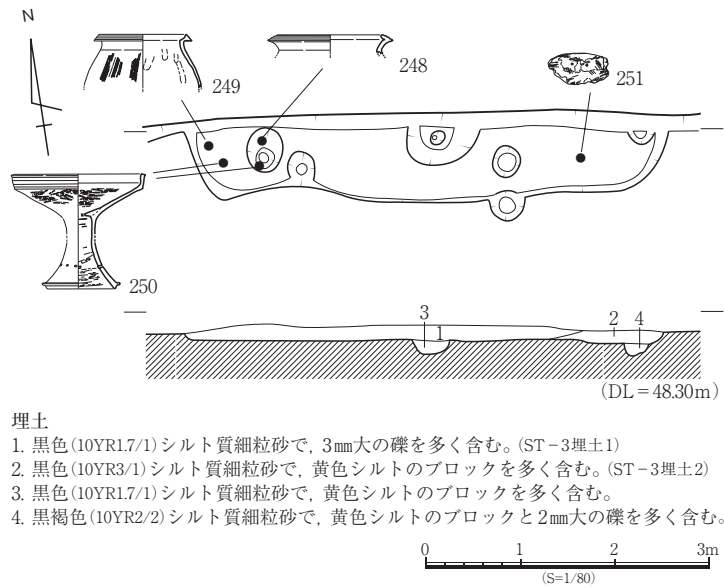
P-1 出土遺物

弥生土器(図26-243~246)

243は短頸壺で, ほぼ完存する。丸底を呈し, 口縁部は細く仕上げる。調整は底部内面がナデ, 胴部内面と外面がハケで, 口縁部はヨコナデである。244は甕で, 胴部の約1/3が残存する。調整は胴部内面がハケ後ナデ, 口縁部内面がハケ, 口縁部外面がタタキ後ハケ, 胴部外面は螺旋状にタタキを行う。245は鉢で, ほぼ完存する。器壁が薄く, 丸底を呈するものである。調整は内面が口縁部にハケを行った後体部にナデを加える。外面はタタキ後ナデ調整で, 若干亀裂が入る。246は手握ね土器で, 完存する。深い椀形を呈する。調整は縦方向の強いナデで, 口縁部には指頭圧痕が顕著に残る。

ST-3(図27)

調査区中央部で検出した隅丸方形を呈するとみられる竪穴式住居跡で、南端の一部のみ検出した。東西は4.30m、深さ12cmを測る。埋土は2層に分かれ、いずれも黒色シルト質細粒砂で、上層は3mm大の礫を多く含み、下層は黄色シルトのブロックを多く含んでいた。主柱穴及び中央ピットは不明である。出土遺物には弥生土器約200点がみられ、上層より出土した弥生土器4点(247~250)、下層より出土した石製品(251)が図示できた。弥生時代中期末の竪穴式住居跡とみられる。



埋土

1. 黒色(10YR17/1)シルト質細粒砂で、3mm大の礫を多く含む。(ST-3埋土1)
2. 黒色(10YR3/1)シルト質細粒砂で、黄色シルトのブロックを多く含む。(ST-3埋土2)
3. 黒色(10YR17/1)シルト質細粒砂で、黄色シルトのブロックを多く含む。
4. 黒褐色(10YR2/2)シルト質細粒砂で、黄色シルトのブロックと2mm大の礫を多く含む。

図27 ST-3

出土遺物

弥生土器(図28-247~250)

247~250は住居跡南西部よりまとめて出土した。247は広口壺で、約1/2が残存する。口縁部は外反し、端部は上下に拡張させ、外面には擬凹線が4条巡る。調整は胴部内面が強いナデ、口縁部がヨコナデ、外面の肩部がナデ、胴部がハケ後ナデまたは横方向のミガキで、ハケ状原体による列点文を2段に施す。248・249は甕である。248は口縁部の一部が残存する。口縁部は外反し、端部は上方に大

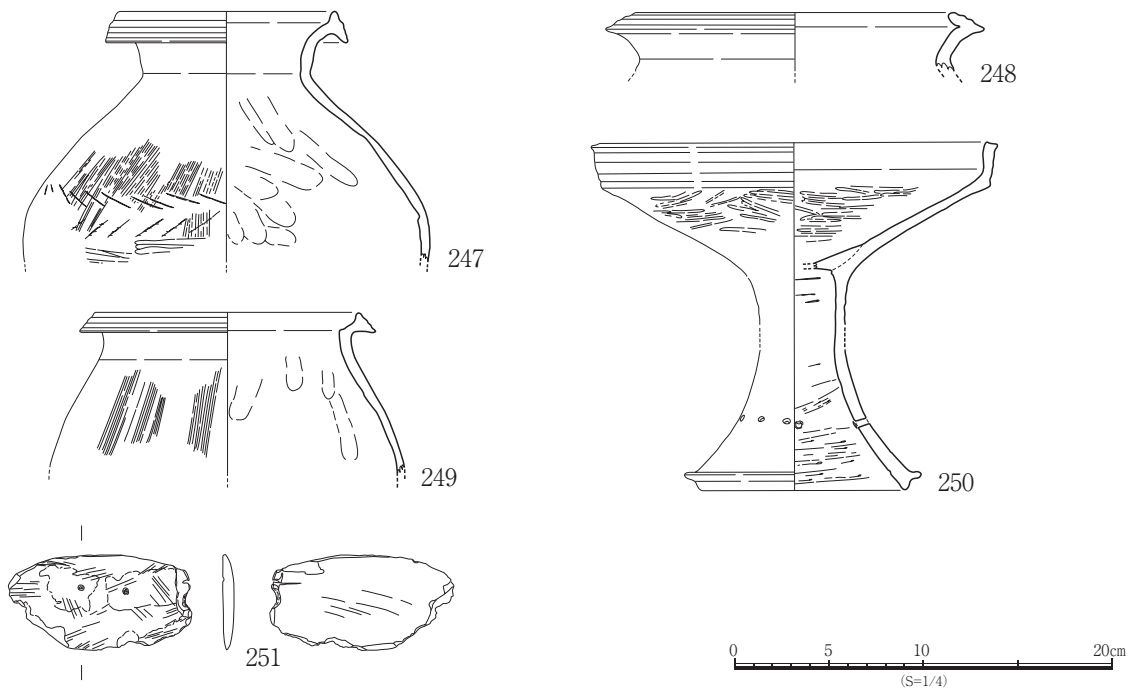


図28 ST-3出土遺物実測図(弥生土器・石製品)

大きく拡張する。調整はヨコナデで、口縁端部には擬凹線が3条巡る。249は口縁部の約1/2が残存する。口縁部は短く外傾し、端部には擬凹線が3条巡る。調整は内面がナデ、口縁部がヨコナデで、外面がナデまたはハケである。250は高杯で、杯部がほぼ完存する。口縁部は短く直立し、脚部は中空で緩やかに広がり、端部を拡張させる。調整は杯部の内外面がミガキ、口縁部がヨコナデで外面には擬凹線が3条巡る。脚部外面はナデ調整、脚部内面は横方向のヘラケズリ調整である。脚部には径3mmの円孔が3個単位で3箇所に分けていたものとみられる。

石製品(図28-251)

251は磨製石包丁で、一部を欠損する。片面には径3mm、深さ1mmの凹みがあり、穿孔途中で止めているものとみられる。また、両端を意図的に欠いており、打製石包丁として使用している。石材は細粒砂岩である。

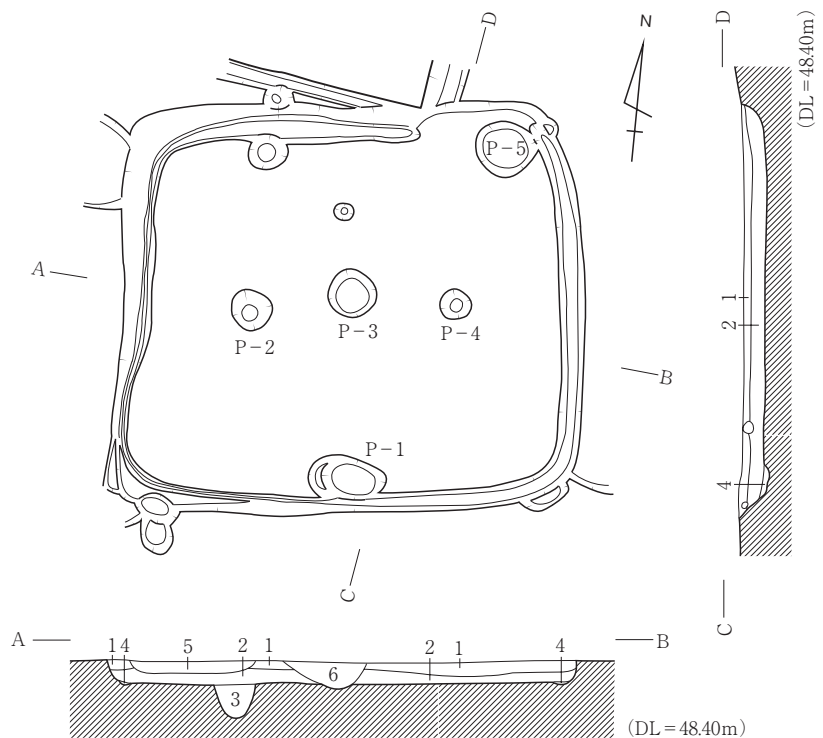
ST-4(図29)

調査区東部で検出した隅丸方形を呈する竪穴式住居跡である。東西は4.40~4.60m、南北は4.05~4.10mを検出し、深さ31cm、面積18㎡を測る。床面には一部を除き、幅8~20cm、深さ2cmの壁溝が巡る。

埋土は2層に分かれ、上層は黒色シルト質細粒砂で中粒砂を少し含み、下層は黒色シルト質細粒砂で5~10cm大の礫が含まれていた。

主柱穴と中央ピットは不明である。南壁中央に位置するP-1及び北東隅に位置するP-5はやや大型で貯蔵穴とみられる。P-1は楕円形を呈し、長径0.80m、短径0.44m、深さ17cmを測る。P-5は楕円形を呈し、長径0.64m、短径0.55m、深さ18cmを測る。埋土はいずれも黒色シルト質細粒砂で、5~10cm大の礫と炭化物を含んでいた。

出土遺物には弥生土器の壺、甕、鉢、高杯、手捏ね土器、支脚などがみられ、上層より出土した弥生土器6点(252~257)、土師器2点(258・259)、土製品(260)、下層より出土した弥生土器7点(261~267)、土師器3点(268~270)、石製品(271)、鉄製品(272)、P-1より出土した弥生土器5点(273



埋土

1. 黒色(10YR2/1)シルト質細粒砂で、中粒砂を少し含む。(ST-4埋土1)
2. 黒色(2.5GY2/1)シルト質細粒砂で、5~10cm大の礫を含む。(ST-4埋土2)
3. 黒色(10YR1.7/1)シルト質細粒砂で、5~10cm大の礫と炭化物を含む。(P-2)
4. 黒色(10YR1.7/1)シルト質細粒砂で、5~10cm大の礫と炭化物を含む。(P-1)
5. 黒色(10YR1.7/1)シルト質細粒砂で、黄色ブロックを含む。(SD-2)
6. 黒色(5YR2/1)細粒質シルトで、10cm大の礫を多く含む。

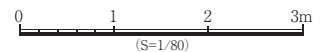


図29 ST-4

3. 遺構と遺物

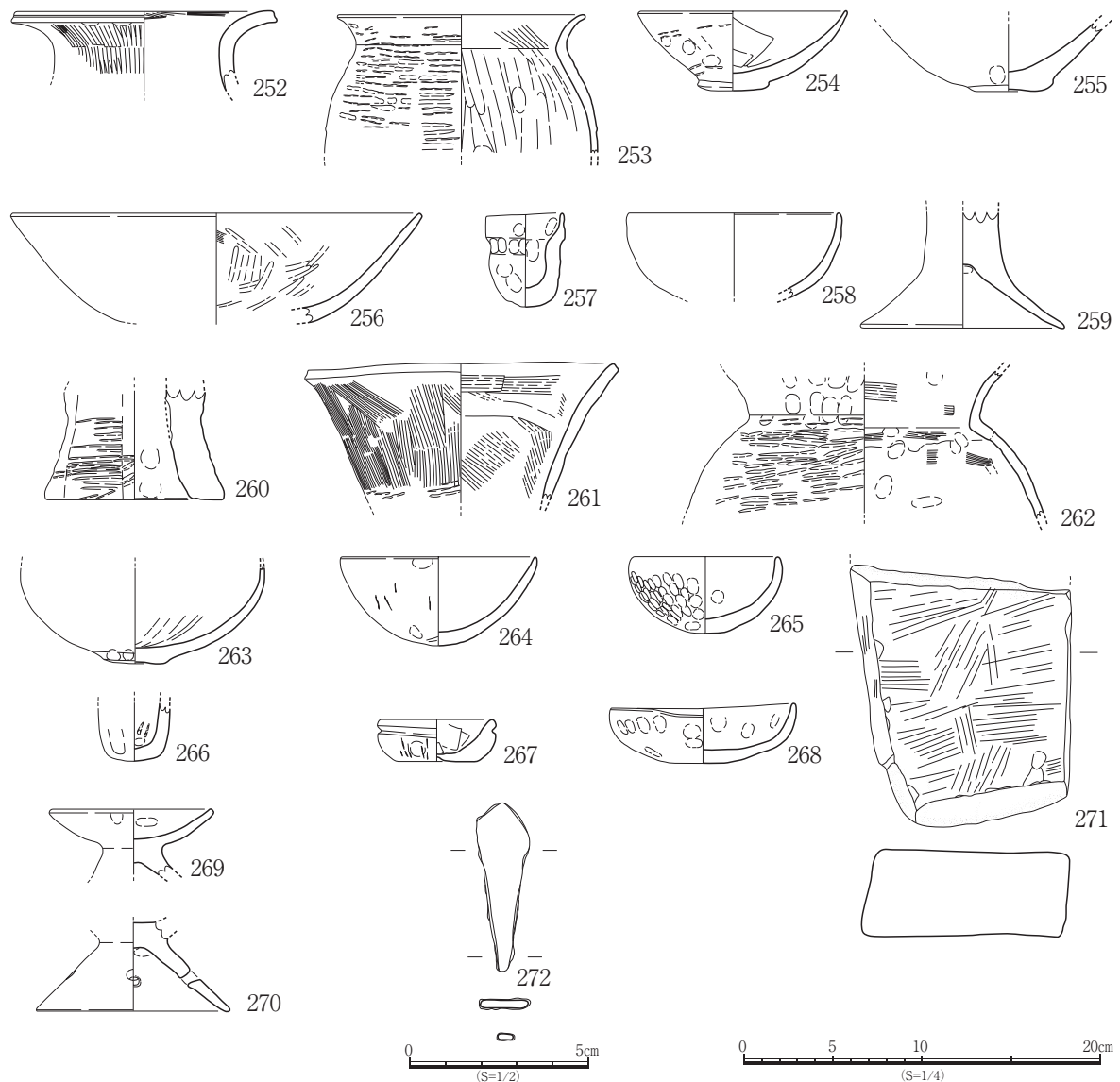


図30 ST-4 出土遺物実測図（弥生土器・土師器・土製品）

～277), P-5から出土した弥生土器(278)が図示できた。

埋土1 出土遺物

弥生土器(図30-252～257)

252は広口壺で、口縁部の約1/8が残存する。調整は内面がナデまたは粗い横方向のハケ、口縁端部はヨコナデ、外面は粗い縦方向のハケである。

253は甕で、口縁部の約1/2が残存する。口縁部は外反する。口縁部は叩き出し成形で、調整は胴部内面が縦方向の強いナデ、口縁部内面が板ナデ、口縁端部はヨコナデ、外面はタタキである。

254～256は鉢である。254は底部が完存する。底部の器壁が厚く、器高が低いものである。調整は内面が横方向の板ナデ、口縁部がヨコナデ、体部外面はタタキ後ナデ、底部外面はナデである。255は底部の約1/2が残存する。全面にナデ調整を施す。256は大型のもので、約1/5が残存する。調整は内面がナデまたはハケ後ミガキ、口縁部がヨコナデ、外面がナデである。

257は手捏ね土器で、ほぼ完存する。小型で、丸底を呈し、口縁部は上方へ真っすぐ立ち上がる。調

整はナデで、頸部には指頭圧痕が顕著に残る。

土師器(図30-258・259)

258は鉢で、口縁部の約1/3が残存する。やや腰が張る形態を呈する。調整は体部がナデで、口縁部はヨコナデである。

259は高杯で、脚部の約3/4が残存する。中実で、裾部は短く伸びる。調整はナデで、裾端部はヨコナデである。

土製品(図30-260)

260は支脚で、約1/6が残存する。裾部は円形、脚部は多角形を呈する。調整は外面がタタキ、内面がナデで、接地面は無調整である。

埋土2 出土遺物

弥生土器(図30-261~267)

261は広口壺で、口縁部の約1/2が残存する。口縁部は直線的で、緩やかに開く。調整はナデ後ハケで、口縁端部はヨコナデ、外面にはわずかにタタキが残る。

262は甕で、頸部の約1/4が残存する。調整は内面の胴部がナデ、頸部から口縁部がハケで、外面は口縁部がヨコナデ、胴部がタタキで、頸部にはナデを加える。口縁部外面には煤が付着する。

263~265は鉢である。263は底部が完存する。平底を呈し、体部は内湾する。調整はナデで、内面は特に丁寧に仕上げる。体部外面には若干亀裂が入る。264は底部が完存する。小型で、尖底を呈する。調整はナデで、口縁部はヨコナデである。外面には亀裂が入る。265はほぼ完存する。小型で、丸底を呈する。調整はナデで、外面には指頭圧痕が縦方向に並ぶ。口縁部はヨコナデ調整である。

266・267は手捏ね土器である。266は底部の約1/2が残存する。平底を呈し、体部は上方へ真っすぐ立ち上がる。調整はナデで、内面には礫が動いた痕跡が残る。267は約1/3が残存する。平底で、浅い杯形を呈する。調整はナデで、内面にはヘラナデを加える。非常に粗雑な作りで、口縁部外面には沈線状の段を有し、体部には亀裂が入る。

土師器(図30-268~270)

268は皿状を呈する鉢で、完存する。調整はナデで、口縁部はヨコナデを施し、指頭圧痕が顕著に残る。

269・270は器台である。269は杯部の約1/3が残存する。杯部は皿状を呈する。調整はナデで、口縁部はヨコナデである。270は脚部の約1/2が残存する。脚部は低く、径8mmの円孔が3箇所に残存する。調整はナデで、裾端部はヨコナデである。

石製品(図30-271)

271は砥石である。砂岩の割石を使用しており、残存部で5面に使用痕が残る。また、1面には黒い付着物がみられる。

鉄製品(図30-272)

272は鉄鏃で、床面より2cm上で出土した。ほぼ完存し、全面に錆化がみられる。基部は断面が矩形を呈する。圭頭式である。

P-1 出土遺物

弥生土器(図31-273~277)

273は甕で、底部が完存する。器壁が厚く、丸底を呈する。調整は内面がナデ後ハケ、胴部外面がタタキ後ハケ、底部外面はタタキである。274~276は鉢である。274は口縁部の約1/3が残存する。調

3. 遺構と遺物

整は内面が細かいハケ、口縁部がヨコナデ、外面がナデで若干亀裂が入る。275は完存し、丸底を呈する。調整は内面がヘラナデ後ナデ、体部外面がタタキ後ナデ、底部外面がナデである。276も完存し、丸底を呈する。調整は内面が丁寧なナデ、口縁部がヨコナデ、外面がタタキ後丁寧なナデで、亀裂が入る。277は手捏ね土器で、約1/4が残存する。小型で、鉢形を呈する。器面は著しく摩耗するため調整は不明である。

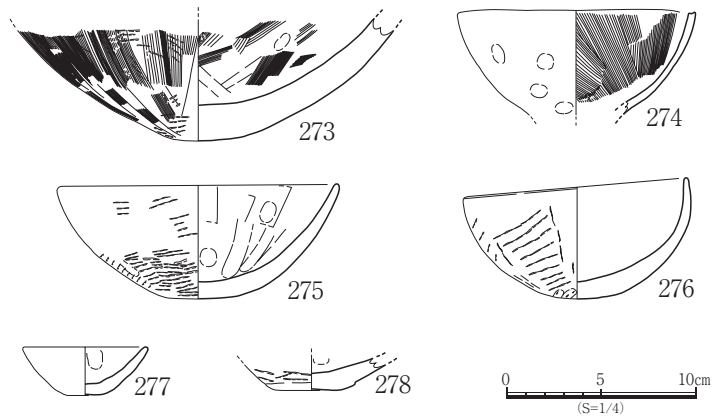


図31 ST-4ピット出土遺物実測図(弥生土器)

P-5 出土遺物

弥生土器(図31-278)

278は甕で、底部が完存する。底部は平底を呈する。調整は内面がナデ、胴部外面がタタキ、底部外面がナデである。

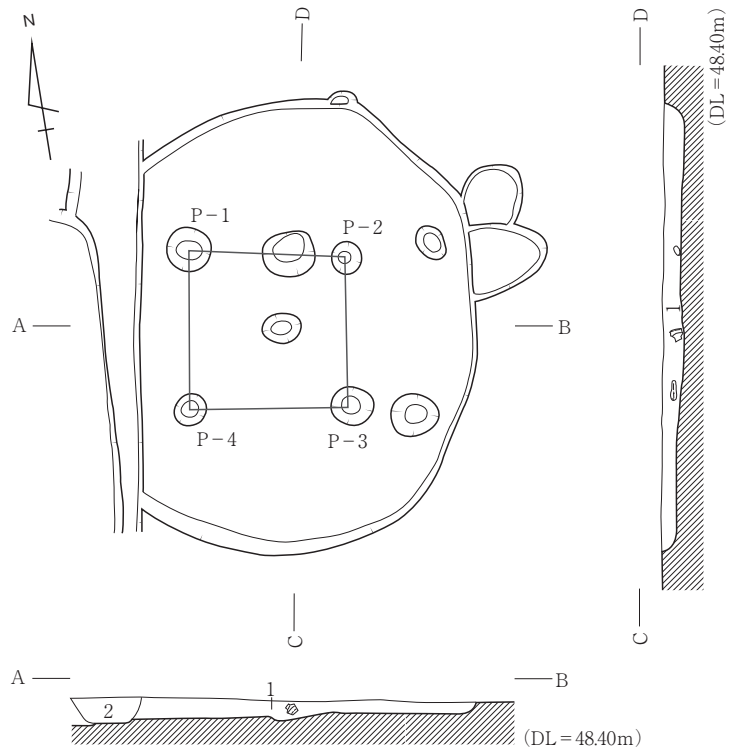
ST-5(図32)

ST-4の南で検出した楕円形を呈する竪穴式住居跡で、西側は近世の溝跡(SD-10)と古墳時代後期の竪穴式住居跡(ST-11)に切られる。東西は3.50m、南北は4.75mを検出し、深さ24cmを測る。

埋土は黒色シルト質細粒砂で粘性が弱く、0.5~1cm大の礫を多く含んでいた。

主柱穴はP-1~4の4本とみられ、柱間寸法は1.65~1.70mである。P-1は円形で径48cm、深さ44cm、P-2は円形で径32cm、深さ40cm、P-3は楕円形で長径45cm、短径38cm、深さ46cm、P-4は円形で径30cm、深さ36cmを測る。埋土はいずれも黒色シルト質細粒砂で、5~10cm大の礫を含んでいた。中央ピットは不明である。

出土遺物には弥生土器の壺、甕、鉢、高杯がみられ、弥生土器13点(279~291)が図示できた。



埋土

1. 黒色(10YR1.7/1)シルト質細粒砂で、0.5~1cm大の礫を多く含む。(ST-5埋土)
2. 黒色(5Y2/1)細粒砂質シルトで、10cm大の礫を多く含む。(SD-10)

図32 ST-5



図 33 ST-5 出土遺物実測図 (弥生土器)

出土遺物

弥生土器(図33-279~291)

279~282は壺である。279は複合口縁壺で、口縁部の約1/3が残存する。調整は内面がナデ、口縁端部がヨコナデ、外面がナデ後一部ハケである。口縁部には櫛描きの波状文が1条、頸部には突帯が2条巡る。280は頸部の約1/8が残存する。279と同一個体の可能性が高い。調整はナデで、外面には突帯が2条とヘラ描きの斜格子文を施す。281は底部の約1/2が残存する。平底を呈し、胴部はやや直線的に伸びる。調整は胴部外面がタタキ後ハケ、底部外面はナデである。内面は著しく摩耗するため調整は不明である。282は大型の壺で、底部が完存する。調整は内面が粗いハケ後ナデ、外面が密なミガキである。外面は著しく剥離する。

283~286は甕で、283・284は平底を呈する。283は小型で、底部の約1/4が残存する。調整はナデで、指頭圧痕が残る。胴部外面には煤が付着する。284はほぼ完存する。やや肩が張り、底部は平底を呈するものとみられる。調整は内面が粗いナデで一部ハケが残る。外面は口縁部がナデ調整、胴部がタタキ後ナデまたは粗いハケ調整、底部外面がナデ調整である。外面の口縁部から肩部には煤が付着する。285は口縁部の約1/3が残存する。頸部はくの字状に屈曲し、口縁端部は四角く収める。調整は胴部内面がナデ、口縁部内面と口縁端部が横方向のハケ、口縁部外面がナデ、胴部外面には縦方向のハケがわずかに残る。胴部外面には煤が付着する。胎土には雲母を含む。阿波からの搬入品とみられる。286は胴部を欠損する。器壁が薄く、平底を呈し、口縁部は短く屈曲し端部を肥厚させる。調整は底部内面がナデ、胴部内面がハケ後ヘラケズリ、口縁部がヨコナデ、胴部外面が細かいハケ、底部外面はナデである。外面には煤が付着する。胎土には石英を含む。阿波からの搬入品とみられる。

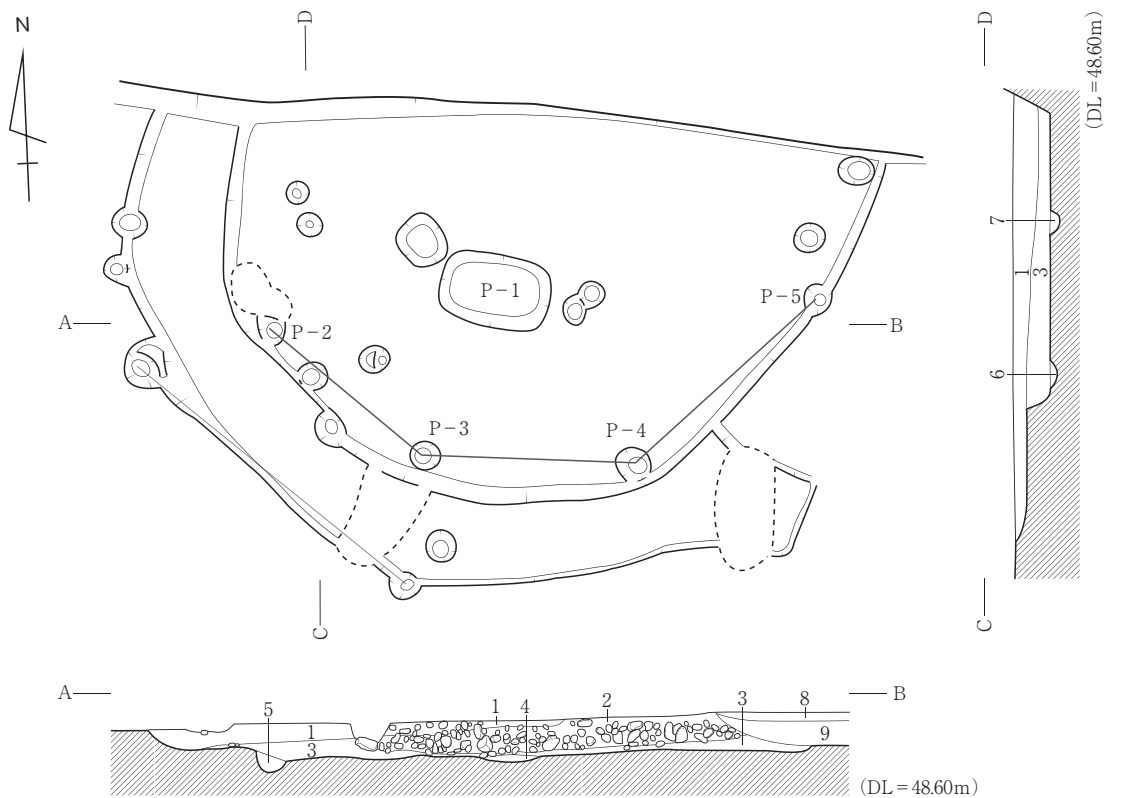
287・288は鉢で、いずれも平底を呈する。287は底部が完存する。調整は内面がナデで一部ヘラケズリ、体部外面がタタキ、底部外面がナデである。288はほぼ完存する。器壁が厚く、口縁端部は四角く収める。調整は内面が底部にナデ、口縁部にハケを行った後縦方向のミガキ、外面は口縁部がナデ、体部がハケ後ミガキ、底部がナデである。

289~291は高杯である。289は脚部の約1/6が残存する。脚部はハの字状に大きく開き、径7mmの円孔が1箇所に残存する。調整は杯底部と脚部外面がミガキ、裾端部がヨコナデ、裾内面はハケ、脚柱部はナデでしぼり目が残る。290は杯部が椀状を呈するもので、ほぼ完存する。杯部は浅く、脚部はハの字状に大きく開き、径1.1cmの円孔を3箇所に穿つ。調整は杯部と脚部外面が緻密なミガキ、脚裾部はヨコナデ、裾内面は細かい横方向のハケ、脚柱部内面はナデでしぼり目が残る。291は口縁部が外反するもので、ほぼ完存する。脚部は大きく開き、径1cmの円孔が4箇所にみられる。調整は杯部内面がナデ後ミガキ、口縁部外面がヨコナデ、杯部外面と脚部外面がミガキ、脚裾部がヨコナデ、脚部内面が縦方向のナデである。

ST-6(図34)

調査区東部で検出した多角形を呈する竪穴式住居跡で、六角形または八角形とみられる。北側は調査区外へ続き、東側はST-7に切られる。東西7.75m、南北5.00mを検出し、深さ37cmを測る。西側と南側ではベット状遺構を確認し、地山削り出しで、多角形を呈するものとみられ、幅0.72~0.84m、床面との比高差は9~20cmを測る。

埋土は3層に分かれ、埋土1は黒色シルト質細粒砂で多量の1~3cm大の礫を含み、埋土2は黒褐色シルト質細粒砂で5~20cm大の礫を非常に多く含んでいた。埋土3は黒褐色シルト質細粒砂で1~10cm



埋土

1. 黒色(10YR2/1)シルト質細粒砂で、1~3cm大の礫を多く含む。(ST-6埋土1)
2. 黒褐色(10YR2/2)シルト質細粒砂で、5~20cm大の礫を非常に多く含む。(ST-6埋土2)
3. 黒褐色(10YR2/2)シルト質細粒砂で、1~10cm大の礫を含む。(ST-6埋土3)
4. 黒色(7.5YR2/1)シルト質細粒砂で、10cm大の礫を非常に多く含む。(P-1)
5. 黒色(7.5YR2/1)シルト質細粒砂で、10cm大の礫を非常に多く含む。(P-2)
6. 黒色(7.5YR2/1)シルト質細粒砂で、10cm大の礫を非常に多く含む。
7. 黒色(7.5YR2/1)シルト質細粒砂で、10cm大の礫を非常に多く含む。
8. 黒色(10YR1.7/1)シルト質細粒砂で、5mm大の礫を多く含む。5cm大の礫を少し含む。(ST-7埋土1)
9. 黒色(10YR2/2)シルト質細粒砂で、5mm大の礫を多く含む。1~10cm大の礫を含む。(ST-7埋土2)

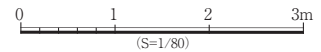


図34 ST-6

大の礫を含んでいた。

中央ピット(P-1)は中央よりやや南に位置する。隅丸方形を呈し、長辺1.18m、短辺0.77m、深さ11cmを測り、埋土は黒色シルト質細粒砂で、10cm大の礫を非常に多く含んでいた。出土遺物には弥生土器片10点がみられたが、図示できるものはなかった。

支柱穴はP-2~5の4本を確認し、住居跡コーナー部の内側に多角形に廻るものとみられる。柱間寸法は2.10~2.60mを測る。P-2は楕円形で長径28cm、短径16cm、深さ15cm、P-3は円形で径33cm、深さ32cm、P-4は円形で径35cm、深さ33cm、P-5は楕円形で長径36cm、短径28cm、深さ23cmを測る。埋土はいずれも黒色シルト質細粒砂であった。

出土遺物には弥生土器の壺、甕、鉢、高杯、手捏ね土器、支脚がみられ、埋土1より出土した弥生土器8点(292~299)、埋土2より出土した弥生土器(300)と土師器(301)、埋土3より出土した弥生土器4点(302~305)が図示できた。

埋土1 出土遺物

弥生土器(図35-292~299)

3. 遺構と遺物

292・293は壺である。292は底部の約1/6が残存する。器壁が厚く、平底を呈する。調整は内面がハケ後縦方向のナデ、外面にはわずかにハケが残り、底部外面はナデである。293は底部が完存する。器壁が薄く、丸底を呈する。調整は底部内面がナデ、胴部内面が粗いハケ、胴部外面がタタキ後縦方向のミガキ、底部外面がナデである。

294は甕で、底部の約1/2が残存する。小型のもので、平底を呈する。調整は内面がハケ、胴部外面がタタキ、底部外面がナデである。

295～298は鉢である。295はやや大型のもので、腰が張る形態を呈する。調整は口縁部にヨコナデを行った後体部内面にハケ、その後底部内面にナデを施す。体部外面はハケ調整で亀裂が入り、底部外面はナデ調整である。296は約1/2が残存する。器高が高く、底部は尖底を呈する。調整は口縁部にヨコナデを行った後体部内面にハケ、その後底部内面にナデを施す。外面はタタキ後丁寧なナデ調整である。297はほぼ完存する。器高が高く、底部は尖底を呈する。調整は口縁部にヨコナデを行った後体部内面にハケ、その後底部内面にナデを施す。外面はタタキ後ナデ調整で、底部にはヘラケズリ調整を加える。298は約1/2が残存する。皿状を呈し、底部は丸底である。調整は内面が丁寧なナデ、口縁端部は無調整、体部外面は螺旋状のタタキで、底部外面はナデである。

299は手捏ね土器で、口縁部を欠損する。鉢形を呈し、体部は真っすぐ伸びる。調整はナデである。

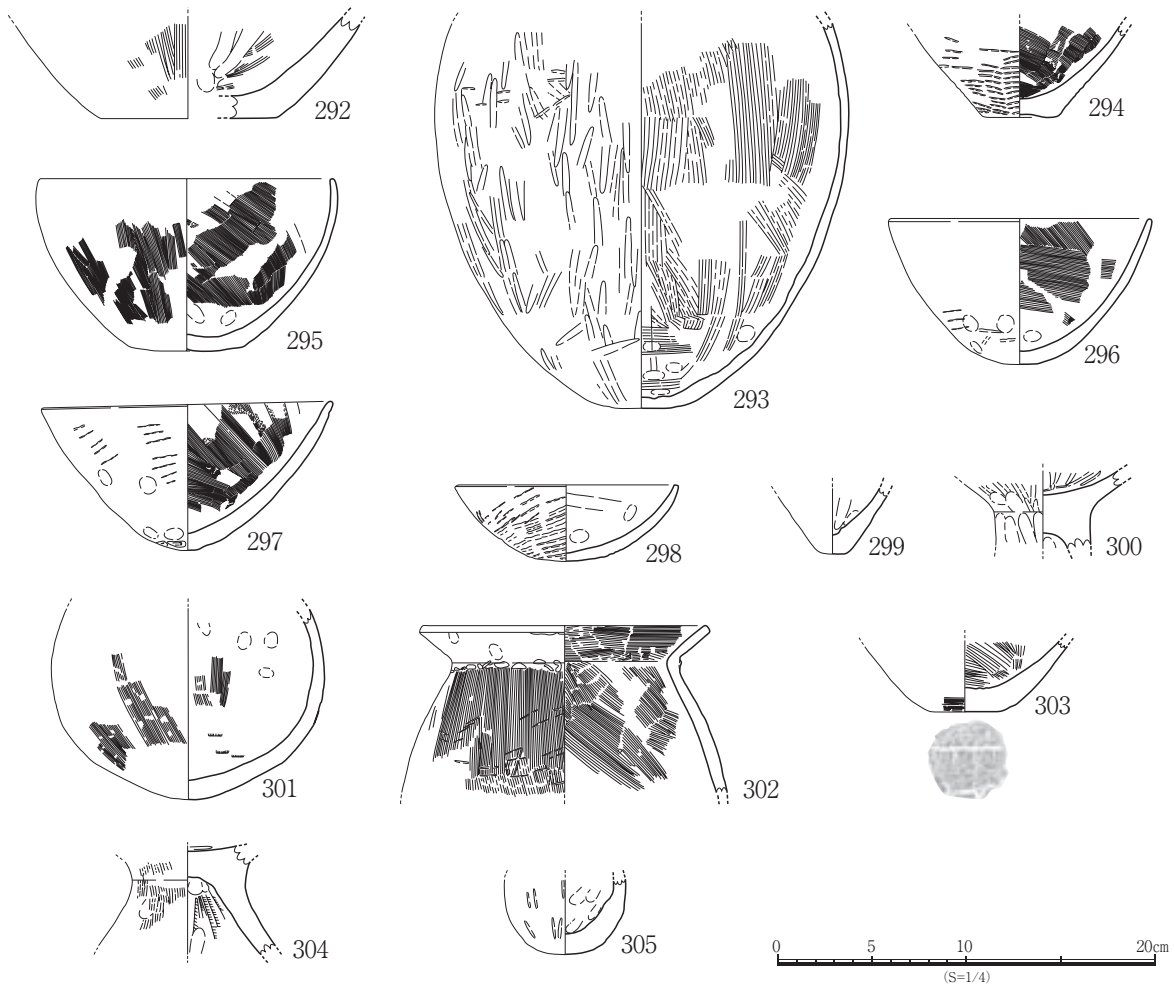


図 35 ST-6 出土遺物実測図 (弥生土器・土師器)

埋土 2 出土遺物

弥生土器(図35-300)

300は高杯で、杯底部が残存する。調整は杯内面が放射線状のミガキ、杯外面が縦方向のミガキ、脚部はナデである。

土師器(図35-301)

301は壺で、底部が完存する。小型で、胴部は膨らみ、底部は尖底を呈する。調整は底部内外面がナデ、胴部内外面が縦方向のハケである。

埋土 3 出土遺物

弥生土器(図35-302~305)

302・303は甕である。302は口縁部の約1/5が残存する。調整は内面がハケで、口縁部外面がナデ、胴部外面がタタキ後ハケである。また、口縁端部は面取りを行い、頸部外面にはハケ調整の際にできた粘土塊が付着する。303は底部が完存する。小型で、底部は平底を呈する。調整は内面が粗いハケ、外面がナデで一部ハケが残る。底部外面には直線の圧痕が残る。

304は高杯で、脚部の一部が残存する。器壁が厚く、脚部が太いものである。調整は杯底部が密なミガキ、脚部がハケである。

305は手捏ね土器で、約1/2が残存する。鉢形を呈するもので、底部は丸底である。調整は内面が強いナデ、外面が縦方向のタタキ後ナデである。

ST-7(図36)

ST-6の東側で検出した隅丸方形を呈する竪穴式住居跡で、ST-6を切る。北側は調査区外へ続き、東西は4.05m、南北は3.10~4.15mを検出し、深さ35cmを測る。

東側のみベット状遺構がみられ、幅0.90~1.04m、床面との比高差は16cmを測る。床面の東側と南側には溝跡がみられ、幅約23cm、深さ8cmを測る。

埋土は2層に分かれ、上層は黒色シルト質細粒砂で多量の5mm大の礫と少量の5cm大の礫を含んでいた。下層は黒色シルト質細粒砂で多量の5mm大の礫と1~10cm大の礫を含んでいた。

中央ピット(P-1)は中央よりやや南に位置し、不整形で、全長1.11m、幅0.80m、深さ16cmを測り、埋土は黒色細粒砂質シルトで、2~5cm大の礫を含んでいた。出土遺物には弥生土器の甕1点、細片35点がみられ、甕(342)が図示できた。

主柱穴はP-2~5の4本とみられ、柱間寸法は1.95~2.10mを測る。P-2は楕円形を呈し、長径40cm、短径31cm、深さ33cm、P-3は円形を呈し、径42cm、深さ23cm、P-4は円形を呈し、径24cm、深さ16cmを測る。P-5は楕円形を呈し、長径38cm、短径28cm、深さ26cmを測る。埋土はいずれも黒色シルト質細粒砂で、5~10cm大の礫と炭化物を含んでいた。

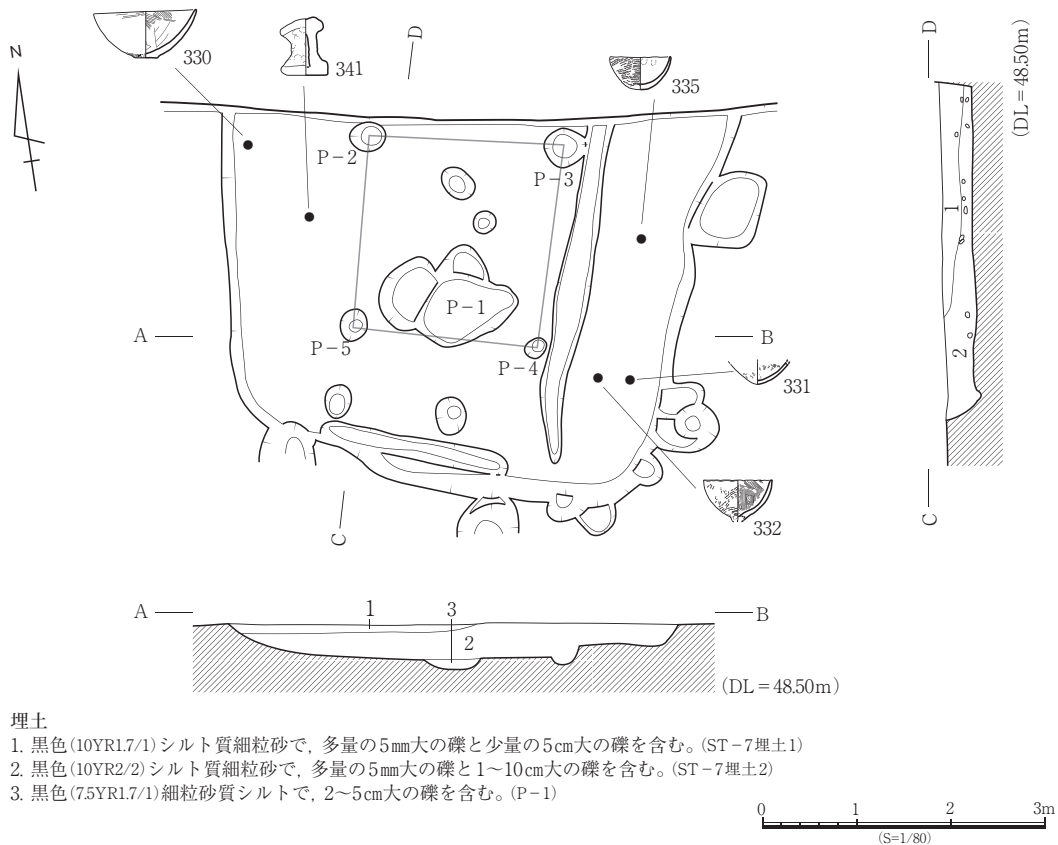
出土遺物には弥生土器の壺、甕、鉢、高杯、手捏ね土器、支脚がみられ、上層より出土した弥生土器7点(306~312)、下層より出土した弥生土器26点(313~338)、土製品3点(339~341)、P-1より出土した弥生土器(342)が図示できた。

埋土 1 出土遺物

弥生土器(図37-306~312)

306・307は壺である。306は広口壺で、口縁部の約1/2が残存する。口縁部は大きく外反し、端部を若干下方に肥厚させる。調整は内面がハケまたはナデ、口縁端部がヨコナデ、口縁部外面がハケ、胴

3. 遺構と遺物



埋土

1. 黒色(10YR1.7/1)シルト質細粒砂で、多量の5mm大の礫と少量の5cm大の礫を含む。(ST-7埋土1)
2. 黒色(10YR2/2)シルト質細粒砂で、多量の5mm大の礫と1~10cm大の礫を含む。(ST-7埋土2)
3. 黒色(7.5YR1.7/1)細粒砂質シルトで、2~5cm大の礫を含む。(P-1)

図36 ST-7

部外面がタタキ後ハケである。307は底部が完存する。調整は内面がナデで、一部ミガキ、胴部外面がハケ、底部外面がナデである。

308は甕で、底部の約2/3が残存する。器壁が厚く、底部は平底を呈する。調整は内面がナデで、胴部外面がタタキ後ハケ、底部外面がナデである。内面には煤が付着する。

309~312は鉢である。309~311は平底を呈する。309は底部が完存する。調整は内面がナデ、体部外面がタタキ後ナデ、底部外面がタタキである。体部外面は若干亀裂が入る。310は約1/2が残存する。器壁が薄く、体部は内湾して立ち上がる。調整は内面がナデ、体部外面がタタキ後ナデ、底部外面がナデである。311は小型で、底部が完存する。調整はナデで、丁寧な作りである。312は大振りで、口縁部の約1/2が残存する。調整は底部内面がナデ、体部内面がハケ、口縁部がヨコナデ、体部外面がタタキ後ナデである。底部は凹凸が著しく、粗雑な作りである。

埋土2 出土遺物

弥生土器(図37・38-313~338)

313~319は壺である。313~315は広口壺である。313は口縁部の約1/5が残存する。口縁部は外反し、端部を四角く収める。調整は内面がハケ、口縁端部がヨコナデ、外面がハケ後一部横方向のナデを加える。314は口縁部の約1/5が残存する。口縁端部に粘土帯を貼付し、上下に拡張する。調整は口縁端部がヨコナデ、外面が縦方向のハケである。内面は著しく摩耗するため調整は不明である。315は口縁部の約1/4が残存する。口縁端部に粘土帯を貼付し、下方に拡張する。調整は横方向のハケで、口縁端部はヨコナデである。外面には櫛描の波状文を施す。316は直口壺で、口縁部の約1/6が

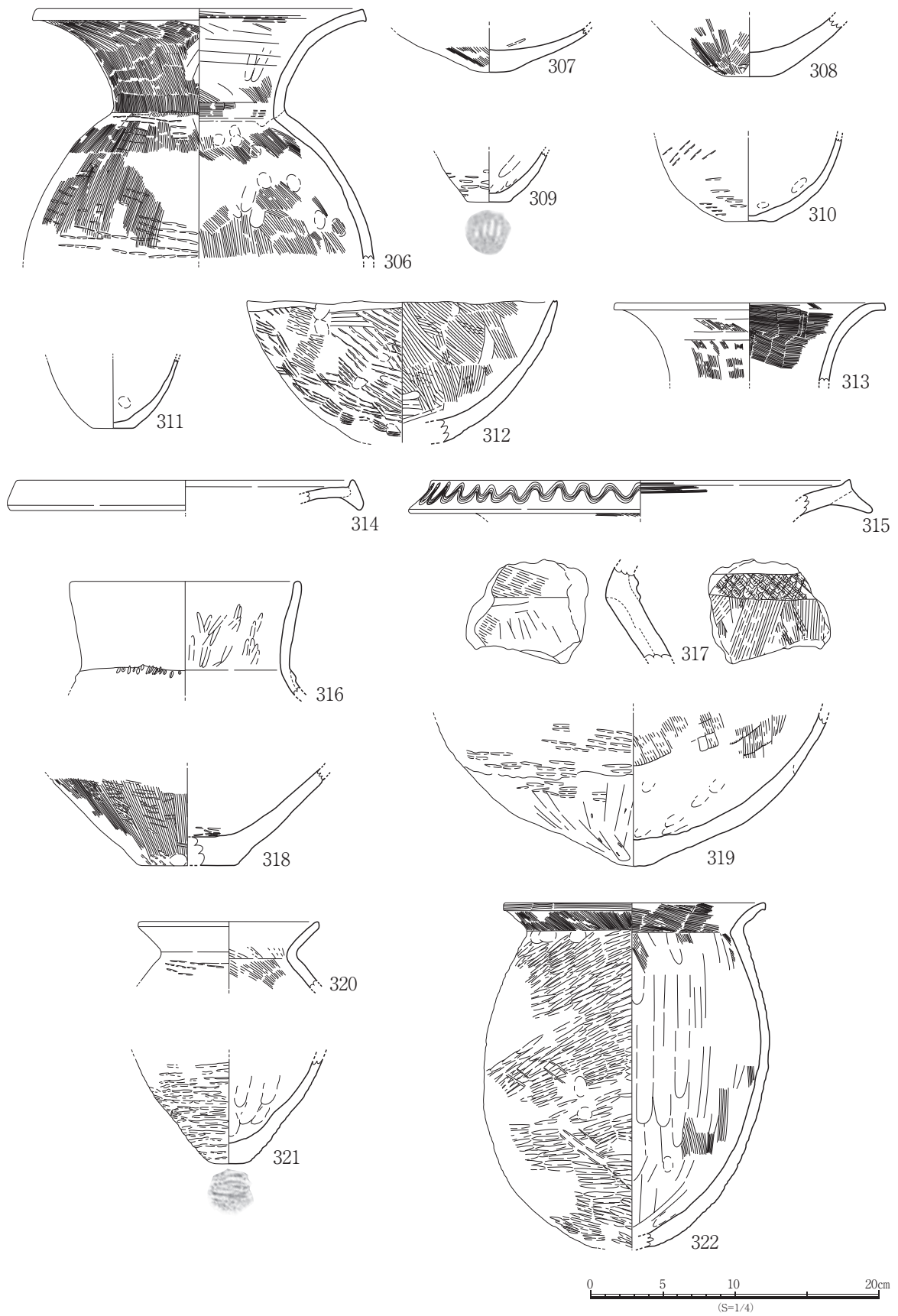


図 37 ST-7 出土遺物実測図 1 (弥生土器)

3. 遺構と遺物

残存する。口縁部は真っすぐ上方に伸び、端部を丸く収める。調整は頸部内面がナデ、口縁部内面がナデ後ミガキ、口縁端部がヨコナデ、口縁部外面が縦方向のナデで、頸部外面には粘土帯を貼付し刺突文を施す。317は頸部の一部が残存する。調整は胴部内面がナデ後ハケ、口縁部内外面がハケである。頸部外面には粘土帯を貼付し、櫛状原体による斜格子文を施す。318は底部の約1/3が残存する。平底を呈し、胴部は外上方に真っすぐ伸びる。調整は底部内面がナデ後ミガキ、胴部内面がナデ、胴部外面がタタキ後ハケ、底部外面がタタキ後ナデである。319は底部がほぼ完存する。底部は尖底を呈し、胴部は膨らむ。調整は底部内面がナデ、胴部内面がハケ、胴部外面がタタキで下半には縦方向のケズリを加える。底部外面はナデ調整である。

320～322は甕である。320は口縁部の約1/4が残存する。小型で、口縁端部を細く仕上げる。調整は内面にハケを施した後口縁部にヨコナデ、外面はタタキである。321は底部が完存する。底部は平底を呈し、胴部はやや上方に立ち上がる。調整は内面が強いナデ、外面がタタキで、底部にはナデを加える。322は約2/3が残存する。器壁が薄く、頸部はくの字状に屈曲する。調整は底部内面がナデ、胴部内面がハケ後縦方向のナデ、口縁部内面がハケ、口縁端部がヨコナデ、口縁部外面がハケ、胴部外面はタタキで、底部にはナデを加える。口縁端部は面取りを行い、ハケ状工具の痕跡が残る。

323～337は鉢である。323は口縁部の約1/3が残存する。器壁が薄く、口縁端部は丸く収める。調

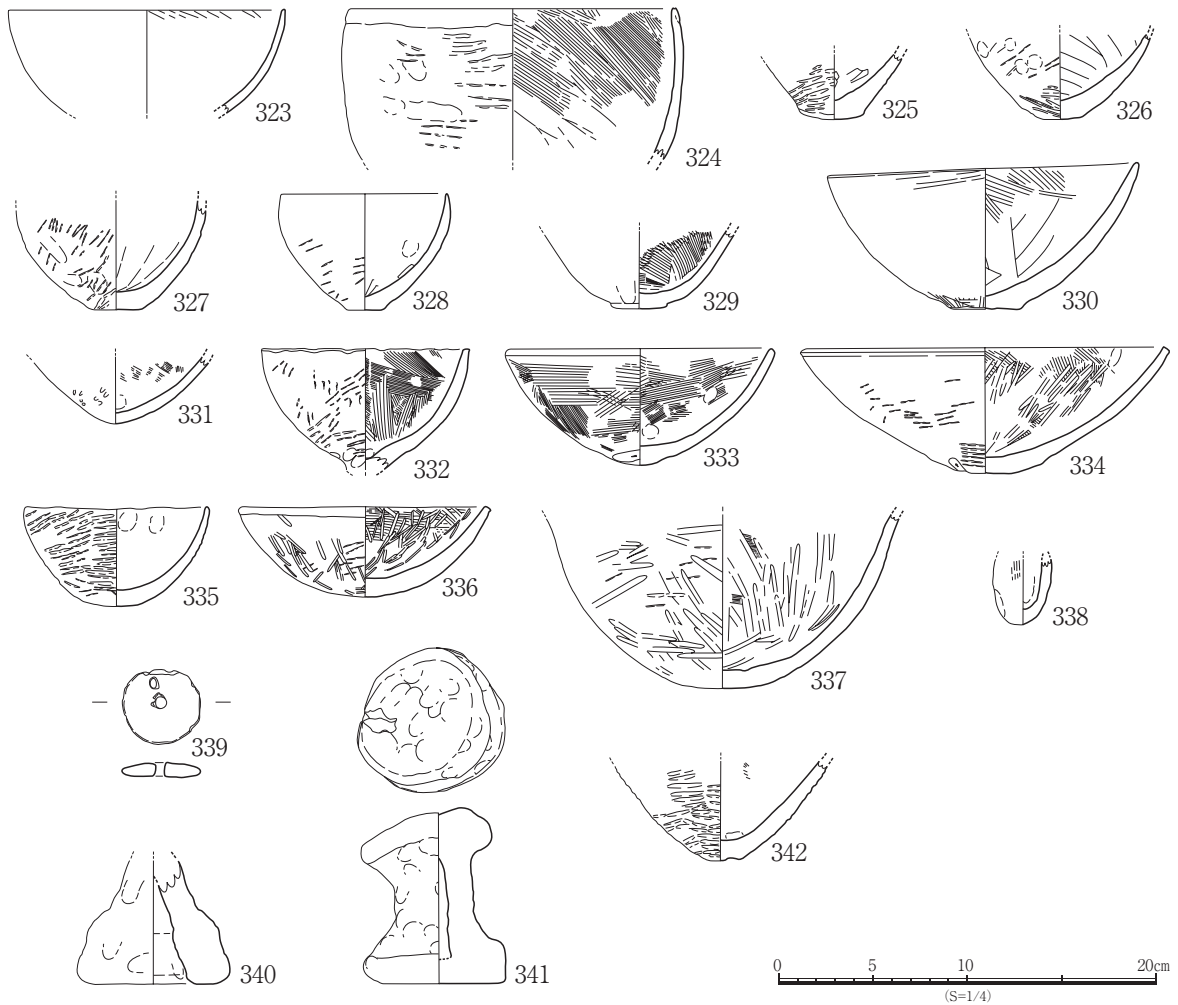


図 38 ST-7 出土遺物実測図 2 (弥生土器・土製品)

整はナデで、口縁部内面には粗い斜め方向のハケがわずかに残る。外面には細かい亀裂が入る。324は大振りのもので、口縁部の約1/3が残存する。体部は上方に立ち上がる。調整は内面がナデまたはハケ、口縁端部はナデ、体部外面はタタキ後ナデで指頭圧痕が残る。325～330は平底を呈する。325は底部が完存する。調整は内面がヘラナデ、体部外面がタタキ、底部外面がナデである。326は底部の約1/2が残存する。調整は内面がナデ、体部外面がタタキ後ナデ、底部外面がナデである。327は口縁部を欠損する。調整は内面がヘラナデ、体部外面がタタキ後ナデ、底部外面がナデである。体部外面には著しく亀裂が入る。328は約1/4が残存する。小型で、底部は小さな平底を呈する。調整は底部内面がヘラナデ、体部内面がナデ、体部外面がタタキ後ナデ、底部外面がナデである。329は底部が完存する。体部は内湾して立ち上がる。調整は内面がハケで底部にはナデを加える。外面はナデ調整である。330はほぼ完存する。調整は底部内面がヘラナデ、口縁部内面がハケ、体部外面がハケ後ナデで、底部外面がナデである。体部外面は著しく亀裂が入る。331～334は尖底を呈する。331は底部が完存する。調整は内面がハケ後ナデ、外面がナデで、竹管状の圧痕が残る。332は約1/2が残存する。調整は底部内面がナデ、体部内面がハケ、口縁部がナデ、外面がタタキ後ナデである。333は底部が完存する。調整は内面がハケで底部にはナデを加える。口縁端部は面取りを行い、外面はハケ調整で、底部にはケズリまたはナデを加える。外面の一部には煤が付着する。334は底部が完存する。やや大振りで、器高は低い。調整は内面がハケ後ミガキ、口縁端部がヨコナデ、体部外面がタタキ後ナデ、底部外面がケズリ後ナデである。335～337は丸底を呈する。335は約1/2が残存する。調整は内面が丁寧なナデ、口縁端部がヨコナデ、体部外面がタタキ、底部外面がナデである。336はほぼ完存する。器壁が厚く、器高が低い。調整は内面が密なミガキ、口縁端部がヨコナデ、外面がタタキ後ナデで、その後ミガキを施す。外面には若干亀裂が入る。337は約1/4が残存する。大振りのもので、口縁部は屈曲するものとみられる。調整は底部内面がナデ後ミガキ、体部内面がハケ後縦方向のミガキ、体部外面はタタキ後ナデで、その後ミガキを施す。底部外面はナデ調整である。

338は手捏ね土器で、底部が完存する。底部は丸底で、卵形を呈する。調整はナデで、外面には一部ハケが残る。

土製品(図38-339～341)

339は有孔円盤で、一部を欠損する。全長4.0cm、全厚0.8cm、重量11.6gを測る。端部は細く仕上げる。調整はナデで、中央部には径0.6cmの円孔を穿つ。片面には竹管状の圧痕が残る。

340・341は支脚である。340は約1/3が残存する。残存部は円錐状を呈し、大きく傾く。調整はナデで、器面の凹凸が著しく残る。341はほぼ完存する。ダンベル状の形態を呈し、上端は傾く。脚柱部は中空である。調整はナデで、指頭圧痕が顕著に残る。

P-1 出土遺物

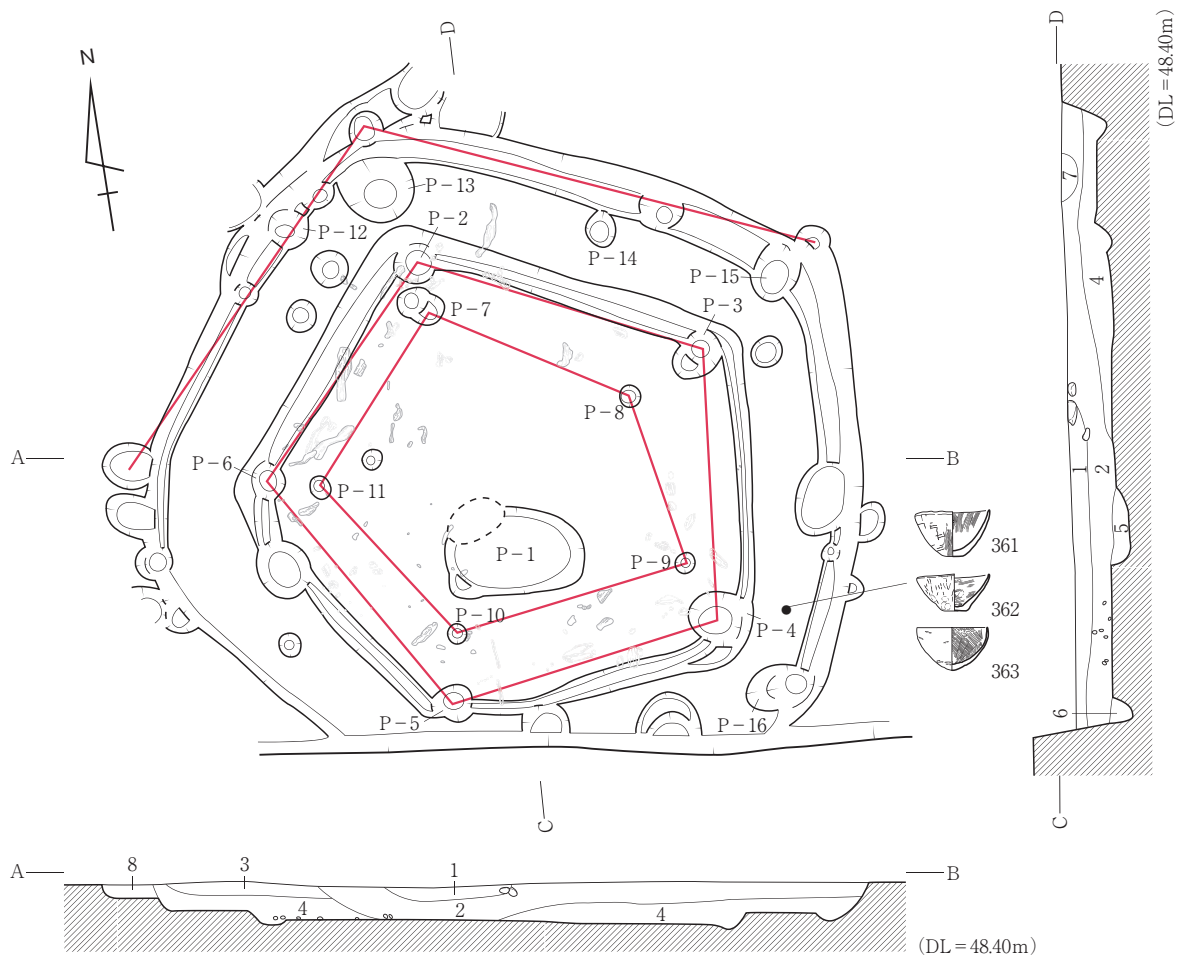
弥生土器(図38-342)

342は甕で、底部が完存する。小さな平底を呈する。調整は内面がナデで、一部ハケが残る。胴部外面はタタキで、底部外面は摩耗するため不明である。

ST-8(図39)

調査区東部で検出した五角形を呈する竪穴式住居跡で、ST-6の南側に位置する。南側は調査区外へ続き、東西7.55m、南北7.00mを検出し、深さ0.51m、面積は推定38㎡を測る。一辺の長さは4.20～5.00mを測る。

3. 遺構と遺物



埋土

1. 黒色(7.5YR3/2)シルト質細粒砂で、5mm大の礫を少し含む。(ST-8埋土1)
2. 黒色(10YR3/3)細粒砂質シルトで、5cm大の礫と炭化物を含む。(ST-8埋土2)
3. 黒色(5Y2/1)細粒砂質シルトで、5cm大の礫を多く含む。(ST-8埋土3)
4. 黒色(10YR1.7/1)シルト質細粒砂で、非常に多量の5mm大の礫を含む。5cm大の礫と炭化物を含む。(ST-8埋土4)
5. 黒色(7.5YR2/1)細粒砂質シルトで、多量の1cm大の礫と炭化物を含む。(P-1)
6. 暗色(7.5YR2/1)細粒砂質シルトで、1cm大の礫を多く含む。
7. 黒色(10YR1.7/1)シルト質細粒砂で、黄色シルトのブロックを含む。
8. 黒色(10YR1.7/1)シルト質細粒砂で、黄色シルトのブロックを含む。

0 1 2 3m
(S=1/80)

図39 ST-8

ベット状遺構は地山削り出しで、五角形を呈し、幅0.62~0.98m、床面との比高差は8~22cmを測る。ベット状遺構上には一部を除き幅10~45cm、深さ3~11cmの壁溝が巡る。

床面も五角形を呈し、東西5.45m、南北5.40m、一辺3.20~3.80mを測る。床面の周囲には幅12~28cm、深さ1~4cmを測る浅い溝が五角形に巡る。

埋土は4層に分かれ、レンズ状に堆積する。埋土1は黒色シルト質細粒砂で5mm大の礫を少し含み、埋土2は黒色細粒砂質シルトで5cm大の礫と炭化物を含んでいた。埋土3は黒色細粒砂質シルトで5cm大の礫を多く含み、埋土4は黒色シルト質細粒砂で非常に多量の5mm大の礫と5cm大の礫及び炭化物を含んでいた。

中央ピット(P-1)は中央よりやや南に位置し、楕円形を呈する。長径1.43m、短径0.93m、深さ19cmを測り、埋土は黒色細粒砂質シルトで、多量の1cm大の礫と炭化物を含んでいた。出土遺物には弥生土器の鉢2点、細片125点、鉄片1点がみられ、鉢(364)が図示できた。

主柱穴は床面の周溝コーナー部に位置するP-2~6とその内側の床面に位置するP-7~11の二重になっていたものとみられる。いずれも五角形に並び、住居跡のコーナー部の内側に並ぶ。P-2~6の柱間寸法は2.80~3.15m, P-7~11は1.90~2.55mを測る。埋土はいずれも黒色細粒砂質シルトで、1cm大の礫と炭化物を含んでいた。また、ベット状遺構のコーナー部と検出面のコーナー部においてもピットを確認している箇所もあり、五角形に並んでいた可能性もある。また、P-12~15はベット状遺構上で確認したピットで、埋土は黒色細粒砂質シルトで、1cm大の礫と炭化物を含んでいた。

出土遺物は弥生土器の壺、甕、鉢、支脚がみられ、埋土1・2からの出土が多くみられた。埋土1より出土した弥生土器4点(343~346)、埋土2より出土した弥生土器10点(347~356)、埋土3より出土した弥生土器1点(357)、埋土4より出土した弥生土器6点(358~363)、P-1より出土した弥生土器(364)、P-12より出土した弥生土器(365)、P-13より出土した弥生土器(366)、P-14より出土した土師器(367)、P-15より出土した弥生土器2点(368・369)が図示できた。

埋土1 出土遺物

弥生土器(図40-343~346)

343は広口壺で、口縁部の約1/6が残存する。口縁部は屈曲して上方に立ち上がる。調整はハケまたはナデで、口縁端部はヨコナデである。344は鉢で、底部が完存する。やや大振り、丸底を呈する。調整はナデで、底部外面には一部工具の圧痕が残る。外面には亀裂が入る。345・346は手捏ね土器で、いずれも高杯形を呈する。345は中実の脚部が残存する。端部は短く下方へ伸びる。調整はナデである。346は約1/2が残存する。脚部はハの字状に伸びる。調整はナデである。

埋土2 出土遺物

弥生土器(図40-347~356)

347~349は壺である。347は二重口縁壺で、口縁部の一部が残存する。調整は内面がミガキまたはハケ、口縁端部がヨコナデ、外面がハケである。348は底部の約1/2が残存する。器壁が厚く、平底を呈する。調整は底部内面がナデ、胴部内面がハケ、胴部外面がタタキ後ハケ、底部外面がナデである。349は底部が完存する。器壁が厚く、小さな平底を呈する。調整は内面がナデ、胴部外面がタタキ後ナデ、底部外面がナデである。

350・351は甕である。350は口縁部の約1/5が残存する。頸部はくの字状に屈曲する。調整は胴部内面がハケ後ナデ、口縁部内面がハケ、口縁端部がナデ、外面はタタキ後ハケである。351は底部がほぼ完存する。底部は平底を呈する。調整は内面がナデ、胴部外面はタタキ後ハケ、底部外面には木葉痕が残る。

352~354は鉢である。352は底部が完存する。調整は内面が横方向のハケ、底部外面がナデである。体部外面は摩耗するため調整は不明である。353はほぼ完存する。器壁が薄く、器高が高い。調整は内面と口縁部外面がナデ、体部外面はナデ後ハケ、底部外面はハケである。底部内面は摩耗するため調整は不明である。354はほぼ完存する。器壁が薄く、底部は尖底を呈する。調整は内面がヘラナデ、外面がタタキ後ナデで、底部にはケズリを加える。

355・356は手捏ね土器で、ほぼ完存する。355は鉢形を呈し、底部は丸底である。調整はナデで、外面には亀裂が顕著に入る。356は皿状を呈し、口縁部は楕円形を呈する。調整はナデである。

埋土3 出土遺物

弥生土器(図40-357)

3. 遺構と遺物

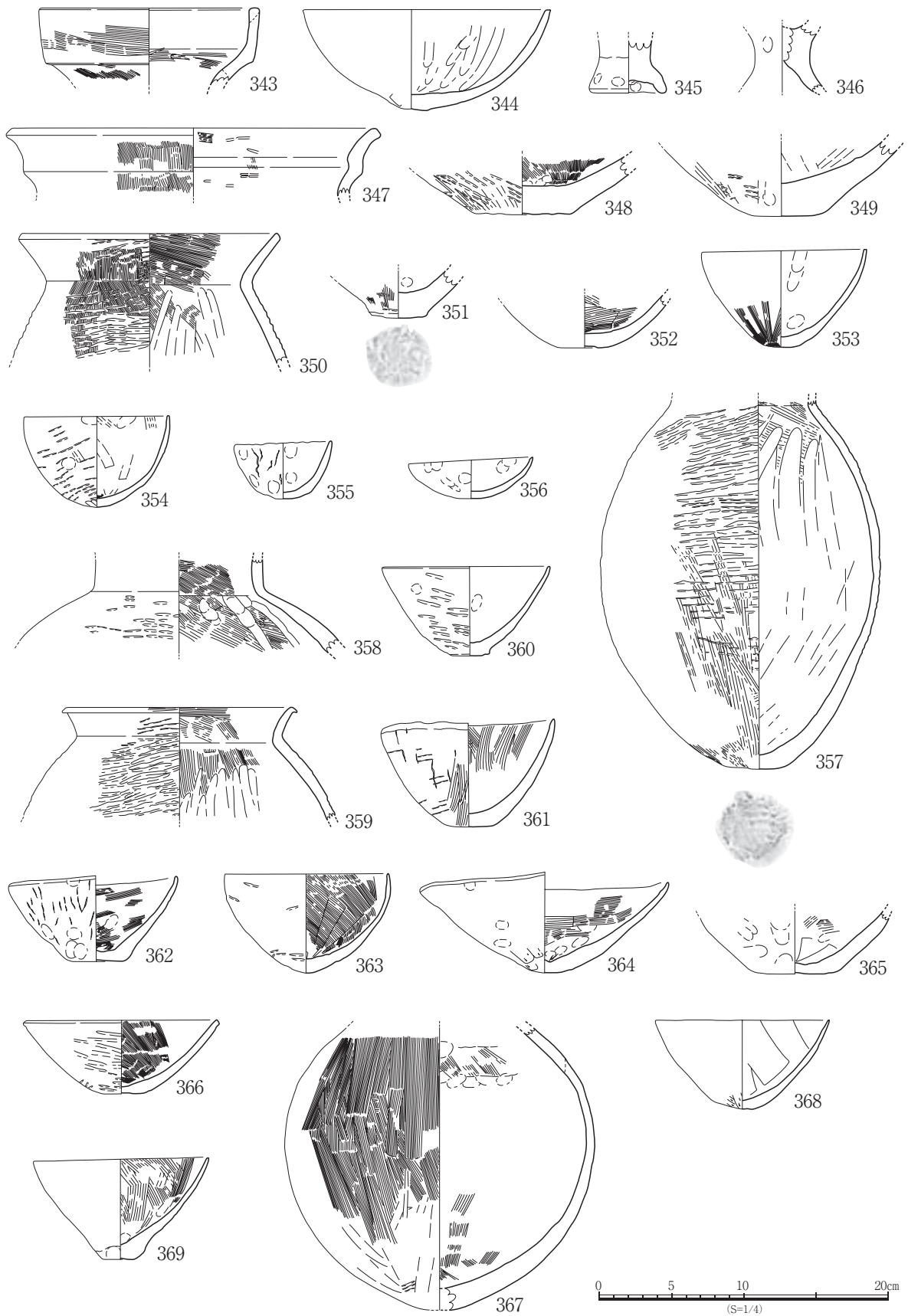


図40 ST-8 出土遺物実測図 (弥生土器・土師器)

357は甕で、約1/2が残存する。胴部は砲弾形を呈し、底部は平底である。調整は内面が頸部にハケを行った後ナデ、胴部外面がタタキで、胴部下半にはハケを加える。底部外面はタタキである。外面の胴部上半には煤が付着する。

埋土4 出土遺物

弥生土器(図40-358~363)

358は壺で、頸部の約1/3が残存する。口縁部は上方に真っすぐ立ち上がる。調整は内面がハケ後一部ナデ、口縁部外面がナデ、胴部外面がタタキ後ナデである。

359は甕で、口縁部の約1/6が残存する。口縁部は叩き出し成形で、調整は内面がハケ後ナデ、外面はタタキで、口縁端部は面取りを行う。外面には煤が付着する。

360~363は鉢である。360~362は平底を呈する。360は約2/3が残存する。器壁が薄く、口縁部は細く仕上げる。調整は内面がナデ、外面がタタキ後ナデ、底部外面がナデである。体部外面には若干亀裂が入る。361はほぼ完存し、口縁部を細く仕上げる。調整は底部内面が縦方向のナデ、口縁部内面がハケ、口縁端部がナデ、外面はタタキで、体部下半にはハケを加える。底部外面はナデ調整である。外面には亀裂が入る。362はほぼ完存し、体部は真っすぐ外上方に伸びる。調整は内面が横方向のハケ、外面がナデで、外面には亀裂が顕著に残る。363はほぼ完存し、底部は尖底を呈する。調整は内面がハケで、底部にはナデを加える。外面はわずかにタタキが残るが、摩耗するため調整は不明瞭である。

P-1 出土遺物

弥生土器(図40-364)

364は鉢で、ほぼ完存する。口縁部は大きく歪み、底部は尖底を呈する。調整は底部内面がナデで、しぼり目状の痕跡が残る。口縁部内面はハケ調整、口縁端部はヨコナデ調整、外面はナデ調整で底部にはケズリ調整を加える。

P-12 出土遺物

弥生土器(図40-365)

365は壺で、底部の約2/3が残存する。調整は底部内面がヘラナデ、胴部内面がナデまたはハケ、外面はナデである。

P-13 出土遺物

弥生土器(図40-366)

366は鉢で、約1/4が残存する。器高が低く、底部は平底を呈する。調整は内面がハケで、底部にはナデを加える。口縁端部は無調整で、体部外面はタタキ後ナデ調整、底部外面はヘラケズリ後ナデ調整で、体部には若干亀裂が入る。

P-14 出土遺物

土師器(図40-367)

367は甕で、約1/3が残存する。底部は尖底で、胴部は球形を呈する。調整は内面がナデまたはハケ、外面がタタキで、胴部上半にはハケ、胴部下半にはナデを加える。内面の胴部上半には煤が付着する。

P-15 出土遺物

弥生土器(図40-368・369)

3. 遺構と遺物

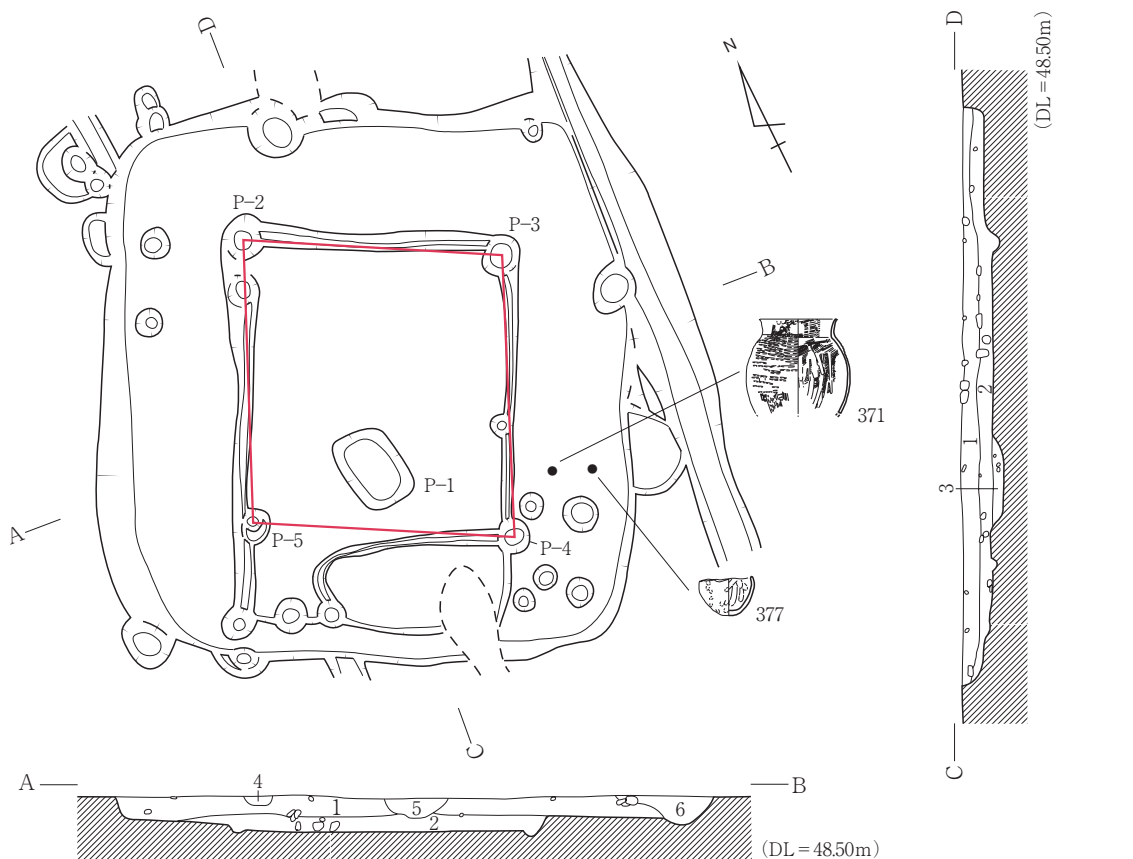
368・369は鉢である。368は底部が完存し、尖底を呈する。調整は内面がヘラナデ、体部外面がナデ、底部外面がケズリである。369は完存し、器壁が薄く、底部は平底を呈する。調整は内面が板ナデ、外面がナデである。底部外面は摩耗するため調整は不明である。

ST-9(図41)

調査区東部で検出した隅丸方形を呈する竪穴式住居跡で、北東隅は近世の溝跡(SD-13)に切られる。東西は4.95m、南北は5.05mを検出し、深さ38cmを測る。南壁を除く三辺にはベット状遺構を有する。ベット状遺構は地山削り出しで、幅0.98~1.15m、床面からの高さは9~13cmを測る。南壁際にはベット状遺構ほど明確ではないが、幅30cmで床面との比高差10cmを測る高床部があり、床面までなだらかに下がる。床面は長方形を呈し、東西2.95m、南北4.00mを測り、周囲にはベット状遺構に沿って幅8~17cm、深さ3cmの浅い溝がめぐる。南側の溝は変則的に内側に湾曲して南側の高床部まで伸びており、南側がこの竪穴式住居跡の入り口とみられる。

埋土は2層に分かれるが、上層と下層の境は非常に不明瞭であった。いずれも黒色シルト質細粒砂で、上層は5mm大の礫と5cm大の礫を含み、下層は5~10cm大の礫を多く含んでいた。

中央ピット(P-1)は隅丸方形を呈し、中央よりやや南側に位置する。長辺0.98m、短辺0.63m、深さ8



埋土

1. 黒色(10YR2/1)シルト質細粒砂で、5mm大と5cm大の礫を含む。(ST-9埋土1)
2. 黒色(10YR2/1)シルト質細粒砂で、5~10cm大の礫を多く含む。(ST-9埋土2)
3. 黒褐色(10YR2/2)シルト質細粒砂で、1cm大の礫を含む。(P-1)
4. 黒褐色(10YR3/1)シルト質細粒砂で、1cm大の礫を含む。(SD-9)
5. 黒褐色(10YR2/3)シルト質細粒砂で、2~5cm大の礫を含む。(SD-12)
6. 黒褐色(10YR2/3)細粒質シルトで、8cm大の礫を含む。(SD-13)

図41 ST-9

cmを測り、埋土は黒褐色シルト質細粒砂で、1cm大の礫を含んでいた。出土遺物には弥生土器片7点がみられたが、図示できるものはなかった。

主柱穴はP-2~5の4本とみられ、柱間寸法は東西が2.75m、南北が2.95mを測る。P-2は楕円形で長径45cm、短径40cm、深さ36cm、P-3は円形で径38cm、深さ39cm、P-4は円形で径38cm、深さ40cm、P-5は楕円形で長径38cm、短径32cm、深さ39cmを測る。埋土はいずれも黒褐色シルト質細粒砂で、1cm大の礫を含んでいた。

出土遺物には弥生土器の壺、甕、鉢、高杯などがみられ、上層より出土した弥生土器8点(370~377)、土師器(378)、石製品(379)、鉄製品(380)、下層より出土した弥生土器5点(381~385)が図示できた。

埋土 1 出土遺物

弥生土器(図42-370~377)

370は広口壺で、口縁部の約1/8が残存する。口縁端部を上下に肥厚させる。調整は内面がナデまたはハケ、口縁端部がヨコナデ、外面が縦方向のハケである。内面には煤が付着する。

371・372は甕である。371は東側のベット状遺構上から出土したもので、口縁部の約1/4が残存す

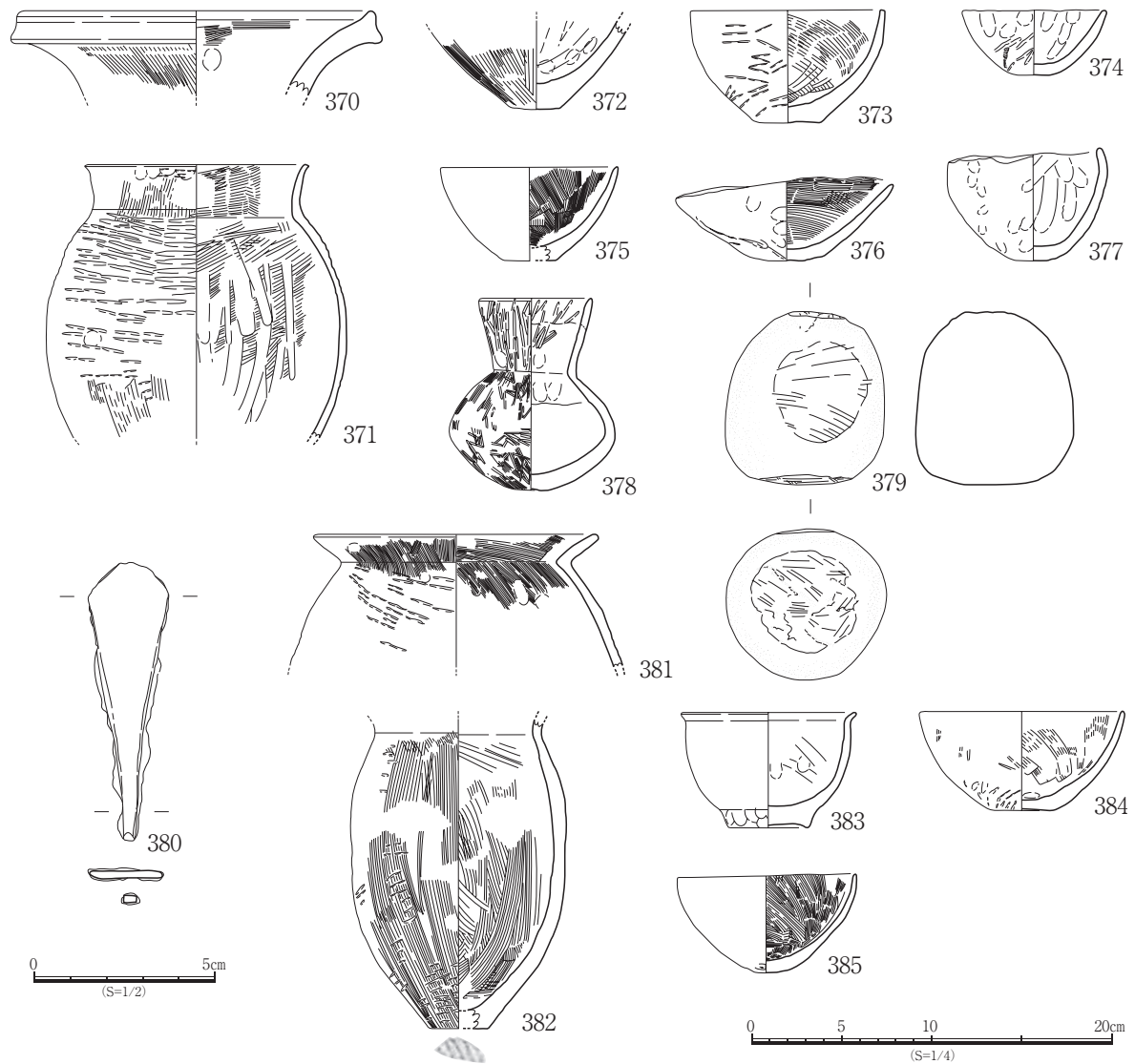


図 42 ST-9 出土遺物実測図 (弥生土器・土師器・石製品・鉄製品)

3. 遺構と遺物

る。器壁が薄く、口縁部は比較的上方に立ち上がる。調整は胴部内面がハケ後縦方向のナデ、口縁部内面がハケ、口縁部外面がナデ、口縁部外面がタタキ後ハケ、胴部外面がタタキで、下半にはハケを加える。372は底部が完存する。小型で、平底を呈する。調整は内面がナデ、胴部外面が粗い縦方向のハケ、底部外面がナデである。内面には煤が付着する。

373～377は鉢で、373～375は平底を呈する。373は底部が完存する。調整は内面が横方向のハケ、口縁部は無調整、体部外面がタタキ後ナデ、底部外面がナデである。374は約1/4が残存する。小型で、器高が低いものである。調整は内面がナデ、外面がタタキである。375は約3/4が残存する。体部は内湾し、口縁部を細く仕上げる。調整は内面が斜め方向の細かいハケ、外面がナデである。376はほぼ完存する。底部は尖底を呈し、体部は真っすぐ外上方へ伸びる。調整は底部内面がナデ、体部内面が横方向のハケ、外面がナデで渦巻き状に亀裂が入る。377は東側のベット状遺構上から出土したもので、完存する。器高が高く、底部は尖底を呈する。手捏ね成形で、調整は内面が縦方向の強いナデ、外面がナデである。

土師器(図42-378)

378は小型丸底壺で、ほぼ完存する。胴部は扁平な球形を呈し、口縁部は上方へ真っすぐ伸びる。調整は胴部内面がナデ、口縁部内面がナデ後ミガキ、口縁部外面がヨコナデ後ミガキ、外面は口縁部から胴部上半がナデ後ミガキ、胴部下半はハケ後ミガキ、底部外面はナデである。

石製品(図42-379)

379は砥石で、完存する。円柱形を呈し、下面と側面の一部に使用跡が残る。石材は砂岩の河原石である。

鉄製品(図42-380)

380は鉄鏃で、一部を欠損する。圭頭式で茎部は断面が矩形を呈する。全面に錆化がみられる。

埋土2 出土遺物

弥生土器(図42-381～385)

381・382は甕である。381は口縁部の約1/5が残存する。口縁部は外上方に真っすぐ伸びる。調整は胴部内面が縦方向のナデ、頸部から口縁部内面がハケ、口縁部外面がタタキ後ハケ、胴部外面がタタキで煤が付着する。382は約1/3が残存する。平底を呈し、胴部は膨らまず上方へ立ち上がる。調整は胴部内面がハケ、頸部内面がナデ、胴部外面がタタキ後ハケ、底部外面はタタキである。

383～385は鉢である。383は底部が完存する。底部は上げ底状を呈し、口縁部は屈曲して短く伸びる。調整はナデで、口縁部はヨコナデである。外面には若干亀裂が入る。384はほぼ完存する。器高が低く、底部は平底を呈する。調整は内面がハケ、体部外面がタタキ後ハケ、底部外面がナデである。385はほぼ完存する。小型で、底部は尖底を呈する。調整は内面が細かいハケ、胴部外面がナデ、底部外面がケズリ後ナデである。

ii 土坑

SK-1

調査区西部で検出した土坑である。西側は攪乱を受けており削平される。全長3.92mを検出し、深さ12cmを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は黒色シルト質細粒砂で5cm大の礫を少し含んでいた。出土遺物には弥生土器の甕2点、細片65点がみられ、甕2点(386・387)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図43-386・387)

386は甕の口縁部で、一部が残存する。器壁が薄く、口縁端部は肥厚し、凹線が2条巡る。調整はヨコナデで、口縁端部には煤が付着する。胎土にはチャートと雲母を含む。387は甕で、底部の約1/5が残存する。器壁が薄く、底部は平底を呈する。調整は内面の胴部下半がケズリ、外面の胴部下半が丁寧な縦方向のミガキである。外面の胴部下半には一部煤が付着する。搬入品とみられる。

SK-2

SK-1の東側で検出した土坑で、住居跡の可能性はある。全長3.66mを検出し、深さ12cmを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は黒色シルト質細粒砂であった。出土遺物には弥生土器の甕2点、細片95点、土製品1点がみられ、土製品(388)が図示できた。

出土遺物

土製品(図43-388)

388は管状土錘で、ほぼ完存する。紡錘形を呈し、孔径2.5mmを測る。調整はナデである。

SK-3

SK-1の南で検出した土坑で、竪穴式住居跡の可能性はある。西側は攪乱を受けており削平される。全長5.44mを検出し、深さ18cmを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は黒色シルト質細粒砂であった。出土遺物には弥生土器の甕17点、細片195点がみられ、甕(389)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図43-389)

389は甕で、約1/2が残存する。胴部は上方に立ち上がり、頸部は絞まらず、口縁部は直線的に伸びる。口縁部は叩き出し成形で、調整は内面がハケで、胴部下半には縦方向のナデを加える。口縁端部はヨコナデ調整、外面はタタキ調整で、胴部下半には縦方向のハケ調整を加える。

SK-4

調査区北西部で検出した溝状の土坑で、北側は調査区外へ続く。西側の肩は不明瞭であり、SX-1の一部である可能性もある。全長3.58m、幅1.42m、深さ11cmを測り、長軸方向はN-14°-Eを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は黒色シルト質細粒砂であった。出土遺物には弥生土器の甕4点、細片10

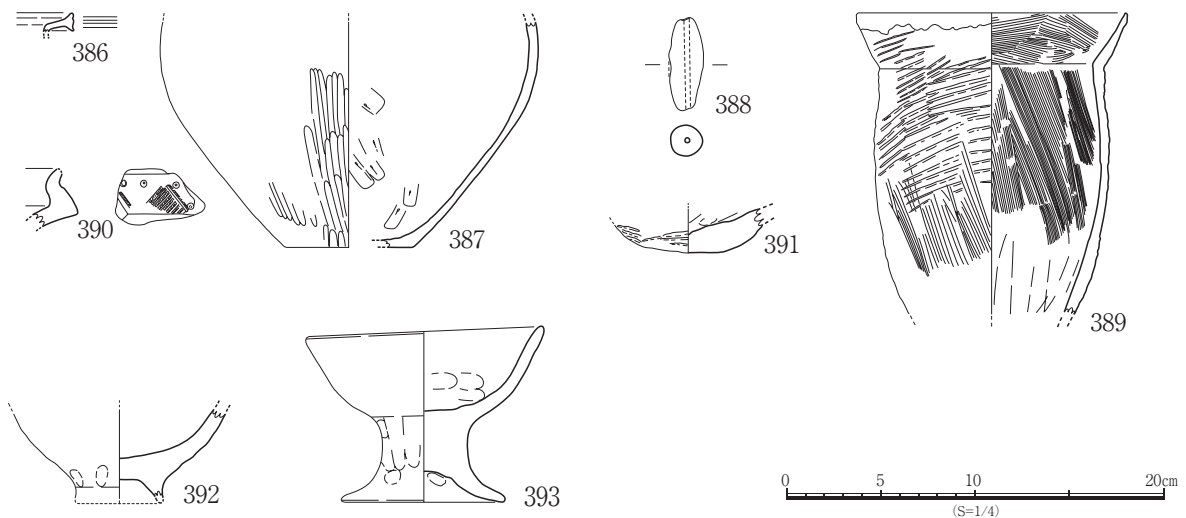


図43 SK-1～3・6 出土遺物実測図

3. 遺構と遺物

点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-5

調査区北西部で検出した隅丸方形を呈する土坑である。長辺1.19m、短辺0.84m、深さ13cmを測り、長軸方向はN-73°-Eを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は黒色シルト質細粒砂であった。出土遺物には弥生土器片4点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-6

調査区中央部で検出した隅丸方形を呈する土坑で、一部攪乱に切られる。長辺5.30m、短辺2.27m、深さ5~19cmを測り、長軸方向はN-84°-Wを示す。断面は逆台形を呈し、埋土は黒褐色シルト質細粒砂であった。出土遺物には弥生土器の壺1点、甕2点、鉢1点、細片130点、土師器の高杯1点がみられ、弥生土器の壺(390)、甕(391)、鉢(392)、土師器の高杯(393)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図43-390~392)

390は複合口縁壺で、口縁部の一部が残存する。口縁部は屈曲して内傾し、端部は短く外反する。調整は口縁端部にヨコナデを施した後内面は横方向のハケ、外面は縦方向のミガキを行う。外面にはハケ状原体による鋸歯文と竹管文がみられる。391は甕の底部で、丸底を呈する。調整は内面がナデ、胴部外面がタタキ、底部外面がナデである。392は鉢で、底部が完存する。底部には断面三角形を呈する高台を有する。調整は内面がナデである。外面は器面が著しく摩耗するため調整は不明である。

土師器(図43-393)

393は高杯で、ほぼ完存する。杯部は椀形を呈し、脚部は中実で太く、裾部は短く開く。調整はナデで、口縁端部と裾端部がヨコナデである。

SK-7

SK-6の南で検出した楕円形を呈する土坑である。長径1.04m、短径0.83m、深さ7cmを測り、長軸方向はN-14°-Wを示す。断面は皿状を呈し、埋土は黒褐色細粒砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器片5点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-8

調査区南部で検出した楕円形を呈する土坑である。長径1.26m、短径0.86m、深さ5cmを測り、長軸方向はN-17°-Eを示す。断面は皿状を呈し、埋土は黒褐色シルト質細粒砂で3cm大の礫を少し含んでいた。出土遺物には弥生土器片10点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-9

調査区北部で検出した隅丸方形を呈する土坑で、北側は調査区外へ続く。長辺0.81m、短辺0.53m、深さ5cmを測る。断面は皿状を呈し、埋土は黒褐色シルト質細粒砂であった。出土遺物には弥生土器片10点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-10

SK-9の南で検出した不整楕円形を呈する土坑で、SK-11を切る。長径0.93m、短径0.78m、深さ10cmを測り、長軸方向はN-66°-Wを示す。断面は逆台形を呈し、埋土は黒褐色シルト質細粒砂であった。出土遺物には弥生土器片65点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-11(図44)

SK-10の南で検出した隅丸方形を呈する土坑で、SK-10に切られる。長辺1.08m、短辺1.05m、

深さ40cmを測り、長軸方向はN-66°-Wを示す。断面は逆台形を呈し、埋土は3層に分かれ、上から黒褐色シルト質細粒砂、黒褐色シルト質細粒砂、黒色シルト質細粒砂であった。出土遺物には弥生土器片100点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-12

調査区中央部で検出した不整隅丸方形を呈する土坑である。長辺1.40m、短辺0.95m、深さ6cmを測り、長軸方向はN-73°-Eを示す。断面は逆台形を呈し、埋土は黒褐色シルト質細粒砂であった。出土遺物には弥生土器片100点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-13(図45)

SK-12の南で検出した不整円形を呈する土坑である。径0.96m、深さ23cmを測り、断面は舟底形を呈する。埋土は黒褐色シルト質細粒砂であった。出土遺物には弥生土器の甕3点、高杯1点、細片95点、石製品1点がみられ、弥生土器の甕(394)、高杯(395)、石製品(396)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図47-394・395)

394は甕で、口縁部の約1/8が残存する。小型で、胴部は上方に立ち上がり、口縁部は緩やかに外反する。口縁部は叩き出し成形で、調整は内面がハケ、外面がタタキである。395は高杯で、脚部の約1/2が残存する。脚柱部は中空で、緩やかにハの字状に開く。調整は外面が縦方向のミガキ、内面がナデで、脚柱部にはしほり目が残る。裾部には円孔の一部が残存する。

石製品(図47-396)

396は砥石で、一部が残存する。一面に使用痕が残り、使用により摩耗する。石材は砂岩である。

SK-14

SK-15の北で検出した不整隅丸方形を呈する土坑で、SK-15に切られる。長辺1.60m、短辺1.22m、深さ13cmを測り、長軸方向はN-90°-EWを示す。断面は逆台形を呈し、埋土は黒褐色シルト質細粒砂であった。出土遺物は皆無であった。

SK-15

SK-13の東で検出した不整楕円形を呈する土坑で、SK-14を切る。長径0.95m、短径0.89m、深さ15cmを測り、長軸方向はN-90°-EWを示す。断面は逆台形を呈し、埋土は黒色シルト質細粒砂であった。出土遺物には弥生土器の甕3点、鉢2点、細片55点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-16

SK-14の北東で検出した楕円形を呈する土坑で、SK-17に切られる。長径1.03m、短径0.80m、深さ16cmを測り、長軸方向はN-55°-Wを示す。断面は逆台形を呈し、埋土は黒褐色シルト質細粒砂であった。出土遺物は弥生土器片20点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-17(図46)

SK-16の東で検出した不整楕円形を呈する土坑で、SK-16を切る。長径1.22m、短径0.79m、深さ

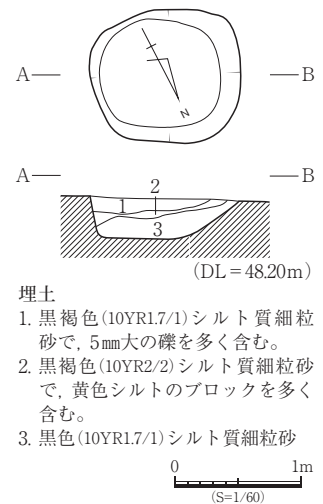


図44 SK-11

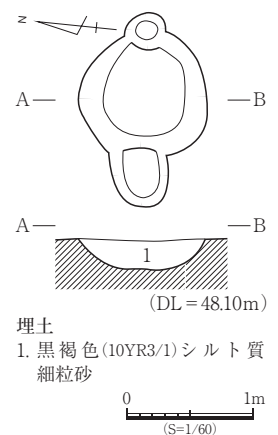
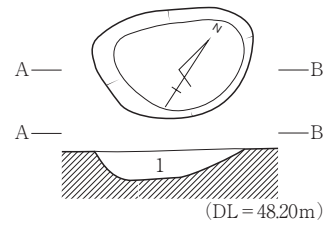


図45 SK-13

3. 遺構と遺物

10cmを測り、長軸方向はN-50°-Eを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は黒褐色シルト質細粒砂で1cm大の礫と黄色シルトのブロックを含んでいた。出土遺物は弥生土器の甕4点、細片70点がみられたが、図示できるものはなかった。



埋土
1. 黒褐色(10YR3/1)シルト質細粒砂で、1cm大の礫と黄色シルトのブロックを含む。 0 1m (S=1/250)

図46 SK-17

SK-18

ST-1の北で検出した土坑で、ST-1を切る。全長2.64m、幅0.53m、深さ7cmを測る。断面は皿状を呈し、埋土は黒色シルト質細粒砂であった。出土遺物は弥生土器の甕1点、細片75点、石製品1点がみられ、弥生土器の甕(397)、石製品(398)が、図示できた。

出土遺物

弥生土器(図47-397)

397は甕の底部とみられる。底部はほぼ完存し、器壁が厚く、底部の縁は外へ広がる。調整は内面が板ナデ、胴部外面が縦方向のハケ、底部外面はハケである。

石製品(図47-398)

398は叩石及び磨石である。平面が楕円形を呈する、扁平な石を使用しており、両端と表裏の4面に敲打痕が残る。また、側面の一部は摩耗して平滑になっており、磨石として使用している。片端と一側面にわずかに朱が付着する。石材は細粒の砂岩である。

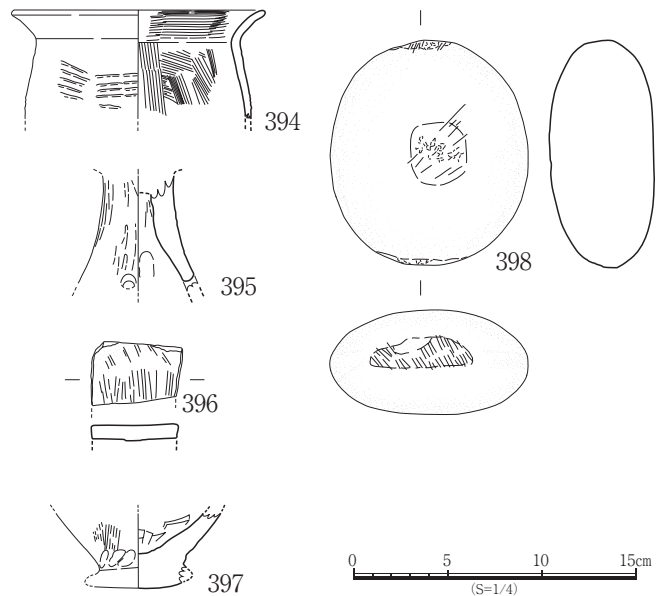


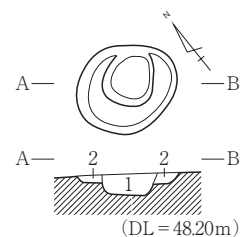
図47 SK-13・18 出土遺物実測図

SK-19(図48)

ST-1の南西で検出した楕円形を呈する土坑である。長径0.82m、短径0.63m、深さ7cmを測り、長軸方向はN-81°-Wを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は黒褐色シルト質細粒砂であった。出土遺物は弥生土器細片8点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-20

ST-1の上で検出した隅丸方形を呈する土坑で、ST-1を切る。長辺2.44m、短辺1.66m、深さ7cmを測り、長軸方向はN-76°-Wを示す。断面は逆台形を呈し、埋土は黒色シルト質細粒砂で、5cm大の礫を多く含んでいた。出土遺物には弥生土器の壺3点、甕15点、鉢2点、甌1点、細片580点、土師器の鉢1点、高杯1点、器台1点、土製品1点がみられ、弥生土器の壺(399~401)、甕(402~404)、甌(405)、鉢(406)、土師器の鉢(407)、高杯(408)、器台(409)が図示できた。



埋土
1. 黒褐色(10YR2/2)細粒砂シルト
2. 黒褐色(10YR3/3)シルト質細粒砂(SK-19) 0 1m (S=1/60)

図48 SK-19

出土遺物

弥生土器(図49-399~406)

399~401は壺である。399は広口壺で、頸部の約1/3が残存する。口縁部は上方へ真っすぐ立ち上

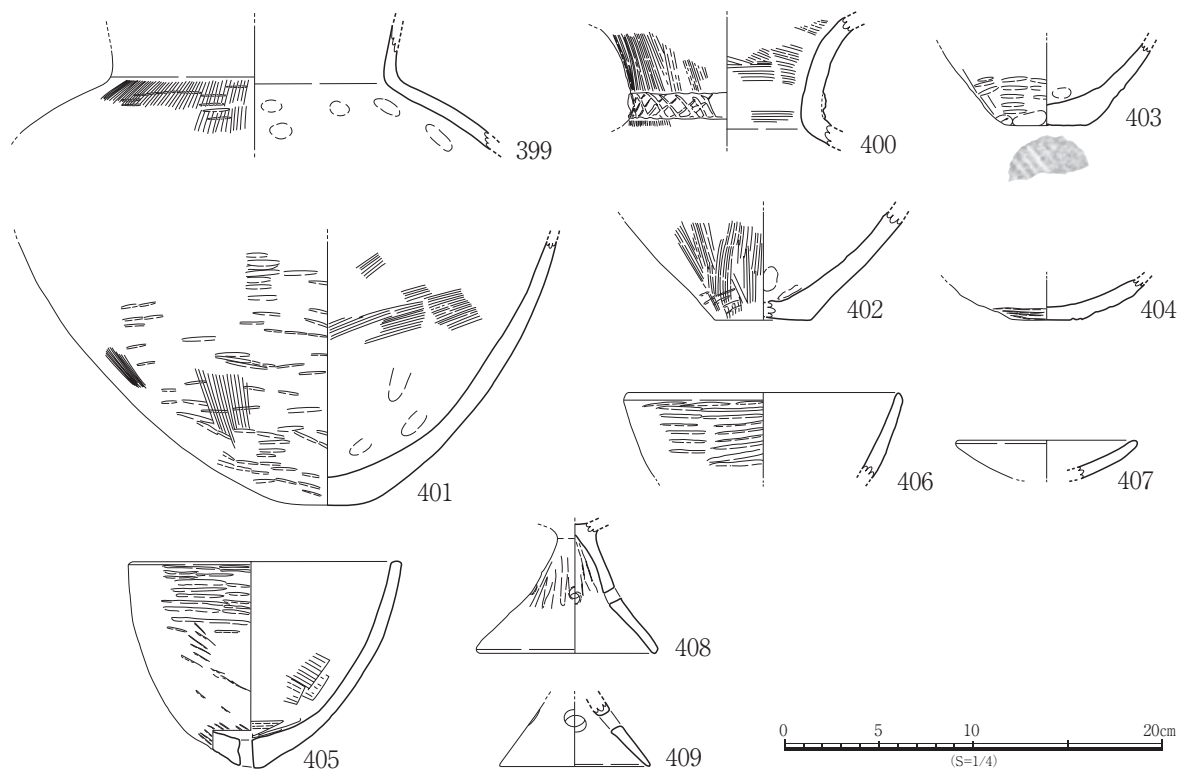


図 49 SK-20 出土遺物実測図

がる。調整は内面に指頭圧痕が残るが、摩耗するため不明である。外面の調整はタタキ後ハケである。400も広口壺で、頸部の約1/3が残存する。口縁部は外反する。調整は頸部内面がナデで、その他はハケである。頸部外面には扁平な粘土帯を貼付し、ヘラ描きの斜格子文を施す。401は大型の壺の底部である。小さな平底を呈し、胴部はやや内湾して立ち上がる。調整は底部内面がナデ、胴部内面が横方向の粗いハケ、胴部外面がタタキ後一部ハケを施す。底部外面はナデ調整とみられるが摩耗するため不明である。

402～404は甕で、いずれも平底を呈する。402は底部の約1/4が残存する。調整は内面がナデ、胴部外面がタタキ後ハケ、底部外面がタタキ後ナデである。403は底部の約1/2が残存する。調整は内面がナデ、胴部外面がタタキ、底部外面がタタキ後ナデである。404は底部の約1/4が残存する。調整は内面がナデ、胴部外面がタタキ後ハケ、底部外面がナデである。

405は甕で、底部が完存する。深い鉢形を呈し、底部には内面より径7.5mmの円孔を穿つ。調整は内面がハケ、口縁部がヨコナデ、体部外面がタタキ、底部外面がナデである。

406は鉢で、口縁部の約1/5が残存する。器壁が厚く、端部を丸く収める。調整は内面がナデ、口縁部がヨコナデ、外面がタタキである。

土師器(図49-407～409)

407は鉢で、口縁部の約1/2が残存する。小型で、皿状を呈し、器高が低い。調整はナデで、口縁端部はヨコナデである。

408は高杯とみられ、脚部の約1/3が残存する。脚柱部は中空で、真っすぐ伸びる。調整は杯底部がナデとみられるが摩耗するため不明瞭である。外面は縦方向のミガキ、裾端部はヨコナデ、内面はナデで、脚柱部にはしほり目が残る。また、4箇所径6.5mmの円孔を有する。

3. 遺構と遺物

409は小型の器台で、脚部の約1/5が残存する。脚部は真っすぐ伸び、残存部で2箇所径1.05cmの円孔を穿つ。調整はナデで、裾端部はヨコナデである。

SK-21

ST-1の北側で検出した土坑で、ST-1・2に切られる。全長1.51m、幅0.74mを検出し、深さ23cmを測る。断面は舟底形を呈し、埋土は黒褐色シルト質細粒砂であった。出土遺物には弥生土器の甕1点、細片132点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-22

ST-2の東で検出した隅丸方形を呈する土坑である。長辺1.07m、短辺1.04m、深さ12cmを測り、長軸方向はN-3°-Wを示す。断面は逆台形を呈し、埋土は褐灰色シルト質細粒砂であった。出土遺物は弥生土器片2点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-23

SK-22の南で検出した楕円形を呈する土坑である。長径2.60m、短径2.36m、深さ9cmを測り、長軸方向はN-40°-Eを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は黒色シルト質細粒砂であった。出土遺物には弥生土器の壺2点、甕4点、鉢3点、細片90点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-24(図50)

SK-23の上で検出した楕円形を呈する土坑で、SK-23を切る。長径1.57m、短径0.63m、深さ34cmを測り、長軸方向はN-58°-Eを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は黒褐色シルト質細粒砂であった。出土遺物は皆無であった。

SK-25

SK-23の東で検出した楕円形を呈する土坑である。長径0.92m、短径0.90m、深さ12cmを測り、長軸方向はN-39°-Eを示す。断面は逆台形を呈し、埋土は黒褐色シルト質細粒砂であった。出土遺物は皆無であった。

SK-26

ST-5の東側で検出した土坑で、ST-5を切る。不整楕円形を呈し、長径1.42m、短径1.12m、深さ6cmを測り、長軸方向はN-90°-EWを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は黒褐色シルト質細粒砂で、黄色ブロックを多く含み、1cm大の礫を含んでいた。出土遺物には弥生土器片20点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-27

ST-8の北側で検出した土坑で、SK-27の底でST-8の肩を確認した。半円形を呈し、南側の肩は不明瞭であった。全長4.98m、幅1.84m、深さ7cmを測り、断面は皿状を呈する。埋土は黒色細粒砂質シルトで、1~3cm大の礫を含んでいた。出土遺物には弥生土器の甕2点、細片65点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-28

ST-9の西側で検出した土坑である。不整楕円形を呈し、長径1.15m、短径0.94m、深さ15cmを測り、長軸方向はN-45°-Wを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は黒褐色シルト質細粒砂で、黄色ブロックを多く含み、1cm大の礫を含んでいた。出土遺物には弥生土器の鉢1点、細片10点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-29

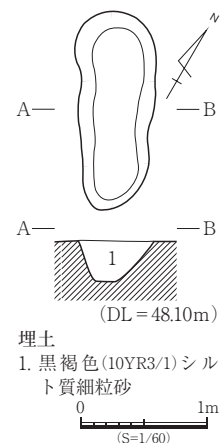


図50 SK-24

調査区北東隅で検出した土坑で、北側は調査区外へ続く。隅丸方形を呈するものとみられ、検出長1.95m、幅0.61m、深さ35cmを測る。断面は舟底形を呈し、埋土は黒色シルト質細粒砂で、黄色ブロックを含んでいた。出土遺物には弥生土器の鉢1点、細片130点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-30(図51)

ST-8の東側で検出した土坑である。隅丸方形を呈し、長辺1.30m、短辺1.04m、深さ23cmを測り、長軸方向はN-7°-Wを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は黒褐色シルト質細粒砂で、黄色ブロックを多く含み、2mm大の礫を含んでいた。出土遺物には弥生土器片6点がみられたが、図示できるものはなかった。

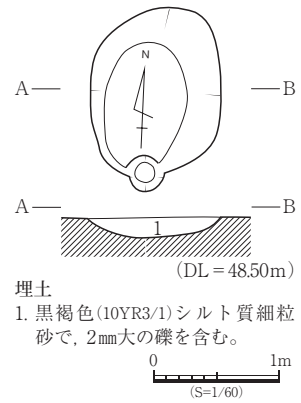


図 51 SK-30

iii 溝跡

SD-1(図52)

調査区西部で検出した東西溝(N-74°-W)である。全長5.47m、幅1.11m、深さ44cmを測る。基底面は中央部が最も深く、標高47.556mを測る。断面はU字形を呈し、埋土は黒褐色シルト質中粒砂で、1cm大の礫を多く含み、炭化物を含んでいた。出土遺物には弥生土器の甕8点、細片103点がみられたが、図示できるものはなかった。

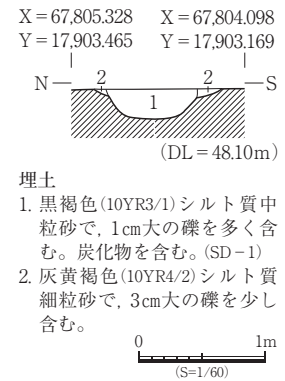


図 52 SD-1

SD-2(図53)

調査区中央部で検出した南北溝(N-11°-E)で、ST-4の上で検出した。北側は調査区外へ続き、検出長5.00m、幅1.21m、深さ13cmを測り、基底面は南(48.179m)から北(48.106m)へ傾斜する。断面は舟底形を呈し、埋土は黒色シルト質細粒砂で、黄色ブロックを含んでいた。出土遺物には弥生土器の壺4点、甕10点、鉢3点、細片720点、土製品1点がみられ、甕(410・411)、鉢(412)、土製品(413)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図54-410~412)

410・411は甕である。410は口縁部の約1/5が残存する。器壁が薄く、口縁部は外反する。調整は頸部内面がナデ、頸部外面はタタキである。口縁部は摩耗するため調整は不明である。411は尖底を呈するもので、底部がほぼ完存する。調整はナデである。

412は鉢で、約1/5が残存する。平底を呈し、器高が低いものである。調整は内面がヘラナデ、口縁部がヨコナデ、外面はナデである。

土製品(図54-413)

413は支脚で、約1/3が残存する。低脚で、脚部はハの字状に広がり、上端は浅い皿状を呈する。口縁部は片口状を呈し高さが異なる。調整は外面がタタキ、上端と内面がナデである。外面はタタキにより多角形を呈する。

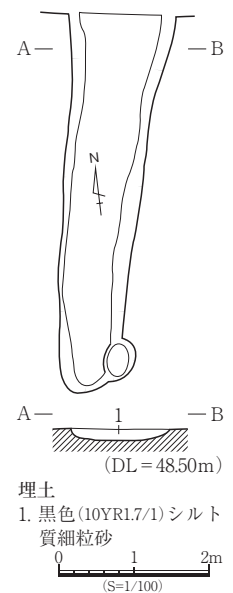


図 53 SD-2

3. 遺構と遺物

iv 性格不明遺構

SX-1

調査区北西隅で検出した遺構で、竪穴式住居跡の可能性もあるが、攪乱及び削平を受けており性格は不明である。検出長5.44m、深さ18cmを測り、断面は逆台形を呈する。埋土は黒色シルト質細粒砂で、黄色ブロックを含む。出土遺物には弥生土器の甕1点、細片140点がみられ、甕(414)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図55-414)

414は甕で、底部が完存する。器壁が厚く、底部は丸底を呈する。調整は内面がハケ後底部にナデを加える。外面は胴部がタタキ調整、底部がナデ調整である。

SX-2

調査区東部のST-4の東側で検出した遺構で、ST-4を切る。北側は調査区外へ続き、東側は近世の溝跡(SD-11)に切られる。楕円形を呈し、長径5.08m、短径4.53mを検出し、深さ23cmを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は黒色シルト質細粒砂で、3~5mm大の礫を多く含む。出土遺物には弥生土器の壺5点、甕32点、鉢6点、高杯4点、細片2416点、土師器の鉢1点、土製品41点、鉄製品1点がみられ、弥生土器の壺(415・416)、甕(417・418)、鉢(419・420)、高杯(421・422)、土師器(423)、土製品(424)、鉄製品(425)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図55-415~422)

415・416は広口壺である。415は口縁部の約1/8が残存する。器壁が厚く、口縁端部は四角く収める。調整は内面がナデまたは横方向のミガキ、口縁端部がヨコナデ、外面がナデである。416は頸部の約1/4が残存する。口縁部はやや外上方に真っすぐ立ち上がる。調整は頸部内面がナデ、口縁部外面がハケで、その他は器面が摩耗するため不明である。

417・418は甕である。417は口縁部の約1/4が残存する。器壁が薄く、口縁部は外上方に短く伸び、端部は若干肥厚する。調整は胴部内面がナデで指頭圧痕が残る。口縁部はヨコナデ、胴部外面がハケ調整である。外面の口縁部と胴部の一部には煤が付着する。胎土は精良で、雲母を含む。阿波からの搬入品である。418は底部が完存する。器壁が厚く、底部は平底を呈する。調整は内面がハケ後ナデ、胴部外面が縦方向のハケ、底部外面がナデである。胴部外面には被熱の痕跡が残り、煤が付着する。

419・420は鉢である。419は口縁部の約1/5が残存する。器壁が薄く、口縁部は内湾する。調整は丁寧なナデで、口縁部はヨコナデである。420は底部が完存する。平底を呈し、体部は歪む。調整は内面がヘラナデ、外面はナデである。

421・422は高杯である。421は脚部の一部が残存する。器壁が厚く、脚柱部は中空である。調整はナデで、外面にはわずかに縦方向のハケが残る。また、円孔の一部が3箇所に残存する。422は脚部の約1/2が残存する。裾部は大きく開く。調整は外面が縦方向のハケ、内面がナデである。

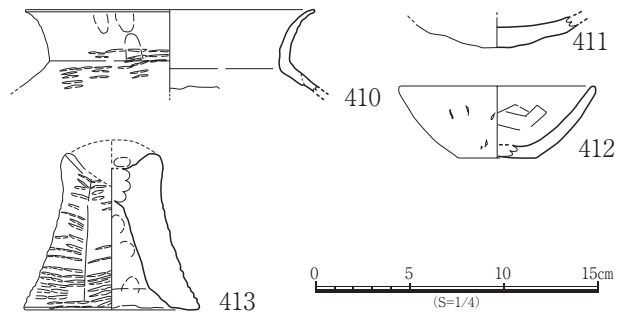


図54 SD-2出土遺物実測図

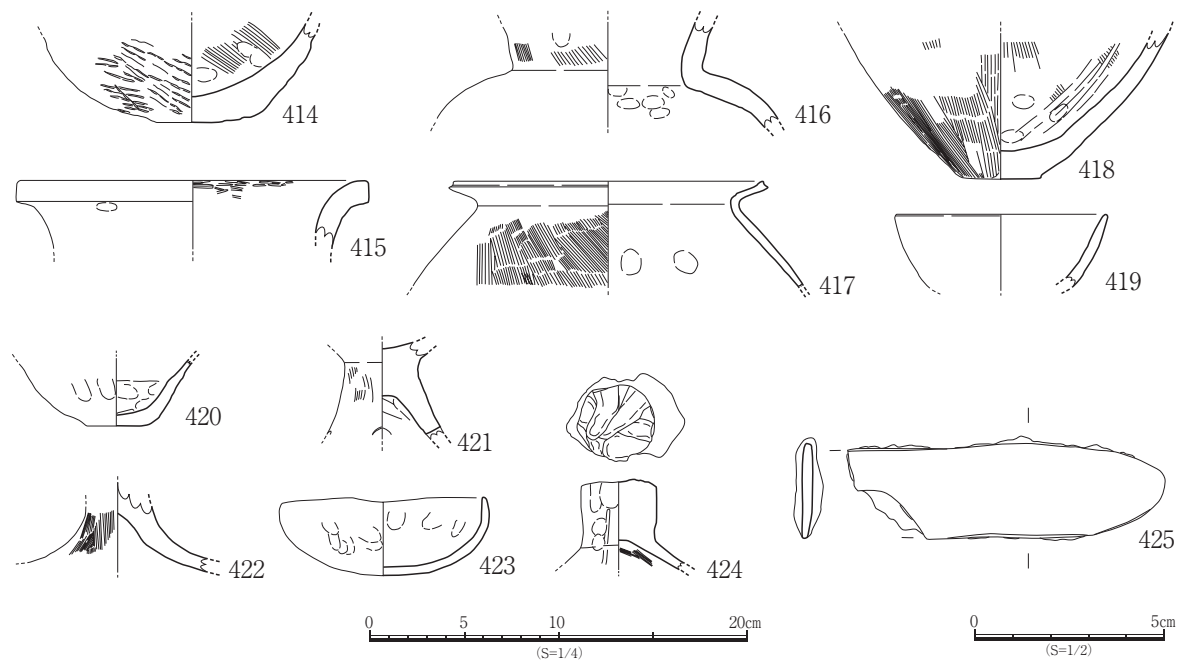


図 55 SX-1・2 出土遺物実測図

土師器(図55-423)

423は皿状を呈する鉢で、約2/3が残存する。調整はナデで、指頭圧痕が顕著に残る。口縁部はヨコナデである。

土製品(図55-424)

424は支脚で、一部が残存する。脚柱部は中実で、裾部は外へ開き、真っすぐ伸びる。調整は上端が粗いナデ、外面がナデで一部ミガキ、内面はハケまたはナデである。

鉄製品(図55-425)

425は床面より出土したもので、短刀とみられる。一部が残存し、全長8.2cm、全幅2.6cm、全厚0.7cmを測る。

v ピット

P-1

調査区西部で検出した円形のピットである。径40cm、深さ16cmを測り、埋土は黒色シルト質細粒砂であった。出土遺物には弥生土器の鉢1点、細片15点がみられ、鉢(426)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図56-426)

426は鉢で、底部の約1/2が残存する。底部は小さな平底を呈する。調整は内面が横方向のハケ、外面がナデである。

P-2

調査区南西部で検出した楕円形のピットで、長径0.79m、短径0.58m、深さ17cmを測る。埋土は2層に分かれ、上層は黒褐色シルト質中粒砂、下層は黒褐色シルト質中粒砂で黄褐色シルト質砂のブロックと3mm大の礫を含んでいた。出土遺物には弥生土器の甕1点、細片31点がみられ、上層より出土した甕(427)が図示できた。

3. 遺構と遺物

出土遺物

弥生土器(図56-427)

427は甕で、口縁部の約1/5が残存する。口縁部は真っすぐ外上方に伸び、端部は面取りを行う。調整は内面がハケ、外面がタタキである。

P-3

P-2の南側に位置する楕円形のピットで、SD-4の底で検出した。長径0.85m、短径0.76m、深さ0.53mを測る。埋土は2層に分かれ、上層は黒褐色シルト質中粒砂、下層は黒褐色シルト質細粒砂で黄褐色シルト質砂のブロックと3cm大の礫を多く含んでいた。出土遺物には弥生土器片42点がみられたが、図示できるものはなかった。

P-4

調査区南西部で検出した楕円形のピットで、長径0.52m、短径0.48m、深さ13cmを測る。埋土は黒褐色シルト質中粒砂であった。出土遺物には弥生土器の手捏ね土器2点、細片30点がみられ、手捏ね土器2点(428・429)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図56-428・429)

428・429はミニチュア土器である。428はほぼ完存する。小型で鉢形を呈し、底部は尖底である。調整はナデで、指頭圧痕が残る。429は小型で、高杯形を呈する。脚部の約1/2が残存し、調整はナデである。

P-5

調査区北西部で検出した楕円形のピットで、長径0.85m、短径0.68m、深さ5cmを測る。埋土は黒褐色シルト質中粒砂であった。出土遺物には弥生土器の手捏ね土器1点、細片10点がみられ、手捏ね土器(430)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図56-430)

430は手捏ね土器で、約1/4が残存する。浅い鉢形を呈する。調整はナデで、口縁部はヨコナデである。

P-6

調査区中央部で検出した不整円形のピットで、径33cm、深さ31cmを測る。埋土は黒褐色細粒砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器片18点、土製品1点がみられ、土製品(431)が図示できた。

出土遺物

土製品(図56-431)

431は支脚で、一部を欠損する。低脚で、脚柱部は中実である。上端は浅い皿状を呈し、口縁部は片口状を成し、高さが異なる。調整はナデである。

P-7

ST-2の西側で検出した楕円形のピットで、長径34cm、短径29cm、深さ34cmを測る。埋土は黒褐色極細粒砂質シルトであった。出土遺物には弥生土器の鉢1点、細片2点がみられ、鉢(432)が図示できた。

出土遺物

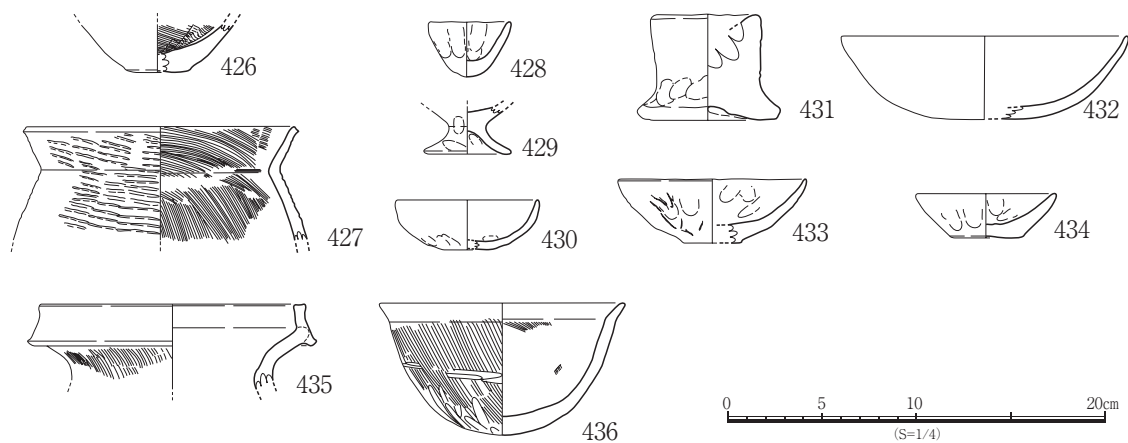


図 56 P-1・2・4～10 出土遺物実測図

弥生土器(図56-432)

432は鉢で、約1/6が残存する。口径が大きく、器高が低いもので、皿状を呈する。調整はナデで、口縁部はヨコナデである。

P-8

ST-2の南西で検出した楕円形のピットで、ST-2に切られる。長径0.52m、短径0.37m、深さ36cmを測る。埋土は褐灰色シルト質細粒砂であった。出土遺物には弥生土器の甕1点、鉢3点、手捏ね土器1点、細片50点がみられ、鉢(433)と手捏ね土器(434)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図56-433・434)

433は鉢で、約1/6が残存する。器高が低く、底部は平底を呈する。調整はナデで、外面には亀裂が入る。434は手捏ね土器で、約1/4が残存する。小型で、浅い鉢形を呈し、底部は平底である。調整はナデで、指頭圧痕が残る。口縁部はヨコナデである。

P-9

ST-2の南側で検出した楕円形のピットで、ST-2に切られる。長径48cm、短径30cm、深さ10cmを測る。埋土は黒褐色シルト質細粒砂であった。出土遺物には弥生土器の壺1点、細片1点がみられ、壺(435)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図56-435)

435は複合口縁壺で、口縁部の約1/5が残存する。口縁部は外上方に真っすぐ伸び、端部には粘土を貼付し、上下に拡張する。調整は内面がナデ、口縁端部がヨコナデ、外面が縦方向のハケである。

P-10

SK-24の南側で検出した楕円形のピットで、長径31cm、短径30cm、深さ12cmを測る。埋土は黒色シルト質細粒砂であった。出土遺物には弥生土器片5点、土師器の鉢1点がみられ、土師器(436)が図示できた。

出土遺物

土師器(図56-436)

436は鉢で、約1/2が残存する。底部は丸底を呈し、口縁部は屈曲して短く伸びる。調整は内面がハ

3. 遺構と遺物

ケ後ナデ, 口縁部がヨコナデ, 体部外面がハケ後ミガキ, 底部外面がナデ後ミガキである。

P-11

ST-8の西側で検出した楕円形のピットで, 長径46cm, 短径42cm, 深さ47cmを測る。埋土は黒褐色シルト質細粒砂であった。出土遺物には弥生土器の鉢1点, 細片30点がみられ, 鉢(437)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図57-437)

437は鉢で, 底部の約1/4が残存する。平底を呈し, 体部は外上方に真っすぐ伸びる。調整は内面が丁寧なナデ, 外面はナデで亀裂が入る。

P-12

ST-8の西側で検出した円形のピットで, 径37cm, 深さ12cmを測る。埋土は黒褐色シルト質細粒砂であった。出土遺物には弥生土器の鉢1点, 細片10点がみられ, 鉢(438)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図57-438)

438は鉢で, 底部が完存する。底部は小さな平底を呈する。調整は内面がハケ, 体部外面がタタキ後ナデ, 底部外面がナデである。

P-13

ST-8の北側で検出した円形のピットで, 径35cm, 深さ26cmを測る。埋土は黒褐色シルト質細粒砂であった。出土遺物には弥生土器の壺1点, 細片12点がみられ, 壺(439)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図57-439)

439は広口壺で, 口縁部の約1/8が残存する。口縁部は大きく外反し, 端部を四角く収める。調整は口縁端部にヨコナデを行った後, 内面にハケ, 外面にハケ後タタキを施す。

P-14

ST-7の上で検出した円形のピットで, 径36cm, 深さ12cmを測る。埋土は黒色シルト質細粒砂であった。出土遺物には弥生土器の鉢1点, 細片13点がみられ, 鉢(440)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図57-440)

440は鉢で, 約1/4が残存する。底部は平底を呈し, 体部は内湾して立ち上がる。調整は内面が横方向のハケ, 外面がナデで亀裂が入る。

P-15

ST-7の東側で検出した楕円形のピットで, ST-7に切られる。長径0.64m, 短径0.55m, 深さ11cmを測る。埋土は褐色シルト質細粒砂であった。出土遺物には弥生土器の甕2点, 細片15点がみられ, 甕(441)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図57-441)

441は甕で, 口縁部の約1/4が残存する。胴部はやや丸味を有し, 口縁部は真っすぐ伸びる。調整は胴部内面が横方向のナデ, 口縁部内面が横方向のハケ, 口縁端部がヨコナデ, 口縁部外面が縦方向の

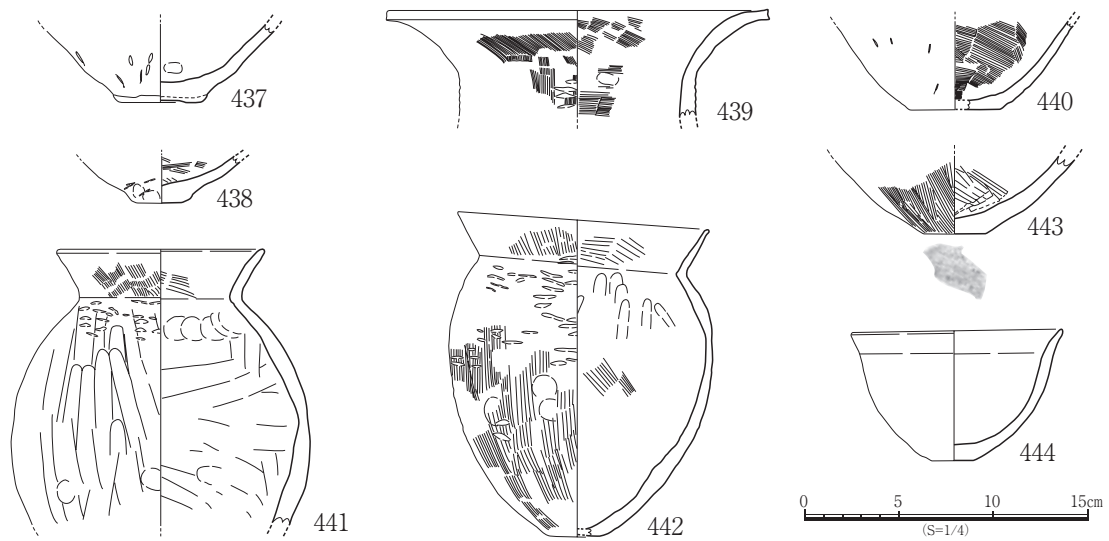


図57 P-11～18 出土遺物実測図

ハケ、胴部外面がタタキ後縦方向のナデである。

P-16

P-15の底で検出した円形のピットで、径36cm、深さ0.60mを測る。埋土は褐灰色シルト質細粒砂であった。出土遺物には弥生土器の壺1点、甕1点、細片25点がみられ、甕(442)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図57-442)

442は甕で、ほぼ完存する。底部は平底を呈し、胴部は膨らむ。調整は胴部内面がナデまたはハケ、口縁部がハケ、胴部外面はタタキ後ハケ、底部外面はハケである。

P-17

ST-9の上で検出したピットで、近世の溝跡(SD-12)に切られる。隅丸方形を呈するとみられ、長辺1.00m、短辺0.51mを検出し、深さ25cmを測る。埋土は黒褐色シルト質細粒砂であった。出土遺物には弥生土器の甕1点、細片35点がみられ、甕(443)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図57-443)

443は甕で、底部の約1/5が残存する。器壁が厚く、底部は小さな平底を呈する。調整は内面が板ナデ後一部ナデ、胴部外面が縦方向のハケ、底部外面がハケである。

P-18

ST-9の上で検出した円形のピットで、径22cm、深さ25cmを測る。埋土は黒褐色シルト質細粒砂であった。出土遺物には弥生土器の甕1点、細片8点、土師器の鉢1点がみられ、土師器(444)が図示できた。

出土遺物

土師器(図57-444)

444は鉢で、約2/3が残存する。底部は小さな平底を呈し、口縁部は屈曲して短く伸びる。調整は口縁部がヨコナデで、その他はナデとみられるが摩耗するため不明である。

3. 遺構と遺物

(2) 古墳時代後期

i 竪穴式住居跡

ST-10(図58・59)

調査区中央部で検出した方形を呈する竪穴式住居跡で、ST-1を切る。東西は4.30～4.85m、南北は4.45～4.80m、深さ35cmを測る。

埋土は7層に分かれ、埋土1～5はレンズ状に堆積し、埋土6・7はカマドの周辺にのみみられ、埋土7には炭化物が含まれていた。

支柱穴はP-1～4とみられ、柱間寸法は1.60～2.95mを測る。P-1は円形で径42cm、深さ27cm、P-2は楕円形で長径47cm、短径35cm、深さ40cm、P-3は楕円形で長径47cm、短径40cm、深さ44cm、P-4は円形で径28cm、深さ22cmを測る。埋土はいずれも黒褐色細粒砂質シルトで、5mm大の礫を含んでいた。また、北西部で検出したP-5は隅丸方形を呈し、長辺0.82m、短辺0.45m、深さ9cmを測る。埋土は黒褐色シルトで、極粗粒砂を含む。

出土遺物は弥生土器の壺、甕、高杯、土師器の甕、甗、高杯、須恵器の蓋、杯、高杯、甕、甗などがみられ、北西部で特に多く出土した。埋土では埋土1が最も出土量が多く、次いで埋土4であった。また、南西部の埋土3には一括廃棄されたような状態で遺物が出土している(465～467・471)。埋土1より出土した弥生土器と土師器、須恵器、土製品が18点(445～462)、埋土2より出土した須恵器2点(463・464)、埋土3より出土した弥生土器と土師器、須恵器が7点(465～471)、埋土4より出土した弥生土器と土師器、須恵器、石製品が14点(472～485)、埋土5より出土した土師器と須恵器3点(486～488)が図示できた。

北壁の中央よりやや東寄りでカマド跡を確認した。前袖石は左右の2個を確認し、掘方を検出しており元位置を動いていないものとみられ、焚口幅は31cmを測る。前袖石はいずれも砂岩の河原石で、内側部分は被熱していた。左前袖石の高さは37cm、右前袖石の高さは24cmを測る。前袖石の前には天井石とみられる43cm長の河原石が確認されたが、被熱の痕跡はみられなかった。また、奥袖石及び支脚は確認できなかった。床張りはなく、竪穴式住居跡とほぼ同じ高さで、炎焼部は一段高く作られており、煙道部とみられる部分も確認できた。焚口から奥壁までの長さは0.69m、奥壁幅31cm、煙道部長41cm、煙道部幅31cmを測る。燃焼部から炎焼部には焼土がみられた。燃焼部の埋土中からは土師器の甕(489・490)、土師器の高杯(491)が出土している。

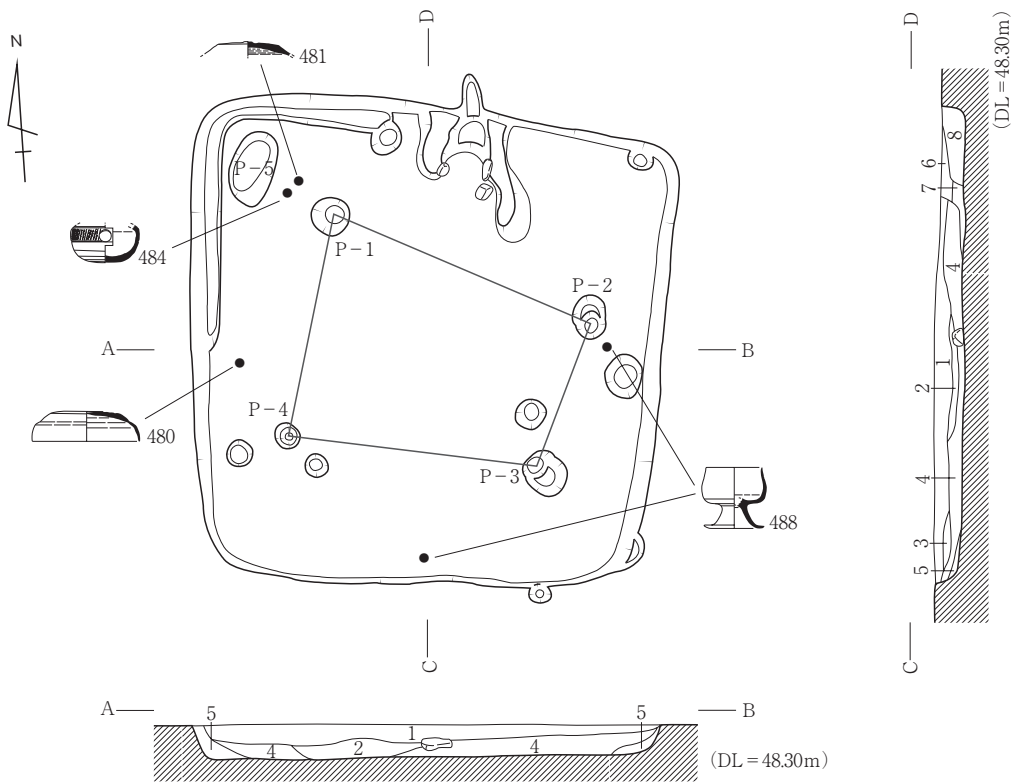
埋土1 出土遺物

弥生土器(図60-445～450)

445～447は壺である。445は広口壺で、口縁部の約1/5が残存する。口縁部は水平に伸び、端部は上下に拡張する。調整はハケで、口縁端部はその後ヨコナデを行う。外面には線描きの鋸歯文を施す。446は底部の約3/4が残存する。器壁が厚く、平底を呈する。調整は内面が縦方向の強いナデ、底部外面がナデである。胴部外面は摩耗するため調整は不明である。447は底部の約1/4が残存する。底部は小さな平底を呈し、胴部は外上方に真っすぐ立ち上がる。調整は内面がハケ後ナデ、胴部外面が縦方向のハケ、底部外面がナデである。

448・449は甕である。448は底部の約1/2が残存する。底部は平底を呈する。調整は内面にハケがわずかに残り、胴部外面はタタキ後ハケ、底部外面がナデである。449は底部が完存する。底部は小さな平底を呈する。調整は内面が横方向のハケ、胴部外面がタタキ後ナデ、底部外面がナデである。

450は鉢で、底部が完存する。底部は平底を呈し、口縁部は細く仕上げる。調整は体部内面がナデ、



埋土

1. 黒褐色(10YR2/2)シルト質細粒砂(ST-10埋土1)
2. 黒褐色(10YR2/2)シルト質細粒砂で、5cm大の礫を含む。(ST-10埋土2)
3. 黒褐色(10YR2/2)シルト質細粒砂(ST-10埋土3)
4. 黒褐色(10YR2/3)シルト質細粒砂で、黄色シルトのブロックを多く含む。(ST-10埋土4)
5. 黒色(10YR1.7/1)シルト質細粒砂(ST-10埋土5)
6. オリーブ黒色(5Y3/1)シルト質細粒砂で、暗褐色細粒砂質シルトのブロックを含む。(ST-10埋土6)
7. 黒褐色(2.5Y3/1)細粒砂質シルトで、炭化物を多く含む。(ST-10埋土7)
8. 暗褐色(10YR3/3)細粒砂質シルト(カマド構築土)

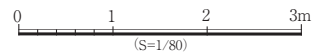
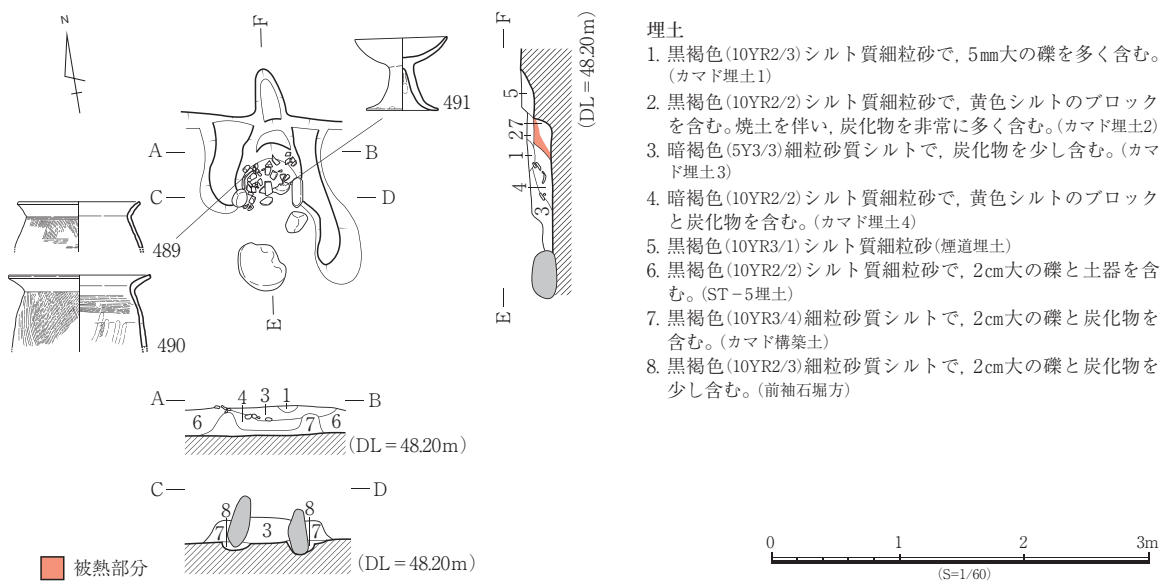


図 58 ST-10



埋土

1. 黒褐色(10YR2/3)シルト質細粒砂で、5mm大の礫を多く含む。(カマド埋土1)
2. 黒褐色(10YR2/2)シルト質細粒砂で、黄色シルトのブロックを含む。焼土を伴い、炭化物を非常に多く含む。(カマド埋土2)
3. 暗褐色(5Y3/3)細粒砂質シルトで、炭化物を少し含む。(カマド埋土3)
4. 暗褐色(10YR2/2)シルト質細粒砂で、黄色シルトのブロックと炭化物を含む。(カマド埋土4)
5. 黒褐色(10YR3/1)シルト質細粒砂(煙道埋土)
6. 黒褐色(10YR2/2)シルト質細粒砂で、2cm大の礫と土器を含む。(ST-5埋土)
7. 黒褐色(10YR3/4)細粒砂質シルトで、2cm大の礫と炭化物を含む。(カマド構築土)
8. 黒褐色(10YR2/3)細粒砂質シルトで、2cm大の礫と炭化物を少し含む。(前袖石堀方)

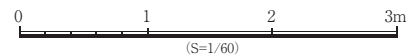


図 59 ST-10 カマド跡

3. 遺構と遺物

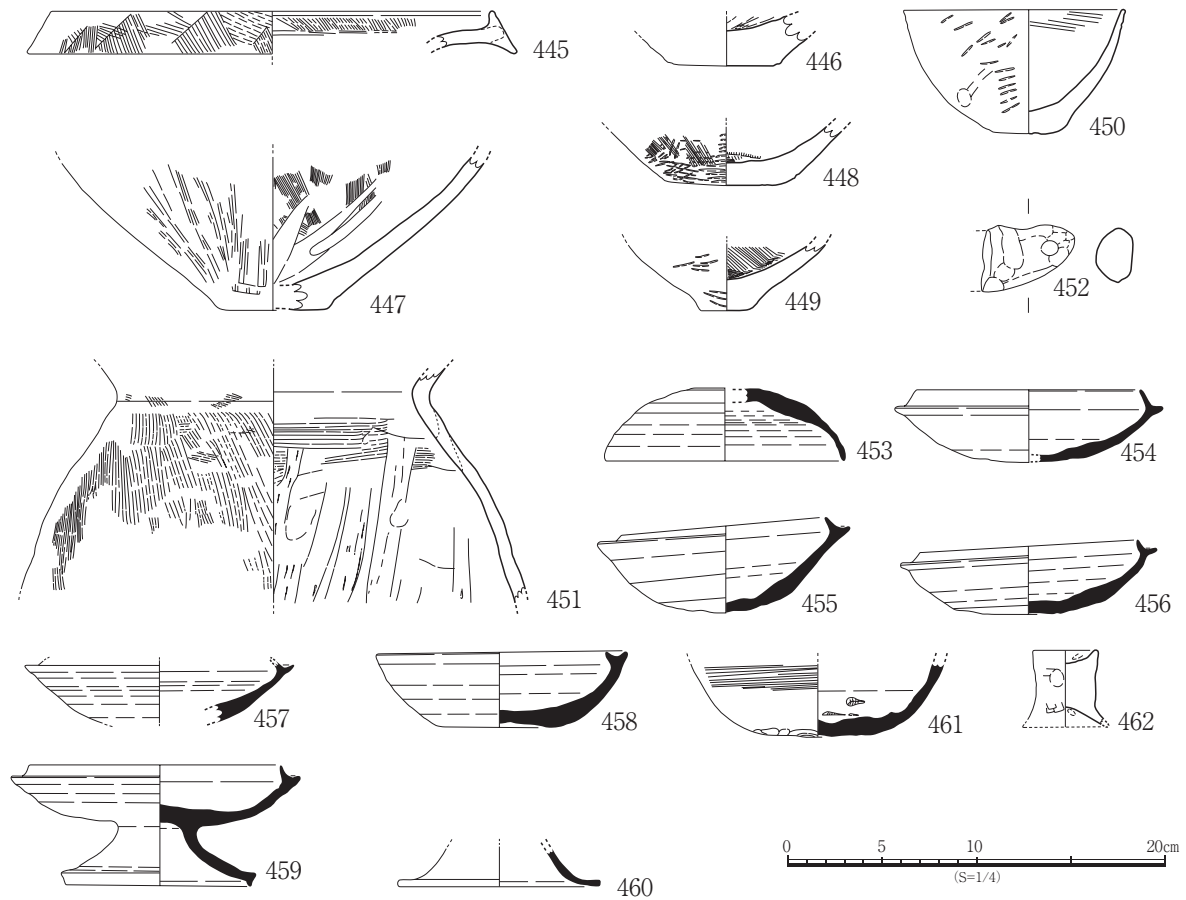


図 60 ST-10 埋土 1 出土遺物実測図 (弥生土器・土師器・須恵器・土製品)

口縁部内面が横方向のハケ, 体部外面がタタキ後ナデ, 底部外面がナデである。

土師器(図60-451・452)

451は甕で, 胴部の約1/4が残存する。調整は内面が頸部に横方向のハケを施した後胴部に縦方向のケズリ, 外面が縦方向のハケである。内面には接合痕が残る。452は甑の把手で, 一部が残存する。断面は楕円形を呈し, 端部を細く仕上げる。調整はナデで, 指頭圧痕が残る。

須恵器(図60-453~461)

453は蓋で, 約1/3が残存する。口縁部は器壁が薄く, 端部は丸く収める。調整は回転ナデで, 天井部外面には回転ヘラケズリを加える。

454~458は杯で, いずれも受け部を有するものである。454は約1/3が残存する。器高が低く, 立ち上がりが比較的長いものである。調整は回転ナデで, 底部内面にはナデを加える。底部外面は器面が荒れるため調整は不明瞭である。455は約2/3が残存し, 著しく歪む。器高が高く, 底部は丸底を呈する。調整は回転ナデで, 底部内面にはナデを加える。底部外面は回転ヘラ切り後回転ヘラケズリ調整とナデ調整を加える。456は器高が低く, 立ち上がりが短いものである。調整は回転ナデで, 底部外面は回転ヘラケズリ後ナデを加え, 工具の圧痕が残る。457は体部の約1/6が残存する。調整は回転ナデである。458はほぼ完存する。底部は平底を呈し, 立ち上がりは非常に短いものである。調整は回転ナデで, 底部内外面にナデを加える。

459・460は高杯である。459は脚部が完存し, 端部を下方に肥厚させる。調整は回転ナデで, 脚部内

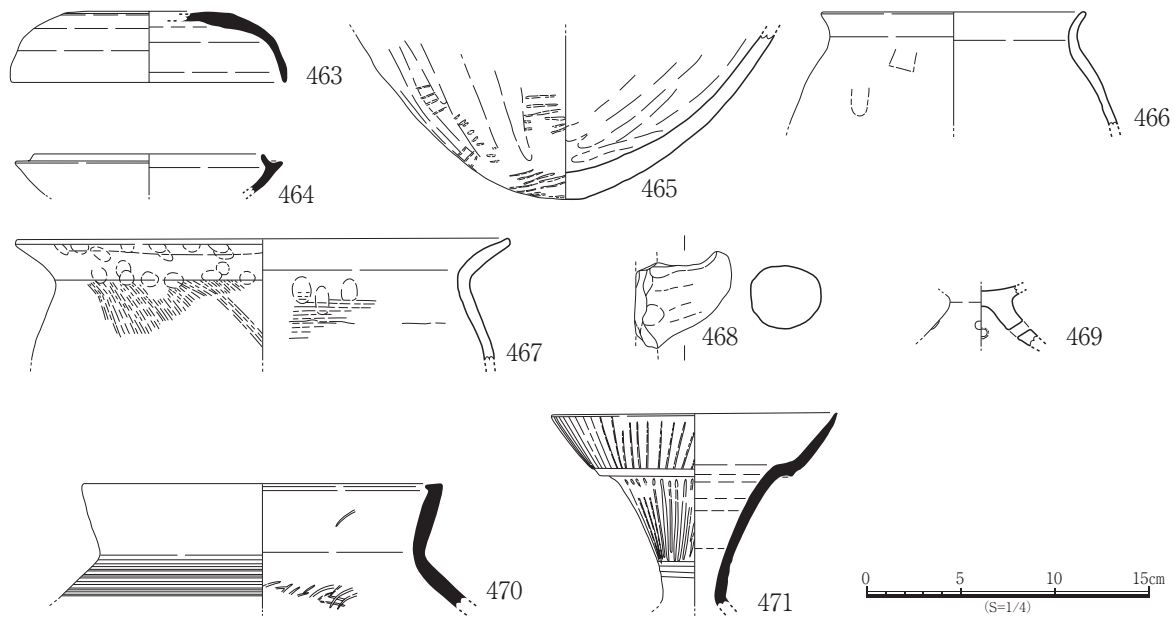


図61 ST-10埋土2・3出土遺物実測図（弥生土器・土師器・須恵器）

面には一部ナデを施す。460は高杯の脚部とみられ、約1/8が残存する。脚端部は水平に伸び、端部を四角く収める。調整は回転ナデである。

461は壺で、底部の約1/4が残存する。底部は平底を呈し、胴部は緩やかに内湾して立ち上がる。調整は回転ナデで、内面にはハケ状工具の圧痕が顕著に残る。外面は胴部にカキ目調整、底部にヘラケズリ調整を加える。

土製品(図60-462)

462は支脚とみられ、脚端部を欠損する。小型で、上端は浅い皿状を呈し、脚部は短く開く。調整はナデで、脚柱部には縦方向のヘラナデを加える。

埋土2出土遺物

須恵器(図61-463・464)

463は蓋で、約1/3が残存する。口径が大きく、天井部は平らである。調整は回転ナデで、天井部外面には回転ヘラ切り後ナデを加える。464は杯で、口縁部の約1/8が残存する。受け部は短く伸びる。調整は回転ナデである。

埋土3出土遺物

弥生土器(図61-465)

465は甕で、底部が完存し、丸底を呈する。調整は内面が縦方向のナデ、胴部外面がタタキ後縦方向のナデ、底部外面がナデである。

土師器(図61-466~469)

466・467は甕である。466は口縁部の約1/5が残存する。口縁部は頸部から緩やかに屈曲して短く伸び、端部を丸く収める。調整はナデで、口縁部はヨコナデである。胴部外面は丁寧なナデで一部にヘラナデの痕跡が残る。467は大型のもので、口縁部の約1/3が残存する。口縁部は頸部から大きく開き、真っすぐ伸びる。調整は胴部内面が横方向のハケ、頸部内面がナデ、口縁部がヨコナデで、外面には指頭圧痕が顕著に残る。胴部外面は縦方向のハケ調整である。

3. 遺構と遺物

468は甑の把手である。断面は楕円形を呈し、端部は上方へ細くつまみ上げる。胴部内面及び把手の調整はナデである。

469は器台で、脚部の一部が残存する。脚部には径6mmの円孔が3箇所に残存する。調整は脚部がナデで、杯底部は摩耗するため不明である。

須恵器(図61-470-471)

470は甕で、口縁部の約1/8が残存する。短頸で、口縁部は真っすぐ伸び、端部は内側に肥厚させる。調整は回転ナデで、胴部外面にはカキ目がみられる。口縁部内面には沈線状の工具の痕跡、胴部内面には当て具痕が残る。

471は甕で、口縁部が完存する。口縁部は緩やかに外反して立ち上がり、上部は内湾して端部を細く仕上げる。調整は回転ナデで、外面には凹線と沈線による文様を施す。

埋土4 出土遺物

弥生土器(図62-472-476)

472-474は壺である。472は複合口縁壺で、口縁部の約1/8が残存する。調整は外面にヨコナデが残るが、その他は摩耗するため不明である。473は底部が完存する。底部は小さな平底を呈する。調

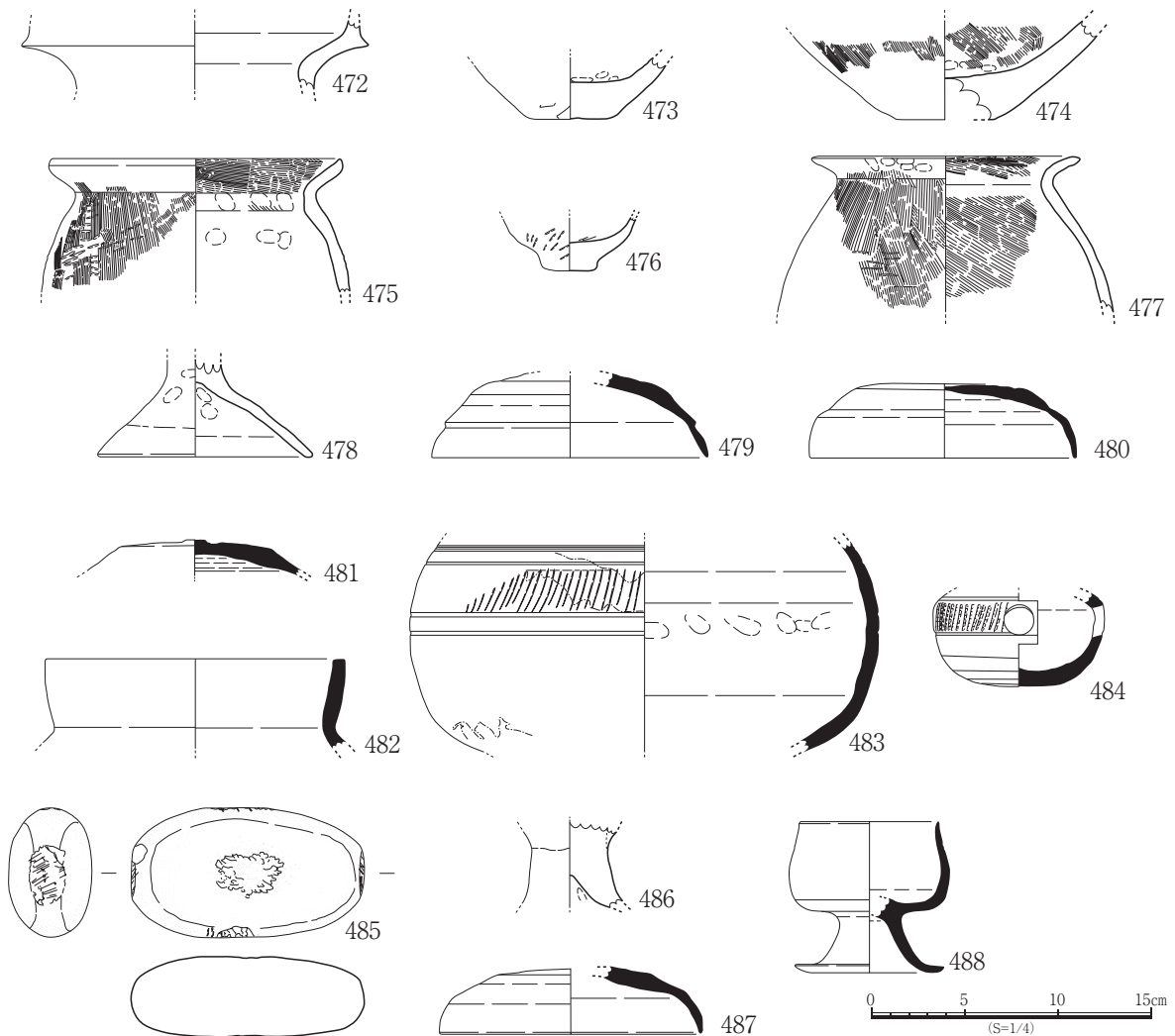


図62 ST-10埋土4・5出土遺物実測図(弥生土器・土師器・須恵器・石製品)

整は内面がナデで、胴部外面にヘラ状工具の圧痕が残る。その他は摩耗するため調整は不明である。474は底部の約1/2が残存する。器壁が厚く、底部は平底を呈する。調整は底部内面がナデ、胴部内外面がハケである。

475は甕で、口縁部の約1/5が残存する。口縁部は真っすぐ伸び、端部は上方に摘み上げる。調整は内面の胴部と頸部がナデ、口縁部が横方向のハケである。外面は口縁部がナデ調整、胴部がタタキ後ハケ調整である。

476は鉢で、底部が完存する。底部は小さな平底を呈する。調整は内面がヘラナデ、外面にはタタキが残る。底部外面はナデ調整とみられるが、摩耗するため不明瞭である。

土師器(図62-477・478)

477は甕で、口縁部の約1/5が残存する。口縁部は頸部から湾曲して外上方に大きく開く。調整は内面の胴部と口縁部がハケ、頸部がナデ、口縁部外面がナデ、胴部外面がタタキ後ハケである。胴部外面には煤が付着する。

478は高杯で、脚部の約1/3が残存する。脚柱部は中実で、裾部は大きく開き、長く真っすぐ伸びる。調整は裾端部がヨコナデ、内面がナデである。外面はナデ調整とみられるが、摩耗するため調整は不明である。

須恵器(図62-479~484)

479~481は蓋である。479は約1/3が残存する。口縁部には稜を有し、天井部はやや丸みをもつ。調整は回転ナデで、天井部外面には回転ヘラケズリを加える。480はほぼ完存する。口縁部は直立し、天井部は平らである。器面は著しく摩耗するため調整は不明である。481は北西部の床面より出土したものである。天井部が残存し、天井部は平らである。調整は回転ナデで、天井部外面は回転ヘラ切り後丁寧なナデである。

482・483は壺である。482は直口壺とみられ、口縁部の約1/5が残存する。口縁部は短く上方に立ち上がり、端部は四角く収める。調整は回転ナデで、頸部内面にはナデを加える。483は胴部の約1/5が残存する。胴部は丸みを有する。調整は内面の胴部下半がナデ、上半が回転ナデである。外面は回転ナデ調整だが、器面が荒れるため不明瞭である。外面には凹線と沈線による文様がみられる。また、一部はカキ目を施したとみられるが、器面が荒れるため不明瞭である。外面の胴部下半には自然釉がかかる。

484は甕で、北西部の床面より出土した。底部が完存する。底部は平底を呈し、胴部は扁球形である。調整は回転ナデで、底部外面には回転ヘラケズリを行う。外面には凹線とハケ状工具の圧痕による文様がみられ、胴部には径1.6cmの円孔を有する。

石製品(図62-485)

485は叩石および磨石で、完存する。平面が楕円形を呈する扁平な石材を使用しており、両端と表裏面の4箇所を使用痕が残る。表裏面は中央に敲打痕がみられ、両端は摩耗して平滑になっている。石材は砂岩の河原石である。

埋土5出土遺物

土師器(図62-486)

486は高杯で、脚部の一部が残存する。脚柱部は中実で、裾部は短く伸びるものとみられる。調整はナデとみられるが、摩耗するため不明瞭である。

3. 遺構と遺物

須恵器(図62-487・488)

487は蓋で、約1/2が残存する。器高が低く、天井部は平らである。調整は回転ナデで、天井部外面は回転ヘラケズリ後ナデである。

488は無蓋高杯で、南東部の床面より出土した。ワイングラス形を呈し、脚部はほぼ完存する。小型で、端部は細く仕上げる。調整は回転ナデで、外面の杯底部には回転ヘラケズリを加える。

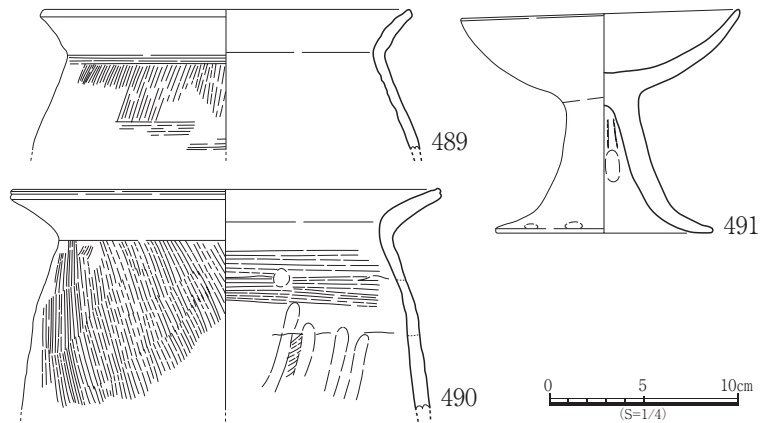


図63 ST-10 カマド跡出土遺物実測図(土師器)

カマド跡出土遺物

土師器(図63-489~491)

489・490は甕で、いずれも長胴になるものとみられる。489は口縁部の約1/4が残存し、口縁部は真っすぐ伸び、端部を四角く収める。調整は口縁部がヨコナデ、胴部外面が縦方向のハケ後横方向のハケである。内面は著しく摩耗するため調整は不明である。490は口縁部の約1/5が残存する。胴部は真っすぐ上方に立ち上がる。調整は内面が横方向のハケでその後下半に縦方向のナデを加える。口縁部はヨコナデ調整、胴部外面はハケ調整である。

491は高杯で、杯部が完存する。杯部は浅い椀形を呈し、脚部は中空で、ハの字状に開く。調整は脚部がナデであるが、杯部は摩耗するため不明である。

ST-11(図64・65)

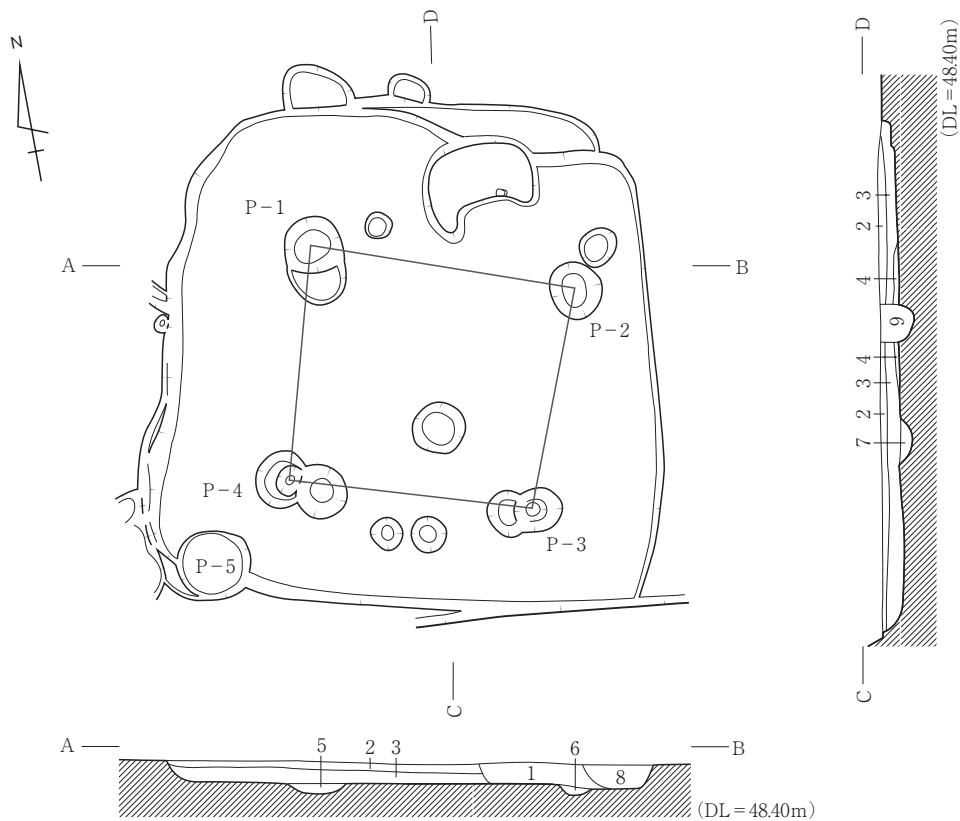
調査区中央部で検出した方形を呈する竪穴式住居跡で、東側は近世の溝跡(SD-10)に切られる。東西は4.30~5.00m、南北は4.65~4.80mを検出し、深さ26cm、面積22㎡を測る。

埋土は4層に分かれ、埋土1はカマドの周辺にのみみられ、炭化物を含んでいた。埋土2・3はほぼ水平に堆積し、埋土4は中央部にのみみられた。

出土遺物は弥生土器の壺、甕、鉢、支脚、須恵器の蓋、杯、高杯、甕がみられた。住居跡南側で多く出土し、埋土では埋土3から最も多く出土した。埋土2より出土した弥生土器(492)、須恵器2点(493・494)、埋土3より出土した弥生土器2点(495・496)、須恵器(497)が図示できた。

支柱穴はP-1~4の4本とみられ、柱間寸法は2.40~2.85mを測る。P-1は円形で径0.59m、深さ24cm、P-2は楕円形で長径0.60m、短径0.52m、深さ42cm、P-3は楕円形で長径0.62m、短径0.55m、深さ28cm、P-4は円形で径48cm、深さ38cmを測る。埋土はいずれも黒色シルト質細粒砂で、3~5cm大の礫を含んでいた。また、南西隅で検出したP-5は比較的大きなピットであり、貯蔵用のピットであった可能性も考えられる。円形を呈し、径0.76m、深さ26cmを測る。埋土は黒褐色シルト質細粒砂であった。出土遺物には弥生土器片40点、須恵器の杯1点がみられ、須恵器(498)が図示できた。

北壁の中央より東寄りでカマド跡を確認した。馬蹄形を呈するカマド構築土と立石一石を検出した。カマド構築土は幅1.21m、長さ1.11mの範囲に拡がり、高さ23cmを測る。立石は焼土の範囲や被熱箇所より右前袖石の可能性が高い。この立石には掘方があり、元位置を動いていないものとみられる。砂岩の河原石で高さ18cmを測る。床張りはなく、竪穴式住居跡の床面とほぼ同じ高さで、奥



埋土

1. 黒褐色(10YR2/3)シルト質細粒砂で、5mm大の礫と炭化物を含む。(ST-11埋土1)
2. 黒褐色(10YR2/2)シルト質細粒砂(ST-11埋土2)
3. 黒色(10YR2/1)シルト質細粒砂で、5mm大の礫を多く含む。(ST-11埋土3)
4. 黒褐色(10YR2/3)シルト質細粒砂で、5mm大の礫を少し含む。(ST-11埋土4)
5. 黒色(10YR1.7/1)シルト質細粒砂で、3~5cm大の礫を含む。(P-1)
6. 黒色(10YR1.7/1)シルト質細粒砂で、3~5cm大の礫を含む。(P-2)
7. 黒色(10YR1.7/1)シルト質細粒砂で、3~5cm大の礫を含む。
8. 黒色(5Y2/1)細粒砂質シルトで、10cm大の礫を多く含む。(SD-10)
9. 黒色(10YR1.7/1)シルト質細粒砂で、少量の1cm大の礫と黄色シルトのブロックを含む。

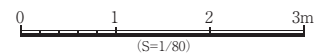


図64 ST-11

壁に近い部分は一段高く作られていた。出土遺物はカマド構築土から出土した須恵器(499)、カマド埋土から出土した土師器(500)と須恵器2点(501・502)が図示できた。

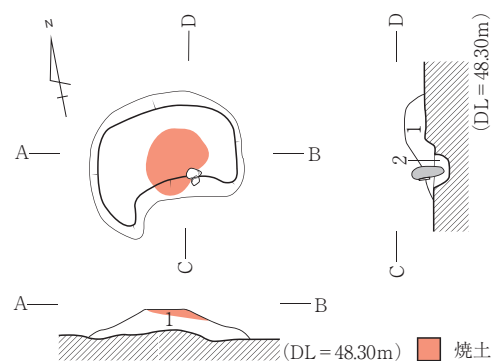
埋土2 出土遺物

弥生土器(図66-492)

492は鉢で、底部が完存する。底部は平底を呈する。調整は内面がナデ、体部外面がタタキ後ハケ、底部外面がナデである。

須恵器(図66-493・494)

493は杯で、底部の約1/4が残存する。底部は平底を呈し、体部は外上方へ真っすぐ伸びる。調整は内面と体部外面が回転ナデ、底部外面がナデである。494は甕で、口縁部の約1/8が残存する。口縁部はやや外反し、端部は玉



埋土

1. 黒褐色(10YR2/3)細粒砂質シルトで、5cm大の礫と焼土、炭化物を含む。(カマド構築土)
2. 黒褐色(10YR2/3)中粒砂質シルトで、3cm大の礫を含む。(軸石堀方)

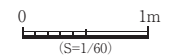


図65 ST-11 カマド跡

3. 遺構と遺物

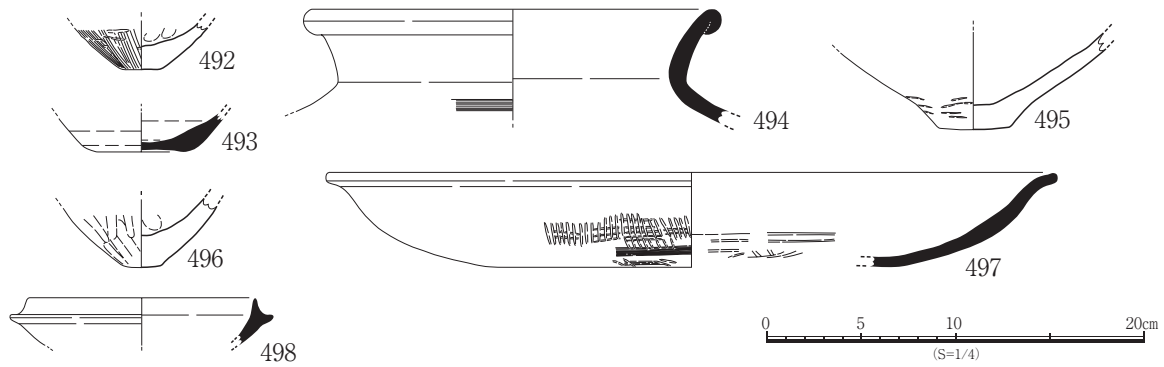


図66 ST-11 出土遺物実測図（弥生土器・須恵器）

縁状を呈する。調整は胴部内面がナデ、口縁部がヨコナデ、胴部外面がカキ目である。

埋土3 出土遺物

弥生土器(図66-495・496)

495は甕で、底部の約3/4が残存する。底部は平底を呈し、体部は外上方に真っすぐ伸びる。調整は内面がナデ、胴部外面がタタキ後ナデ、底部外面がナデである。496は鉢で、底部が完存する。底部は小さな平底を呈する。調整は外面がナデで、内面は摩耗するため不明である。

須恵器(図66-497)

497は大型で皿状を呈するものである。平底を呈するものとみられ、口縁部は外反して端部を丸く収める。調整は底部内面に当て具痕が残り、体部内面がナデ、口縁部がヨコナデ、体部外面には格子状のタタキ目が残る、その後一部横方向のハケを加える。内面と体部外面には自然釉がかかる。

ピット出土遺物

須恵器(図66-498)

498はP-5より出土した杯で、口縁部の約1/8が残存する。口縁部は短く上方に立ち上がる。調整は回転ナデである。

カマド構築土出土遺物

須恵器(図67-499)

499は高杯で、脚部の約1/3が残存する。脚部はハの字状に開き、端部は上方に肥厚させる。調整は回転ナデで、外面には凹線を1条施す。また、長方形とみられる透かしの一部が残存する。

カマド埋土出土遺物

土師器(図67-500)

500は立石の南側から出土したものである。鉢状を呈するものとみられ、口縁部の一部が残存する。口縁部は真っすぐ伸び、端部を丸く収める。外面にはハケ調整がわずかに残るが、その他は摩耗するため調整は不明である。

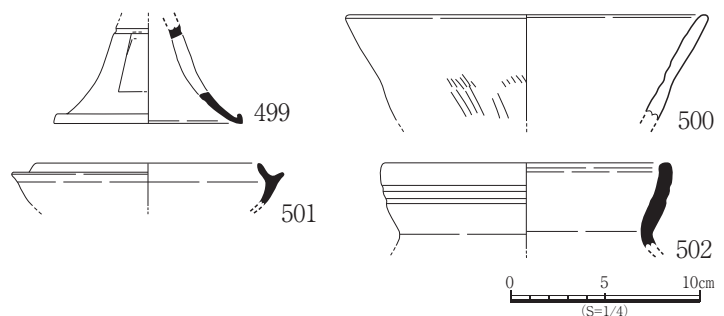


図67 ST-11 カマド跡出土遺物実測図（土師器・須恵器）

須恵器(図67-501・502)

501は杯で、口縁部の約1/6が残存す

る。口縁部は短く内傾する。調整は回転ナデだが、外面は摩耗するため不明瞭である。502は壺で、口縁部の約1/4が残存する。口縁部は内湾し、端部を四角く収める。外面には凹線が2条巡る。器面は著しく摩耗するため調整は不明である。

ii 土坑

SK-31

SD-7の西で検出した楕円形を呈する土坑で、SK-32に切られる。長径0.94m、短径0.41m、深さ5cmを測り、長軸方向はN-33°-Wを示す。断面は逆台形を呈し、埋土は黒褐色シルト質細粒砂であった。出土遺物には弥生土器片30点、土師器片25点、須恵器片1点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-32(図68)

SK-31の南で検出した楕円形を呈する土坑で、SK-31を切る。長径0.97m、短径0.88m、深さ13cmを測り、長軸方向はN-34°-Wを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は黒褐色シルト質細粒砂で黄色シルトのブロックを含んでいた。出土遺物は皆無であった。

SK-33

ST-6の上で検出した隅丸方形を呈する土坑で、ST-6を切る。長辺0.96m、短辺0.78m、深さ16cmを測り、長軸方向は真北を示す。断面は舟底形を呈し、埋土は黒色シルト質細粒砂で黄色シルトのブロックを含んでいた。出土遺物には弥生土器片65点、須恵器片1点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-34(図69)

ST-9の南側で検出した円形を呈する土坑で、径0.94m、深さ22cmを測る。断面は舟底形を呈し、埋土は黒褐色シルト質細粒砂で2~8cm大の礫を含んでいた。出土遺物には弥生土器の甕1点、細片90点、須恵器片1点がみられ、弥生土器(503)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図70-503)

503は甕で、底部の約1/4が残存する。底部は小さな平底を呈する。調整は内面がナデ、外面がタタキである。

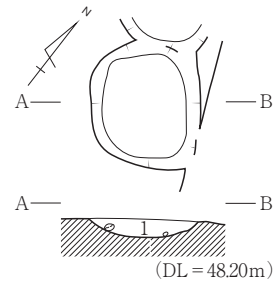
iii 溝跡

SD-3

調査区西部で検出した南北溝跡(N-16°-E)である。検出長5.42m、幅35cm、深さ4cmを測る。基底面は北(47.979m)から南(47.851m)に傾斜する。断面は舟底形を呈し、埋土は黒褐色シルト質中粒砂であった。出土遺物には弥生土器片32点、須恵器片1点がみられたが、図示できるものはなかった。

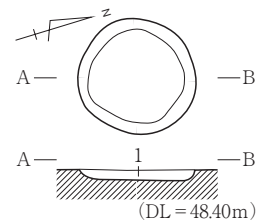
SD-4(図71)

調査区西部で検出した南北溝跡(N-10°-E)である。北端は攪乱に切られ、南端は調査区外へ続く。検出長5.40m、幅0.56m、深さ8cmを測る。基底面は南



埋土
1. 黒褐色(10YR3/1)シルト質細粒砂で、黄色シルトのブロックを含む。
0 1m
(S=1/60)

図68 SK-32



埋土
1. 黒褐色(10YR3/1)シルト質細粒砂で、2~8cm大の礫を含む。
0 1m
(S=1/60)

図69 SK-34

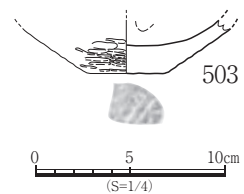
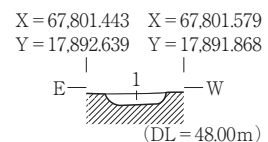


図70 SK-34
出土遺物実測図



埋土
1. 黒色(10YR1.7/1)シルト質細粒砂
0 1m
(S=1/60)

図71 SD-4

3. 遺構と遺物

(47.914m)から北(47.846m)に傾斜する。断面は逆台形を呈し、埋土は黒色シルト質細粒砂であった。出土遺物には弥生土器片17点、須恵器片1点がみられたが、図示できるものはなかった。

SD-5(図72)

調査区中央部で検出した南北溝跡(N-9°-E)で、ST-1・2を切る。両端は調査区外へ続き、検出長13.40m、幅0.56m、深さ18cmを測る。基底面は北(48.047m)から南(47.927m)に傾斜する。断面は舟底形を呈し、埋土は黒褐色シルト質細粒砂で1cm大の礫を含んでいた。出土遺物には弥生土器の甕4点、鉢3点、細片110点、須恵器片3点がみられ、弥生土器5点(504~508)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図73-504~508)

504・505は甕である。504は口縁部を欠損する。底部は丸底を呈し、胴部はやや膨らむ。調整は内面の胴部下半が強いナデ、胴部上半がハケ後ナデ、頸部内面がハケ、胴部外面はタタキ、底部外面はナデである。505はほぼ完存する。底部は小さな平底を呈し、胴部は砲弾形を呈する。調整は内面の胴部下半がハケ、胴部上半がナデ、口縁部内面がハケ、胴部外面はタタキで下半にはハケを加える。底部外面はナデ調整である。

506~508は鉢である。506は平底を呈するもので、完存する。器高が高く、口縁部は細く仕上げる。調整は内面が口縁部にミガキを施した後縦方向のナデ、口縁端部はヨコナデ、外面はナデ後体部下半にハケを行う。底部外面には木葉痕が残る。507は平底を呈するもので、底部が完存する。器高が低いものである。調整は内面がミガキ後一部ナデ、外面はナデで、体部には亀裂が入る。508は尖底を呈するもので、底部が完存する。調整はナデで、外面には亀裂が入る。

iv 性格不明遺構

SX-3(図74)

調査区北西部で検出した不整形を呈する遺構で、全長7.95m、幅5.45m、深さ5~13cmを測る。北端よりカマド跡が確認されており、竪穴式住居跡の可能性が高いが、削平を受けており形状は不明瞭である。埋土は黒褐色シルト質細粒砂で1~3cm大の礫を多く含んでいた。

出土遺物には弥生土器の鉢1点、細片715点、土師器の高杯1点、甑2点、細片25点、須恵器の杯1点、細片5点がみられ、弥生土器(509)、土師器3点(510~512)、須恵器(513)が図示できた。

カマド跡は左前袖石と奥壁が確認できた。左前袖石は砂岩の割れ石で、高さ26cmを測り、掘方も確認できた。右前袖石は確認できなかった。また、前袖石の南側には天井石に使用していたとみら

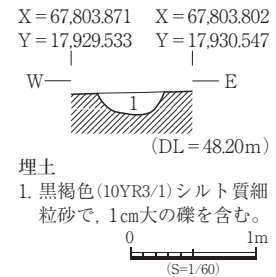


図72 SD-5

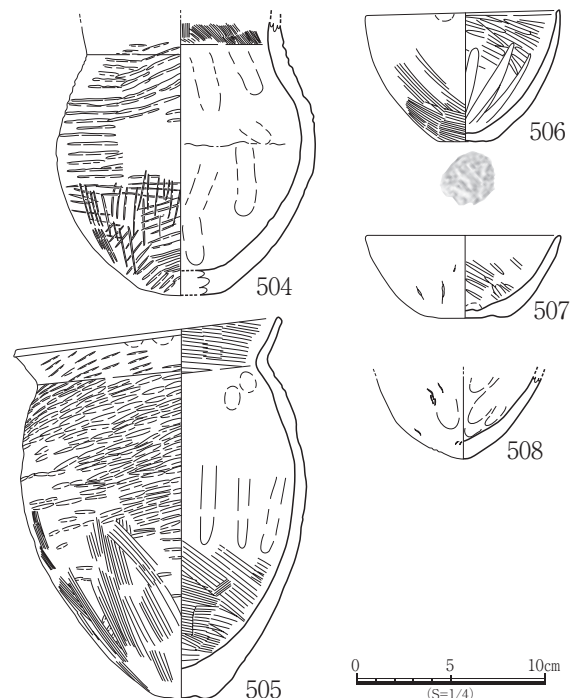


図73 SD-5出土遺物実測図

れる割れ石があり、被熱の痕跡が認められた。石材はチャートで、長さ0.55m、幅18cmを測る。奥壁は半円形を呈し、幅1.03m、長さ39cmを測る。焚口幅は37cm、焚口から奥壁までの長さは0.55mを測る。基底はSX-3の基底より地山を若干掘り込んでいた。カマド内の埋土は黒褐色細粒砂質シルトで、炭化物と焼土、3cm大の礫を含んでいた。カマド前面の埋土は黒色シルト質細粒砂で灰黄褐色シルト質細粒砂ブロックと炭化物、焼土を含んでいた。

カマド内からは弥生土器片125点、土師器片8点、須恵器片1点が出土した。カマド埋土中から出土した土師器4点(514~517)が図示できた。なお、514はSX-3の埋土(埋土1)より出土したが、515~517に重なって一括出土したためカマド跡出土遺物とした。

出土遺物

弥生土器(図75-509)

509は大型の鉢とみられ、一部が残存する。調整はミガキで、外面には断面半円形を呈する突帯を2条貼付し、刻み目を施す。

土師器(図75-510~512)

510は高杯で、脚部の約1/2が残存する。脚部はハの字状に開き、端部を丸く収める。調整はケズリで、裾部はヨコナデ後ハケである。

511・512は甌である。511は口縁部の一部が残存する。口縁部は真っすぐ上方に立ち上がり、端部を丸く収める。調整は内面が縦方向のケズリ、口縁端部がヨコナデ、外面が縦方向の粗いハケである。512は把手である。断面は楕円形を呈し、端部は上方へ摘まみ上げる。調整はナデで、胴部内面は横方向に施す。

須恵器(図75-513)

513は杯で、口縁部の約1/3が残存する。受け部を有するもので、立ち上がりは比較的高く、外反する。調整は回転ナデである。

カマド跡出土遺物

土師器(図75-514~517)

514は長胴甕で、胴部の約4/5が残存する。胴部は内湾して立ち上がり、口縁部は短く、端部は水平方向に細く摘まむ。調整は内面の胴部下半がナデ後縦方向のケズリ、胴部上半がナデ、口縁部がヨコナデ、外面がナデである。内面には接合痕が顕著に残る。515は甕で、カマド内の西側より出土した。小型で、ほぼ完存する。丸底で、胴部は球形を呈し、口縁部は短く伸びる。調整は底部内面がナデ、胴部内面がヘラケズリ、口縁部がヨコナデ後ハケ、外面が粗いハケである。

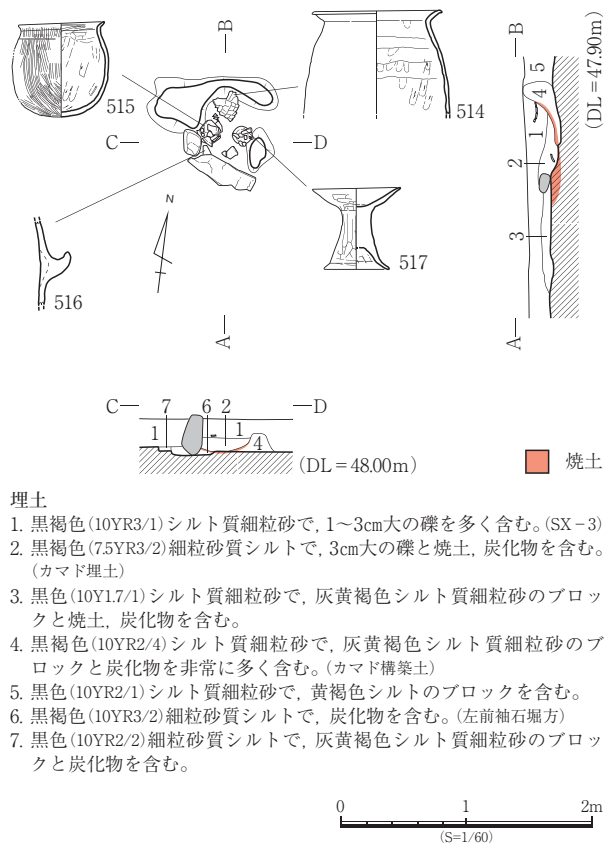


図74 SX-3カマド跡

3. 遺構と遺物

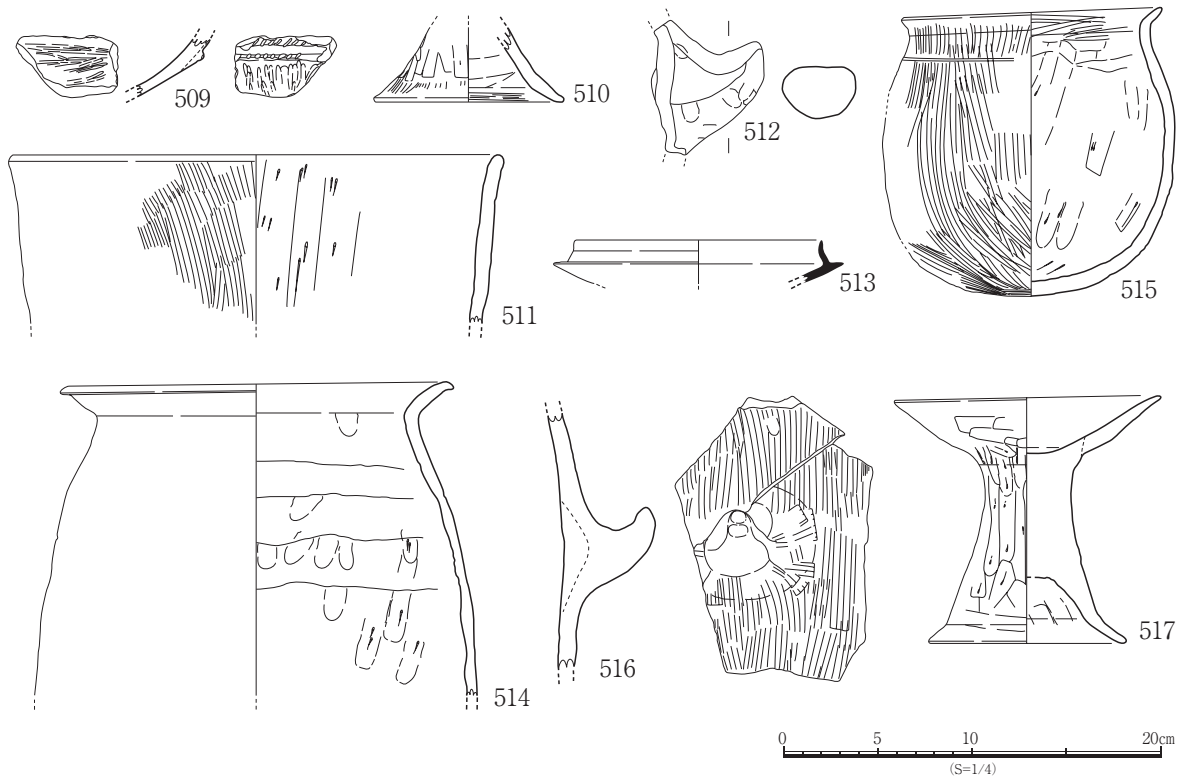


図 75 SX-3 出土遺物実測図

516は甑で、天井石の下より出土した。胴部の一部が残存し、把手が付く。胴部は真っすぐ上方へ立ち上がり、把手は端部を上方へ摘み上げる。調整は胴部内面が縦方向のケズリ、外面が縦方向の粗いハケ、把手はナデである。

517は高杯でカマド内の東側より杯部を下にした状態で出土した。杯部が完存する。杯部は浅く皿状を呈し、脚部は中実で太く、裾部はハの字状に開く。調整は内面と口縁部外面が横方向のナデ、外面の杯底部と脚部が縦方向のケズリ、裾部は横方向のナデ、脚内面がナデである。

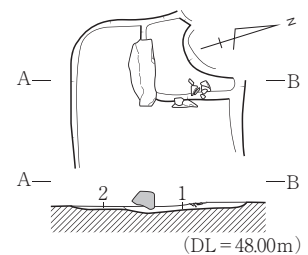
SX-4(図76)

調査区中央部で検出した遺構で、隅丸方形を呈する。カマドを確認しており、住居跡の一部とみられる。長辺2.24m、短辺1.38m、深さ16cmを測り、断面は逆台形を呈する。長軸方向はN-75°-Wを示す。カマドは北西隅で確認された。カマドに使用されたとみられる二石が垂直方向に並んでおり、石で囲まれた範囲は一辺0.64mの方形を呈し、周囲より11cm深くなっていた。埋土は黒褐色シルト質細粒砂で、粘性は弱く、焼土と炭化物を多く含んでいた。天井石に使用されたとみられる石は全長52cmを測り、被熱の痕跡が認められた。出土遺物は弥生土器または土師器片68点がみられ、カマド内から出土した土師器2点(518・519)が図示できた。

出土遺物

土師器(図77-518-519)

518・519は甑である。底部は筒状を呈し、端部は細く仕上げる。518は底部の約1/5が残存する。調整はナデで、端部はヨコナデである。519は



- 埋土
1. 黒褐色(10YR2/2)シルト質細粒砂で、粘性弱く、焼土と炭化物を多く含む。(カマド埋土)
 2. 黒色(10YR1.5/1)シルト質細粒砂で、黄色シルトのブロックを含む。(SX-4)

図 76 SX-4 カマド跡

底部の約1/3が残存する。調整は胴部内面がナデ後縦方向のケズリ, 端部がヨコナデ, 外面がナデである。

v ピット

P-19

SX-3の底で検出した円形のピットで, 径20cm, 深さ3cmを測る。埋土は黒色シルト質細粒砂で黄色シルトのブロックを含んでいた。出土遺物は図示した須恵器の杯(520)がみられた。

出土遺物

須恵器(図78-520)

520は杯で, 約3/4が残存する。器高が低く, 受け部を有するもので, 立ち上がりは短く伸びる。調整は回転ナデで, 底部内面にナデ, 底部外面に回転ヘラケズリを加える。

P-20

SD-7の西側で検出した不整楕円形を呈するピットで, 長径29cm, 短径25cm, 深さ5cmを測る。埋土は黒色シルト質細粒砂であった。出土遺物には弥生土器片35点, 須恵器の蓋1点がみられ, 須恵器(521)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図78-521)

521は蓋で, 天井部の約1/3が残存する。天井部は平らで, つまみを欠損する。調整は回転ナデで, 天井部内面にはナデ, 天井部外面は回転ヘラケズリを加える。

P-21

ST-11の上で検出した楕円形のピットで, 長径42cm, 短径32cm, 深さ13cmを測る。埋土は黒褐色シルト質細粒砂であった。出土遺物には弥生土器片2点と須恵器の杯1点がみられ, 須恵器(522)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図78-522)

522は杯で, 口縁部の約1/8が残存する。器高が低く, 受け部を有するもので, 立ち上がりは内傾し, 真っすぐ伸びる。調整は回転ナデで, 底部外面は回転ヘラケズリである。

P-22

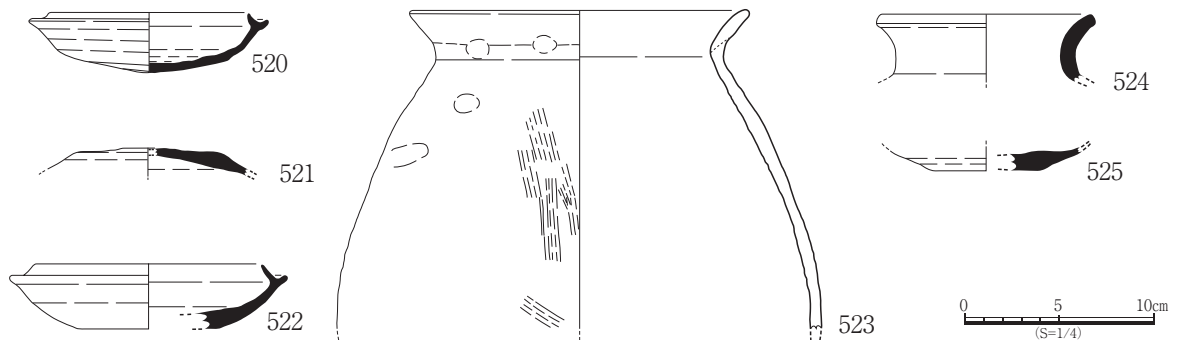


図 78 P-19 ~ 23 出土遺物実測図

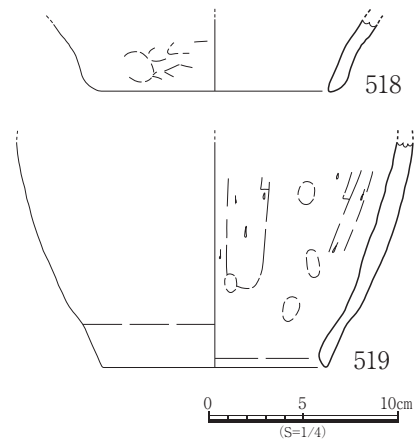


図 77 SX-4 出土遺物実測図

3間(5.70m)を検出した。棟方向はN-88°-Eである。柱間寸法は、桁行(東西)が1.90mである。柱穴は径0.45~0.60mの円形または楕円形で、柱径は約30cmとみられる。埋土は黒色シルト質細粒砂で黄色シルトのブロックを含んでいた。出土遺物には弥生土器片137点、土師器片3点、須恵器片1点がみられたが、図示できるものはなかった。

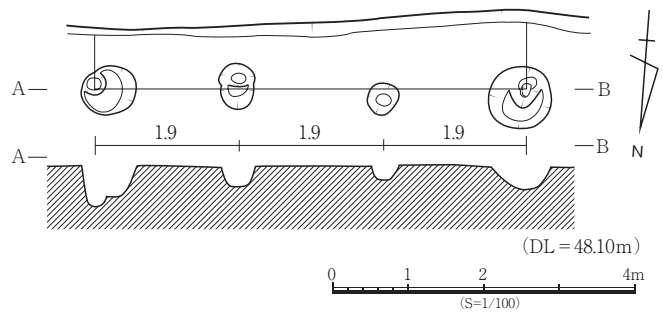


図80 SB-2

SB-3(図81)

調査区北部で検出した東西棟建物で、桁行3間(6.60m)を検出した。棟方向はN-88°-Eである。柱間寸法は、桁行(東西)が2.20mである。柱穴は径0.50~0.90mの楕円形で、柱径は約20cmとみられる。埋土は黒色シルト質細粒砂で黄色シルトのブロックを含んでいた。出土遺物には弥生土器片560点、土師器片1点がみられたが、図示できるものはなかった。

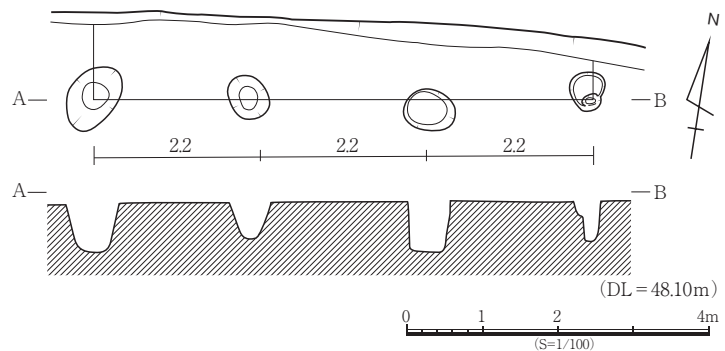


図81 SB-3

SB-4(図82)

SB-2の東で検出した梁間2間(5.80m)、桁行3間(6.80m)の南北棟建物で、南側は調査区外へ続く。棟方向は方眼北を示す。柱間寸法は、梁間(東西)が2.90m、桁行(南北)が2.00mと2.40mである。柱穴は径0.65~0.90mの円形または楕円形で、柱径は約25cmとみられる。埋土は黒色シルト質細粒砂または黒褐色シルト質細粒砂であった。出土遺物には弥生土器片263点がみられたが図示できるものはなかった。

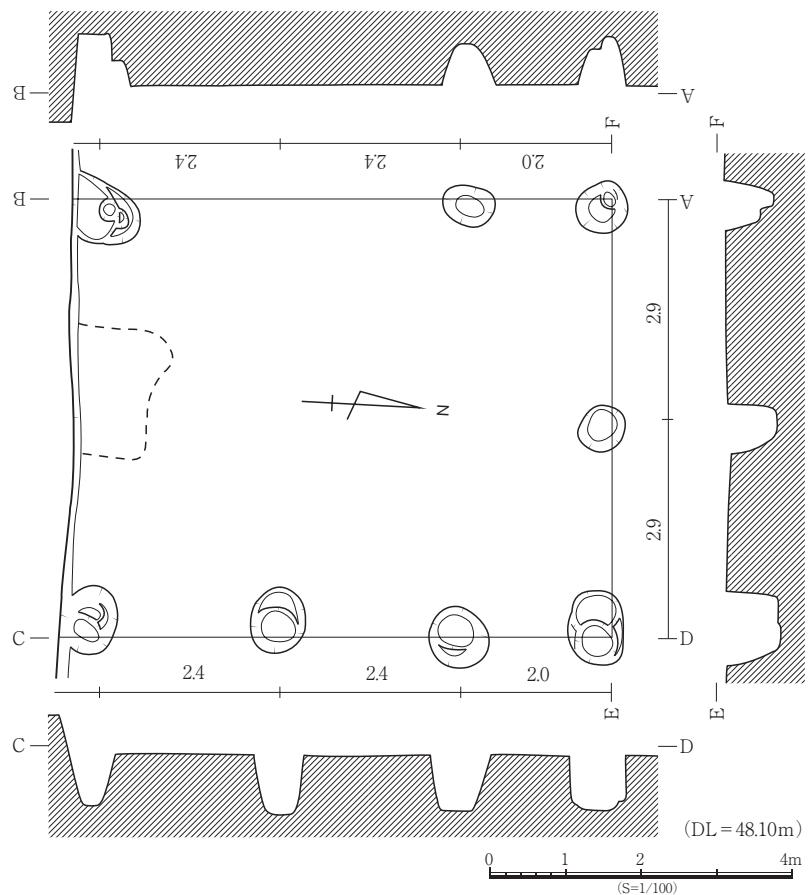


図82 SB-4

3. 遺構と遺物

ii 土坑

SK-35(図83)

調査区西部で検出した隅丸方形を呈する土坑である。長辺1.58m, 短辺1.32m, 深さ27cmを測り, 長軸方向はN-84°-Wを示す。断面は逆台形を呈し, 埋土は黒褐色シルト質細粒砂であった。出土遺物には弥生土器片200点, 土師器の盤1点, 土師器片1点, 須恵器の杯2点, 須恵器片5点, 鉄製品1点がみられ, 土師器(527), 須恵器2点(528・529), 鉄製品(530)が図示できた。

出土遺物

土師器(図84-527)

527は盤とみられ, 底部の約1/2が残存する。底部には直立する高台を有する。調整は内面がミガキ, 底部外面が回転ヘラ切り後ナデである。

須恵器(図84-528・529)

528・529は杯で, いずれも受け部を有するものである。528は口縁部の約1/8が残存する。体部は外傾し, 立ち上がりは短く伸びる。調整は回転ナデである。529は口縁部の約1/8が残存する。器高が低く, 立ち上がりは短く上方に立ち上がる。調整は回転ナデで, 底部内面にはナデを加える。

鉄製品(図84-530)

530は刀子で, 完存する。全長10.6cm, 全幅1.3cm, 全厚0.5cm, 重量14.7gを測る。

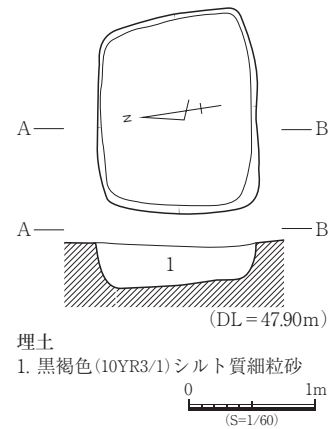


図 83 SK-35

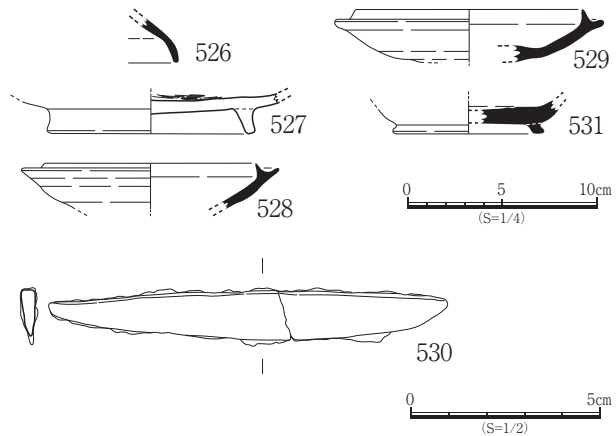


図 84 SB-1・SK-35・37 出土遺物実測図

SK-36

調査区中央部で検出した隅丸方形を呈する土坑で, SD-7に切られる。長辺1.34m, 短辺1.17m, 深さ4cmを測る。断面は逆台形を呈し, 埋土は黒褐色シルト質細粒砂で5mm大の礫を含んでいた。出土遺物には弥生土器片3点, 土師器の甕1点, 土師器片1点, 須恵器片1点がみられたが, 図示できるものはなかった。

SK-37

SK-36の南で検出した楕円形を呈する土坑である。長径1.02m, 短径0.73m, 深さ15cmを測る。断面は逆台形を呈し, 埋土は黒褐色シルト質細粒砂であった。出土遺物には弥生土器片35点, 須恵器2点がみられ, 須恵器(531)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図84-531)

531は杯で, 底部の約1/8が残存する。底部には低くハの字状に開く高台を有する。調整は回転ナデとみられるが, 摩耗するため不明瞭である。

SK-38(図85)

調査区東部で検出した楕円形を呈する土坑である。長径2.42m, 短径1.51m, 深さ12cmを測る。断

面は逆台形を呈し、埋土は黒褐色シルト質細粒砂で、底及び側面には焼土がみられた。出土遺物には弥生土器の壺3点、甕3点、鉢2点、高杯3点、細片910点、須恵器の蓋1点、壺1点、細片7点、土師質土器の椀8点、杯50点、皿12点、細片800点、土師器の甕12点、黒色土器の椀9点、細片20点がみられ、弥生土器6点(532~537)、須恵器(538)、土師質土器19点(539~557)、土師器5点(558~562)、黒色土器8点(563~570)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図86-532~537)

532は壺で、頸部の一部が残存する。口縁部は頸部から屈曲して上方に立ち上がる。調整は胴部内面がナデ、口縁部内面がヘラナデ、口縁部外面はタタキ後ナデ、胴部外面はタタキ後一部縦方向のナデである。

533・534は甕で、いずれも平底を呈する。533は底部が完存する。調整は内面が縦方向のハケ、胴部外面はタタキ後丁寧なナデ、底部外面はナデである。534は底部の約1/2が残存する。器壁が厚く、胴部は内湾して立ち上がる。調整は内面がナデ、外面が縦方向のハケである。

535・536は鉢で、いずれも平底を呈する。535は約1/6が残存する。器高が低く、底径が大きいものである。調整は内面がナデ、口縁部がヨコナデ、外面がナデである。口縁部外面には煤が付着する。536は底部の約1/2が残存する。内面の調整は底部内面にヘラナデがわずかに残るが、摩耗するため不明瞭である。外面はナデ調整とみられるが摩耗するため不明瞭である。

537は高杯で、脚柱部が残存する。脚柱部は細く、裾部はハの字状に開く。調整は外面がナデまたは縦方向のハケ、内面は裾部が横方向のハケ、脚柱部がヘラナデでしぼり目が残る。裾部には径6mmの円孔が4箇所に残る。

須恵器(図86-538)

538は小型の壺で、口縁部の約1/5が残存する。胴部は算盤玉形を呈し、口縁部は短く外上方に伸びる。調整は内面が回転ナデである。外面は器面が荒れるため調整は不明である。

土師質土器(図87-539~557)

539~543は椀である。539・540は口縁部の約1/8が残存する。器壁が薄く、口縁部内面には浅い沈線を有する。調整は内面が横方向のミガキ、外面が回転ナデである。黒化処理はしていないが、形態

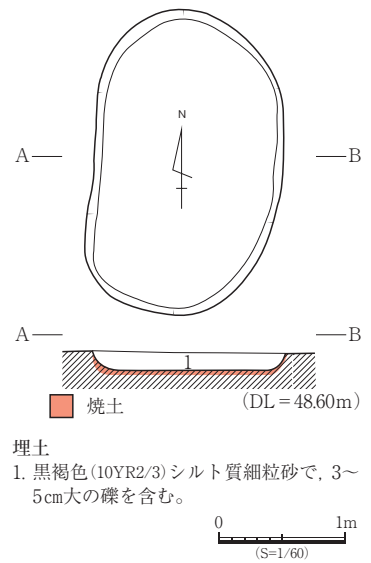


図 85 SK-38

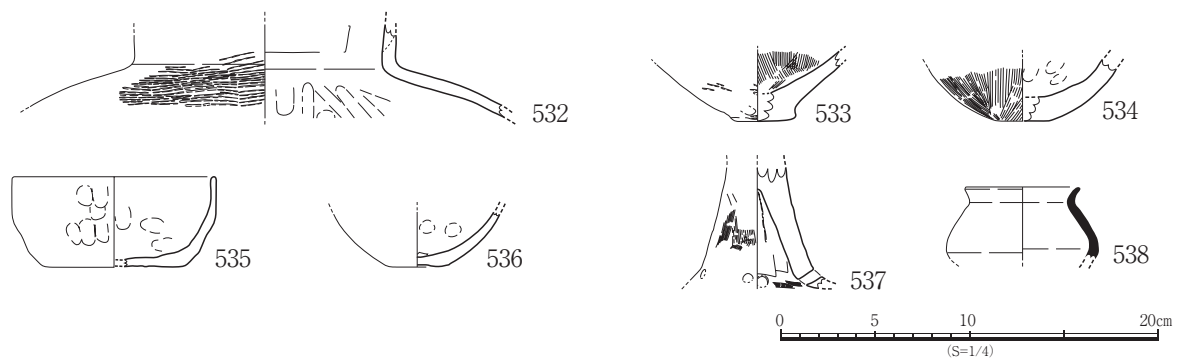


図 86 SK-38 出土遺物実測図 1 (弥生土器・須恵器)

3. 遺構と遺物

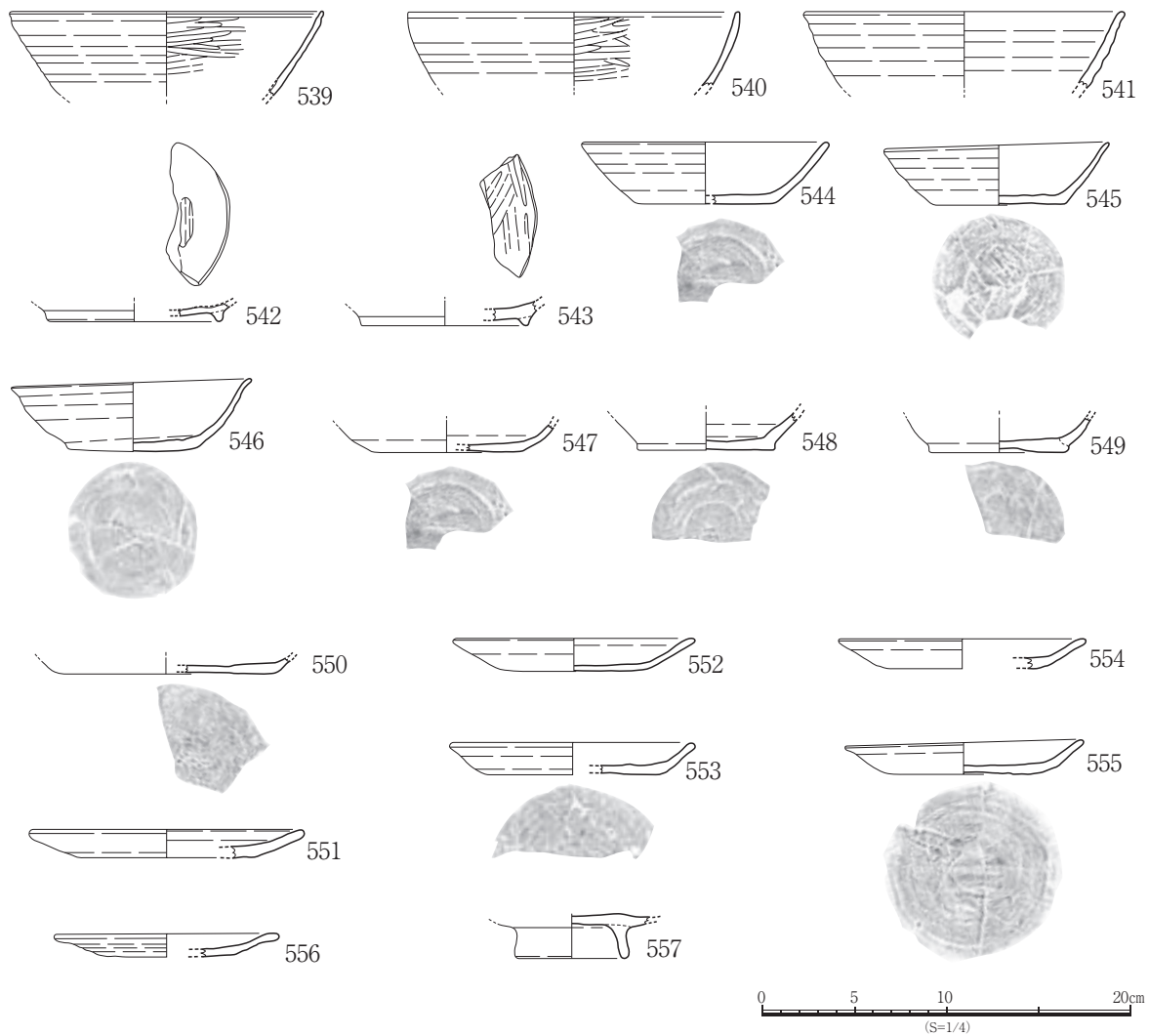


図 87 SK-38 出土遺物実測図 2 (土師質土器)

及び成形, 調整は黒色土器に酷似する。541は口縁部の約1/8が残存する。調整は回転ナデで, ロクロ目が顕著に残る。542は底部の約1/4が残存する。器壁が薄く, 底部には断面三角形を呈する小さな高台を有する。内面は著しく剥離し, わずかに残存する。調整は内面がミガキ, 外面がナデで, 底部には高台を貼付する。543も底部の約1/4が残存する。底部には断面三角形を呈する高台を有する。調整は内面がミガキ, 外面がナデで, 底部には高台を貼付する。

544~549は杯である。544~547は器高が低く, 外面の底部と体部の境に段を持たないものである。調整は回転ナデで, 底部内面にナデを加える。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。544は約1/4が残存する。底部外面には板状圧痕が残る。545は約2/3が残存する。底部外面には板状圧痕が残る。546は器壁が薄いもので, ほぼ完存する。調整は回転ナデとみられるが, 器面は摩耗するため不明瞭である。底部外面には板状圧痕が残る。547は底部の約1/5が残存する。調整は回転ナデである。548・549は器高が高くなるタイプとみられ, 外面の底部と体部の境に段を有するものである。いずれも底部の約1/4が残存する。調整は回転ナデで, 底部内面にナデを加える。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。549は底部外面にナデを加える。

550~557は皿である。調整は回転ナデで, 底部の切り離しは回転ヘラ切りである。550は底径が大

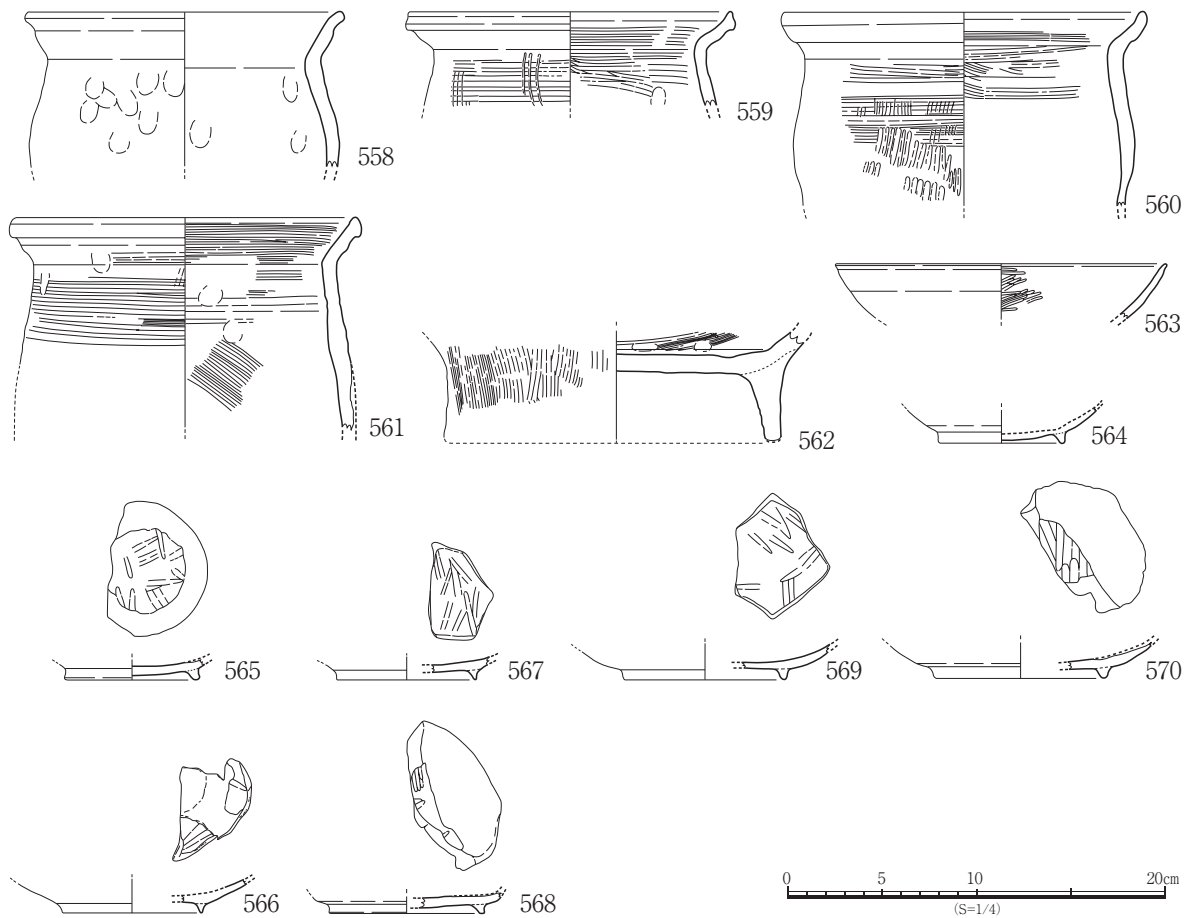


図 88 SK-38 出土遺物実測図 3 (土師器・黒色土器)

きいもので、底部の約1/5が残存する。底部外面にはナデ調整を加える。内面は摩耗するため調整は不明である。551は約1/8が残存する。器壁が厚く、器高が低いものである。552は器壁が薄いもので、約1/8が残存する。回転ナデ調整とみられるが、摩耗するため不明である。553は約1/3が残存する。底部外面には板状圧痕が残る。554は約1/5が残存する。底部の切り離しは回転ヘラ切りとみられるが不明瞭である。555はほぼ完存する。底部内面にはナデ調整を加え、底部外面には板状圧痕が残る。また、底部外面には輪状の黒斑がみられる。556は約1/6が残存する。器高が低く、口縁端部は肥厚し水平に伸びる。底部の切り離しは器面が摩耗するため不明である。557は高台を有する皿とみられ、底部の約1/3が残存する。調整は回転ナデで、底部には高く直立する輪高台を貼付する。高台内の調整は器面が摩耗するため不明である。

土師器(図88-558~562)

558~561は甕である。558は球形を呈する甕とみられ、口縁部の約1/3が残存する。口縁端部は丸く収める。調整は口縁部外面はヨコナデ、胴部外面はナデで指頭圧痕が残る。内面は器面が著しく摩耗するため調整は不明である。559~561は長胴甕である。559は口縁部の約1/5が残存する。口縁端部は肥厚し若干上下に拡張する。調整は胴部内面がナデまたは横方向のハケ、口縁部がヨコナデ、胴部外面は横方向のハケ後タタキである。560は口縁部の約1/6が残存する。口縁部は内湾し、端部を丸く収める。調整は胴部内面が横方向のハケ、口縁部がヨコナデ、胴部外面は横方向のハケ後タタキである。561は口縁部の約1/4が残存する。口縁端部は肥厚し若干上下に拡張する。調整は内面が

3. 遺構と遺物

ハケ, 口縁部がヨコナデ, 胴部外面が横方向のハケである。

562は煮沸具または火に関係するものとみられるが, 器形は不明である。底部の約2/3が残存し, 底部には直立する高い高台を貼付する。調整は底部内面が強いナデ, 胴部が粗いハケ, 高台はヨコナデ, 高台内はナデである。

黒色土器(図88-563~570)

563~570は椀である。内面に黒化処理を施すもので, いずれも在地産のものともみられる。563は口縁部の一部が残存する。口縁端部には浅い沈線状の段を有する。調整は内面がミガキで, 外面は回転ナデとみられるが摩耗するため不明である。564は底部の約1/3が残存するが, 内面は剥離し損失する。小型のもので, 底部には断面台形を呈する高台を貼付する。調整は体部外面が回転ナデ, 高台内はナデである。565は底部の約1/2が残存する。小型のもので, 底部には断面台形を呈する高台を貼付する。調整は内面がミガキ, 高台内はナデである。566は底部の約1/8が残存する。底部には断面三角形を呈する小さな高台を貼付する。調整は内面がミガキで, 外面は摩耗するため不明である。567は底部の約1/6が残存する。底部には断面三角形を呈する小さな高台を貼付する。調整は内面がミガキで, 外面は摩耗するため不明である。568は底部の約1/3が残存する。底部には断面三角形を呈する小さな高台を貼付する。調整は内面がミガキで, 高台内はナデである。569は底部の約1/5が残存する。底部には断面三角形を呈する高台を貼付する。調整は内面がミガキで, 外面は摩耗するため不明である。570は底部の約1/5が残存する。底部には断面三角形を呈する高台を貼付する。調整は内面がミガキで, 外面は摩耗するため不明である。

iii 溝跡

SD-6(図89)

調査区西部で検出した南北溝跡(N-9°-E)で, 両端は調査区外に続く。検出長13.70m, 幅0.98m, 深さ16cmを測る。基底面は北(47.979m)から南(47.851m)に傾斜する。断面は逆台形を呈し, 埋土は2層に分かれ, 上層は黒褐色シルト質中粒砂で10cm大の河原石を非常に多く含んでおり, 意図的に投棄されたものとみられる。下層は黒褐色シルト質中粒砂で黄色シルトのブロックを多く含んでいた。出土遺物には弥生土器片80点, 須恵器8点が見られ, 上層より出土した須恵器(571)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図91-571)

571は蓋で, 口縁部の約1/8が残存する。口縁部は直立し, 天井部は平らになるものとみられる。調整は回転ナデである。

SD-7(図90)

調査区中央部で検出した南北溝跡(N-25°-W)で, 両端は調査区外に続く。検出長15.70m, 幅2.00m, 深さ41cmを測る。基底面は南(47.777m)から北(47.646m)に緩やかに傾斜する。断面は舟底形を呈し, 埋土は2層に分かれ, 上層は黒褐色シルト質細粒砂, 下層は黒色シルト質細粒砂で黄色シ

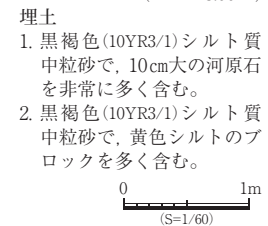
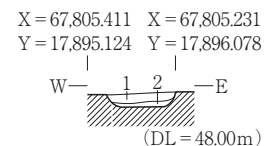


図 89 SD-6

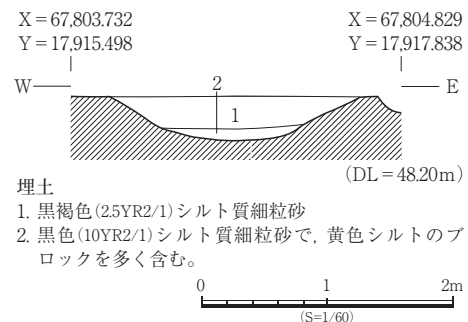


図 90 SD-7

ルトのブロックを多く含んでいた。出土遺物には弥生土器片65点、土師器片4点、須恵器杯3点、高杯1点、甕6点がみられ、上層より出土した須恵器3点(572~574)が図示できた。

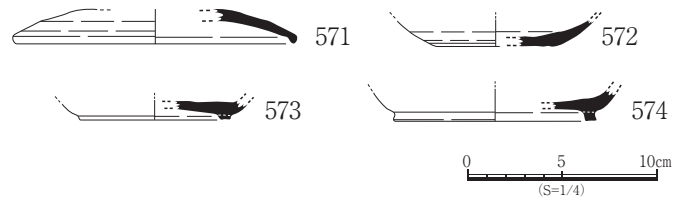


図 91 SD-6・7 出土遺物実測図

出土遺物

須恵器(図91-572~574)

572~574は杯である。572は底部の約1/5が残存する。平底を呈し、体部は内湾して立ち上がる。調整は内面と体部外面が回転ナデ、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。573は底部の約1/4が残存する。底部には断面台形を呈する低い高台を有する。調整は回転ナデ後底部内面にナデを加える。高台内はナデ調整である。574は底部の約1/5が残存する。底部には断面台形を呈する高台を有する。調整は回転ナデ後底部内面にナデを加える。高台内はナデ調整である。

SD-8

調査区東部で検出した南北溝跡(N-9°-E)である。全長2.65m、幅25cm、深さ13cmを測る。基底面はほぼ平ら(48.300m)であった。断面は舟底形を呈し、埋土は黒褐色シルト質中粒砂で3mm大の礫を少し含んでいた。出土遺物には弥生土器片16点、黒色土器片1点がみられたが図示できるものはなかった。

SD-9

調査区東部で検出した南北溝跡で、ST-9を切る。主軸は方眼北を向く。両端は調査区外へ続き、検出長13.90m、幅37cm、深さ12cmを測る。基底面は南(48.354m)から北(48.273m)に傾斜する。断面は逆台形を呈し、埋土は黒色細粒砂シルトであった。出土遺物には弥生土器片175点、須恵器蓋1点、須恵器片5点、土師質土器片3点、土錘1点がみられたが図示できるものはなかった。

iv ピット

P-24

SD-7の東側で検出した楕円形を呈するピットで、長径32cm、短径22cm、深さ6cmを測る。埋土は黒褐色シルト質細粒砂であった。出土遺物には弥生土器片10点、土師器片1点、須恵器の杯2点、蓋3点、甕6点がみられ、須恵器2点(575・576)が図示できた。

出土遺物

須恵器(図92-575・576)

575は蓋で、口縁部の約1/5が残存する。口縁部は短く直立し、天井部は平らである。調整は回転ナデで、天井部内面にはナデを加える。576は杯で、約1/6が残存する。小型で、底部には断面台形を呈する高台を有する。調整は外面が回転ナデ、高台内がナデである。内面は器面が荒れるため調整は不明である。内面には若干自然釉が付着する。

P-25

SD-10の西側で検出した楕円形を呈するピットで、長径29cm、短径25cm、深さ18cmを測る。埋土は黒色シルト質細粒砂であった。出土遺物には須恵器(577)がみられ、図示した。

出土遺物

須恵器(図92-577)

3. 遺構と遺物

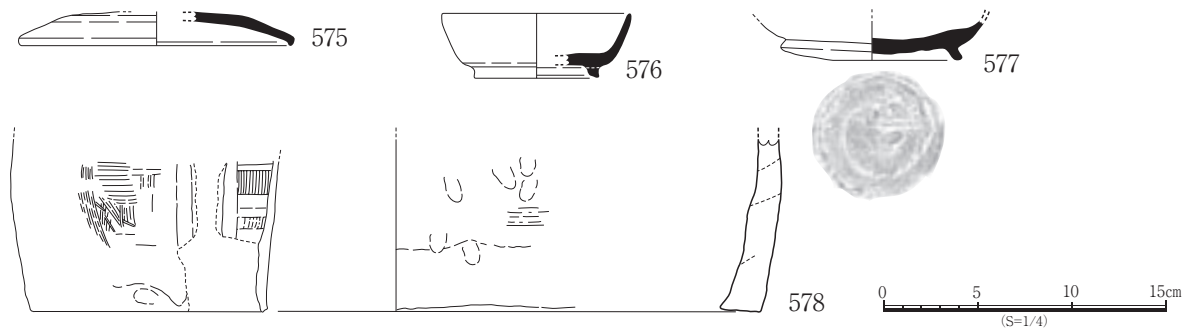


図 92 P-24 ~ 26 出土遺物実測図

577は杯で、底部が完存する。底部にはハの字状に開く高台を有する。調整は回転ナデで、底部内面にはナデを加える。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。

P-26

SD-9の西側で検出した楕円形を呈するピットで、長径0.71m、短径0.64m、深さ6cmを測る。埋土は黒褐色シルト質細粒砂であった。出土遺物には弥生土器片12点、土師器1点がみられ、土師器(578)が図示できた。

出土遺物

土師器(図92-578)

578は竈で底部の一部が残存する。体部は上方に立ち上がり、外面には粘土板状のものを器面に垂直方向に貼付した痕跡が残る。調整は外面がハケ後ナデ、端部はヨコナデ、内面はナデで、指頭圧痕が残る。

(4) 近世

i 土坑

SK-39

調査区北東隅で検出した土坑で、北側は調査区外に続く。楕円形を呈するものとみられ、長径1.54m、短径0.90m、深さ4cmを測る。断面は舟底形を呈し、埋土は黒褐色シルト質細粒砂で5~10cm大の礫を含んでいた。出土遺物には弥生土器片11点がみられたが、図示できるものはなかった。

SK-40

調査区南東隅で検出した隅丸方形を呈する土坑で、SD-13を切る。長辺1.24m、短辺1.23m、深さ24cmを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は黒褐色シルト質細粒砂で5~10cm大の礫を含んでいた。出土遺物には弥生土器の壺1点、細片10点、須恵器の杯2点、細片2点、近世磁器片2点、鉄釘1点がみられたが、図示できるものはなかった。

ii 溝跡

SD-10

調査区東部で検出した南北溝跡(N-9°-E)で、両端は調査区外に続く。検出長12.20m、幅1.00m、深さ0.56mを測る。基底面はほぼ平ら(47.830m前後)であった。断面は逆台形を呈し、埋土は黒色細粒砂質シルトで10cm大の礫を多く含んでいた。出土遺物には弥生土器の壺1点、細片125点、須恵器片4点がみられたが図示できるものはなかった。

SD-11(図93)

調査区東部で検出した南北溝跡(N-11°-E)で、両端は調査区外に続く。検出長14.20m、幅0.85m、

深さ43cmを測る。基底面は北(48.123m)から南(48.034m)に傾斜する。断面は逆台形を呈し、埋土は黒褐色シルト質細粒砂で5~10cm大の礫を非常に多く含んでいた。出土遺物には弥生土器の壺1点、細片16点、近世陶器片1点がみられ、弥生土器(579)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図94-579)

579は壺で底部の約1/2が残存する。底部は平底を呈し、胴部は外上方に大きく開く。調整は胴部外面がハケ、底部外面がナデである。内面は摩耗するため調整は不明である。

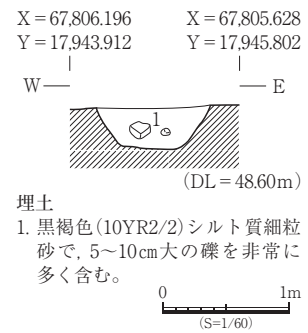


図 93 SD-11

SD-12

調査区東部で検出した南北溝跡(N-5°-E)で、北部はN-77°-Eに方向を変え、SD-13に繋がる。検出長14.60m、幅0.71m、深さ37cmを測る。基底面は南(48.172m)から北(48.129m)に傾斜する。断面は逆台形を呈し、埋土は黒褐色シルト質細粒砂で5~10cm大の礫を多く含んでいた。出土遺物には弥生土器の壺1点、甕1点、細片270点、須恵器の蓋1点、甕1点、細片6点、近世陶器の壺2点、碗2点がみられたが図示できるものはなかった。

SD-13

調査区東端で検出した南北溝跡(N-8°-E)で、両端は調査区外に続く。検出長13.60m、幅0.55m、深さ36cmを測る。基底面はほぼ平ら(48.140m前後)である。断面はU字形を呈し、埋土は黒褐色細粒砂質シルトで8cm大の礫を多く含んでいた。出土遺物には弥生土器の甕1点、細片54点、須恵器の蓋1点、細片8点、土師質土器片4点、近世陶器の皿1点、細片1点、近世磁器の碗1点、石製品1点がみられ、弥生土器(580)、近世陶器(581)、石製品(582)が図示できた。

出土遺物

弥生土器(図94-580)

580は甕で、底部が完存する。器壁が厚く、底部は尖底を呈する。調整は内面がハケ、外面がタタキで、一部ハケを加える。

近世陶器(図94-581)

581は肥前系(内野山)の皿で、底部が完存する。底部には断面台形を呈する削り出し高台を有する。内面には銅緑釉を薄く施し、見込は蛇の目釉ハギを行う。外面には灰釉を薄く施す。

石製品(図94-582)

582は叩石及び磨石で、完存する。円柱形を呈し、残存部で2面を使用している。端部は敲打痕がみられ叩石として使用したものとみられ、側面は擦痕がみられ磨石として使用したものとみられる。石材は砂岩の河原石である。

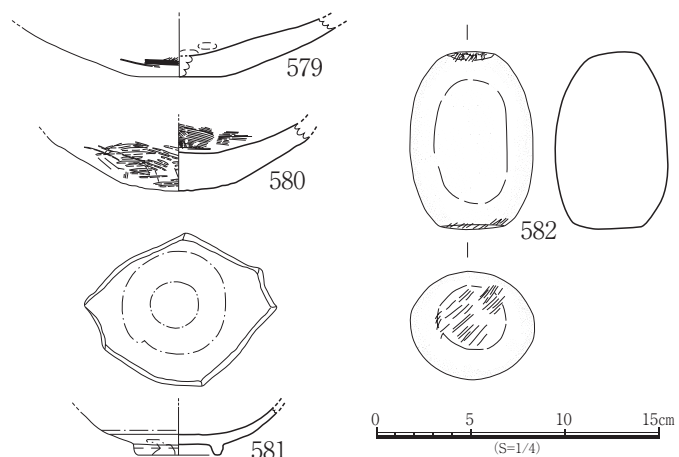


図 94 SD-11・13 出土遺物実測図

表2 竪穴式住居跡一覧表

遺構番号	平面形態	規模			面積(m ²)	時期	備考
		長径・長辺(m)	短径・短辺(m)	深さ(cm)			
ST-1	五角形	6.95	6.93	52	33	弥生時代終末期	
ST-2	隅丸方形	4.50	(3.50)	32	(16)	弥生時代終末期	ベット状遺構
ST-3	隅丸方形か	4.30	(0.75)	12	(3)	弥生時代中期末	
ST-4	隅丸方形	4.40 ~ 4.60	4.05 ~ 4.10	31	18	古墳時代初頭	
ST-5	楕円形	4.75	3.50	24	(13)	弥生時代終末期	
ST-6	多角形	7.75	(5.00)	37	(24)	弥生時代終末期	ベット状遺構
ST-7	隅丸方形	(4.15)	4.05	35	(17)	古墳時代初頭	ベット状遺構
ST-8	五角形	7.55	(7.00)	51	(38)	弥生時代終末期	ベット状遺構
ST-9	隅丸方形	5.05	4.95	38	25	古墳時代初頭	ベット状遺構
ST-10	方形	4.85	4.80	35	23	古墳時代後期	
ST-11	方形	5.00	4.80	26	24	古墳時代後期	

(カッコは検出長及び検出した面積)

第Ⅳ章 自然化学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

高橋 敦

はじめに

本報告では、弥生時代終末期の竪穴住居跡のST-8から出土した炭化材の樹種同定結果について述べる。

1. 試料

試料は、ST-8から出土した炭化材3点(No.1~3)である。これらの試料は、出土状況から建物の構築部材であったと推定されている。

2. 分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。なお、木材組織の名称や特徴については、島地・伊東(1982)やWheeler他(1998)を参考にする。また、日本産木材の組織配列については、林(1991)や伊東(1995, 1996, 1997, 1998, 1999)を参考にする。

3. 結果

樹種同定結果を表3に示す。炭化材は、広葉樹2分類群(ツブラジイ・クスノキ科)に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・ツブラジイ(*Castanopsis cuspidata* (Thunberg) Schottky) ブナ科シイノキ属

環孔性放射孔材で、道管は接線方向に1-2個幅で放射方向に配列する。孔圏部は3-4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものと集合~複合放射組織とがある。

・クスノキ科(Lauraceae)

散孔材で、管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独または2-3個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-2細胞幅、1-20細胞高。柔組織は周囲状および散在状。大型の油細胞が顕著に認められる。

4. 考察

同定された炭化材のうち、ツブラジイは暖温帯常緑広葉樹林の主構成種で、主に沿海地の尾根筋を中心に生育し、木材は比較的重硬で強度が高い。クスノキ科は、科としては常緑樹・落葉樹が混在し、高木から低木まで様々な種が含まれているが、ツブラジイが確認されていることを考慮すれば、ツブラジイと共に常緑広葉樹林を構成する種類に由来するものであろう。クスノキ科は、比較的重硬な

4. 考察

材質の種類が多く、精油成分(樟脳)を含むために防虫性が高い種類もある。これまでの高知平野での分析事例をふまえると、今回同定を行った炭化材3点は、遺跡周辺に生育していた樹木から採取されたと判断される。

表3 樹種同定結果

番号	地区	遺構	時期	位置	樹種
No.1	3区	ST-8	弥生時代終末期	NW	ツブラジイ
No.2	3区	ST-8	弥生時代終末期	SE	ツブラジイ
No.3	3区	ST-8	弥生時代終末期	SE	クスノキ科

なお伏原遺跡では、弥生時代終末期～古墳時代初頭の住居跡の中央ピットから出土した燃料材に由来すると考えられる炭化材の同定も実施している。この分析では、暖温帯常緑広葉樹林の構成種のカヤ、アカガシ亜属、サカキをともない、二次林要素のマツ属複雑管束亜属、クヌギ節、クリ近似種の産出が目立ったことから、遺跡周辺で人為による二次林化が進行していた可能性が示唆された。既往および今回の分析結果からは、住居構築材と燃料材で多用される樹種の傾向が異なっていたことが想定される。ただし现阶段では分析点数が少なく、傾向を見いだすまでに至っていない。この点については、今後の類例蓄積をふまえ、さらに検討していくことが課題と思われる。

引用文献

- 林 昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- 伊東 隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
- 伊東 隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
- 伊東 隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
- 伊東 隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
- 伊東 隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
- 島地 謙・伊東 隆夫, 1982, 図説木材組織. 地球社, 176p.
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東 隆夫・藤井 智之・佐伯 浩(日本語版監修), 海青社, 122p.[Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E.(1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification] .

第V章 考察

1. 弥生時代から古墳時代初頭

この時期の遺物包含層は調査区全面で確認されたが、調査区西部は攪乱及び削平を受けており、堆積は薄く、古代の遺物を伴っていた。遺構は全面で確認されたが、今回の調査区の西側は試掘調査では遺物包含層及び遺構は確認されておらず、今回の調査対象地は伏原遺跡の縁辺部と考えられる。竪穴式住居跡は地形の高い調査区東側で多く検出された。また、平成19・20年に本調査区の東側を第Ⅱ調査区として調査を行っており、同時期の遺構がさらに東へ広がっていることが確認され、遺跡の中心は今回の調査区の東であるとみられる。

竪穴式住居跡は9棟が確認された。平面形態では円形が1棟、方形が5棟、多角形が3棟である。最も古い竪穴式住居跡は調査区中央部で検出したST-3で、弥生時代中期末である。ST-3は方形を呈する竪穴式住居跡とみられるが、大半は調査区外であり不明瞭である。この時期の遺構はST-3のみである。最も遺構が多い時期は弥生時代終末期から古墳時代初頭で、大半の遺構はこの時期である。ST-1・2・5～8が該当する。これらの中でも比較的古い様相を示すのは円形を呈するST-5である。円形を呈する竪穴式住居跡はST-5のみであり、ベット状遺構は伴わない。その他ST-1・6・8は面積が大きく多角形を呈し、ST-2・7は方形でベット状遺構を伴う。多角形を呈するST-6は方形を呈するST-7に切られている。古墳時代初頭のものとしてはST-4とST-9がみられる。いずれも方形を呈し、ST-9にはベット状遺構が伴う。

ベット状遺構は方形を呈するST-2とST-9、多角形を呈するST-6とST-8の4棟で確認した。いずれも地山削り出しで、ST-2とST-9は南側を除く3辺にみられ、ST-9については南側の溝が変則的に湾曲しており、南側が出入り口の可能性が考えられる。ST-6・8のベット状遺構はいずれも多角形を呈しており、五角形を呈するST-8はベット状遺構も五角形を呈していた。

出土遺物は弥生土器の壺、甕、鉢、高杯、土師器の壺、高杯、器台などが出土している。良好な一括資料は少ないが、ST-2のP-1(243～246)、ST-3(247～250)、ST-4のP-1(273～277)は一括遺物として捉えられるものである。ST-3は中期末、ST-2とST-4は後期末とみられる。また、土師器の器台は杯部が皿状を呈し、脚部が直線的に伸びるもの(213・269・270・409・469)のほか、口縁部を上下に拡張するもの(170・171)が確認された。胎土よりいずれも在地産とみられる。

搬入品は8点(156・157・180・183・285・286・387・417)がみられた。出土地点は住居跡のほか、SK-1とSX-2で出土しているがいずれも住居跡の可能性のある遺構である。住居跡では多角形を呈するST-1が最も多く4点出土している。産地は阿波と讃岐とみられる。器形では壺や甕、高杯、器台がみられ、甕が4点出土しており最も多いが、搬入品が最も多く出土したST-1は壺2点、高杯1点、器台1点がみられ、他の竪穴式住居跡とは異なる様相がみられた。

特異な出土遺物としては杓子形土器(220)がある。220はST-1のピットより出土したもので、完存する。杓子形土器は県外では類例がみられるものの、県内では介良遺跡⁽¹⁾で木製品が出土しているが土製品は初めての出土である。また、隣接するひびのきサウジ遺跡でも平成19年度の調査で確認されており⁽²⁾県内では2点が確認されている。杓子形土器と形態が類似する匙形土器は林田遺跡⁽³⁾

と西分増井遺跡⁽⁴⁾でみられるが、匙は直接口へ運ぶためのもので、杓子は容器へ移動するためのものであり用途が異なる。杓子形土器は実用品というよりも祭祀具であるという見解もあり⁽⁵⁾、多角形住居のピットから出土したことは非常に意義深く、ST-1は立て替えが行われていることや、ガラス玉が出土していること、搬入品が最も多く出土していることなど特徴的な竪穴式住居跡である。

2.古墳時代後期

この時期の遺物及び遺構は少ないながらもほぼ全面で確認された。主な遺構は竪穴式住居跡2棟、溝跡3条である。竪穴式住居跡はいずれも方形を呈し、北側にカマド跡を伴っていた。また、竪穴式住居跡は削平されたとみられ確認されなかったが、カマド跡も2基確認された。

出土遺物では土師器の壺、甕、甑、高杯や須恵器の蓋、杯、高杯、甕、壺、甗が出土している。ほとんどが竪穴式住居跡からの出土である。SX-3のカマド跡から出土している土師器の甕と甑、高杯は一括資料(514~517)と捉えられるものである。土師器の甕は長胴のものと小型で球形を呈するもの、甑は把手を有するもので、いずれも外面に粗いハケ調整を施し、内面にはケズリ調整を行っている。甑はSX-4から底部が筒状を呈するものが出土しており同様のタイプとみられる。高杯は杯部が皿状を呈し脚部が中実で裾部がハの字状に開くものが出土している。ST-10・11やSX-4から出土している遺物にも同様なものがみられる。これらの遺物は供出する須恵器より6世紀末頃とみられる。

この時期の遺構は隣接する第Ⅱ調査区や、東に隣接するひびのきサウジ遺跡などでも確認されており、周辺に古墳や須恵器窯が築造される時期でもある。また、6世紀中頃に築造された四国最大の方墳である伏原大塚古墳とは約400mの距離にあり、本調査区からも望めたと考えられることや、本調査区の東部は「大ツカ」という小字が残るところでもあり、今回確認された集落は古墳築造に密接に関連していたと思われる。

3.古代

古代の遺構はほぼ全面で検出されたが、遺構の密度は低く、調査区西部では遺物包含層が削平を受けているものとみられ、遺物の出土も少なかった。古代の遺物は土師器、須恵器のほか黑色土器が出土しており、8世紀後半と10世紀初頭の二時期のものがみられた。主な遺構は掘立柱建物跡4棟、土坑2基、溝跡3条である。8世紀後半のものは、SD-7、SK-35・37である。SD-7は幅2.0mを測る大溝であり、官が関与した可能性も考えられる。SK-35は刀子が出土しており土坑墓とみられる。10世紀初頭の遺構は調査区東部で検出したSK-38のみである。SK-38の肩は不明瞭であったが底面及び側面に焼土を伴う土坑で、埋土からは多量の土師質土器と黑色土器が出土し、出土遺物には土師質土器の碗、杯、皿、土師器の甕、黑色土器の碗がみられた。黑色土器の碗はすべて在地産で、土師質土器の碗と形態は全く同じであり、回転台成形で内面にミガキ調整を施し、底部には断面三角形を呈する高台を貼付する等、成形や調整にも共通性が認められた。土師器の甕などその他の出土遺物も在地産であることや周囲には同時期の遺構が検出されておらず集落縁辺部の生産域とも考えられ、土器の焼成土坑の可能性もある。

掘立柱建物跡(SB-1~4)は出土遺物が少なく、土師器及び須恵器の細片が出土していることから古代としたが、古墳時代の可能性も考えられる。SB-1~4は柱間寸法や柱穴の大きさよりほぼ同時期のものとみられるが、SB-2~4は主軸方向が方眼北を意識しているのに対し、SB-1は大き

く西に振っており(N-22°-W), 若干時期が異なる可能性がある。溝跡についても, 主軸方向がSD-7はN-25°-Wであるのに対し, SD-9は方眼北であり, 2時期あるものと考えられる。SB-1はSD-7と主軸方向がほぼ同様の数値を示しており, 同時期ではないだろうか。

周辺の古代の遺跡としては東に隣接するひびのきサウジ遺跡がある。ひびのきサウジ遺跡では9世紀後半と10世紀後半から11世紀後半の遺構が確認されている。今回の調査で確認された遺構はその空白期を埋める時期であり, また遺構の密度は薄いながらも集落の変遷を推察することができた。

4. 近世

近世の遺構・遺物は少なく, 調査区東部でのみ確認された。調査区西部には建物の基礎等がみられ, 近代に削平を受けたものとみられる。検出された遺構は主に溝跡で, SD-10~13はほぼ平行に走り, 出土遺物からいずれも18世紀後半から19世紀前半とみられる。また, SD-12の北端はSD-13に繋がっており同時期に機能していたものと考えられる。これらの溝跡は現在の地割とほぼ同じであり地境であるとみられる。近世の掘立柱建物跡は確認されておらず, 遺物も少ないことから本調査区の東部は近世後期には田または畠として利用されていたのではないだろうか。

5. 多角形の竪穴式住居跡について

今回の調査では多角形を呈する竪穴式住居跡(以下多角形住居跡)が3棟確認された。ST-8は五角形を呈する竪穴式住居跡で, 明瞭な五角形を呈する竪穴式住居跡としては県内では初めて確認されたものである。この竪穴式住居跡は一辺約4.5m, 面積約38㎡を測り, ベット状遺構も五角形を呈していた。この他にもST-1は五角形, ST-6は六角形または八角形を呈するとみられ, いずれも他の住居跡と比較すると面積が大きく, ST-6ではベット状遺構も確認されている。県内で多角形住居跡は, 林田遺跡⁽⁶⁾で確認されている。1983年の調査ではトレンチ調査であり全形は不明であるが, 八角形とみられる竪穴式住居跡の一部が確認されている。この住居跡にはコーナー部の床面でピットが確認されている。また, 検出のみであったが六角形を呈するとみられる竪穴式の一部も確認されている。いずれも他の円形住居跡と規模は変わらず, 特殊な遺物はみられない。1999年の調査⁽⁷⁾でも六角形とみられる竪穴式住居跡の一部が確認されており, この住居跡にはベット状遺構も伴っていた。古墳時代初頭の竪穴式住居跡とされる。また多角形に近い形態を呈するものが小籠遺跡⁽⁸⁾で確認されている。ST16は平面形が多角形に近い不整円形を呈するものでベット状遺構を有し, 支柱穴も五角形に配されている。出土遺物には庄内式土器と東阿波型土器がみられ, 古墳時代初頭の竪穴式住居跡とされる。また現在調査中の南国市土島田遺跡⁽⁹⁾でも後期後半の五角形及び六角形の住居跡が約5棟確認されており, 県内では集落内での多角形住居跡数は最も多くなるものとみられる。多角形住居跡はベット状遺構を伴い, 多角形住居跡の中には焼失住居があるという点は伏原遺跡のST-8と共通する。土島田遺跡ではこの時期の住居跡は少なく, 円形を呈するものより多角形住居跡が多くなる可能性があり, 面積は約50㎡を測りやや大型の傾向がある。その他, 円形住居跡でベット状遺構が六角形を呈するものが稗地遺跡⁽¹⁰⁾で確認されており, 弥生時代後期の竪穴式住居跡とされている。

これらの県内で確認されている多角形住居跡またはベット状遺構が多角形を呈するものは, 現在のところ高知平野東部で確認されており, 時期的には弥生時代後期後半から古墳時代初頭に位置づ

5. 多角形の竪穴式住居跡について

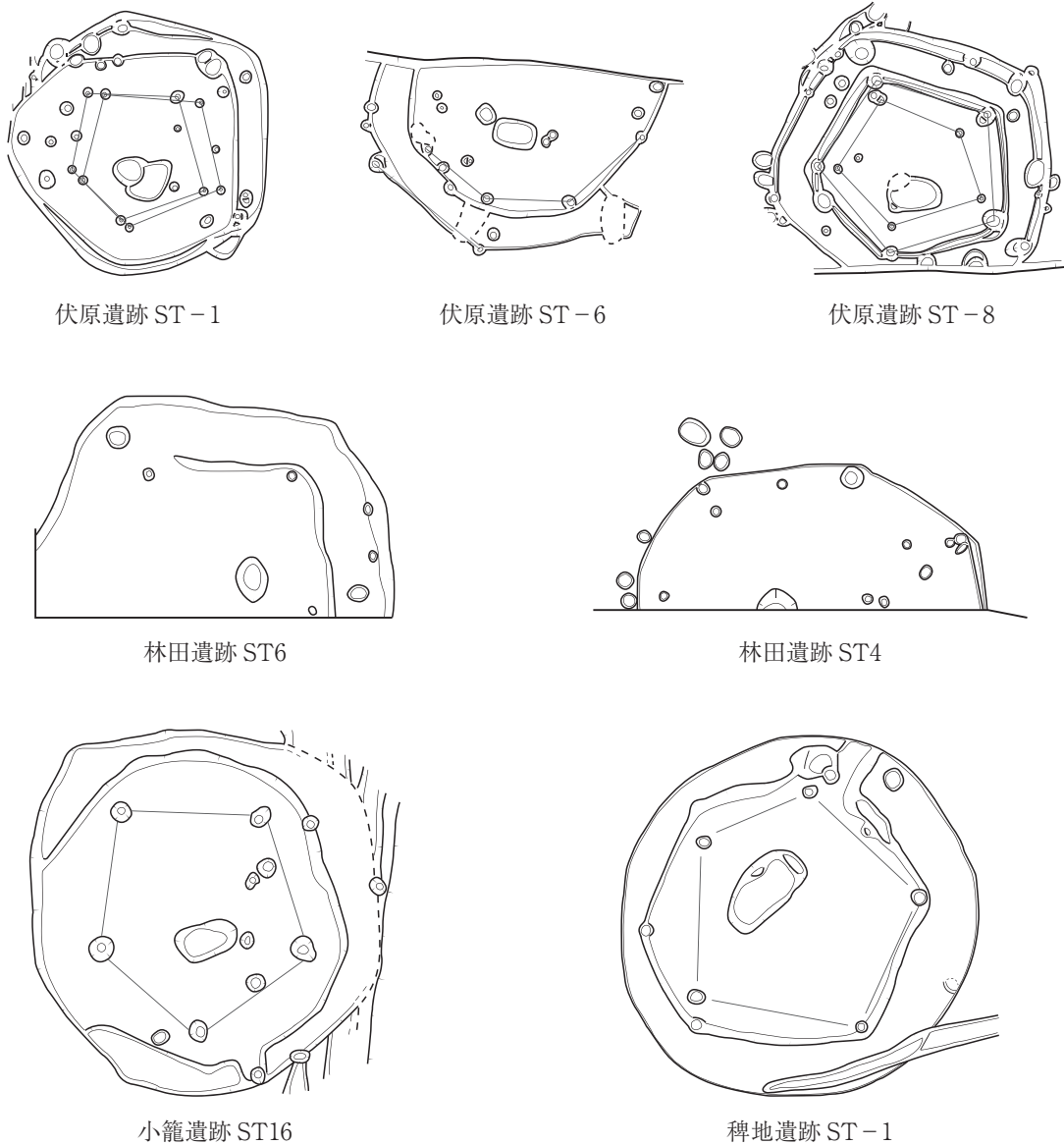


図95 県内の多角形住居跡及び多角形のベット状遺構(S=1/200)

けられるものである。県内の多角形住居跡は、集落内で複数確認される例が多く、面積も円形や方形の住居跡に比較すると若干大きい。40㎡を超える大型のものは少ない。また、ベット状遺構を有するものと持たないものがある。

県外では多角形を呈する竪穴式住居跡は山陰地方や瀬戸内海東部を中心に、滋賀県や福井県、石川県の北陸地方でも確認されている。太平洋側では三重県四日市で1棟確認されているのみで、伏原遺跡の五角形住居跡は最も南端での確認である。多角形住居跡は弥生時代中期後半には出現しており、この時期の多角形住居跡は鳥取県、岡山県、兵庫県、大阪府で確認されている。¹¹⁾後期には分布の中心は鳥取県となり、分布域は福井県、滋賀県から香川県、島根県まで拡大する。県内で多角形住居跡が確認されている後期末から古墳時代初頭には分布の中心は引き続き鳥取県で、石川県や長野県まで広がるが、その他の地域は瀬戸内側の一部となり減少に向かう。

多角形住居跡の分布の中心となる鳥取県では、青木遺跡や妻木晩田遺跡¹²⁾などで多数確認されて

いる。妻木晩田遺跡では弥生時代後期の竪穴式住居跡の形態は他地域と同様に円形や隅丸方形が主流であるが、古墳時代にかけて楕円形、多角形、隅丸三角形、方形へと変化していくとされ、多角形住居跡は円形から方形へと変化する過程で多く見られる。この地域においては多角形住居跡は一定数が確認されており、時期によっては集落の半数を占める例も見られる。規模も円形や隅丸方形と同程度であり、また特殊な遺物も出土しておらず、多角形住居跡は弥生時代後期の住居形態の一つとして捉えられ、特異なものではないと考えられる。

滋賀県では五角形の住居跡が圧倒的に多く、また後期中葉から後葉に限られる。近江の五角形住居跡は山陰や北陸地域の住居プランや住居内施設を併せ持つ特徴があり¹³⁾、大陸や朝鮮半島との密接な交流関係にあった日本海地域との交流によって生み出されたとされ、五角形の住居跡の分布は後期における鉄の流通ルートと重なり合う蓋然性が高いと指摘されている。¹⁴⁾滋賀県においては五角形という形に非常に意味があるものと考えられる。

大阪府では滋賀県と近接しているにも関わらず六角形住居が多く確認されている。芥川遺跡¹⁵⁾では五角形1棟と六角形1棟が確認されている。これらの多角形住居跡は他の竪穴式住居跡の2倍以上の面積があり、多角形住居跡にのみベット状遺構が確認されている。また六角形を呈する住居跡からは破鏡が出土していることから、この遺跡においては多角形住居跡は特殊な住居跡として捉えられている。瀬戸内側の岡山県、兵庫県、大阪府で確認されている多角形住居には40㎡を超える大型住居跡や銅鏡等の特殊な遺物が出土しているものもみられ、この地域においては特殊な住居として捉えられるものも存在する。

四国内では香川県の4遺跡で確認されている。旧練兵場跡¹⁶⁾では弥生時代後期後半のベット状遺構を有する多角形住居跡5棟(五角形2棟、六角形1棟、その他2棟)、空港跡地遺跡¹⁷⁾で後期後半から古墳時代初頭にかけての五角形または六角形住居の可能性のあるものが4棟、彼ノ宗遺跡で後期末の多角形住居跡2棟(五角形1棟・六角形1棟)がみられる。九頭神遺跡¹⁸⁾では終末期の不整円形または多角形を呈する住居跡が2棟確認されている。香川県内では多角形住居跡は弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけてみられ、いずれの遺跡においても複数の多角形住居跡が確認されており、集落内で五角形と六角形が共存する状況やベット状遺構を伴っている例があること、大型住居跡ではないことなど高知県での様相と類似する。

これまで確認されている多角形住居跡は各地域で様々な様相であるが、竪穴式住居跡が円形から方形に変化する弥生時代後期後半に多く見られる傾向がある。また、その伝播には山陰を中心とする日本海ルートと瀬戸内ルートが考えられている。¹⁹⁾瀬戸内ルートにおいては多角形住居跡とベット状遺構が同様な広がりを見せ、多角形住居跡が最も多く確認されている山陰ではベット状遺構を伴う住居跡はほとんどみられないが、瀬戸内については多角形住居跡とベット状遺構という二つの要素をもって独自に展開していく様子が窺える。そして更には香川県、高知県と四国内にも伝播したものと考えられる。県内においては日本海側から直接ではなく、瀬戸内を通して多角形住居跡が伝わったと考えられる。

県内のベット状遺構は後期中葉には確認ができ、後期後葉には普遍的に見られるようになる。ちょうどその時期に多角形住居跡が県内でもみられるようになり、多角形住居跡でもベット状遺構を持つものと持たないものが存在する。隣接する第Ⅱ調査区では吉備からの搬入品もみられ、瀬戸内からの影響を多く受けていたことは間違いなくであろう。県内の多角形住居跡は五角形住居跡と

六角形住居跡が集落内に同時に存在しており、五角形と六角形に特別な意味がないものとする。また円形住居跡ともさほど面積が変わらず、威信材といったものが出土していないなど、特殊な性格をもった住居跡とは考えがたい。円形から方形住居跡への技術的な橋渡しをする住居であることは以前から指摘されており、県内でも多角形住居跡を採用する理由としては円形から方形住居跡へ変化する過程の技術に大きく関連するものと考えられる。しかしながらST-1は多角形を呈し、今回の調査で搬入品がもっとも多く出土している住居跡であり、外来の要素を多く受け入れていることは注目されるべきことである。また、祭祀に関連するとされる杓子形土製品が出土していることなどから集落内においてやはり特殊な立場の人物の存在を想定しなければならないだろう。

6. カマド跡について

今回の調査では竪穴式住居跡に伴って2基のカマド跡が確認された。また、竪穴式住居跡のプランは確認できなかったが、カマド跡とみられる遺構(SX-3・4)が2基確認された。カマド跡が確認された竪穴式住居跡はST-10・11で、カマド跡はいずれも竪穴式住居跡の北側で確認し、北壁の中央よりやや東に位置する。カマド跡の構造については残存状態が良好なST-10とSX-1を検討すると、袖石を有し、焚口幅は31cmと37cm、焚口から奥壁までの距離は55cmと69cmを測り、ST-10では煙道が確認された。床面についてはSX-3は若干掘り込んでいたが、張床は確認されなかった。ST-10・11は奥壁際の炎焼部が一段高い構造になっていた。いずれのカマド跡からも支脚は確認されず、カマド内より遺物が出土している。ST-10では甑と高杯が並列しており、SX-3では甕と高杯が並列して出土した。SX-3の高杯は杯部を下にして直立した状態で出土しており、土器転用支脚とみられる。今回の調査では支脚が確認されていないことや、ST-10とSX-1の遺物の出土状態を見る限り煮沸具を2個並列して使用した可能性も考えられる。

県内のカマド跡の例では土佐国衙跡⁽²⁰⁾や小籠遺跡⁽²¹⁾、下ノ坪遺跡⁽²²⁾、ひびのきサウジ遺跡⁽²³⁾、土島田遺跡⁽²⁴⁾など高知平野東部、特に長岡台地での検出例が多く、6世紀後半以降の竪穴式住居跡の殆どにカマドが作り付けられている。土島田遺跡では県内で最多の検出例を誇り、7世紀の竪穴式住居跡も多数確認されている。これらのカマド跡は住居内の北壁に接地されているものが殆どで、構築には石材が用いられている。カマドの構築に石材を使用するのは四国ではあまり類例がなく、高知の特徴とされる。⁽²⁵⁾支脚については下ノ坪遺跡では支脚が両袖の中間に位置し、一つ掛けと考えられている。

県外の例では徳島県大柿遺跡⁽²⁶⁾で、カマドを伴う竪穴式住居跡が186棟確認されている。大柿遺跡で確認されたカマド跡は粘土が主要材である。支脚については石製のものが4割程度みられるが、土器転用支脚が約2割、石製と土器転用支脚の併用例も認められる。土器転用については土師器甕を転用したものであり、高杯の転用は確認されていない。支脚の位置については2つ掛けと想定される位置で確認されたものが多く、大柿遺跡については2つ掛けが主流であったとされている。

伏原遺跡で確認されたカマド跡は県内の例と同様に竪穴式住居跡の北壁に位置し、構築には石材を用いていた。支脚については今回の調査では確認されておらず、出土遺物の状況からは2つ掛けも想定できる。県内の例では一つ掛けであり、2つ掛けとすると特異な存在である。西日本では1つ掛けが主流であるが、徳島県大柿遺跡では2つ掛けの例が確認されており、高知県でも今後類例が確認される可能性があり、徳島県と同様に一つ掛けと二つ掛けが共存することも想定できる。

7.まとめ

伏原遺跡の歴史は弥生時代中期に始まる。弥生時代後期から古墳時代初頭には多数の竪穴式住居跡が確認されており伏原遺跡が最も栄えた時期である。水田等の生産遺構は確認されていないが、石包丁が出土しており付近には水田があったものと考えられ、隣接する第Ⅱ調査区では壺棺墓も確認されている。古墳時代中期にはムラは一度衰退するが、古墳時代後期には再び竪穴式住居跡が確認されるようになる。この時期には伏原大塚古墳を中心に調査区の北側の山間部で多くの古墳や須恵器窯跡がみられるようになり、土佐においても重要な地域となる。伏原遺跡は隣接するひびのきサウジ遺跡やひびのき遺跡等とともにムラを構成し、古墳築造に関与したと考えられる。

古代から近世にかけては遺構や遺物は少なくなる。古代には集落、中世には楠目城の城下町の縁辺部、近世には農村へと姿を変える。そして現在、穏やかな風景が道路へと変わりつつある。

註

- (1) 『介良遺跡Ⅲ』高知市文化財調査報告書第20集 高知市教育委員会 1999
- (2) 『ひびのきサウジ遺跡Ⅲ』高知県埋蔵文化財センター調査報告書第110集 (財)高知県埋蔵文化財センター 2010
- (3) 『林田遺跡』土佐山田町教育委員会 1985
- (4) 『西分増井遺跡群発掘調査報告書』春野町教育委員会 1990
- (5) 角南聡一郎「四国の匙・杓子形土器」『旧練兵場跡 市営西仙遊町住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』善通寺市, (財)元興寺文化財研究所 2001
- (6) (3)に同じ
- (7) 『緊急地方道整備事業による県道宮ノ口深淵線改良工事に伴う林田遺跡発掘調査報告書 林田遺跡Ⅰ』高知県埋蔵文化財センター調査報告書第71集 (財)高知県埋蔵文化財センター 2002
- (8) 『小籠遺跡Ⅱ』高知県埋蔵文化財センター調査報告書第24集 (財)高知県埋蔵文化財センター 1996
- (9) 『平成19年度土島田遺跡記者発表及び現地説明会資料』(財)高知県埋蔵文化財センター 2007
『平成20年度土島田遺跡記者発表及び現地説明会資料』(財)高知県埋蔵文化財センター 2008
『平成21年度土島田遺跡記者発表及び現地説明会資料』(財)高知県埋蔵文化財センター 2009
- (10) 『稗地遺跡』高知県埋蔵文化財センター調査報告書第11集 (財)高知県埋蔵文化財センター 1993
- (11) 福島孝行「平面多角形の多角形住居の検討」『同志社大学考古学研究シリーズⅦ』1999
- (12) 『妻木晩田遺跡発掘調査報告書Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ－大山スイス村リゾート開発事業に伴う発掘調査報告書－』大山町埋蔵文化財発掘調査報告書第17集 大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団, 鳥取県大山町教育委員会 2000
『史跡妻木晩田遺跡妻木山地区発掘調査報告書－第8・11・13次調査－』史跡妻木晩田遺跡発掘調査報告書第Ⅱ集 鳥取県教育委員会 2006
- (13) 『伊勢遺跡75次発掘調査報告書』守山市教育委員会 2003
- (14) (11)に同じ
- (15) 『芥川遺跡発掘調査報告書－縄文・弥生集落跡の調査』高槻市教育委員会 1995
- (16) 森下英治「5.旧練兵場跡の集落構造－これまでの発掘調査成果から－」『旧練兵場跡 市営西仙遊町住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』善通寺市, (財)元興寺文化財研究所 2001
『旧練兵場跡－平成5年度国立善通寺病院内発掘調査報告－』香川県教育委員会 1994
- (17) 『空港跡地遺跡Ⅰ 空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第1冊』香川県教育委員会, 財団法人香川県埋蔵文化財センター, 香川県土地開発公社 1996

7.まとめ

- 『空港跡地遺跡Ⅷ 空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第8冊』香川県教育委員会, 香川県土地開発公社 2004
- (18) 『九頭神遺跡発掘調査報告書』九頭神遺跡発掘調査団, 善通寺市教育委員会 1988
- (19) (11)に同じ
- (20) 『土佐国衙跡発掘調査報告書第2集 内裏地区の調査』高知県教育委員会 1981
『土佐国衙跡発掘調査報告書第3集 府中地区の調査』高知県教育委員会 1982
『土佐国衙跡発掘調査報告書第5集 堂ヶ内・クゲ地区の調査』高知県教育委員会 1984
- (21) (8)に同じ
- (22) 『下ノ坪遺跡Ⅰ』高知県野市町教育委員会 1997
- (23) 『ひびのきサウジ遺跡発掘調査報告書』土佐山田町埋蔵文化財調査報告書第8集 土佐山田町教育委員会 1990
- (24) (9)に同じ
- (25) 池沢俊幸「高知平野における古墳時代後期の竪穴住居について－カマドよりみた予察」『下ノ坪遺跡Ⅰ』高知県野市町教育委員会 1997
- (26) 『大柿遺跡Ⅱ－四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書24－』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 第48集 財団法人徳島県埋蔵文化財センター 2004
田川憲「大柿遺跡におけるカマドの構造と変遷について」『真珠第6号』財団法人徳島県埋蔵文化財センター 2006

遺物觀察表

凡例

1. カッコ付きの数値は残存値である。
2. 赤色風化礫は赤色礫と略した。
3. ナデ調整をナデ，ハケ調整をハケ，ミガキ調整をミガキ，ヘラケズリ調整を削りと略した。

遺物観察表 1

図版 番号	出土地点	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面	焼成	胎土	調整及び特徴	備考
			口径	器高	底径					
1	西部Ⅱ層	弥生土器 壺	15.9	(4.1)	-	橙 橙	良好	粗。チャート等 の小礫を多く 含む。	内外面は粗いハケ、口縁部はヨコナ デ、外面下部はナデ。	広口壺。
2	〃	〃	18.8	(2.8)	-	橙 橙	やや 良好	やや粗。小礫を 多く含む。	内外面にハケ。口縁端部はハケの後 櫛描の波状文。	広口壺。 摩耗する。
3	〃	〃	-	(4.9)	5.3	にぶい赤褐 にぶい赤褐	良好	やや密。8mm大 の礫を含む。	内面はナデ、外面は胴部がタタキ後 ハケ、底部がタタキ後ナデ。	
4	〃	弥生土器 鉢	-	(2.4)	3.0	にぶい黄橙 にぶい黄橙	良好	密。	内面がナデで指頭圧痕が残る。外面 は底部がナデ、体部はタタキ後ナ デ。	
5	〃	須恵器 蓋	13.3	3.0	-	灰 暗灰黄	不良	やや粗。極細粒 砂を含む。	回転ナデで、外面の天井部は回転ヘ ラ削りを加える。	摩耗する。
6	〃	〃	-	(1.5)	-	灰オリーブ 灰	良好	やや密。極細粒 砂を含む。	内面が回転ナデで、外面は回転ヘラ 削り。	つまみ径 2.7 cm。
7	〃	〃	17.5	(1.6)	-	灰 灰	やや 良好	やや密。	回転ナデ。	
8	〃	須恵器 杯	-	(1.4)	8.2	灰 灰	良好	やや密。	内面がナデ、外面は体部が回転ナ デ、高台内は回転ヘラ切り後ナデ。	
9	〃	須恵器 高杯	-	(4.2)	-	灰白 灰白	良好	密。	回転ナデ。自然釉が付着。小型。	
10	〃	須恵器 壺	34.8	(5.3)	-	灰オリーブ 灰	良好	やや粗。砂粒を 多く含む。	回転ナデ。外面に櫛描の波状文を 2 条施す。	
11	中央・東部 Ⅰ層	弥生土器 甕	-	(3.5)	5.2	橙 橙	良好	やや密。小礫を 多く含む。	内面が横方向のハケで底部にナデ を加える。外面は胴部がタタキ後 ナデ、底部はナデ。	
12	〃	弥生土器 高杯	-	(4.6)	-	橙 にぶい橙	やや 良好	やや密。極細粒 砂を含む。	杯底部と外面がミガキ、脚内面はナ デで、裾部にはわずかにハケが残 る。	
13	〃	須恵器 蓋	-	(2.5)	-	黄灰 黄灰	良好	やや密。極細粒 砂を多く含む。	回転ナデで、天井部は内面にナデ、 外面に回転ヘラ削りを加える。	
14	〃	須恵器 杯	-	(1.4)	8.8	灰 灰黄	やや 良好	やや密。	回転ナデで、内面と高台内はナデを 加える。	高台あり。
15	〃	近世磁器 碗	-	(2.6)	4.5	灰白 灰白	良好	密。粗粒砂を含 む。	透明釉を施釉。見込を蛇の目釉ハ ギ、高台を釉ハギ。内面に圏線と松 葉の染め付け。	丸碗。
16	中央・東部 Ⅵ層	弥生土器 壺	-	(4.7)	6.2	にぶい黄橙 にぶい黄橙	良好	やや粗。粗粒砂 と赤色礫を多 く含む。	内面がハケ後ナデ、外面が縦方向の ハケ後ナデまたはミガキ。	摩耗する。 外面に黒斑 あり。
17	〃	弥生土器 甕	-	(3.5)	3.8	にぶい黄橙 にぶい橙	やや 良好	やや密。チャート 等の小礫を 含む。	内面がハケ後ナデ、外面はナデ。	
18	〃	〃	-	(3.4)	3.6	にぶい橙 にぶい橙	良好	やや密。極粗粒 砂を含む。	胴部外面にタタキ、底部はナデ。	外面に被熱 の痕跡。
19	〃	〃	-	(9.5)	2.0	暗灰黄 にぶい黄橙	良好	やや粗。チャート と極粗粒砂 を含む。	内面にナデ、外面はタタキ後縦方向 のハケ、底部はナデ。	
20	〃	弥生土器 鉢	17.2	(5.0)	-	にぶい黄褐 にぶい黄橙	良好	やや密。細粒砂 と赤色礫を含 む。	内面は密なハケ、外面は口縁部がヨ コナデ、体部がナデで指頭圧痕が残 る。	内面の一部に 煤が付着。

遺物観察表 2

図版 番号	出土地点	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面	焼成	胎土	調整及び特徴	備考
			口径	器高	底径					
21	中央・東部 Ⅵ層	弥生土器 鉢	15.6	(4.6)	-	にぶい黄橙 にぶい黄橙	良好	密。チャートの 小礫と細粒砂 を含む。	内面は斜め方向のハケ、外面はナデ で亀裂が入る。	
22	〃	〃	-	(3.4)	3.5	橙 橙	やや 良好	やや密。粗粒砂 を含む。	内面に横方向のハケ。底部外面に木 葉痕。	摩耗する。
23	〃	〃	-	(4.3)	1.8	橙 橙	良好	やや密。	内面は横方向の板ナデのちナデ、外 面は体部がタタキ後丁寧なナデ、底 部は削り。	
24	〃	弥生土器 高杯	-	(7.0)	-	橙 橙	やや 不良	密。小礫を含 む。	内面にしぼり目が残る。	摩耗する。
25	〃	弥生土器 手握ね土器	-	(3.0)	-	にぶい橙 にぶい黄橙	良好	密。	ナデ。指頭圧痕が顕著に残る。	高杯形。
26	〃	土師器 高杯	-	(4.6)	-	にぶい橙 にぶい橙	やや 良好	やや密。赤色礫 を含む。	杯内面はミガキ。外面は口縁部がナ デ、杯底部がハケ、脚柱部がハケ後 ナデ。	
27	〃	〃	-	(4.9)	-	にぶい橙 にぶい橙	良好	密。	杯底部がヘラナデ、脚外面はナデ、 脚内面はナデで裾部は横方向のナ デ。	
28	〃	土師器 甕	18.6	(8.7)	-	にぶい橙 にぶい橙	やや 良好	やや粗。赤色礫 と細粒砂を多 く含む。	胴部内面がナデ、頸部内面はハケ、 口縁部がヨコナデ、胴部外面がタタ キ後ハケ。	
29	〃	〃	19.1	(8.1)	-	橙 橙	良好	やや粗。チャー ト、赤色礫、極粗 粒砂を含む。	胴部内面がナデ、頸部内面はハケ、 口縁部がヨコナデ。胴部外面は横方 向のハケ後縦方向のハケ。	
30	〃	土師器 釜	-	(5.2)	-	浅黄橙 浅黄橙	やや 良好	密。細粒砂を含 む。	内面に横方向のハケ。断面三角形の 鏝を貼付。	摩耗する。
31	〃	土師器 甌	全長 (4.2)	全幅 2.7	-	- 橙	やや 良好	やや粗。	ナデで、指頭圧痕が残る。	把手。
32	〃	〃	全長 (4.4)	全幅 (4.1)	-	- 橙	良好	やや密。細粒砂 を含む。	ナデで、指頭圧痕が残る。胴部内面 は粗い縦方向の削り。	把手。
33	〃	〃	全長 (4.6)	全幅 (3.8)	-	- 橙	良好	密。	ナデで、指頭圧痕が残る。胴部内面 は粗い縦方向の削り。	把手。
34	〃	須恵器 蓋	12.4	(3.2)	-	灰黄 灰黄	良好	密。	回転ナデで、天井部は内面にナデ、 外面は回転ヘラ切り後回転ヘラ削 り。	
35	〃	〃	-	(2.7)	-	褐灰 褐灰	良好	やや密。	回転ナデ。天井部外面には回転ヘラ 削りを加える。	
36	〃	〃	-	(2.7)	-	灰 灰	やや 良好	密。	回転ナデ。	つまみ輪状。 つまみ径 4.0cm。
37	〃	〃	-	(1.0)	-	黄灰 灰	良好	やや密。	回転ナデで、内面にナデを加える。	
38	〃	〃	16.5	(2.7)	-	灰 灰	良好	やや密。	回転ナデで、天井部には内面にナ デ、外面に回転ヘラ切りのち回転ヘ ラ削りを加える。	
39	〃	〃	16.6	(1.4)	-	褐灰 褐灰	良好	やや密。砂粒を 多く含む。	回転ナデで、天井部内面にはナデを 加える。	
40	〃	須恵器 杯	9.9	3.9	4.1	暗灰黄 灰黄	良好	密。	回転ナデで、底部外面は回転ヘラ削 り。	受け部径 12.3cm。

遺物観察表 3

図版 番号	出土地点	器種 器形	法量 (cm)			色調	焼成	胎土	調整及び特徴	備考
			口径	器高	底径	内面・外面				
41	中央・東部 Ⅵ層	須恵器 杯	-	(2.7)	6.1	灰 灰白	良好	密。粗粒砂を含 む。	回転ナデ。回転ヘラ削り。	受け部径 12.5cm。
42	〃	〃	-	(2.6)	9.5	灰オリーブ 灰黄	良好	密。粗粒砂を含 む。	回転ナデ後、内面と高台内にはナ デ。	高台あり。
43	〃	〃	-	(1.7)	9.5	灰 灰	良好	やや粗。細粒砂 を多く含む。	回転ナデ後、内面にナデ。回転ヘラ 切り。	高台あり。
44	〃	〃	-	(1.3)	8.9	灰黄 灰黄	やや 良好	やや密。	回転ナデ後、内面にナデ。	高台あり。
45	〃	〃	-	(1.6)	6.4	褐灰 褐灰	良好	密。	回転ナデ。回転ヘラ切り。底部外面 に板状圧痕が残る。	
46	〃	〃	-	(1.6)	6.4	にぶい黄橙 灰黄褐	やや 不良	やや密。細粒砂 を含む。	回転ナデ。	
47	〃	〃	-	(2.2)	8.4	灰 灰黄	やや 不良	密。細粒砂を含 む。	回転ナデ。回転ヘラ切り。	
48	〃	須恵器 皿	-	(1.4)	8.7	灰白 灰白	不良	やや密。細粒砂 を含む。	回転ナデ。回転ヘラ切り。	摩耗する。
49	〃	須恵器 高杯	-	(3.3)	9.0	暗灰黄 灰黄	良好	密。	回転ナデ。	脚内面に自然 釉が付着。
50	〃	〃	-	(4.2)	-	浅黄 灰黄	やや 良好	密。	回転ナデ後、杯外面に回転ヘラ削 り。脚内の一部はナデ。	
51	〃	〃	-	(4.7)	-	暗灰黄 暗灰黄	不良	密。		著しく摩耗 する。
52	〃	〃	-	(9.0)	-	灰白 灰白	良好	密。粗粒砂を含 む。	回転ナデ後、杯内面にナデ。脚内面 にはしほり目が残る。脚外面に凹線 が1条巡る。	
53	〃	〃	-	(9.2)	-	黄灰 黄灰	良好	やや密。極細粒 砂を含む。	杯内面がナデ、脚は回転ナデで、内 面にはしほり目が残る。	
54	〃	〃	-	(10.5)	-	灰黄 灰黄	やや 不良	やや粗。細粒砂 を含む。	回転ナデ。脚内面の上部はナデを加 える。	
55	〃	須恵器 小杯	-	(3.0)	4.7	灰 灰	やや 良好	やや粗。極細粒 砂を多く含む。	回転ナデで、底部の切り離しは回転 ヘラ切りとみられる。	高台あり。
56	〃	須恵器 壺	-	(2.9)	9.8	黄灰 黄灰	良好	やや密。	ナデで、内面には指頭圧痕が顕著に 残る。	高台あり。
57	〃	須恵器 甕	18.7	(6.2)	-	灰白 灰白	良好	やや密。	回転ナデ。外面に回転カキ目が残 る。頸部内面には当て具痕または工 具の圧痕あり。	
58	〃	土師質土器 蓋	-	(2.0)	-	- にぶい黄橙	良好	密。		つまみ径 2.9cm。 摩耗する。
59	〃	〃	-	(1.6)	-	明赤褐 橙	やや 良好	やや密。	ナデ。	つまみ径 3.4cm。
60	〃	〃	21.5	(2.0)	-	橙 橙	良好	精良。赤色礫を 含む。	内外面に横方向のミガキ。	

遺物観察表 4

図版 番号	出土地点	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面	焼成	胎土	調整及び特徴	備考
			口径	器高	底径					
61	中央・東部 Ⅵ層	土師質土器 杯	18.4	(4.6)	-	赤褐 赤褐	やや 不良	やや粗。砂粒を 多く含む。	内外面に横方向のミガキ。	赤色塗彩。
62	〃	〃	-	(2.4)	12.8	橙 橙	やや 不良	密。		著しく摩耗 する。
63	〃	〃	-	(1.8)	8.2	橙 橙	やや 良好	やや密。チャー トと極細粒砂 を含む。	回転ナデ。底部の切り離しは回転ヘ ラ切りで、一部板状圧痕が残る。	
64	〃	〃	12.7	2.8	8.2	橙 橙	やや 良好	密。赤色礫を含 む。	回転ナデ。回転ヘラ切り。	摩耗する。
65	〃	〃	13.0	2.9	7.8	にぶい橙 にぶい橙	やや 良好	密。赤色礫を含 む。	回転ヘラ切り。	著しく摩耗 する。
66	〃	〃	-	(1.8)	7.0	橙 橙	不良	密。赤色礫を含 む。	回転ヘラ切り。	著しく摩耗 する。
67	〃	〃	-	(2.8)	6.4	橙 橙	不良	やや密。赤色礫 を含む。	回転ヘラ切り。	著しく摩耗 する。
68	〃	〃	-	(1.3)	8.3	にぶい橙 橙	やや 不良	密。赤色礫を含 む。	回転ヘラ切り。	著しく摩耗 する。
69	〃	〃	13.8	5.5	8.8	にぶい橙 にぶい橙	やや 良好	やや密。細粒砂 を含む。	底部内面にナデ。回転ヘラ切り。	摩耗する。
70	〃	〃	-	(3.2)	6.4	橙 橙	やや 不良	やや密。赤色礫 を多く含む。	回転ヘラ切り。	摩耗する。
71	〃	〃	-	(3.7)	7.8	橙 橙	やや 不良	やや密。赤色礫 と細粒砂を多 く含む。	回転ヘラ切り。	著しく摩耗 する。
72	〃	土師質土器 椀	13.0	(3.8)	-	橙 橙	やや 不良	やや密。赤色礫 と細粒砂を多 く含む。		著しく摩耗 する。
73	〃	黒色土器 椀	17.5	(4.0)	-	黒 橙	やや 良好	密。	内面が幅の太い横方向のミガキ、口 縁部はヨコナデ。	A類。在地。 摩耗する。
74	〃	〃	-	(3.6)	-	黒 にぶい橙	良好	密。極細粒砂を 含む。	内面が緻密な横方向のミガキ、外面 がナデ。	A類。在地。 高台あり。
75	〃	〃	-	(1.4)	10.4	黒褐 にぶい黄橙	やや 良好	密。	内面がミガキ、高台内がナデ。	A類。在地。 高台あり。
76	〃	黒色土器 鉢	23.2	(10.0)	-	黒 浅黄橙	良好	密。	内面は緻密な横方向のミガキ、口縁 部はヨコナデ、外面はナデで指頭圧 痕が残る。	A類。在地。
77	〃	土製品 支脚	-	(6.9)	10.2	オリーブ黒 にぶい橙	良好	やや粗。粗粒砂 を含む。	外面が横方向のタタキ、内面は横方 向のナデで、指頭圧痕が残る。	煤が付着。
78	〃	土製品 土錘	-	全長 (3.6)	全幅 2.2	- 橙	やや 良好	やや密。	ナデ。	孔径 0.6cm。 重量 9.5g。 摩耗する。
79	中央・東部 Ⅶ層	弥生土器 壺	-	(5.0)	-	にぶい橙 橙	良好	やや粗。チャー トと極粗粒砂 を含む。	頸部内面がナデ、口縁部内外面ミガ キ、頸部外面がハケ。頸部に断面三 角形の突帯。	
80	〃	〃	-	(5.1)	-	黒褐 明赤褐	良好	やや粗。極粗粒 砂を含む。	内面がハケまたはナデ、外面は縦方 向のハケ。頸部の粘土帯に斜格子 文。	

遺物観察表 5

図版 番号	出土地点	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面	焼成	胎土	調整及び特徴	備考
			口径	器高	底径					
81	中央・東部 Ⅶ層	弥生土器 壺	21.0	(4.0)	-	橙 橙	良好	やや密。チャー トと細粒砂を 含む。	口縁部上半が横方向のナデ, 口縁部 下半がナデ。口縁端部には凹線を7 条施す。	広口壺。
82	〃	〃	20.8	(3.4)	-	にぶい黄橙 にぶい黄橙	良好	やや密。細粒砂 を含む。	内面が横方向の粗いハケ, 口縁部が ヨコナデ, 外面が縦方向のハケ。	広口壺。
83	〃	〃	16.0	(4.7)	-	橙 橙	不良	やや粗。粗粒砂 を多く含む。	口縁部外面に竹管文と鋸歯文, 口縁 端部には竹管文を施す。	二重口縁壺。 著しく摩耗 する。
84	〃	〃	-	(3.8)	-	黄灰 にぶい橙	良好	やや密。雲母・ チャートを含 む。	内面がハケ, 口縁部がヨコナデ, 外 面がナデまたはハケ。外面に竹管文 と櫛描の波状文。	二重口縁壺。
85	〃	〃	-	(13.4)	-	にぶい橙 にぶい褐	良好	密。細粒砂を少 し含む。	内外面に緻密なハケ。胴部外面はナ デ。	
86	〃	〃	-	(4.0)	4.4	褐灰 にぶい黄橙	良好	やや粗。極粗粒 砂を多く含む。	内面がナデ, 胴部外面がハケまたは ナデ, 底部外面がナデ。	摩耗する。
87	〃	〃	-	(9.5)	8.4	にぶい黄褐 橙	やや 良好	やや密。チャー トと粗粒砂を 含む。	外面が縦方向のハケ。	摩耗する。外 面に黒斑あ り。
88	〃	〃	-	(5.9)	5.0	灰黄褐 にぶい黄褐	やや 不良	やや密。極粗粒 砂を含む。	内面がナデ。	摩耗する。
89	〃	〃	-	(5.4)	-	にぶい黄橙 にぶい黄橙	やや 良好	粗。チャート等 の小礫と極粗粒 砂を多く含む。	外面はナデ後縦方向のミガキ。底部 外面に工具の圧痕が顕著に残る。	摩耗する。
90	〃	弥生土器 甕	15.7	(6.7)	-	橙 橙	良好	やや密。チャー トを含む。	胴部内面がハケ後ナデ, 口縁部がハ ケ, 胴部外面がタタキ後ハケ。口縁 端部は面取り。	
91	〃	〃	-	(2.1)	4.8	橙 橙	やや 良好	密。粗粒砂を含 む。	内面が横方向のハケ後ナデ, 外面が ナデ。	摩耗する。
92	〃	〃	-	(2.5)	4.5	褐灰 にぶい褐	やや 良好	やや粗。チャー ト, 赤色礫, 極粗 粒砂を含む。	内面がハケ, 胴部外面がタタキ後縦 方向のハケ。底部外面に木葉痕が残 る。	摩耗する。
93	〃	〃	-	(11.0)	4.2	にぶい黄橙 橙	やや 良好	密。	胴部内面にハケ後底部にナデ。外面 がタタキ後縦方向の密なハケ。底部 外面はナデ。	外面に黒斑と 煤が付着。摩 耗する。
94	〃	〃	-	(7.0)	-	にぶい黄橙 にぶい黄橙	やや 良好	やや粗。チャー トと極粗粒砂 を含む。	底部内面がナデ, 胴部内面が縦方向 のハケ, 胴部外面はタタキ, 底部外 面はナデ。	摩耗する。
95	〃	弥生土器 甌	-	(2.4)	4.8	橙 橙	良好	やや粗。細粒砂 を含む。	内面が粗雑なハケ, 胴部外面がタタ キ後縦方向のハケ, 底部外面がハケ またはナデ。	底部に径5 mmの焼成前 の穿孔あり。
96	〃	弥生土器 鉢	-	(2.7)	5.0	にぶい橙 橙	良好	粗。チャート等 の小礫と極粗 粒砂を含む。	内面が粗雑なハケ, 体部外面はタタ キ後ハケまたはナデ。高台はナデ。	台付き鉢。
97	〃	〃	-	(4.4)	1.8	灰黄褐 にぶい黄褐	良好	やや粗。極粗粒 砂を含む。	内面がナデ, 体部外面が縦方向のハ ケ, 底部外面がナデ。	内外面に黒 斑あり。
98	〃	〃	18.3	(7.5)	-	にぶい橙 橙	良好	やや粗。チャー トと極粗粒砂 を含む。	内面がハケ後縦方向のナデ, 口縁部 外面がナデ, 体部外面がハケ。口縁 端部は面取り。	
99	〃	〃	8.2	3.8	2.4	明赤褐 橙	良好	密。	内面が縦方向のナデ, 口縁部がヨコ ナデ, 外面はタタキ, 底部外面には ナデ。	外面に煤が 付着。
100	〃	〃	-	(4.1)	3.2	にぶい橙 にぶい橙	良好	密。チャートと 赤色礫の小礫 を含む。	ナデで内面にはわずかにハケが残 る。外面に亀裂が入る。	摩耗する。

遺物観察表 6

図版 番号	出土地点	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面	焼成	胎土	調整及び特徴	備考
			口径	器高	底径					
101	中央・東部 Ⅷ層	弥生土器 鉢	16.6	(9.1)	-	橙 にぶい橙	やや 良好	やや密。チャート等の小礫を含む。	内面は底部がナデ、体部がハケ、口縁部がヨコナデ、外面はタタキ後ナデ。外面に亀裂が入る。	摩耗する。
102	〃	〃	21.2	(5.7)	-	灰 橙	良好	やや粗。極粗粒砂を含む。	内面が斜め方向のハケ後縦方向のナデ、口縁部がヨコナデ。	摩耗する。
103	〃	弥生土器 高杯	-	(7.4)	-	にぶい黄橙 にぶい黄橙	良好	やや密。細粒砂を含む。	ナデで指頭圧痕が残る。脚内面に接合痕が顕著に残る。	
104	〃	〃	-	(4.8)	-	にぶい黄褐 明赤褐	やや 良好	密。	外面にわずかにミガキが残る。内面は脚柱部がナデ、裾部が横方向のハケ。	摩耗する。
105	〃	土師器 高杯	-	(2.9)	-	橙 橙	やや 不良	密。	杯底部がナデ後ミガキ、口縁部内面がハケ後ミガキ、外面がナデ。口縁部にはハケが残る。	著しく摩耗する。
106	〃	〃	-	(5.4)	-	明赤褐 にぶい黄橙	良好	密。粗粒砂を含む。	外面の脚上端がナデ、脚柱部がハケ。内面は脚柱部がナデ、裾部がハケ。2箇所円孔が残る。	摩耗する。
107	〃	〃	-	(6.3)	-	橙 橙	やや 良好	密。		著しく摩耗する。
108	〃	〃	-	(5.7)	-	橙 橙	良好	やや密。赤色礫と細粒砂を含む。	杯底部がナデ、外面の杯部と脚部の接合部が縦方向のハケ、脚柱部と裾部がナデ。	
109	〃	土師器 甌	全長 (6.1)	全幅 (3.6)	-	- にぶい黄橙	良好	やや粗。粗粒砂を多く含む。	ナデ。	把手。
110	〃	須恵器 蓋	11.6	(3.4)	-	灰黄 灰黄	やや 良好	やや密。極細粒砂を含む。	回転ナデで、天井部外面には回転ヘラ削り、内面にはナデを加える。	
111	〃	〃	11.4	(1.5)	-	灰黄 灰黄	良好	やや粗。極細粒砂を多く含む。	回転ナデで、天井部外面には回転ヘラ削り。	
112	〃	須恵器 杯	-	(2.8)	7.8	灰 灰オリーブ	良好	密。粗粒砂を含む。	回転ナデで、底部外面には回転ヘラ削り。回転ヘラ切り。	受け部径 14.2cm。
113	〃	〃	-	(1.3)	7.2	黄灰 黄灰	良好	密。	回転ナデ後底部内面にナデ。回転ヘラ切り。底部外面に「×」とみられるヘラ記号。	
114	〃	須恵器 高杯	11.8	(3.4)	-	黄灰 黄灰	良好	密。	回転ナデ。	
115	〃	須恵器 甕	-	(5.8)	-	灰黄 黄灰	良好	密。	回転ナデ。外面は凹線が5条、櫛状原体の圧痕による文様。	
116	〃	土製品 支脚	-	(4.2)	10.0	橙 橙	良好	やや密。細粒砂を多く含む。	ナデで、指頭圧痕が顕著に残る。底部は輪高台状を呈する。	
117	〃	石製品 砥石	全長 (6.7)	全幅 (3.5)	全厚 (1.8)	-	-	-	残存部で4面を使用。石材は泥岩。	重量 72.2g。
118	〃	鉄製品 釘	全長 (4.9)	全幅 (1.0)	全厚 (0.8)	-	-	-	両端を欠損。断面は方形を呈する。	重量 9.6g。
119	ST-1 埋土 1	弥生土器 壺	-	(3.2)	-	橙 橙	やや 良好	やや密。	内面がハケとナデ、口縁部がヨコナデ。外面に櫛描の波状文。	複合口縁壺。 著しく摩耗する。
120	〃	〃	-	(2.0)	-	にぶい黄褐 にぶい黄褐	やや 良好	やや密。	外面に沈線による鋸歯文。	二重口縁壺。 著しく摩耗する。

遺物観察表 7

図版 番号	出土地点	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面	焼成	胎土	調整及び特徴	備考
			口径	器高	底径					
121	ST-1 埋土 1	弥生土器 壺	-	(6.3)	7.0	橙 橙	良好	やや密。細粒砂 を含む。	内面がハケ後ナデ、胴部外面がタタ キ後ナデ、底部外面がナデ。	
122	〃	弥生土器 鉢	16.0	(8.7)	-	にぶい黄橙 にぶい黄橙	やや 良好	やや粗。	内面がナデ、外面がタタキ。口縁部 に径 8mm の円孔が 1 孔残存する。	摩耗する。
123	〃	〃	-	(2.5)	-	にぶい黄橙 橙	良好	密。チャートを含 む。	底部内面がナデ、体部内面がミガ キ、外面はナデ後ミガキ。	
124	〃	弥生土器 高杯	16.2	(6.5)	-	橙 橙	やや 良好	やや密。チャー トを含む。	内面がハケ、口縁部がヨコナデ、外 面は縦方向のハケが残る。脚部との 接合部はナデ。	摩耗する。
125	〃	〃	-	(3.1)	-	橙 橙	やや 不良	やや密。チャー トと赤色礫を 含む。	杯底部がナデ後一部ミガキ、脚内面 がナデでわずかにハケが残る	著しく摩耗 する。
126	〃	弥生土器 ミニチュア 土器	6.4	(2.9)	-	にぶい黄橙 にぶい黄橙	良好	やや粗。チャー トと赤色礫を 含む。	ナデで、指頭圧痕が残る。脚部との 境には一部ハケが残る。	高杯形。
127	〃	〃	-	(4.3)	4.4	橙 橙	不良	密。		高杯形。 著しく摩耗 する。
128	〃	ガラス製品 小玉	全長 0.60	全幅 0.65	全厚 0.50	- 青緑色	-	-	青緑色。	孔径 0.25cm。 重量 0.3g。
129	ST-1 埋土 2	弥生土器 壺	15.2	(6.5)	-	橙 橙	やや 良好	密。チャートを含 む。	内面がハケまたはナデ、口縁部はヨ コナデで指頭圧痕が顕著に残る。外 面はハケ。	広口壺。
130	〃	〃	16.9	(5.1)	-	にぶい黄橙 にぶい黄橙	やや 良好	やや粗。チャー ト、赤色礫、極粗 粒砂を含む。	ナデで、口縁端部はヨコナデ。	広口壺。 摩耗する。
131	〃	〃	19.0	(5.2)	-	にぶい橙 にぶい黄橙	やや 良好	やや密。チャー トと赤色礫を 含む。	ナデで、口縁端部はヨコナデ。	広口壺。 摩耗する。
132	〃	〃	22.8	(6.6)	-	にぶい橙 にぶい橙	やや 良好	やや粗。チャー トと赤色礫を 含む。	内面が横方向のハケ、口縁部がヨコ ナデ、外面がハケ後横方向のナデ。	広口壺。
133	〃	〃	13.8	(3.8)	-	黄橙 黄橙	不良	密。チャートを含 む。		広口壺。摩耗 する。煤が付 着。
134	〃	〃	23.6	(5.0)	-	橙 橙	やや 不良	密。チャートと 赤色礫の小礫 を含む。	内面がハケ、口縁部がヨコナデ、外 面はハケまたはナデ。外面にヘラ描 きの波状文。	複合口縁壺。 摩耗する。
135	〃	弥生土器 甕	14.8	(5.6)	-	にぶい橙 にぶい橙	やや 良好	やや密。チャー トを含む。	内面は胴部がナデ、口縁部がハケ、 端部がヨコナデ、外面は口縁部がナ デ、胴部がタタキ後ハケ。	
136	〃	〃	-	(2.0)	4.8	橙 橙	良好	やや密。チャー ト等の小礫を 含む。	内面が細かいハケ、外面がタタキ。	
137	〃	〃	-	(4.8)	4.4	橙 にぶい橙	良好	やや密。チャー トと赤色礫を 含む。	内面がナデ、外面がタタキ。	
138	〃	〃	-	(6.2)	4.8	橙 にぶい橙	良好	やや密。チャー トを含む。	内面がナデ、外面がタタキ。	胴部外面に 黒斑あり。摩 耗する。
139	〃	〃	-	(2.4)	4.2	にぶい赤褐 黄褐	やや 良好	やや粗。チャー トと粗粒砂を 含む。		著しく摩耗 する。
140	〃	〃	-	(4.4)	4.7	にぶい橙 黒褐	良好	やや密。チャー トと赤色礫を 含む。	内面がナデ、外面がタタキ後ナデ。	

遺物観察表 8

図版 番号	出土地点	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面	焼成	胎土	調整及び特徴	備考
			口径	器高	底径					
141	ST-1 埋土 2	弥生土器 甕	-	(7.0)	3.9	にぶい黄橙 灰黄褐	やや 良好	やや粗。チャー トと赤色礫を 含む。	ナデ。	胴部外面に 煤が付着。摩 耗する。
142	〃	〃	-	(6.0)	1.9	にぶい黄橙 にぶい橙	良好	密。チャートと 赤色礫を含む。	内面がナデ, 外面がタタキ後ハケ。	
143	〃	〃	-	(2.7)	-	にぶい橙 にぶい橙	良好	やや粗。チャー トと赤色礫を 多く含む。	内面がナデ, 外面がハケ。	外面の一部 に黒斑あり。
144	〃	〃	-	(3.8)	-	にぶい黄橙 にぶい黄橙	良好	密。赤色礫を含 む。	ナデで, 外面に細かい亀裂が入る。	
145	〃	〃	-	(12.3)	-	にぶい黄橙 にぶい橙	良好	やや粗。チャー ト等の小礫を 多く含む。	内面がナデ, 外面がタタキ後ハケ。	
146	〃	弥生土器 鉢	-	(4.1)	4.8	にぶい橙 にぶい橙	良好	やや密。チャー トと赤色礫を 含む。	内面が横方向のハケ, 外面がタタキ 後ナデで亀裂が入る。	
147	〃	〃	-	(6.5)	4.0	にぶい黄橙 にぶい黄橙	良好	密。チャートを 含む。	内面がハケ後一部ナデ, 外面がタタ キ後ナデで, 亀裂が入る。	
148	〃	〃	-	(5.4)	4.0	橙 橙	やや 良好	密。	内面が細かい横方向のハケ, 外面が タタキ。	摩耗する。
149	〃	〃	12.3	5.5	4.0	にぶい橙 にぶい橙	良好	やや密。チャー トと赤色礫を 含む。	内面がハケ, 口縁部がヨコナデ, 外 面が螺旋状のタタキで亀裂が入る。	
150	〃	〃	9.1	4.0	-	橙 にぶい橙	やや 良好	密。チャートを 含む。	内面にわずかにハケが残る。	著しく摩耗 する。
151	〃	〃	10.2	5.3	3.0	褐灰 にぶい黄橙	良好	密。	ナデで, 口縁部はヨコナデ。	内面に黒斑 あり。
152	〃	〃	12.4	5.9	4.0	橙 橙	良好	やや粗。チャー トと赤色礫を多 く含む。	ナデで, 口縁部はヨコナデ。外面に は亀裂が入る。	
153	〃	〃	9.6	4.8	-	にぶい橙 にぶい黄橙	やや 良好	密。チャートと 赤色礫を含む。	ナデで, 口縁部はヨコナデ。外面に はわずかに亀裂が入る。	
154	〃	弥生土器 手捏ね土器	-	(4.6)	1.5	灰黄褐 にぶい黄橙	やや 良好	密。	ナデで, 指頭圧痕が残る。	卵形。 摩耗する。
155	〃	弥生土器 ミニチュア 土器	-	(3.4)	6.0	にぶい黄橙 にぶい黄橙	良好	やや密。チャー トと赤色礫を 含む。	ナデで, 指頭圧痕が残る。	高杯形。
156	〃	土師器 高杯	-	(2.3)	-	にぶい黄褐 褐	良好	やや精良。雲母 を含む。	脚柱部外面が縦方向のミガキ, 裾部 が横方向の緻密なミガキ, 内面がナ デ。	搬入品。
157	〃	土師器 器台	-	(6.2)	11.5	橙 橙	やや 良好	やや密。細粒砂 を多く含む。雲 母, 石英を含む。	外面がナデ後ミガキ, 脚端部はヨコ ナデ, 内面がハケ。円孔が2箇所に あり。	搬入品。 摩耗する。
158	〃	土製品 支脚	6.0	6.5	7.8	橙 橙	良好	粗。チャート, 赤 色礫等の小礫を 多く含む。	ナデで, 指頭圧痕が残る。	低脚。底部に 黒斑あり。
159	〃	〃	-	(5.5)	4.5	灰黄褐 灰黄褐	良好	やや粗。赤色礫 を含む。	上端は片口状, 中心は円孔を穿ち中 空となる。ナデで, 指頭圧痕が残る。	低脚。底部に 黒斑あり。
160	〃	石製品 叩石	全長 12.5	全幅 7.1	全厚 4.8	-	-	-	両端を使用。石材は砂岩の河原石。	重量 645g。

遺物観察表 9

図版 番号	出土地点	器種 器形	法量 (cm)			色調		焼成	胎土	調整及び特徴	備考
			口径	器高	底径	内面・外面					
161	ST-1 埋土2	石製品 叩石	全長 15.0	全幅 7.8	全厚 6.2	-	-	-	両端を使用。片端に朱が付着。石材は砂岩の河原石。	重量 1100g。	
162	ST-1 埋土2 集石	弥生土器 壺	12.5	28.7	4.4	橙 にぶい橙	良好	やや密。チャートを含む。	胴部内面がハケ後ナデ、頸部内面はナデ。口縁部はハケ、口縁端部はヨコナデ、外面はタタキ後ナデ。	広口壺。	
163	〃	〃	22.0	(5.2)	-	明赤褐 明赤褐	やや不良	やや粗。チャートを含む。	口縁部内面がハケ、口縁端部がヨコナデ、外面はナデ。外面に櫛状原体による斜格子文。	複合口縁壺。著しく摩耗する。	
164	〃	〃	-	(9.2)	4.0	褐灰 橙	やや良好	やや密。チャートと細粒砂を多く含む。	内面がナデ。	著しく摩耗する。	
165	〃	弥生土器 甕	-	(3.2)	2.0	にぶい黄橙 褐灰	良好	密。チャートを含む。	内面がナデ、胴部外面がタタキ、底部外面がナデ。	外面に黒斑あり。	
166	〃	〃	-	(3.8)	3.3	褐灰 にぶい黄橙	良好	やや密。チャートと細粒砂を多く含む。	内面がナデ、胴部外面がタタキ、底部外面がナデ。	内面に煤が付着。	
167	〃	〃	-	(6.7)	2.7	にぶい黄橙 にぶい黄橙	良好	やや粗。チャートを含む。	内面がナデ、胴部外面がタタキ、底部外面がタタキ後ナデ。	底部に黒斑あり。	
168	〃	土師器 高杯	16.0	(4.5)	-	橙 橙	不良	やや粗。チャートと極粗粒砂を含む。		著しく摩耗する。	
169	〃	〃	-	(4.0)	10.7	黄橙 橙	やや不良	やや密。チャート等の小礫を含む。		著しく摩耗する。	
170	〃	土師器 器台	-	(5.8)	9.8	橙 橙	やや良好	密。チャート等の小礫を含む。	ナデ。口縁部を肥厚させる。脚柱部は中空。	摩耗する。	
171	〃	〃	-	(6.5)	-	にぶい黄橙 にぶい黄橙	やや良好	粗。チャートと極粗粒砂を多く含む。	ナデ。口縁部に粘土を貼付して肥厚させる。脚柱部は中実。	摩耗する。	
172	〃	石製品 砥石	全長 (15.4)	全幅 (10.2)	全厚 (3.6)	-	-	-	残存部で一面を使用。砂岩の割れ石を使用。	重量 920g。	
173	ST-1 埋土3	弥生土器 壺	-	(6.5)	-	浅黄橙 にぶい黄橙	良好	密。	胴部内面がハケ、口縁部は横方向のハケまたはナデ、外面は縦方向のハケ。	広口壺。摩耗する。	
174	〃	〃	21.0	(4.5)	-	黄橙 黄橙	やや良好	密。チャートと赤色礫を含む。	外面にわずかに縦方向のハケが残る。	広口壺。著しく摩耗する。	
175	〃	〃	24.4	(6.0)	-	橙 橙	不良	やや密。チャートと赤色礫を含む。	口縁部がヨコナデ、外面はわずかに縦方向のハケが残る。	広口壺。著しく摩耗する。	
176	〃	〃	14.3	(1.9)	-	橙 にぶい橙	良好	やや密。チャートを含む。	内面がミガキ、口縁部がヨコナデ、外面がハケ後ナデ。口縁部に粘土を貼付し、沈線による文様を施す。	広口壺。	
177	〃	〃	19.4	(2.2)	-	橙 橙	不良	やや密。チャートと細粒砂を含む。	外面に細かいハケがわずかに残る。外面に沈線による鋸歯文と竹管文を施す。	広口壺。著しく摩耗する。	
178	〃	〃	-	(7.0)	-	橙 橙	良好	密。チャートを含む。	内面が横方向のハケ、外面がタタキ後縦方向のハケ。	複合口縁壺。内面は摩耗する。	
179	〃	〃	20.8	(7.2)	-	にぶい橙 にぶい橙	良好	やや密。チャートと赤色礫を含む。	胴部内面が丁寧なナデ、頸部がハケ後ミガキ、口縁部がヨコナデ、胴部外面がナデ後ミガキ。	直口壺。	
180	〃	〃	17.9	(7.6)	-	橙 橙	やや良好	密。雲母と石英、赤色礫の小礫を含む。	胴部はナデ、口縁部はヨコナデ。口縁部外面には掘凹線が3条巡る。	讃岐産か。	

遺物観察表 10

図版番号	出土地点	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面	焼成	胎土	調整及び特徴	備考
			口径	器高	底径					
181	ST-1 埋土 3	弥生土器 壺	-	(3.3)	4.5	灰黄褐 灰黄褐	良好	やや密。	内面がナデ、胴部外面がタタキ後細かい縦方向のハケ、底部外面がタタキ。	
182	〃	〃	-	(6.4)	9.9	橙 にぶい橙	良好	やや粗。チャートと赤色礫を含む。	胴部はナデ、底部外面には粗いハケ。	
183	〃	〃	-	(8.1)	5.5	にぶい黄橙 橙	やや良好	やや密。雲母と石英を含む。	ナデで、胴部外面には一部削りを施す。	搬入品。摩耗する。底部に黒斑あり。
184	〃	弥生土器 甕	16.8	(11.5)	-	褐灰 にぶい黄橙	良好	密。チャートと赤色礫を含む。	内面がナデ、外面がタタキで、胴部下半にはナデを加える。口縁部は叩き出し成形で、端部は面取り。	
185	〃	〃	13.6	(5.7)	-	にぶい黄橙 にぶい黄橙	良好	やや密。チャート等の小礫を含む。	内面がハケ、口縁部がヨコナデ、外面はタタキで口縁部にはハケを加える。口縁部は叩き出し成形。	
186	〃	〃	16.6	(6.4)	-	浅黄橙 にぶい橙	やや良好	密。	内面が粗いハケ、口縁部がヨコナデ、外面がタタキで口縁部にはハケを加える。	摩耗する。
187	〃	〃	-	(4.3)	5.2	にぶい橙 橙	やや不良	やや粗。チャートと粗粒砂を多く含む。	内面が密なハケ、外面は一部ハケが残る。外面には亀裂が入り、底部外面は一部ナデ。	摩耗する。
188	〃	〃	-	(4.2)	4.2	にぶい橙 灰黄褐	良好	やや密。チャートと赤色礫を含む。	内面がナデ、胴部外面がタタキ後ナデ、底部外面がナデ。	胴部内面に煤が付着する。
189	〃	〃	-	(8.6)	6.5	灰黄 にぶい黄橙	良好	密。チャートと赤色礫を含む。	内面がハケ後ナデ、胴部外面はタタキ、底部外面はナデ。	内外面に黒斑あり。
190	〃	〃	-	(9.5)	3.1	にぶい褐 にぶい黄橙	良好	やや粗。チャートと極粗粒砂を含む。	内面が粗いハケ、外面がタタキ後粗いハケ、底部外面がナデ。	
191	〃	〃	-	(4.2)	-	にぶい黄橙 黒	やや良好	やや密。チャートと赤色礫を含む。	ナデで、外面には一部削りの痕跡が残る。胴部外面には被熱の痕跡が残る。	摩耗する。外面に一部黒斑あり。
192	〃	〃	-	(2.9)	(3.8)	にぶい黄橙 にぶい黄橙	やや良好	密。赤色礫を含む。	内面が粗いハケ、外面がタタキで亀裂が入る。底部外面はナデ。	
193	〃	〃	-	(3.3)	(5.4)	にぶい褐 にぶい黄褐	良好	やや密。チャートと赤色礫を含む。	内面が粗いハケ、胴部外面がタタキ後ナデ、底部外面がナデ。	摩耗する。
194	〃	弥生土器 鉢	13.4	(6.7)	-	にぶい黄橙 にぶい黄橙	良好	やや密。チャートと赤色礫を含む。	内面が粗いハケ後底部に縦方向のナデを加える。外面は口縁部がナデ、体部がタタキ後ナデ。	外面に黒斑あり。
195	〃	〃	11.4	9.6	6.5	にぶい黄橙 にぶい黄橙	良好	やや密。チャートを含む。	内面が粗いハケで、底部はナデ。口縁部はヨコナデ、外面はナデ。	台付鉢。
196	〃	〃	-	(3.2)	2.5	橙 にぶい橙	やや不良	やや密。細粒砂を多く含む。	内面が細かいハケ、外面はナデで亀裂が入る	著しく摩耗する。底部外面に黒斑あり。
197	〃	〃	-	(3.4)	2.9	にぶい橙 黄灰	良好	やや密。チャートを含む。	内面は横方向の板ナデ、外面はナデ。	黒斑あり。
198	〃	〃	-	(3.3)	3.6	橙 にぶい黄橙	やや良好	やや密。チャートと赤色礫を含む。	内面が横方向の板ナデ、外面はタタキ後ナデで著しく亀裂が入る。底部外面はナデ。	
199	〃	〃	12.1	5.8	3.9	にぶい黄橙 橙	やや良好	密。	内面がナデ、体部外面がタタキ、底部外面がナデ。体部外面は若干亀裂が入る。	体部外面は著しく摩耗する。
200	〃	〃	12.1	7.1	5.9	橙 橙	良好	密。	内面が粗いハケ。	摩耗する。

遺物観察表 11

図版 番号	出土地点	器種 器形	法量 (cm)			色調	焼成	胎土	調整及び特徴	備考
			口径	器高	底径	内面・外面				
201	ST-1 埋土 3	弥生土器 鉢	16.8	6.5	9.6	橙 橙	不良	密。チャートと 赤色礫を含む。		著しく摩耗 する。
202	〃	〃	10.5	8.2	7.2	にぶい黄橙 にぶい黄橙	良好	やや粗。チャー トと赤色礫を 含む。	内面がナデ、外面がタタキ後ナデ。 底部には内面と外面に凹みが見ら れるが、貫通はしていない。	黒斑あり。
203	〃	〃	-	(5.5)	4.0	橙 にぶい褐	良好	密。チャートと 赤色礫を含む。	内面がナデまたは板ナデ、外面はナ デで体部には亀裂が入る。	外面に黒斑 あり。
204	〃	〃	11.4	5.3	-	にぶい黄橙 にぶい黄橙	良好	やや密。	内面がハケ後ナデ。	摩耗する。
205	〃	〃	9.5	5.4	-	灰黄 浅黄橙	やや 良好	やや粗。チャー トを多く含む。	底部内面がナデ、体部内面がハケ、 口縁部がヨコナデ、外面がナデで指 頭圧痕が残る。	摩耗する。外 面に黒斑あ り。
206	〃	〃	14.0	6.2	3.5	にぶい橙 橙	良好	粗。チャートと 極粗粒砂を多 く含む。	内面は口縁部にハケ後底部にナ デ。外面は口縁部がナデ、体部がタ タキ後ナデ、底部がナデ。	内面に黒斑 あり。
207	〃	弥生土器 高杯	-	(7.3)	-	明赤褐 橙	不良	密。チャートと 細粒砂を多く 含む。	内面の裾部にわずかにハケが残る。	著しく摩耗 する。
208	〃	弥生土器 手捏ね土器	5.5	3.6	-	灰黄褐 灰黄褐	やや 良好	密。	ナデで、指頭圧痕が残る。	鉢形。外面に 黒斑あり。
209	〃	〃	-	(3.9)	-	にぶい黄橙 灰黄褐	やや 良好	密。チャート を含む。	ナデで、指頭圧痕が残る。	高杯形。摩耗 する。
210	〃	土師器 高杯	-	(4.1)	9.1	にぶい橙 にぶい橙	良好	やや密。チャー トを含む。	外面が縦方向のハケ、内面がナデ で、端部には指頭圧痕が顕著に 残る。径5mmの円孔が5箇所 にあり。	
211	〃	〃	-	(7.6)	9.8	にぶい橙 にぶい橙	良好	やや密。チャー トを含む。	外面が強いナデで、一部ハケが 残る。脚端部はヨコナデ、内面はナ デで、裾部は粗いハケ。	
212	〃	〃	-	(9.3)	15.8	浅黄橙 橙	良好	密。チャート を含む。	杯部と脚外面は緻密なミガキで、脚 内面はハケ、脚端部はヨコナデ。径 1.1cmの円孔が5箇所 にあり。	脚部に黒斑 あり。
213	〃	土師器 器台	-	(4.1)	-	にぶい橙 にぶい橙	やや 良好	やや密。チャー トを含む。	外面が縦方向の緻密なミガキ、内面 がナデでしぼり目が残る。脚部に 円孔が2箇所に残存する。	
214	〃	土製品 支脚	-	(7.2)	-	灰黄褐 明黄褐	良好	やや粗。チャー トを多く含む。	先端が二股に分かれ、脚部は中空で しぼり目がみられる。ナデで指頭 圧痕が残る。	外面に黒斑 あり。
215	〃	〃	-	(7.0)	7.7	にぶい黄橙 にぶい黄橙	良好	やや粗。チャー トと赤色礫を 含む。	外面が粗いハケ、裾部と内面はナ デ。	
216	〃	土製品 不明	全長 (7.1)	全幅 (8.5)	-	橙 橙	やや 良好	密。チャート を含む。	先端がラッパ状に広がる。口縁部は 高さが異なり、基部は中空。手捏 ね成形で、指頭圧痕が顕著に 残る。	
217	〃	鉄製品 鉄鏃	全長 (4.4)	全幅 (1.9)	全厚 (0.3)	-	-	-	-	重量 5.2g。
218	ST-1 埋土 4	弥生土器 鉢	-	(5.5)	2.2	にぶい黄橙 にぶい橙	良好	やや密。チャー トと赤色礫を 含む。	内面がハケ後ナデ、外面がナデ後細 かいハケで若干亀裂が入る。	
219	ST-1 埋土 5	〃	-	(6.6)	2.6	橙 橙	良好	密。	内面がハケ後ナデ、外面がタタキ 後ナデで若干亀裂が入る。	摩耗する。
220	ST-1 P-13	土製品 杓子形土器	全長 12.9	全幅 5.3	全厚 5.9	褐 橙	やや 良好	密。	ナデで、指頭圧痕が顕著に 残る。	黒斑あり。

遺物観察表 12

図版 番号	出土地点	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面	焼成	胎土	調整及び特徴	備考
			口径	器高	底径					
221	ST-1 P-14	弥生土器 甕	16.0	(5.3)	-	にぶい黄橙 にぶい黄橙	やや 不良	やや密。チャートと赤色礫を含む。	胴部内面がナデ、口縁部内面がヨコナデ後粗いハケ、外面がタタキ。口縁部は面取り。	著しく摩耗する。
222	〃	〃	14.6	(18.5)	-	橙 橙	良好	やや密。チャートと赤色礫を含む。	内面がナデまたはヘラナデ、外面はタタキ。口縁部は叩き出し成形。	外面には一部煤が付着する。
223	ST-1 P-15	弥生土器 鉢	14.0	6.8	2.8	にぶい赤褐 橙	良好	密。チャートを 含む。	底部内面がナデ、体部内面がハケ、口縁部がヨコナデ、外面はハケで、高台はナデ。	高台あり。外面に黒斑あり。
224	ST-2 埋土1	弥生土器 甕	9.4	17.7	2.5	黒褐 黄灰	良好	やや密。	内面がハケ後ナデ及びヘラナデ、口縁部はハケ後ヨコナデ、胴部外面がタタキ後ハケ、底部はナデ。	外面に黒斑あり。
225	〃	弥生土器 鉢	13.7	7.9	2.3	にぶい橙 にぶい橙	良好	やや密。チャートを含む。	内面がハケ後ナデ、口縁部がヨコナデ、体部外面がタタキ、底部外面がナデで、底部と体部の境は削り。	摩耗する。
226	〃	〃	13.0	8.9	3.0	明赤褐 にぶい橙	良好	密。チャートを含む。	内面がハケ後ナデ、外面はタタキ後ナデで一部削り。底部外面に板状圧痕残る。口縁部は面取り。	
227	〃	〃	12.6	6.2	1.9	にぶい黄橙 にぶい黄橙	良好	やや粗。小礫を多く含む。	内面がハケ、口縁部はヨコナデ、体部外面はタタキ、底部外面は削り。	内面に黒斑あり。
228	〃	〃	10.1	6.0	2.1	褐灰 灰褐	良好	やや密。チャートを含む。	内面が細かいハケ後底部にナデを加える。外面は体部がタタキ、底部がナデ。	
229	〃	〃	11.8	7.5	1.7	にぶい褐 にぶい褐	やや 良好	やや密。チャートと赤色礫を含む。	内面が密なハケで底部にナデを加える。外面は丁寧なナデで、亀裂が入る。	
230	〃	弥生土器 ミニチュア 土器	-	(3.7)	5.4	橙 橙	やや 不良	やや密。チャートを含む。	ナデで、外面にわずかにハケが残る。	高杯形。著しく摩耗する。
231	ST-2 埋土2	弥生土器 甕	15.3	29.6	3.7	にぶい橙 にぶい橙	良好	やや密。チャートを含む。	胴部内面がナデ、口縁部内面がハケ、外面はタタキ、胴部下半にはハケを加える。口縁部は叩き出し成形。	外面の下半に煤が付着。
232	〃	〃	12.3	19.0	2.5	にぶい黄橙 にぶい橙	やや 良好	密。チャートを含む。	内面胴部下半がナデ、上半と口縁部がハケ、外面がタタキ後ナデ、底部はナデ。口縁部は叩き出し成形。	摩耗する。
233	ST-2 埋土2床面	〃	10.4	15.2	2.4	橙 橙	やや 良好	やや密。チャートと赤色礫を含む。	内面がナデ、外面はタタキで、底部はナデ。口縁部は叩き出し成形。	摩耗する。
234	ST-2 埋土2	弥生土器 鉢	-	(5.8)	6.0	にぶい褐 にぶい黄橙	良好	やや密。赤色礫と細粒砂を含む。	内面が板ナデ、外面がタタキで、底部はナデ。	高台あり。
235	〃	〃	11.1	5.1	3.8	橙 橙	良好	やや粗。チャートを含む。	内面が横方向の強いナデ、外面はタタキ後丁寧なナデ、底部外面はナデ。	黒斑あり。
236	〃	〃	11.9	7.0	3.2	にぶい黄橙 にぶい黄橙	良好	密。チャートと赤色礫を含む。	内面がハケで底部にはナデを加える。外面はタタキ後ナデ、底部外面はナデ。	黒斑あり。
237	〃	〃	10.6	7.0	2.8	橙 橙	やや 良好	やや密。細粒砂を多く含む。	内面がハケ後ナデ、外面はタタキ後丁寧なナデ、底部外面はナデ。体部外面には著しく亀裂が入る。	外面に黒斑あり。
238	〃	〃	10.5	6.5	2.7	橙 橙	やや 良好	密。	底部内面がヘラナデ、口縁部内外面がナデ、底部外面はナデ、外面の体部との境に削りを加える。	
239	〃	〃	19.2	7.1	4.4	橙 橙	やや 良好	やや粗。チャート等の小礫を多く含む。	内面がハケ後底部にナデ。外面はわずかにタタキが残る。	著しく摩耗する。
240	〃	〃	9.1	4.9	-	にぶい黄橙 にぶい黄橙	良好	密。	内面がヘラナデ後ナデ。外面は体部がタタキ後ナデ、底部が強いナデ。体部外面に亀裂が入る。	外面に黒斑あり。

遺物観察表 13

図版 番号	出土地点	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面	焼成	胎土	調整及び特徴	備考
			口径	器高	底径					
241	ST-2 埋土 2	弥生土器 手捏ね土器	7.4	7.8	3.4	にぶい黄橙 にぶい黄橙	良好	やや粗。チャー トと赤色礫を 含む。	ナデで、指頭圧痕が顕著に残る。	鉢形。 黒斑あり。
242	〃	土師器 鉢	7.9	5.2	1.5	橙 橙	良好	密。粗粒砂を少 し含む。	体部はナデ、口縁部はヨコナデ。	黒斑あり。
243	ST-2 P-1	弥生土器 壺	11.6	10.6	-	にぶい黄橙 にぶい黄橙	良好	やや密。チャー トを含む。	底部内面がナデ、胴部内面と外面が ハケで、口縁部はヨコナデである。	短頸壺。 黒斑あり。
244	〃	弥生土器 甕	-	(14.6)	-	橙 橙	良好	密。チャーと 赤色礫を含む。	胴部内面がハケ後ナデ、口縁部内面 がハケ、口縁部外面がタタキ後ハ ケ、胴部外面はタタキ。	
245	〃	弥生土器 鉢	10.6	6.5	-	にぶい橙 橙	良好	密。チャーと 赤色礫を含む。	内面は口縁部にハケ後体部にナ デ。外面はタタキ後ナデで、若干亀 裂が入る。	
246	〃	弥生土器 手捏ね土器	8.7	9.1	1.9	暗灰黄 暗灰黄	やや 良好	密。極粗粒砂を 含む。	縦方向の強いナデで、口縁部には指 頭圧痕が顕著に残る。	碗形。
247	ST-3 埋土 1	弥生土器 壺	11.3	(13.4)	-	橙 橙	良好	やや粗。細粒砂 を多く含む。	胴部内面がナデ、口縁部がヨコナデ で外面に擬凹線が巡る。外面がハケ後 ナデまたはミガキ。胴部に列点文。	広口壺。
248	〃	弥生土器 甕	16.6	(3.1)	-	黄灰 にぶい黄橙	良好	やや密。	口縁部はヨコナデ。口縁端部には擬 凹線が3条巡る。	
249	〃	〃	13.9	(8.7)	-	灰白・黒 にぶい褐	良好	やや粗。細粒砂 を多く含む。	内面がナデ、口縁部がヨコナデで、 外面がナデまたはハケ。口縁端部 には擬凹線が3条巡る。	
250	〃	弥生土器 高杯	20.4	18.5	10.7	にぶい橙 にぶい橙	やや 良好	やや密。チャー トと細粒砂を非 常に多く含む。	杯部がミガキ、口縁部がヨコナデで 擬凹線が巡る。脚部は外面がナデ、 内面が削り。脚部に円孔あり。	摩耗する。
251	ST-3 埋土 2	石製品 石包丁	全長 (9.6)	全幅 (5.0)	全厚 (0.6)	-	-	-	磨製。穿孔途中で止めている。両端 を意図的に欠く。石材は細粒の砂 岩。	重量 33.8g。
252	ST-4 埋土 1	弥生土器 壺	14.4	(4.5)	-	にぶい赤褐 にぶい褐	やや 良好	密。	内面がナデまたは粗い横方向のハ ケ、口縁端部はヨコナデ、外面は粗 い縦方向のハケ。	広口壺。
253	〃	弥生土器 甕	13.7	(7.8)	-	にぶい黄橙 にぶい黄橙	やや 良好	やや密。細粒砂 を多く含む。	胴部内面がナデ、口縁部内面が板ナ デ、口縁端部はヨコナデ、外面はタ タキ。口縁部は叩き出し成形。	摩耗する。
254	〃	弥生土器 鉢	11.4	4.5	4.0	明赤褐 明赤褐	やや 良好	やや密。チャー トと極粗粒砂 を含む。	内面が横方向の板ナデ、口縁部がヨ コナデ、体部外面はタタキ後ナデ、 底部外面はナデ。	摩耗する。
255	〃	〃	-	(3.5)	4.8	にぶい褐 にぶい橙	良好	やや密。赤色礫 と細粒砂を多 く含む。	ナデ。	
256	〃	〃	22.8	(6.2)	-	灰黄褐 灰黄褐	やや 良好	やや密。	内面がナデまたはハケ後ミガキ、口 縁部がヨコナデ、外面がナデ。	摩耗する。
257	〃	弥生土器 手捏ね土器	4.2	5.3	-	にぶい黄橙 にぶい黄橙	良好	密。	ナデで、頸部には指頭圧痕が顕著に 残る。	
258	〃	土師器 鉢	11.6	(4.8)	-	橙 橙	良好	やや密。チャー トと赤色礫を 含む。	体部がナデ、口縁部はヨコナデ。	
259	〃	土師器 高杯	-	(6.5)	11.4	にぶい橙 にぶい橙	やや 良好	やや密。チャー トと赤色礫を 含む。	ナデで、裾端部はヨコナデ。	
260	〃	土製品 支脚	-	(6.2)	10.0	にぶい橙 にぶい橙	やや 良好	粗。チャーと 赤色礫の小礫 を含む。	外面がタタキ、内面がナデ、接地面 は無調整。裾部は円形、脚部は断面 が多角形を呈する。	

遺物観察表 14

図版 番号	出土地点	器種 器形	量 (cm)			色調 内面・外面	焼成	胎土	調整及び特徴	備考
			口径	器高	底径					
261	ST-4 埋土 2	弥生土器 壺	17.1	(8.0)	-	にぶい橙 にぶい橙	良好	密。	ナデ後ハケで、口縁端部はヨコナ デ、外面にはわずかにタタキが残 る。	広口壺。
262	〃	弥生土器 甕	-	(8.4)	-	橙 橙	良好	やや粗。チャー ト等の小礫を 多く含む。	胴部内面がナデ、頸部から口縁部が ハケ、口縁部がヨコナデ、胴部外面 はタタキ。	摩耗する。口 縁部外面に 煤が付着。
263	〃	弥生土器 鉢	-	(5.4)	3.6	灰黄褐 にぶい橙	やや 良好	やや密。チャー トと粗粒砂を 含む。	ナデで、内面は特に丁寧に仕上げ る。体部外面には若干亀裂が入る。	
264	〃	〃	10.8	5.0	-	にぶい黄橙 橙	良好	密。	ナデで、口縁部はヨコナデ。外面に は亀裂が入る。	内面に黒斑 あり。
265	〃	〃	8.1	4.3	-	明赤褐 橙	やや 不良	やや粗。チャー トと細粒砂を 多く含む。	ナデで、外面には指頭圧痕が縦方向 に並ぶ。口縁部はヨコナデ。	著しく摩耗 する。
266	〃	弥生土器 手捏ね土器	-	(3.3)	2.6	橙 橙	良好	やや密。チャー トを含む。	ナデで、内面には礫が動いた痕跡が 残る。	外面に黒斑 あり。
267	〃	〃	6.2	2.4	4.8	橙 橙	良好	やや粗。小礫を 含む。	ナデで、内面にはヘラナデを加え る。体部には亀裂が入る。	摩耗する。
268	〃	土師器 鉢	10.2	3.4	-	にぶい橙 にぶい橙	良好	やや粗。チャー ト、赤色礫、極粗 粒砂を含む。	ナデで、口縁部はヨコナデ。指頭圧 痕が残る。	
269	〃	土師器 器台	8.9	(3.7)	-	にぶい黄橙 にぶい橙	やや 良好	やや密。チャー トと極粗粒砂 を含む。	ナデで、口縁部はヨコナデ。	摩耗する。
270	〃	〃	-	(5.0)	10.8	にぶい黄橙 にぶい黄橙	良好	やや粗。チャー トと極粗粒砂 を含む。	ナデで、裾端部はヨコナデ。脚部には 径 8mm の円孔が 3 箇所に残存。	摩耗する。
271	〃	石製品 砥石	全長 (14.8)	全幅 (12.2)	全厚 (5.0)	-	-	-	砂岩の割石を使用。残存部で 5 面に 使用痕が残る。1 面には黒い付着物 がみられる。	重量 1680g。
272	〃	鉄製品 鉄鏃	全長 (4.7)	全幅 (1.5)	全厚 (0.3)	-	-	-	基部は断面が矩形を呈する。圭頭 式。	重量 3.7g。
273	ST-4 P-1	弥生土器 甕	-	(6.5)	-	橙 にぶい黄褐	良好	やや粗。チャー トと極粗粒砂 を多く含む。	内面がナデ後ハケ、胴部外面がタタ キ後ハケ、底部外面はタタキ。	摩耗する。
274	〃	弥生土器 鉢	12.6	(5.6)	-	明赤褐 明赤褐	良好	密。	内面が細かいハケ、口縁部がヨコナ デ、外面がナデで若干亀裂が入る。	
275	〃	〃	14.6	6.1	3.4	橙 橙	良好	やや密。チャー ト、赤色礫、粗 粒砂を含む。	内面がヘラナデ後ナデ、体部外面が タタキ後ナデ、底部外面がナデ。	摩耗する。
276	〃	〃	11.5	6.5	-	橙 にぶい橙	良好	やや密。チャー トを含む。	内面が丁寧なナデ。口縁部がヨコナ デ、外面がタタキ後丁寧なナデで、 亀裂が入る。	外面に黒斑 あり。
277	〃	弥生土器 手捏ね土器	6.6	2.6	2.0	橙 橙	不良	やや密。極粗粒 砂を少し含む。		鉢形。著しく 摩耗する。
278	ST-4 P-5	弥生土器 甕	-	(1.7)	3.9	橙 橙	良好	やや粗。チャー トと極粗粒砂 を含む。	内面がナデ、胴部外面がタタキ、底 部外面がナデ。	摩耗する。
279	ST-5 埋土 1	弥生土器 壺	14.6	(10.0)	-	にぶい黄橙 橙	良好	密。チャーと 細粒砂を含む。	内面がナデ、口縁端部がヨコナデ、 外面がナデ後一部ハケ。外面の頸部 に突帯が 2 条、口縁部に横波状文。	複合口縁壺。 摩耗する。
280	〃	〃	-	(5.7)	-	黄灰 にぶい橙	良好	やや密。細粒砂 を含む。	ナデ。外面に突帯が 2 条とヘラ描き の斜格子文あり。	279 と 同 一 個体の可能 性あり。

遺物観察表 15

図版 番号	出土地点	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面	焼成	胎土	調整及び特徴	備考
			口径	器高	底径					
281	ST-5 埋土 1	弥生土器 壺	-	(5.3)	5.4	明黄褐 にぶい黄橙	やや 良好	やや密。チャー ト,赤色礫,極粗 粒砂を含む。	胴部外面がタタキ後ハケ, 底部外面 はナデ。	著しく摩耗 する。
282	〃	〃	-	(31.0)	7.2	褐灰 にぶい黄橙	やや 良好	やや密。細粒砂 を多く含む。	内面が粗いハケ後ナデ, 外面が密な ミガキ。大型。	外面は著しく 剥離。外面に 黒斑あり。
283	〃	弥生土器 甕	-	(8.3)	3.0	にぶい橙 にぶい橙	良好	やや密。チャー トと赤色礫を 含む。	ナデで, 指頭圧痕が残る。	胴部外面に 煤が付着。
284	〃	〃	12.9	(16.2)	4.7	にぶい橙 褐灰	やや 良好	密。	内面がナデまたはハケ。外面は口縁 部がナデ, 胴部がタタキ後ナデまた はハケ, 底部外面がナデ。	煤が付着。
285	〃	〃	15.8	(5.3)	-	橙 橙	やや 良好	密。雲母を含 む。	胴部内面がナデ, 口縁部内面と口縁 部がハケ, 口縁部外面がナデ, 胴 部外面がハケ。	阿波。 胴部外面に 煤が付着。
286	〃	〃	14.3	(24.9)	5.2	浅黄橙 橙	やや 良好	やや粗。石英等 の極粗粒砂を 含む。	底部内面がナデ, 胴部内面がハケ後 削り, 口縁部がヨコナデ, 胴部外面 が細かいハケ, 底部外面はナデ。	搬入品。摩耗 する。外面に 煤が付着。
287	〃	弥生土器 鉢	-	(3.9)	2.2	にぶい黄橙 にぶい黄橙	やや 良好	やや密。細粒砂 を含む。	内面がナデで一部削り, 体部外面が タタキ, 底部外面がナデ。	摩耗する。
288	〃	〃	14.0	5.9	5.3	にぶい黄橙 にぶい黄橙	良好	密。細粒砂を含 む。	内面は底部にナデ, 口縁部にハケ後 ミガキ, 外面は口縁部がナデ, 体部 がハケ後ミガキ, 底部がナデ。	黒斑あり。
289	〃	弥生土器 高杯	-	(9.2)	13.8	にぶい黄橙 にぶい黄橙	良好	密。赤色礫を含 む。	杯底部と脚外面がミガキ, 裾端部が ヨコナデ, 裾部内面はハケ, 脚柱部 内面はナデ。円孔が1箇所に残存。	
290	〃	〃	17.0	13.2	16.2	明赤褐 明赤褐	良好	密。極粗粒砂を 含む。	杯部と脚外面が緻密なミガキ, 裾端 部はヨコナデ, 裾内面はハケ, 脚柱 部内面はナデ。3箇所に円孔あり。	
291	〃	〃	24.6	16.3	15.1	にぶい橙 にぶい橙	良好	やや密。チャー トを含む。	杯内面がナデ後ミガキ, 口縁部がヨ コナデ, 杯外面と脚外面がミガキ, 裾部がヨコナデ, 脚内面がナデ。	円孔が4箇 所にあり。
292	ST-6 埋土 1	弥生土器 壺	-	(5.4)	9.4	にぶい黄橙 にぶい褐	良好	やや粗。チャー トと粗粒砂を 多く含む。	内面がハケ後縦方向のナデ, 外面に はわずかにハケが残る。底部外面は ナデ。	摩耗する。
293	〃	〃	-	(20.5)	-	にぶい黄橙 にぶい黄橙	良好	やや密。チャー トと極粗粒砂 を少し含む。	底部内面がナデ, 胴部内面が粗いハ ケ, 胴部外面がタタキ後ミガキ, 底 部外面がナデ。	
294	〃	弥生土器 甕	-	(4.9)	4.0	橙 にぶい橙	良好	やや密。チャー トと極粗粒砂 を含む。	内面がハケ, 胴部外面がタタキ, 底 部外面がナデ。	若干摩耗す る。
295	〃	弥生土器 鉢	15.6	9.2	6.1	にぶい黄橙 にぶい橙	やや 良好	やや密。チャー ト等の小礫を 含む。	口縁部にヨコナデ後体部内面にハ ケ, その後底部内面にナデ。体部外 面はハケ, 底部外面はナデ。	摩耗する。
296	〃	〃	13.7	7.8	-	にぶい橙 にぶい橙	良好	密。	口縁部にヨコナデ後体部内面にハ ケ, その後底部内面にナデ。外面は タタキ後丁寧なナデ。	
297	〃	〃	15.3	7.9	-	橙 橙	良好	密。	口縁部にヨコナデ後体部内面にハ ケ, その後底部内面にナデ。外面は タタキ後ナデで, 底部は削り。	
298	〃	〃	11.4	4.0	-	にぶい橙 にぶい橙	やや 良好	やや密。	内面が丁寧なナデ, 口縁部は無調 整, 体部外面は螺旋状のタタキで, 底部外面はナデ。	摩耗する。
299	〃	弥生土器 手捏ね土器	-	(3.5)	1.8	明赤褐 明赤褐	良好	密。チャートを含 む。	ナデ。	鉢形。
300	ST-6 埋土 2	弥生土器 高杯	-	(4.2)	-	にぶい黄橙 にぶい黄橙	良好	密。チャートを含 む。	杯内面は放射線状のミガキ, 杯外面 は縦方向のミガキ, 脚部はナデ。	摩耗する。

遺物観察表 16

図版 番号	出土地点	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面	焼成	胎土	調整及び特徴	備考
			口径	器高	底径					
301	ST-6 埋土 2	土師器 壺	-	(10.1)	-	橙 橙	やや 良好	密。微粒砂を含む。	底部内外面がナデ、胴部内外面が縦 方向のハケ。	摩耗する。
302	ST-6 埋土 3	弥生土器 甕	15.0	(8.9)	-	橙 橙	良好	密。チャートと 赤色礫、細粒砂 を含む。	内面がハケ、口縁部外面がナデ、胴 部外面がタタキ後ハケ。口縁端部は 面取り。頸部外面に粘土塊が付着。	
303	〃	〃	-	(3.8)	4.0	にぶい黄橙 にぶい黄橙	やや 良好	やや粗。チャー ト、赤色礫を多 く含む。	内面が粗いハケ、外面がナデで一部 ハケが残る。底部外面には直線を呈 する圧痕が残る。	
304	〃	弥生土器 高杯	-	(5.8)	-	橙 橙	やや 良好	やや粗。粗粒砂 を多く含む。	杯底部が密なミガキ、脚部がハケ。	
305	〃	弥生土器 手捏ね土器	-	(4.0)	-	にぶい褐 灰褐	良好	密。赤色礫を含 む。	内面が強いナデ、外面が縦方向のタ タキ後ナデ。	
306	ST-7 埋土 1	弥生土器 壺	22.6	(17.4)	-	橙 橙	良好	密。チャートと 粗粒砂を含む。	内面がハケまたはナデ、口縁端部が ヨコナデ、口縁部外面がハケ、胴部 外面がタタキ後ハケ。	広口壺。
307	〃	〃	-	(3.1)	1.3	にぶい黄橙 にぶい橙	良好	やや粗。チャー トと粗粒砂を 多く含む。	内面がナデで一部ミガキ、胴部外面 がハケ、底部外面がナデ。	黒斑あり。
308	〃	弥生土器 甕	-	(4.1)	4.0	褐灰 にぶい黄橙	良好	粗。チャートと 極粗粒砂を多 く含む。	内面がナデ、胴部外面がタタキ後ハ ケ、底部外面がナデ。	内面に煤が 付着。
309	〃	弥生土器 鉢	-	(3.5)	3.1	にぶい橙 にぶい橙	良好	やや密。チャー トを含む。	内面がナデ、体部外面がタタキ後ナ デ、底部外面がタタキ。体部外面は 若干亀裂が入る。	
310	〃	〃	-	(5.8)	3.6	橙 橙	やや 良好	密。	内面がナデ、体部外面がタタキ後ナ デ、底部外面がナデ。	摩耗する。
311	〃	〃	-	(4.7)	2.8	橙 橙	良好	密。チャートを 含む。	丁寧なナデ。	
312	〃	〃	21.4	(9.8)	-	橙 橙	やや 良好	密。	底部内面がナデ、体部内面がハケ、 口縁部がヨコナデ、体部外面がタタ キ後ナデ。	
313	ST-7 埋土 2	弥生土器 壺	18.6	(5.5)	-	橙 橙	良好	密。チャートを 含む。	内面がハケ、口縁端部がヨコナデ、 外面がハケ後一部横方向のナデ。	広口壺。
314	〃	〃	23.0	(2.1)	-	橙 にぶい橙	やや 不良	密。	口縁端部に粘土帯を貼付。口縁端部 がヨコナデ、外面が縦方向のハケ。	広口壺。 著しく摩耗 する。
315	〃	〃	29.0	(2.5)	-	橙 橙	良好	やや密。チャー ト、赤色礫、極粗 粒砂を含む。	口縁端部に粘土帯を貼付。口縁部は 横方向のハケで、端部はヨコナデ。 外面に櫛描波状文。	広口壺。
316	〃	〃	15.6	(8.0)	-	橙 橙	良好	やや密。チャー ト、赤色礫、極粗 粒砂を含む。	内面がナデ後口縁部にミガキ。口縁 端部がヨコナデ、口縁部外面がナ デ。頸部に粘土帯を貼付し刺突文。	直口壺。
317	〃	〃	-	(6.4)	-	にぶい橙 にぶい橙	良好	やや粗。チャー ト、石英、極粗 粒砂を含む。	胴部内面がナデ後ハケ、口縁部内外 面がハケ。頸部外面に粘土帯を貼付 し、櫛状原体による斜格子文。	
318	〃	〃	-	(6.8)	7.0	褐灰 にぶい橙	良好	やや粗。チャー ト、赤色礫、粗 粒砂を含む。	底部内面がナデ後ミガキ、胴部内面 がナデ、胴部外面がタタキ後ハケ、 底部外面がタタキ後ナデ。	
319	〃	〃	-	(10.7)	3.2	にぶい黄橙 にぶい黄橙	やや 不良	やや密。チャー ト、赤色礫、極粗 粒砂を含む。	底部内面がナデ、胴部内面がハケ、 胴部外面がタタキで下半には削り を加える。底部外面はナデ。	著しく摩耗 する。
320	〃	弥生土器 甕	12.4	(4.6)	-	橙 橙	良好	粗。赤色礫と極 粗粒砂を多く 含む。	内面にハケを施した後、口縁部にヨ コナデ、外面はタタキ。	

遺物観察表 17

図版 番号	出土地点	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面	焼成	胎土	調整及び特徴	備考
			口径	器高	底径					
321	ST-7 埋土 2	弥生土器 甕	-	(7.3)	2.9	にぶい黄橙 にぶい黄橙	良好	やや密。チャー トを含む。	内面が強いナデ、外面がタタキ後、 底部にナデ。	
322	〃	〃	18.0	(24.0)	-	橙 にぶい褐	良好	密。粗粒砂を少 し含む。	底部内面がナデ、胴部内面がハケ後 ナデ、口縁部がハケ、外面はタタキ 後底部にナデ。口縁端部は面取り。	
323	〃	弥生土器 鉢	14.6	(5.5)	-	橙 橙	やや 良好	やや密。チャー トと極粗粒砂 を多く含む。	ナデで、口縁部内面には粗い斜め方 向のハケがわずかに残る。	摩耗する。
324	〃	〃	17.2	(8.1)	-	にぶい橙 にぶい橙	やや 良好	やや粗。小礫を 含む。	内面がナデまたはハケ、口縁端部は ナデ、外面はタタキ後ナデで指頭圧 痕が残る。	
325	〃	〃	-	(3.3)	3.1	橙 橙	やや 良好	粗。チャート、 雲母、極粗粒砂 を含む。	内面がヘラナデ、体部外面がタタ キ、底部外面がナデ。	著しく摩耗 する。
326	〃	〃	-	(4.5)	2.5	にぶい橙 暗灰	良好	やや密。チャー トと粗粒砂を 含む。	内面がナデ、体部外面がタタキ後ナ デ、底部外面がナデ。	黒斑あり。
327	〃	〃	-	(5.8)	3.1	黒 明黄褐	良好	密。	内面がヘラナデ、体部外面がタタキ 後ナデ、底部外面がナデ。体部外面 には著しく亀裂が入る。	黒斑あり。
328	〃	〃	8.6	6.2	2.2	にぶい褐 にぶい褐	良好	密。	底部内面がヘラナデ、体部内面がナ デ、体部外面がタタキ後ナデ、底部 外面がナデ。	
329	〃	〃		(4.2)	3.0	橙 橙	良好	やや密。チャー トと粗粒砂を 含む。	内面がハケで底部にはナデを加え る。外面はナデ。	
330	〃	〃	16.4	7.8	3.6	にぶい橙 にぶい橙	良好	やや密。チャー トと極粗粒砂 を少し含む。	底部内面がヘラナデ、口縁部内面が ハケ、体部外面がハケ後ナデで亀裂 が入る。底部外面はナデ。	
331	〃	〃	-	(3.5)	-	橙 橙	良好	やや密。チャー トと粗粒砂を 含む。	内面がハケ後ナデ、外面がナデ。外 面には竹管状の圧痕が残る。	
332	〃	〃	11.0	(6.4)	-	にぶい橙 にぶい橙	良好	やや粗。チャー トと極粗粒砂 を含む。	底部内面がナデ、体部内面がハケ、 口縁部がナデ、外面がタタキ後ナ デ。	
333	〃	〃	14.0	6.2	-	にぶい橙 灰褐	良好	やや密。チャー トを含む。	内面がハケ後底部にナデ。口縁端部 は面取り。外面はハケ後、底部に削 りまたはナデ。	外面の一部に 煤が付着。
334	〃	〃	19.0	6.7	3.0	にぶい橙 にぶい橙	良好	密。チャートを 含む。	内面がハケ後ミガキ、口縁端部がヨ コナデ、体部外面がタタキ後ナデ、 底部外面が削り後ナデ。	
335	〃	〃	9.6	5.3	-	橙 橙	良好	密。	内面が丁寧なナデ、口縁端部がヨコ ナデ、体部外面がタタキ、底部外面 がナデ。	
336	〃	〃	12.8	4.8	-	橙 橙	良好	密。	内面がミガキ、口縁端部がヨコナ デ、外面がタタキ後ナデで、その後 ミガキ。外面には亀裂が入る。	
337	〃	〃	-	(9.2)	4.0	明赤褐 橙	良好	やや粗。チャー ト、赤色礫、極粗 粒砂を含む。	底部内面がナデ後ミガキ、体部内面が ハケ後ミガキ、体部外面はタタキ後 ナデで、その後ミガキ。底部外面はナ デ。	黒斑あり。
338	〃	弥生土器 手捏ね土器	-	(3.5)	-	褐灰 橙	良好	密。	ナデで、外面には一部ハケが残る。	
339	〃	土製品 有孔円板	全長 (4.0)	全幅 (4.1)	全厚 (0.8)	- 橙	良好	密。	ナデで、中央部には径 0.6cm の円孔 を穿つ。片面には竹管状の圧痕が残 る。	重量 11.6g。 黒斑あり。
340	〃	土製品 支脚	-	(6.3)	6.4	にぶい黄橙 にぶい黄橙	良好	やや密。細粒砂 を含む。	ナデで、器面の凹凸が著しく残る。	

遺物観察表 18

図版 番号	出土地点	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面	焼成	胎土	調整及び特徴	備考
			口径	器高	底径					
341	ST-7 埋土 2	土製品 支脚	-	9.4	6.5	- にぶい黄橙	良好	やや密。	ダンベル状の形態を呈し、上端は傾く。脚柱部は中空。調整はナデで、指頭圧痕が顕著に残る。	
342	ST-7 P-1	弥生土器 甕	-	(5.3)	1.9	橙 橙	良好	やや密。	内面がナデで、一部ハケが残る。胴部外面はタタキ。	摩耗する。
343	ST-8 埋土 1	弥生土器 壺	15.2	(5.4)	-	にぶい橙 橙	やや 良好	やや密。チャートと赤色礫を含む。	ハケまたはナデで、口縁端部はヨコナデ。	広口壺。 摩耗する。
344	〃	弥生土器 鉢	17.1	7.0	-	にぶい橙 にぶい橙	良好	やや粗。チャートと極粗粒砂を多く含む。	ナデで、底部外面には一部工具の圧痕が残る。外面には亀裂が入る。	
345	〃	弥生土器 手握ね土器	-	(3.7)	5.1	- にぶい橙	良好	やや密。小礫を含む。	脚部は中実。ナデ。	高杯形。 外面に黒斑あり。
346	〃	〃	-	(4.6)	-	にぶい橙 にぶい橙	良好	やや粗。細粒砂と極粗粒砂を含む。	ナデ。	高杯形。
347	ST-8 埋土 2	弥生土器 壺	25.0	(4.7)	-	にぶい橙 橙	やや 良好	やや密。チャートと赤色礫を含む。	内面がミガキまたはハケ、口縁端部がヨコナデ、外面がハケ。	二重口縁壺。 摩耗する。
348	〃	〃	-	(4.0)	6.6	黄灰 橙	良好	やや粗。チャート、赤色礫、粗粒砂を含む。	底部内面がナデ、胴部内面がハケ、胴部外面がタタキ後ハケ、底部外面がナデ。	
349	〃	〃	-	(5.2)	5.2	にぶい黄橙 褐灰	やや 良好	やや密。チャートと極粗粒砂を含む。	内面がナデ、胴部外面がタタキ後ナデ、底部外面がナデ。	摩耗する。
350	〃	弥生土器 甕	17.6	(9.1)	-	にぶい橙 にぶい橙	良好	やや密。チャートを含まず。	胴部内面がハケ後ナデ、口縁部内面がハケ、口縁端部がナデ、外面はタタキ後ハケ。	
351	〃	〃	-	(3.3)	4.0	にぶい橙 褐灰	良好	密。	内面がナデ、胴部外面はタタキ後ハケ、底部外面には木葉痕が残る。	黒斑あり。
352	〃	弥生土器 鉢	-	(3.6)	3.4	橙 橙	やや 良好	やや密。チャート、赤色礫、細粒砂を含む。	内面が横方向のハケ、底部外面がナデ。	摩耗する。
353	〃	〃	11.3	6.8	2.7	明赤褐 橙	やや 良好	やや粗。チャート、赤色礫、極粗粒砂を含む。	内面と口縁部外面がナデ、体部外面はナデ後ハケ、底部外面はハケ。	摩耗する。
354	〃	〃	10.0	6.3	-	にぶい黄橙 にぶい黄橙	やや 良好	密。 雲母を含む。	内面がヘラナデ、外面がタタキ後ナデで、底部には削りを加える。	摩耗する。
355	〃	弥生土器 手握ね土器	6.7	4.0	-	にぶい橙 にぶい橙	良好	やや密。チャート、赤色礫、粗粒砂を含む。	ナデで、外面には顕著に亀裂が入る。	鉢形。
356	〃	〃	8.5	2.9	-	橙 橙	良好	密。チャートと細粒砂を少し含む。	口縁部は楕円形を呈する。調整はナデ。	皿形。
357	ST-8 埋土 3	弥生土器 甕	-	(25.6)	3.7	にぶい橙 褐灰	良好	やや密。チャートと極粗粒砂を含む。	内面が頸部にハケ後ナデ、外面がタタキ後、胴部下半にハケ。底部外面はタタキ。	外面の胴部 上半に煤が 付着。
358	ST-8 埋土 4	弥生土器 壺	-	(6.5)	-	にぶい橙 にぶい橙	良好	やや粗。チャートと極粗粒砂を含む。	内面がハケ後一部ナデ、口縁部外面がナデ、胴部外面がタタキ後ナデ。	
359	ST-8 埋土 4 床面	弥生土器 甕	15.4	(7.8)	-	灰黄褐 褐灰	良好	密。	内面がハケ後ナデ、外面はタタキ。口縁部は叩き出し成形で、端部は面取り。	外面に煤が 付着。
360	〃	弥生土器 鉢	11.5	6.2	2.8	にぶい黄橙 にぶい黄橙	良好	やや密。チャートと極粗粒砂を含む。	内面がナデ、外面がタタキ後ナデ、底部外面がナデ。体部外面に若干亀裂が入る。	

遺物観察表 19

図版 番号	出土地点	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面	焼成	胎土	調整及び特徴	備考
			口径	器高	底径					
361	ST-8 埋土 4 床面	弥生土器 鉢	11.9	7.4	3.4	橙 橙	やや 良好	やや密。チャー トと赤色礫を 含む。	底部内面がナデ、口縁部内面がハ ケ、口縁端部がナデ、外面はタタキ 後体部下半にハケ。底部はナデ。	著しく摩耗 する。
362	〃	〃	11.6	5.9	4.1	にぶい黄橙 にぶい黄橙	良好	やや密。チャー トを含む。	内面が横方向のハケ、外面がナデ で、外面には亀裂が顕著に残る。	
363	〃	〃	11.3	6.9	-	にぶい橙 にぶい橙	やや 良好	やや密。チャー ト、赤色礫、極粗 粒砂を含む。	内面がハケ後底部にナデ。外面はわ ずかにタタキが残る。	著しく摩耗 する。
364	ST-8 P-1	弥生土器 鉢	17.1	7.0	1.9	にぶい橙 にぶい橙	やや 良好	やや粗。チャー トと赤色礫を 含む。	底部内面がナデ。口縁部内面はハ ケ、口縁端部はヨコナデ、外面はナ デ後、底部に削り。	摩耗する。
365	ST-8 P-12	弥生土器 壺	-	(4.3)	6.2	浅黄橙 にぶい黄橙	良好	密。チャートと 微粒砂を含む。	底部内面がヘラナデ、胴部内面がナ デまたはハケ、外面はナデ。	
366	ST-8 P-13	弥生土器 鉢	13.2	5.1	2.6	橙 橙	良好	やや密。チャー トを含む。	ナデ。口縁端部は無調整で、体部外 面はタタキ後ナデ、底部外面は削り 後ナデで、体部に若干亀裂が入る。	
367	ST-8 P-14	土師器 甕	-	(19.5)	-	にぶい黄橙 にぶい橙	やや 良好	やや密。チャー トと極粗粒砂 を含む。	内面がナデまたはハケ、外面がタタ キ後、胴部上半にハケ、胴部下半に ナデ。	内面の胴部 上半に煤が 付着。
368	ST-8 P-15	弥生土器 鉢	12.0	6.2	-	にぶい黄橙 橙	やや 良好	やや密。チャー ト、赤色礫、粗 粒砂を含む。	内面がヘラナデ、体部外面がナデ、 底部外面が削り。	著しく摩耗 する。
369	〃	〃	12.0	7.1	2.6	にぶい橙 にぶい橙	やや 良好	やや粗。チャー トと赤色礫を 含む。	内面が板ナデ、外面がナデ。	著しく摩耗 する。
370	ST-9 埋土 1	弥生土器 壺	19.4	(4.7)	-	褐灰 にぶい黄褐	やや 不良	やや粗。粗粒砂 を含む。	内面がナデまたはハケ、口縁端部が ヨコナデ、外面が縦方向のハケ。	広口壺。内面 に煤が付着。 摩耗する。
371	〃	弥生土器 甕	12.0	(15.3)	-	橙 橙	良好	密。	胴部内面がハケ後ナデ、口縁部内面 がハケ、口縁端部がナデ、外面がタ タキ後口縁部と胴部下半にハケ。	
372	〃	〃	-	(4.9)	2.7	にぶい褐 にぶい褐	良好	やや密。	内面がナデ、胴部外面が粗い縦方向 のハケ、底部外面がナデ。	内面に煤が 付着。
373	〃	弥生土器 鉢	10.4	6.3	3.6	橙 橙	良好	密。	内面が横方向のハケ、口縁端部は無 調整、体部外面がタタキ後ナデ、底 部外面がナデ。	
374	〃	〃	7.9	3.5	-	橙 橙	良好	やや粗。小礫を 含む。	内面がナデ、外面がタタキ。	
375	〃	〃	9.8	5.2	2.8	橙 橙	良好	密。チャート を含む。	内面が斜め方向の細かいハケ、外面 がナデ。	外面に黒斑 あり。
376	〃	〃	12.0	4.7	2.6	橙 橙	良好	やや粗。チャー トと極粗粒砂 を多く含む。	底部内面がナデ、体部内面が横方向 のハケ、外面がナデで渦巻き状に亀 裂が入る。	
377	〃	〃	8.5	6.2	2.5	にぶい褐 にぶい褐	良好	やや粗。チャー トと極粗粒砂 を多く含む。	手捏ね成形。内面が縦方向の強いナ デ、外面がナデ。	
378	〃	土師器 小形丸底壺	6.1	10.7	1.4	明赤褐 明赤褐	良好	密。	胴部内面がナデ、口縁部と外面の胴 部上半がナデ後ミガキ、胴部下半は ハケ後ミガキ、底部外面はナデ。	
379	〃	石製品 砥石	全長 9.9	全幅 8.7	全厚 8.7	-	-	-	下面と側面の一部に使用跡が残 る。石材は砂岩の河原石。	重量 1005g。
380	〃	鉄製品 鉄鎌	全長 7.7	全幅 2.2	全厚 0.4	-	-	-	圭頭式。	重量 14.7g。

遺物観察表 20

図版 番号	出土地点	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面	焼成	胎土	調整及び特徴	備考
			口径	器高	底径					
381	ST-9 埋土 2	弥生土器 甕	15.5	(7.4)	-	橙 橙	良好	やや密。	胴部内面が縦方向のナデ、頸部から 口縁部内面がハケ、口縁部外面がタ タキ後ハケ、胴部外面がタタキ。	胴部外面に 煤が付着。
382	〃	〃	胴径 12.0	(17.2)	3.2	暗灰黄 にぶい橙	良好	密。	胴部内面がハケ、頸部内面がナデ、 胴部外面がタタキ後ハケ、底部外面 はタタキ。	内面に黒斑 あり。
383	〃	弥生土器 鉢	9.6	6.4	2.4	にぶい黄橙 にぶい黄橙	良好	密。細粒砂を含 む。	口縁部がヨコナデ、その他はナデ。 外面には若干亀裂が入る。	
384	〃	〃	11.2	5.6	3.5	橙 橙	やや 不良	やや粗。チャー トと極粗粒砂 を含む。	内面がハケ、体部外面がタタキ後ハ ケ、底部外面がナデ。	著しく摩耗 する。
385	〃	〃	9.9	5.5	-	橙 橙	良好	密。チャートを含 む。	内面が細かいハケ、胴部外面がナ デ、底部外面が削り後ナデ。	
386	SK-1	弥生土器 甕	-	(1.0)	-	にぶい橙 にぶい橙	良好	やや密。チャー トと雲母を含 む。	口縁部はヨコナデで、凹線が2条巡 る。	口縁部に 煤が付着。
387	〃	〃	-	(12.0)	6.8	にぶい黄橙 にぶい赤褐	良好	粗。細粒砂を非 常に多く含む。	内面の胴部下半が削り、外面の胴部 下半が丁寧な縦方向のミガキ。	外面胴部下 半に煤が付 着。搬入品。
388	SK-2	土製品 土錘	全長 5.0	全厚 1.8	-	- 橙	良好	やや密。	ナデ。孔径 2.5mm。	摩耗する。 重量 12.2g。
389	SK-3	弥生土器 甕	14.1	(16.0)	胴径 12.2	にぶい黄橙 橙	良好	やや密。	内面がハケ後胴部下半にナデ。口縁端 部はヨコナデ、外面はタタキ後胴部下 半にハケ。口縁部は叩き出し成形。	
390	SK-6	弥生土器 壺	-	(3.0)	-	橙 橙	良好	やや粗。チャー トと赤色礫を 含む。	口縁端部にヨコナデ後、内面にハ ケ、外面はミガキ。外面にハケ状原 体による鋸歯文と竹管文。	複合口縁壺。
391	〃	弥生土器 甕	-	(2.4)	-	にぶい橙 にぶい橙	やや 良好	やや粗。	内面がナデ、胴部外面がタタキ、底 部外面がナデ。	
392	〃	弥生土器 鉢	-	(4.7)	-	にぶい橙 にぶい橙	やや 良好	やや密。チャー ト、赤色礫を多 く含む。	内面はナデ。	著しく摩耗 する。
393	〃	土師器 高杯	12.4	9.3	8.6	にぶい橙 にぶい橙	良好	密。チャートを含 む。	ナデで、口縁端部と裾端部はヨコナ デ。	
394	SK-13	弥生土器 甕	13.2	(5.8)	-	にぶい橙 にぶい橙	良好	やや密。小礫を 含む。	内面がハケ、外面がタタキ。口縁部 は叩き出し成形。	若干摩耗す る。
395	〃	弥生土器 高杯	-	(5.6)	-	橙 橙	やや 不良	粗。白色の細粒 砂を多く含む。	脚柱部は中空。外面がミガキ、内面 がナデで、脚柱部にはしほり目が残 る。裾部には円孔の一部が残存。	摩耗する。
396	〃	石製品 砥石	全長 (3.4)	全幅 (4.8)	全厚 (0.9)	-	-	-	残存部で一面に使用痕が残り、使用 により摩耗する。石材は砂岩である。	重量 25.2g。
397	SK-18	弥生土器 甕	-	(4.0)	-	褐灰 橙	良好	やや粗。チャー トを含む。	内面が板ナデ、胴部外面が縦方向の ハケ、底部外面はハケ。	内面に黒斑 あり。
398	〃	石製品 磨石・叩石	全長 (12.1)	全幅 (10.0)	全厚 (5.5)	-	-	-	両端と表裏の4面に敲打痕。側面 の一部は磨石として使用。片端と一側 面に朱が付着。石材は細粒の砂岩。	重量 980g。
399	SK-20	弥生土器 壺	-	(6.6)	-	褐灰 にぶい橙	やや 不良	やや粗。チャー ト、赤色礫を多 く含む。	内面に指頭圧痕が残る。外面はタタ キ後ハケ。	広口壺。 著しく摩耗 する。
400	〃	〃	-	(7.0)	-	にぶい橙 にぶい橙	良好	密。小礫を含 む。	頸部内面がナデ、その他は縦方向の ハケ。頸部外面に粘土帯を貼付し、 ヘラ描きの斜格子文。	広口壺。

遺物観察表 21

図版 番号	出土地点	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面	焼成	胎土	調整及び特徴	備考
			口径	器高	底径					
401	SK-20	弥生土器 壺	-	(14.0)	5.0	褐灰 にぶい橙	やや 不良	やや粗。チャー ト、赤色礫を多 く含む。	底部内面がナデ、胴部内面が横方向 の粗いハケ、胴部外面がタタキ後一 部ハケ。	著しく摩耗 する。
402	〃	弥生土器 甕	-	(5.8)	5.1	灰黄褐 にぶい黄橙	良好	やや粗。チャー トと石英を含 む。	内面がナデ、胴部外面がタタキ後ハ ケ、底部外面がタタキ後ナデ。	
403	〃	〃	-	(4.4)	4.2	橙 にぶい黄橙	良好	やや密。小礫を 多く含む。	内面がナデ、胴部外面がタタキ、底 部外面がタタキ後ナデ。	
404	〃	〃	-	(2.2)	3.7	にぶい橙 にぶい橙	やや 良好	密。チャートと 赤色礫を含む。	内面がナデ、胴部外面がタタキ後ハ ケ、底部外面がナデ。	摩耗する。
405	〃	弥生土器 甌	14.0	11.0	-	にぶい黄橙 にぶい黄橙	やや 良好	やや密。チャー ト、赤色礫、細粒 砂を多く含む。	内面がハケ、口縁部がヨコナデ、体 部外面がタタキ、底部外面がナデ。 底部に径7.5mmの円孔あり。	若干摩耗す る。
406	〃	弥生土器 鉢	14.4	(4.5)	-	にぶい黄橙 橙	やや 良好	密。赤色礫を含 む。	内面がナデ、口縁部がヨコナデ、外 面がタタキ。	摩耗する。
407	〃	土師器 鉢	9.4	(2.1)	-	にぶい橙 にぶい橙	やや 良好	やや密。粗粒砂 を含む。	ナデで、口縁端部はヨコナデ。	
408	〃	土師器 高杯	-	(6.9)	9.3	橙 橙	良好	やや密。チャー トと赤色礫を含 む。	外面はミガキ、裾端部はヨコナデ、 内面はナデ。脚柱部にはしほり目が 残る。4箇所に径6.5mmの円孔あり。	
409	〃	土師器 器台	-	(3.5)	7.9	橙 橙	やや 良好	密。チャートと 赤色礫を含む。	ナデで、裾端部はヨコナデ。2箇所 に径10.5mmの円孔を穿つ。	
410	SD-2	弥生土器 甕	15.2	(4.4)	-	橙 橙	やや 良好	やや密。チャー トと粗粒砂を含 む。	頸部内面がナデ、頸部外面はタタ キ。	著しく摩耗 する。
411	〃	〃	-	(1.7)	4.0	にぶい橙 にぶい橙	良好	密。チャートを 含む。	ナデ。	
412	〃	弥生土器 鉢	10.2	3.8	4.4	橙 橙	やや 良好	密。チャートと 極粗粒砂を含 む。	内面がヘラナデ、口縁部がヨコナ デ、外面はナデ。	若干摩耗す る。
413	〃	土製品 支脚	-	(8.2)	9.2	にぶい橙 にぶい橙	良好	やや密。チャー トと細粒砂を含 む。	外面がタタキ、上端と内面がナデ。 外面は多角形を呈する。	
414	SX-1	弥生土器 甕	-	(5.3)	-	浅黄橙 橙	やや 良好	やや粗。チャー ト、赤色礫、極粗 粒砂を含む。	内面がハケ後底部にナデ。外面は胴 部がタタキ、底部がナデ。	著しく摩耗 する。
415	SX-2	弥生土器 壺	18.4	(3.7)	-	にぶい橙 にぶい橙	良好	やや粗。チャー トと粗粒砂を 多く含む。	内面がナデまたは横方向のミガ キ、口縁端部がヨコナデ、外面がナ デ。	広口壺。若干 摩耗する。
416	〃	〃	-	(5.6)	-	にぶい黄橙 橙	やや 不良	やや密。チャー トと極粗粒砂 を含む。	頸部内面がナデ、口縁部外面がハ ケ。	広口壺。 摩耗する。
417	〃	弥生土器 甕	16.2	(5.7)	-	暗灰黄 にぶい橙	良好	精良。雲母を含 む。	胴部内面がナデで指頭圧痕が残 る。口縁部はヨコナデ、胴部外面が ハケ。	外面の一部 に煤が付 着。阿波。
418	〃	〃	-	(7.8)	4.3	にぶい橙 灰褐	やや 良好	やや密。チャー トを含む。	内面がハケ後ナデ、胴部外面が縦方 向のハケ、底部外面がナデ。	胴部外面に煤 が付着。著し く摩耗する。
419	〃	弥生土器 鉢	11.1	(3.9)	-	にぶい褐 にぶい褐	良好	密。粗粒砂を含 む。	体部は丁寧なナデ、口縁部はヨコナ デ。	
420	〃	〃	-	(3.6)	3.5	にぶい橙 にぶい橙	良好	密。チャートを 含む。	内面がヘラナデ、外面はナデ。	

遺物観察表 22

図版 番号	出土地点	器種 器形	法量 (cm)			色調		焼成	胎土	調整及び特徴	備考
			口径	器高	底径	内面・外面					
421	SX-2	弥生土器 高杯	-	(4.9)	-	にぶい橙 にぶい橙	やや 良好	やや粗。チャー ト,赤色礫,粗粒 砂を多く含む。	脚柱部は中空で,円孔の一部が3箇 所に残存。調整はナデで,外面には わずかに縦方向のハケが残る。	摩耗する。	
422	〃	〃	-	(4.8)	-	褐灰 にぶい橙	良好	やや粗。細粒砂 を含む。	外面が縦方向のハケ,内面がナデ。		
423	〃	土師器 鉢	10.6	4.1	-	にぶい橙 にぶい橙	良好	密。チャートと 粗粒砂を含む。	調整はナデで,指頭圧痕が顕著に残 る。口縁部はヨコナデ。		
424	〃	土製品 支脚	-	(4.7)	-	橙 橙	良好	密。	脚柱部は中実。調整は上端が粗いナ デ,外面がナデで一部ミガキ,内面 はハケまたはナデ。	黒斑あり。	
425	〃	鉄製品 短刀	全長 (8.2)	全幅 (2.6)	全厚 (0.7)	-	-	-			重量 21.9g。
426	P-1	弥生土器 鉢	-	(2.6)	3.4	灰オリーブ 橙	良好	密。	内面が横方向のハケ,外面がナデ。		
427	P-2	弥生土器 甕	14.2	(6.0)	-	橙 灰黄褐	良好	密。	内面がハケ,外面がタタキ。口縁端 部は面取りを行う。		
428	P-4	弥生土器 ミニチュア 土器	4.4	2.9	-	にぶい黄褐 灰黄褐	やや 良好	やや密。	ナデで,指頭圧痕が残る。	鉢形。	
429	〃	〃	-	(2.5)	4.6	にぶい黄橙 灰黄褐	良好	やや粗。小礫を 多く含む。	ナデ。	高杯形。	
430	P-5	弥生土器 手捏ね土器	7.4	2.7	-	にぶい橙 にぶい橙	良好	やや密。	ナデで,口縁部はヨコナデ。	鉢形。	
431	P-6	土製品 支脚	5.3	5.7	6.9	にぶい橙 にぶい橙	良好	やや粗。チャー トと赤色礫を 含む。	脚柱部は中実で,上端は浅い皿状。 口縁部は片口状を成し,高さが異な る。ナデ。		
432	P-7	弥生土器 鉢	15.1	4.5	-	にぶい褐 にぶい橙	良好	やや密。チャー トを含む。	体部はナデ,口縁部はヨコナデ。	黒斑あり。	
433	P-8	〃	9.8	3.4	3.1	橙 にぶい橙	良好	密。	ナデ。外面に亀裂が入る。		
434	〃	弥生土器 手捏ね土器	7.4	2.4	3.8	にぶい黄橙 灰黄褐	良好	やや密。細粒砂 を含む。	ナデで,指頭圧痕が残る。口縁部は ヨコナデ。	鉢形。	
435	P-9	弥生土器 壺	14.0	(4.5)	-	にぶい橙 にぶい橙	良好	密。チャートを 含む。	内面がナデ,口縁部がヨコナデ, 外面が縦方向のハケ。	複合口縁壺。	
436	P-10	土師器 鉢	13.0	7.0	-	にぶい黄橙 にぶい黄橙	やや 良好	密。チャートを 含む。	内面がハケ後ナデ,口縁部がヨコナ デ,体部外面がハケ後ミガキ,底部 外面がナデ後ミガキ。		
437	P-11	弥生土器 鉢	-	(4.1)	4.6	橙 橙	良好	やや粗。極粗粒 砂を含む。	内面が丁寧なナデ,外面はナデで亀 裂が入る。		
438	P-12	〃	-	(2.5)	3.2	黒褐 にぶい褐	良好	やや密。チャー トを含む。	内面がハケ,体部外面がタタキ後ナ デ,底部外面がナデ。		
439	P-13	弥生土器 壺	20.0	(5.7)	-	橙 橙	良好	密。	口縁部部にヨコナデを行った後,内 面にハケ,外面にハケ後タタキ。	広口壺。	
440	P-14	弥生土器 鉢	-	(4.7)	5.0	橙 橙	良好	密。	内面が横方向のハケ,外面がナデで 亀裂が入る。		

遺物観察表 23

図版 番号	出土地点	器種 器形	法量 (cm)			色調		焼成	胎土	調整及び特徴	備考
			口径	器高	底径	内面・外面					
441	P-15	弥生土器 甕	10.8	(14.6)	-	にぶい 橙 にぶい 橙	良好	やや密。赤色礫 を含む。	胴部内面がナデ、口縁部内面がハケ、口縁端部がヨコナデ、口縁部外面がハケ、胴部外面がタタキ後ナデ。		
442	P-16	〃	13.2	17.3	3.0	橙 橙	やや 良好	やや密。チャートと極粗粒砂を含む。	胴部内面がナデまたはハケ、口縁部がハケ、胴部外面はタタキ後ハケ、底部外面はハケ。	胴径13.8cm。 摩耗する。	
443	P-17	〃	-	(4.1)	3.3	橙 黒褐	良好	やや密。極粗粒砂を含む。	内面が板ナデ後一部ナデ、胴部外面が縦方向のハケ、底部外面がハケ。		
444	P-18	土師器 鉢	11.1	7.0	2.3	橙 橙	やや 良好	やや密。チャートと粗粒砂を含む。	口縁部がヨコナデで、その他はナデとみられるが摩耗するため不明。	著しく摩耗する。	
445	ST-10 埋土1	弥生土器 壺	23.2	(2.3)	-	橙 橙	やや 良好	密。チャートを 含む。	ハケで、口縁端部はその後ヨコナデ。外面に線描きの鋸歯文。	広口壺。	
446	〃	〃	-	(2.7)	5.7	にぶい 橙 にぶい 橙	良好	やや粗。チャートと赤色礫を含む。	内面が縦方向の強いナデ、底部外面がナデ。	摩耗する。	
447	〃	〃	-	(8.2)	5.8	にぶい 橙 にぶい 橙	やや 良好	やや密。チャートを含む。	内面がハケ後ナデ、胴部外面が縦方向のハケ、底部外面がナデ。	摩耗する。	
448	〃	弥生土器 甕	-	(3.2)	6.3	灰 灰	やや 良好	やや粗。チャートを含む。	内面にハケがわずかに残り、胴部外面はタタキ後ハケ、底部外面がナデ。	黒斑あり。	
449	〃	〃	-	(3.6)	3.1	にぶい 橙 オリーブ 黒	良好	密。	内面が横方向のハケ、胴部外面がタタキ後ナデ、底部外面がナデ。	摩耗する。	
450	〃	弥生土器 鉢	11.7	6.6	3.9	にぶい 黄橙 にぶい 黄橙	良好	やや密。チャートを含む。	体部内面がナデ、口縁部内面が横方向のハケ、体部外面がタタキ後ナデ、底部外面がナデ。		
451	〃	土師器 甕	-	(12.5)	-	にぶい 橙 にぶい 橙	やや 良好	やや密。チャートと赤色礫を含む。	内面が頸部に横方向のハケ後胴部に縦方向の削り、外面が縦方向のハケ。		
452	〃	土師器 甕	全長 (4.9)	全幅 (1.9)	全厚 (3.5)	- にぶい 黄橙	やや 良好	やや密。	ナデで、指頭圧痕が残る。	把手。	
453	〃	須恵器 蓋	12.6	(3.9)	-	黄灰 灰	良好	やや密。	回転ナデ後、天井部外面に回転ヘラ削り。		
454	〃	須恵器 杯	11.8	(3.9)	-	灰白 灰白	良好	密。	回転ナデ後、底部内面にナデ。	受け部径 14.2cm。	
455	〃	〃	10.8	5.1	-	灰 灰	良好	密。	回転ナデ後、底部内面にナデ。底部外面は回転ヘラ切り後、回転ヘラ削りとナデ。	受け部径 13.2cm。	
456	〃	〃	11.5	4.0	-	灰 灰	良好	密。	回転ナデで、底部外面は回転ヘラ削り後ナデ。	受け部径 13.6cm。	
457	〃	〃	-	(3.4)	-	黄灰 黄灰	良好	やや密。	回転ナデ。	受け部径 14.2cm。	
458	〃	〃	13.3	4.2	6.6	灰白 灰黄	やや 良好	密。	回転ナデ後、底部内外面にナデ。	器面は著しく荒れる。	
459	〃	須恵器 高杯	13.3	6.5	9.8	灰黄 灰	良好	密。	回転ナデ後、脚部内面は一部ナデ。	受け部径 15.3cm。	
460	〃	〃	-	(2.0)	10.6	灰黄 灰黄	良好	密。	回転ナデ。		

遺物観察表 24

図版 番号	出土地点	器種 器形	量 (cm)			色調 内面・外面	焼成	胎土	調整及び特徴	備考
			口径	器高	底径					
461	ST-10 埋土 1	須恵器 壺	-	(3.9)	8.0	灰 灰オリーブ	良好	密。	回転ナデ後、胴部外面にカキ目、底部外面にヘラ削り。	
462	〃	土製品 支脚	3.4	(4.1)	-	- にぶい橙	良好	やや密。極細粒砂を含む。	ナデ後、脚柱部に縦方向のヘラナデ。	
463	ST-10 埋土 2	須恵器 蓋	14.4	3.8	-	灰黄 黄灰	やや 良好	密。	回転ナデ。天井部外面はヘラ削り後ナデ。	
464	〃	須恵器 杯	12.0	(2.2)	-	灰白 灰白	やや 不良	密。	回転ナデ。	受け部径 14.2 cm。著しく摩耗する。
465	ST-10 埋土 3	弥生土器 甕	-	(8.8)	-	にぶい黄橙 にぶい橙	やや 良好	やや密。チャートと赤色礫、細粒砂を含む。	内面が縦方向のナデ、胴部外面がタタキ後縦方向のナデ、底部外面がナデ。	摩耗する。
466	〃	土師器 甕	14.0	(6.1)	-	にぶい赤褐 にぶい黄橙	やや 良好	やや粗。	ナデで、口縁部はヨコナデ。	
467	〃	〃	26.0	(6.5)	-	にぶい橙 橙	やや 不良	やや密。赤色礫と細粒砂を多く含む。	胴部内面が横方向のハケ、頸部内面がナデ、口縁部がヨコナデ、胴部外面は縦方向のハケ。指頭圧痕が残る。	摩耗する。
468	〃	土師器 甌	全長 (5.2)	全幅 (3.7)	全厚 (4.5)	- にぶい褐	やや 良好	粗。赤色礫と細粒砂を多く含む。	ナデ。	把手。
469	〃	土師器 器台		(3.1)	-	橙 橙	やや 良好	やや密。チャートを含む。	脚部はナデ。	摩耗する。
470	〃	須恵器 甕	19.0	(6.7)	-	灰黄 黄灰	良好	密。	回転ナデで、胴部外面にはカキ目。口縁部内面にはヘラ状工具による沈線、胴部内面には当て具痕が残る。	
471	〃	須恵器 甕	15.1	(10.3)	-	灰 灰	やや 良好	密。細粒砂を多く含む。	回転ナデで、外面には凹線と沈線による文様あり。	
472	ST-10 埋土 4	弥生土器 壺	-	(3.7)	-	橙 にぶい黄橙	やや 不良	やや粗。チャート、赤色礫、雲母粗粒砂を含む。	外面はヨコナデ。	複合口縁壺。摩耗する。
473	〃	〃	-	(3.3)	4.5	にぶい黄橙 にぶい黄橙	やや 不良	やや密。チャートを含む。	内面はナデ。	著しく摩耗する。
474	〃	〃	-	(5.3)	5.2	にぶい黄橙 橙	やや 良好	やや密。チャートを含む。	底部内面がナデ、胴部内外面がハケ。	摩耗する。
475	〃	弥生土器 甕	15.4	(7.2)	-	橙 明赤褐	良好	やや密。チャートを含む。	内面の胴部と頸部がナデ、口縁部がハケ。外面は口縁部がナデ、胴部がタタキ後ハケ。	
476	〃	弥生土器 鉢	-	(2.8)	2.9	浅黄橙 浅黄橙	やや 良好	やや粗。赤色礫を含む。	内面がヘラナデ、外面はタタキ。	摩耗する。
477	〃	土師器 甕	13.5	(8.4)	-	橙 にぶい橙	良好	やや粗。チャートを含む。	内面の胴部と口縁部がハケ、頸部がナデ、口縁部外面がナデ、胴部外面がタタキ後ハケ。	胴部外面に煤が付着。
478	〃	土師器 高杯	-	(5.0)	11.4	橙 にぶい橙	やや 良好	密。	裾端部がヨコナデ、内面がナデ。	摩耗する。
479	〃	須恵器 蓋	14.8	(4.5)	-	橙 にぶい黄橙	不良	やや粗。チャートと赤色礫を含む。	回転ナデ後、天井部外面に回転ヘラ削り。	摩耗する。
480	〃	〃	14.3	4.0	-	灰白 灰白	不良	やや密。チャートを含む。		著しく摩耗する。

遺物観察表 25

図版 番号	出土地点	器種 器形	法量 (cm)			色調	焼成	胎土	調整及び特徴	備考
			口径	器高	底径	内面・外面				
481	ST-10 埋土 4 床面	須恵器 蓋	-	(2.1)	-	灰黄 黄灰	良好	密。	回転ナデで、天井部外面は回転ヘラ 切り後丁寧なナデ。	
482	ST-10 埋土 4	須恵器 壺	16.0	(4.8)	-	灰黄 にぶい黄	やや 良好	密。	回転ナデで、頸部内面にはナデを加 える。	
483	〃	〃	-	(11.3)	-	灰黄 灰	やや 良好	やや密。	内面の胴部下半がナデ、上半が回転 ナデ。外面は回転ナデ。	
484	ST-10 埋土 4 床面	須恵器 甗	-	(5.0)	4.4	灰 黄灰	やや 良好	やや粗。細粒砂 を多く含む。	回転ナデで、底部外面には回転ヘラ 削り。外面に凹線、ハケ状工具の圧 痕、脚部は径 1.6cm の円孔あり。	
485	ST-10 埋土 4	石製品 叩石・磨石	全長 12.4	全幅 6.9	全厚 4.4	-	-	-	両端と表裏面の 4 箇所に使用痕。中 心に敲打痕、両端は摩耗して平滑に なる。石材は砂岩の河原石。	重量 600g。
486	ST-10 埋土 5	土師器 高杯	-	(4.1)	-	橙 橙	やや 良好	やや密。		摩耗する。
487	〃	須恵器 蓋	13.9	(3.7)	-	灰黄 黒	やや 良好	密。	回転ナデで、天井部外面は回転ヘラ 削り後ナデ。	
488	ST-10 埋土 5 床面	須恵器 高杯	7.4	8.1	8.0	黄灰 灰白	やや 良好	やや密。	無蓋高杯。回転ナデ後、外面の杯底 部に回転ヘラ削り。	
489	ST-10 カマド	土師器 甗	19.4	(7.5)	-	橙 橙	やや 不良	やや粗。赤色礫 と粗粒砂を多 く含む。	口縁部がヨコナデ、胴部外面が縦方 向のハケ後横方向のハケ。	著しく摩耗 する。
490	〃	〃	22.6	(11.8)	-	にぶい橙 橙	やや 良好	密。	内面が横方向のハケ後、下半に縦方 向のナデ、口縁部がヨコナデ、胴部 外面がハケ。	
491	〃	土師器 高杯	14.7	11.9	11.4	橙 橙	やや 不良	やや粗。チャー トと細粒砂を 多く含む。	脚部がナデ。	著しく摩耗 する。
492	ST-11 埋土 2	弥生土器 鉢	-	(2.5)	2.4	黒 にぶい黄橙	良好	やや粗。チャー トを含む。	内面がナデ、体部外面がタタキ後ハ ケ、底部外面がナデ。	
493	〃	須恵器 杯	-	(2.0)	5.4	灰 灰	良好	やや密。細粒砂 多くを含む。	内面と体部外面が回転ナデ、底部外 面がナデ。	
494	〃	須恵器 甗	21.4	(6.0)	-	灰 灰	不良	密。	胴部内面がナデ、口縁部がヨコナ デ、胴部外面がカキ目。	
495	ST-11 埋土 3	弥生土器 甗	-	(5.1)	3.8	橙 橙	良好	やや粗。チャー トと極粗粒砂 を含む。	内面がナデ、胴部外面がタタキ後ナ デ、底部外面がナデ。	摩耗する。
496	〃	弥生土器 鉢	-	(3.7)	2.0	橙 橙	良好	やや密。	外面がナデ。	摩耗する。
497	〃	須恵器 不明	38.4	(5.1)	-	暗灰黄 灰	良好	やや密。	体部内面がナデ、口縁部がヨコナ デ、体部外面は格子状のタタキ後一 部ハケ。底部内面に当て具痕。	内面と体部 外面に自然 釉。
498	ST-11 P-5	須恵器 杯	12.0	(2.5)	-	灰黄褐 にぶい褐	良好	密。	回転ナデ。	著しく摩耗 する。
499	ST-11 カマド	須恵器 高杯	-	(5.4)	5.0	灰オリーブ 灰オリーブ	やや 不良	密。小礫を含 む。	回転ナデ。外面は凹線が 1 条、長方 形とみられる透かしの一部がみら れる。	
500	〃	土師器 不明	18.8	(5.6)	-	橙 明赤褐	不良	やや密。	外面にはハケ調整がわずかに残る。	著しく摩耗 する。

遺物観察表 26

図版 番号	出土地点	器種 器形	量 (cm)			色調 内面・外面	焼成	胎土	調整及び特徴	備考
			口径	器高	底径					
501	ST-11 カマド	須恵器 杯	11.6	(2.3)	-	浅黄 灰白	不良	密。	回転ナデ。	著しく摩耗 する。
502	〃	須恵器 壺	15.2	(4.6)	-	浅黄 浅黄	不良	密。	外面に凹線が2条巡る。	著しく摩耗 する。
503	SK-34	弥生土器 甕	-	(2.8)	4.4	黒褐 にぶい黄橙	良好	やや密。極粗粒 砂を含む。	内面がナデ, 外面がタタキ。	摩耗する。
504	SD-5	〃	-	(14.6)	-	灰黄褐 灰黄褐	良好	密。チャートを含 む。	内面の胴部下半がナデ, 胴部上半が ハケ後ナデ, 頸部内面がハケ, 胴部 外面はタタキ, 底部外面はナデ。	
505	〃	〃	13.9	20.3	3.0	にぶい橙 にぶい橙	良好	やや密。チャー トと赤色礫を 多く含む。	内面は胴部下半がハケ, 胴部上半が ナデ, 口縁部がハケ。外面は胴部が タタキ後下半にハケ, 底部がナデ。	黒斑あり。
506	〃	弥生土器 鉢	10.3	6.8	2.7	浅黄橙 浅黄橙	良好	密。チャートを含 む。	内面が口縁部にミガキ後ナデ, 口縁 端部はヨコナデ, 外面はナデ後体部 下半にハケ。底部外面に木葉痕。	
507	〃	〃	10.3	4.4	4.6	橙 橙	良好	やや密。チャー トを含む。	内面がミガキ後一部ナデ, 外面はナ デで, 体部には亀裂が入る。	黒斑あり。
508	〃	〃	-	(4.4)	-	にぶい橙 にぶい橙	良好	やや密。チャー トと粗粒砂を 含む。	ナデで, 外面には亀裂が入る。	
509	SX-3	〃	-	(3.1)	-	にぶい橙 にぶい橙	良好	やや密。	ミガキ。外面は突帯を2条貼付し, 刻み目を施す。	
510	〃	土師器 高杯	-	(4.0)	9.8	にぶい橙 にぶい黄橙	良好	やや密。	削りで, 裾部はヨコナデ後ハケ。	
511	〃	土師器 甌	25.7	(9.0)	-	明黄褐 明黄褐	良好	やや密。チャー トを含む。	内面が縦方向の削り, 口縁端部がヨ コナデ, 外面が縦方向の粗いハケ。	
512	〃	〃	全長 (5.4)	(5.7)	-	橙 にぶい橙	やや 良好	粗。チャートと 赤色礫を多く 含む。	胴部内面は横方向のナデ。	把手。
513	〃	須恵器 杯	13.1	(2.3)	-	灰 灰	良好	密。極細粒砂を 含む。	回転ナデ。	受け部径 15.4cm。
514	SX-3 カマド 埋土1	土師器 甕	19.8	(16.7)	-	にぶい黄橙 にぶい黄橙	良好	やや粗。細粒砂 を多く含む。	内面は胴部下半がナデ後縦方向の 削り, 胴部上半がナデ, 口縁部がヨ コナデ, 外面がナデ。	
515	SX-3 カマド 埋土2	〃	13.7	15.4	-	にぶい黄橙 にぶい黄橙	やや 良好	やや粗。細粒砂 を多く含む。	底部内面がナデ, 胴部内面が削り, 口縁部がヨコナデ後ハケ, 外面が粗 いハケ。	
516	〃	土師器 甌	-	(12.6)	-	にぶい黄橙 にぶい黄橙	良好	やや密。チャー ト, 赤色礫, 細粒 砂を多く含む。	胴部内面が縦方向の削り, 外面が縦 方向の粗いハケ, 把手はナデ。	把手。
517	〃	土師器 高杯	14.0	13.2	10.2	にぶい黄橙 にぶい黄橙	良好	やや密。細粒砂 多くを含む。	内面と口縁部外面がナデ, 外面の杯 底部と脚部が削り, 裾部はナデ, 脚 内面がナデ。	
518	SX-4	土師器 甌	-	(3.9)	12.1	橙 橙	良好	密。極粗粒砂を 含む。	ナデで, 端部はヨコナデ。	
519	〃	〃	-	(12.0)	11.8	橙 橙	良好	やや密。チャー トと赤色礫を 含む。	胴部内面がナデ後縦方向の削り, 端 部がヨコナデ, 外面がナデ。	
520	P-19	須恵器 杯	10.5	3.3	-	灰 灰白	やや 良好	やや密。小礫を 含む。	回転ナデで, 底部内面にナデ, 底部 外面に回転ヘラ削りを加える。	受け部径 12.5cm。

遺物観察表 27

図版 番号	出土地点	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面	焼成	胎土	調整及び特徴	備考
			口径	器高	底径					
521	P-20	須恵器 壺	-	(1.5)	-	にぶい黄橙 にぶい黄橙	やや 良好	密。	回転ナデ後、天井部内面にナデ、天井部外面に回転ヘラ削り。	
522	P-21	須恵器 杯	12.1	(3.9)	7.4	灰黄 灰黄	良好	密。	回転ナデで、底部外面は回転ヘラ削り。	
523	P-22	土師器 甕	18.0	(16.9)	-	明黄褐 橙	やや 良好	粗。チャート、赤色礫、極粗粒砂を多く含む。	胴部外面に縦方向の粗いハケがわずかに残る。	著しく摩耗する。外面に黒斑あり。
524	〃	須恵器 壺	11.2	(3.6)	-	浅黄 浅黄	不良	密。	回転ナデ。	著しく摩耗する。
525	P-23	須恵器 杯	-	(1.3)	5.6	黄灰 黄灰	良好	やや密。	回転ナデ後、底部外面に回転ヘラ削り。	
526	SB-1	須恵器 壺	-	(2.4)	-	灰 灰	良好	密。	回転ナデ。	
527	SK-35	土師器 盤	-	(2.2)	11.0	にぶい黄橙 にぶい黄橙	良好	密。	内面がミガキ、底部外面が回転ヘラ切り後ナデ。	摩耗する。
528	〃	須恵器 杯	11.1	(2.4)	-	灰 灰	やや 良好	密。	回転ナデ。	受け部径 13.6cm。
529	〃	〃	12.0	(2.9)	-	黄灰 黄灰	やや 良好	密。	回転ナデで、底部内面にはナデを加える。	受け部径 14.3cm。
530	〃	鉄製品 刀子	全長 10.6	全幅 1.3	全厚 0.5	-	-	-		重量 14.7g。
531	SK-37	須恵器 杯	-	(2.3)	7.8	暗灰黄 暗灰黄	やや 不良	密。		摩耗する。
532	SK-38	弥生土器 壺	-	(5.0)	-	橙 橙	良好	密。チャートを含む。	胴部内面がナデ、口縁部内面がヘラナデ、口縁部外面はタタキ後ナデ、胴部外面はタタキ後一部ナデ。	
533	〃	弥生土器 甕	-	(3.7)	3.2	橙 にぶい褐	やや 良好	やや粗。極細粒砂を含む。	内面が縦方向のハケ、胴部外面はタタキ後丁寧なナデ、底部外面はナデ。	
534	〃	〃	-	(3.3)	2.6	黒褐 にぶい黄橙	良好	やや粗。粗粒砂を多く含む。	内面がナデ、外面が縦方向のハケ。	
535	〃	弥生土器 鉢	10.7	(4.8)	7.6	灰褐 黒褐	良好	粗。小礫と極粗粒砂を含む。	内面がナデ、口縁部がヨコナデ、外面がナデ。	口縁部外面に煤が付着。
536	〃	〃	-	(2.9)	3.4	にぶい黄褐 にぶい黄褐	やや 良好	やや粗。細粒砂を多く含む。	底部内面にヘラナデがわずかに残る。	著しく摩耗する。
537	〃	弥生土器 高杯	-	(6.4)	-	橙 橙	やや 良好	やや密。細粒砂を含む。	外面がナデまたは縦方向のハケ、内面は裾部が横方向のハケ、脚柱部がヘラナデでしまり目が残る。	著しく摩耗する。
538	〃	須恵器 壺	5.9	(3.8)	-	灰 灰オリーブ	良好	密。	内面が回転ナデ。	器面は荒れる。
539	〃	土師質土器 椀	16.8	(4.6)	-	にぶい黄橙 にぶい黄橙	やや 良好	やや密。極細粒砂を含む。	内面が横方向のミガキ、外面が回転ナデ。	
540	〃	〃	17.8	(4.0)	-	橙 橙	良好	密。	内面が横方向のミガキ、外面が回転ナデ。	

遺物観察表 28

図版 番号	出土地点	器種 器形	法量 (cm)			色調		焼成	胎土	調整及び特徴	備考
			口径	器高	底径	内面・外面					
541	SK-38	土師質土器 椀	17.0	(4.2)	-	橙 橙	やや 良好	やや密。赤色礫 と細粒砂を多 く含む。	回転ナデで、ロクロ目が顕著に残 る。		
542	〃	〃	-	(1.0)	9.2	にぶい橙 橙	やや 良好	やや密。雲母を 含む。	内面がミガキ、外面がナデ。高台を 貼付。	内面は剥離。	
543	〃	〃	-	(1.3)	9.0	にぶい黄橙 にぶい黄橙	良好	やや密。極細粒 砂を含む。	内面がミガキ、外面がナデ。高台を 貼付。		
544	〃	土師質土器 杯	13.0	3.4	7.6	にぶい黄橙 にぶい橙	やや 良好	密。赤色礫を含 む。	回転ナデ後、底部内面にナデ。回転 ヘラ切り。底部外面に板状圧痕が残 る。	摩耗する。	
545	〃	〃	12.1	3.4	7.3	にぶい黄橙 橙	やや 不良	密。赤色礫を含 む。	回転ナデで、底部内面にナデを加え る。回転ヘラ切り。底部外面に板状 圧痕が残る。	摩耗する。	
546	〃	〃	12.9	4.0	7.2	橙 橙	やや 不良	やや密。赤色礫 を多く含む。	回転ナデ。底部外面に板状圧痕が残 る。	著しく摩耗 する。	
547	〃	〃	-	(1.5)	7.6	橙 明赤褐	やや 良好	密。赤色礫を含 む。	回転ナデ。回転ヘラ切り。	著しく摩耗 する。	
548	〃	〃	-	(2.0)	7.4	にぶい橙 にぶい橙	良好	密。	回転ナデで、底部内面にナデを加え る。回転ヘラ切り。		
549	〃	〃	-	(1.9)	7.4	暗灰黄 明黄褐	やや 不良	やや密。	回転ナデ後、底部内外面にナデ。回 転ヘラ切り。		
550	〃	土師質土器 皿	-	(0.9)	12.0	にぶい橙 橙	良好	やや密。赤色礫 を多く含む。	外面が回転ナデ。回転ヘラ切り。	摩耗する。	
551	〃	〃	14.6	1.5	9.4	にぶい黄橙 にぶい黄橙	良好	密。	回転ナデ。回転ヘラ切り。		
552	〃	〃	12.8	1.8	8.6	橙 橙	不良	密。	回転ヘラ切り。	著しく摩耗 する。	
553	〃	〃	13.0	(1.8)	9.9	橙 にぶい橙	やや 良好	密。	回転ナデ。回転ヘラ切り。底部外面 に板状圧痕が残る。		
554	〃	〃	13.0	(1.7)	-	にぶい黄橙 にぶい黄橙	良好	密。	回転ナデ。回転ヘラ切り。		
555	〃	〃	12.8	1.9	8.4	橙 橙	やや 良好	密。	回転ナデで、底部内面にはナデを加 える。回転ヘラ切り。底部外面に板 状圧痕が残る。	底部外面に 輪状の黒斑 あり。	
556	〃	〃	12.1	1.3	7.4	にぶい黄橙 橙	やや 良好	密。	回転ナデ。	摩耗する。	
557	〃	〃	-	(2.5)	6.0	橙 橙	やや 良好	密。	回転ナデ。高台あり。	摩耗する。	
558	〃	土師器 甕	16.6	(8.3)	-	黄橙 黄橙	やや 良好	やや粗。チャー トと細粒砂を 多く含む。	口縁部外面はヨコナデ、胴部外面は ナデで指頭圧痕が残る。	著しく摩耗 する。	
559	〃	〃	17.0	(5.0)	-	浅黄橙 浅黄橙	良好	やや密。極細粒 砂を含む。	胴部内面がナデまたは横方向のハ ケ、口縁部がヨコナデ、胴部外面は 横方向のハケ後タタキ。		
560	〃	〃	19.0	(10.3)	-	浅黄橙 橙	やや 良好	やや粗。チャー ト、赤色礫、粗粒 砂を多く含む。	胴部内面が横方向のハケ、口縁部が ヨコナデ、胴部外面は横方向のハケ 後タタキ。	著しく摩耗 する。	

遺物観察表 29

図版 番号	出土地点	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面	焼成	胎土	調整及び特徴	備考
			口径	器高	底径					
561	SK-38	土師器 甕	18.0	(11.3)	-	にぶい黄橙 にぶい黄橙	不良	粗。チャート, 赤 色礫, 極粗粒砂 を多く含む。	内面がハケ, 口縁部がヨコナデ, 胴 部外面が横方向のハケ。	著しく摩耗 する。
562	〃	土師器 不明	-	(5.8)	(17.7)	にぶい黄橙 にぶい黄橙	良好	やや粗。チャー トと粗粒砂を 含む。	底部内面が強いナデ, 胴部が粗い ハケ, 高台はヨコナデ, 高台内はナ デ。高台あり。	
563	〃	黒色土器 椀	17.4	(2.9)	-	暗灰 にぶい黄橙	良好	やや密。赤色礫 と極細粒砂を 多く含む。	内面ミガキ。	A類。在地。 摩耗する。
564	〃	〃	-	(1.9)	6.6	- にぶい黄橙	やや 良好	やや密。石英を 含む。	体部外面が回転ナデ, 高台内はナ デ。高台あり。	A類。内面は 剥離する。 在地。
565	〃	〃	-	(1.1)	7.2	黒褐 にぶい黄橙	良好	やや密。	内面がミガキ, 高台内はナデ。高台 あり。	A類。在地。
566	〃	〃	-	(1.8)	7.3	黒褐 橙	やや 良好	密。石英と極細 粒砂を含む。	内面ミガキ。高台あり。	A類。在地。 摩耗する。
567	〃	〃	-	(1.2)	7.4	黒 にぶい黄橙	やや 良好	密。雲母を含 む。	内面ミガキ。高台あり。	A類。在地。 摩耗する。
568	〃	〃	-	(1.1)	8.1	暗灰 にぶい黄橙	やや 良好	密。	内面がミガキで, 高台内はナデ。高 台あり。	A類。在地。 内面は剥離 する。
569	〃	〃	-	(1.9)	8.5	黒褐 橙	やや 良好	やや密。	内面ミガキ。高台あり。	A類。在地。 摩耗する。
570	〃	〃	-	(1.9)	9.0	暗灰 橙	やや 良好	やや粗。石英と 細粒砂を含む。	内面ミガキ。高台あり。	A類。在地。 摩耗する。
571	SD-6	須恵器 蓋	14.6	(1.8)	-	にぶい黄橙 にぶい黄橙	やや 良好	やや密。	回転ナデ。	
572	SD-7	須恵器 杯	-	(1.5)	6.2	灰 灰	良好	密。	内面と体部外面が回転ナデ。回転ヘ ラ切り。	
573	〃	〃	-	(1.1)	8.0	暗灰黄 黒褐	良好	やや密。細粒砂 を含む。	回転ナデ後底部内面にナデ。高台内 はナデ。高台あり。	
574	〃	〃	-	(1.7)	10.8	黄灰 灰黄褐	やや 良好	密。	回転ナデ後底部内面にナデ。高台内 はナデ。高台あり。	
575	P-24	須恵器 蓋	14.4	(1.8)	-	にぶい黄橙 にぶい黄橙	やや 良好	密。細粒砂を多 く含む。	回転ナデで, 天井部内面にはナデを 加える。高台あり。	
576	〃	須恵器 杯	10.0	3.5	6.5	暗灰黄 黄灰	良好	密。	外面が回転ナデ, 高台内がナデ。高 台あり。	
577	P-25	須恵器 杯	-	(2.2)	9.6	灰 灰	良好	密。	回転ナデで, 底部内面にはナデを加 える。回転ヘラ切り。	
578	P-26	土師器 甕	-	(9.2)	38.6	にぶい黄橙 にぶい黄橙	良好	やや密。細粒砂 を含む。	外面がハケ後ナデ, 端部はヨコナ デ, 内面はナデ。	
579	SD-11	弥生土器 壺	-	(3.1)	6.0	橙 にぶい橙	良好	やや粗。チャー トと極粗粒砂 を含む。	胴部外面がハケ, 底部外面がナデ。	
580	SD-13	弥生土器 甕	-	(3.6)	-	橙 にぶい橙	良好	やや密。チャー トと細粒砂を 含む。	内面がハケ, 外面がタタキで一部ハ ケを加える。	

遺物観察表 30

図版 番号	出土地点	器種 器形	法量 (cm)			色調	焼成	胎土	調整及び特徴	備考
			口径	器高	底径	内面・外面				
581	SD-13	近世陶器 皿	-	(2.5)	4.4	釉調:緑灰 生地:灰白	良好	密。	内面には銅緑釉を施し、見込は蛇の 目釉ハギ。外面は灰釉。削り出し高 台。	肥前系。 (内野山)
582	々	石製品 磨石・叩石	全長 9.4	全幅 6.4	全厚 5.9	-	-	-	残存部で2面を使用。端部に敲打 痕、側面に擦痕がみられる。石材は 砂岩の河原石。	重量 600g。

圖 版



調査前風景(西より)



調査前風景(東より)



1区遺構検出状態(東より)



1区遺構完掘状態(東より)



2区遺構検出状態(西より)



2区遺構検出状態(東より)

図版4



2区遺構完掘状態(西より)



2区遺構完掘状態(東より)



3区上面遺構検出状態(南より)



3区上面遺構完掘状態(南より)



3区下面遺構検出状態(南より)



3区下面遺構完掘状態(南より)



4区遺構検出状態(東より)



4区遺構完掘状態(東より)



5区遺構検出状態(南西より)



5区遺構完掘状態(南西より)



6区遺構完掘状態(西より)



調査区西部下層確認トレンチ(西より)



調査区西部北壁セクション(南より)



調査区中央部北壁セクション(南より)



ST-1完掘状態(南東より)



ST-1セクション(南より)



ST-2完掘状態(南より)



ST-4・5・11完掘状態(南東より)



ST-4完掘状態(南東より)



ST-6・7完掘状態(南より)



ST-8完掘状態(南より)



ST-8セクション(南より)



ST-8炭化物出土状態(南西より)



ST-9完掘状態(南西より)



ST-10完掘状態(南より)



ST-10セクション(南より)



SX-3完掘状態(東より)



SX-3カマド遺物出土状態(東より)



ST-10カマド完掘状態(南より)



ST-10カマド遺物出土状態(南より)



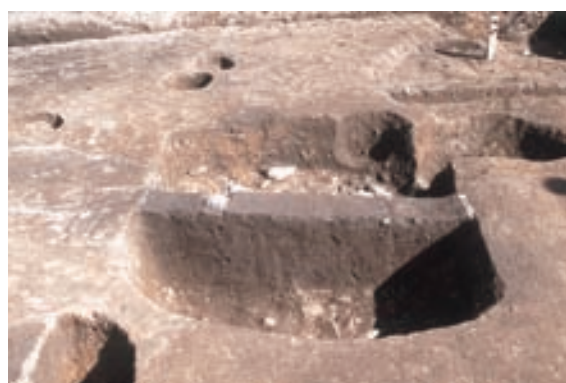
ST-4セクション(南より)



ST-6セクション(南より)



SK-35(東より)



SK-35セクション(西より)



SD-3(北より)



SD-1セクション(西より)



SD-7セクション(南より)



SD-10セクション(南東より)



ST-11 カマド袖石検出状態(南より)



SX-3 P-1 半裁状態(南より)



SX-4 カマド検出状態(東より)



中央部・東部第Ⅵ層弥生土器甕(18)出土状態



中央部・東部第Ⅵ層土師質土器杯(63)出土状態



中央部・東部第Ⅶ層弥生土器鉢(101)出土状態



ST-1 弥生土器鉢(149)出土状態



ST-1 土師器器台(157)出土状態



ST-1 弥生土器鉢(206) 出土狀態



ST-1 鉄鏃(217) 出土狀態



ST-1 弥生土器鉢(219) 出土狀態



ST-2 弥生土器甕(224) 出土狀態



ST-2 弥生土器鉢(227) 出土狀態



ST-2 弥生土器鉢(228) 出土狀態



ST-2 弥生土器鉢(229) 出土狀態



ST-2 弥生土器甕(232) 出土狀態



ST-2 弥生土器鉢(240) 出土状態



ST-2 土師器鉢(242) 出土状態



ST-2 P-1 弥生土器(243 ~ 245) 出土状態



ST-2 P-1 弥生土器手捏ね土器(246) 出土状態



ST-3 弥生土器壺(247) 出土状態



ST-3 弥生土器(248 ~ 250) 出土状態



ST-4 鉄鏃(272) 出土状態



ST-4 P-1 弥生土器甕・鉢(273・275・276) 出土状態



ST-5 弥生土器甕(286)出土状态



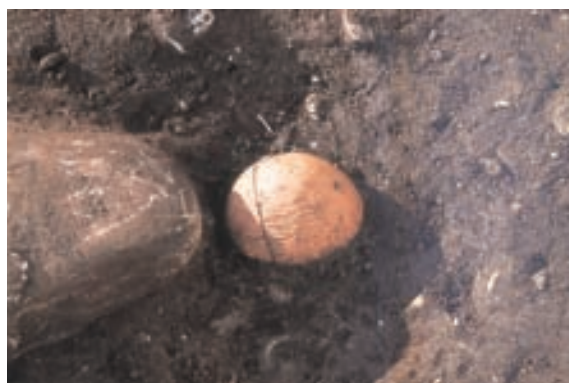
ST-5 弥生土器高杯(290)出土状态



ST-6 弥生土器鉢(301)出土状态



ST-7 弥生土器壺(306)出土状态



ST-7 弥生土器鉢(335)出土状态



ST-8 弥生土器鉢(353)出土状态



ST-8 弥生土器鉢(361 ~ 363)出土状态



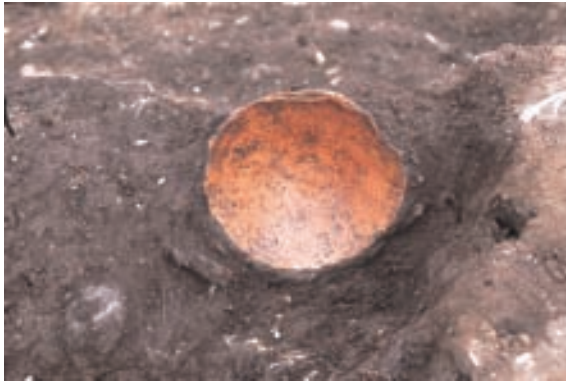
ST-8 P-1 弥生土器鉢(364)出土状态



ST-8 P-15 弥生土器鉢(368・369)出土状態



ST-9 弥生土器甕・鉢(371・377)出土状態



ST-9 弥生土器鉢(376)出土状態



ST-9 土師器壺(378)出土状態



ST-9 鉄鏃(380)出土状態



P-10 土師器鉢(436)出土状態



P-18 土師器鉢(444)出土状態



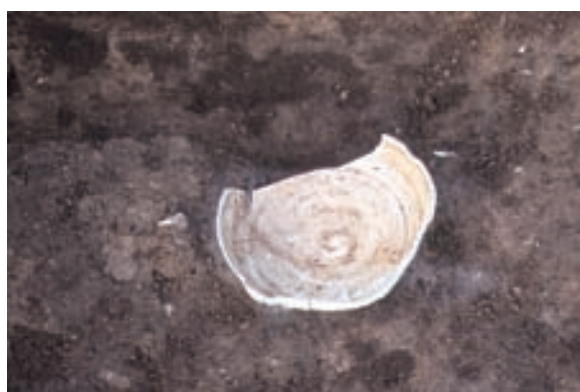
ST-10 須恵器杯(456)出土状態



ST-10 須恵器高杯(459) 出土状態



ST-10 須恵器甕(471) 出土状態



ST-10 須恵器蓋(480) 出土状態



ST-10 須恵器蓋・甕(481・484) 出土状態



ST-10 須恵器高杯(488) 出土状態



ST-10 カマド土師器甕・高杯(489~491) 出土状態1



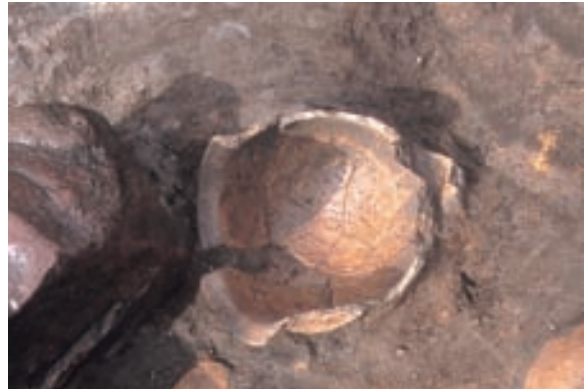
ST-10 カマド土師器甕・高杯(489~491) 出土状態2



SD-5 弥生土器甕(504・505) 出土状態



SX-3 土師器甕(514) 出土状態



SX-3 土師器甕(515) 出土状態



SX-3 土師器高杯(517) 出土状態



P-19 須恵器杯(520) 出土状態



SK-35 土師器盤(527) 出土状態



SK-38 土師質土器杯(546) 出土状態



SK-38 土師器甕・土師質土器杯出土状態



P-25 須恵器杯(577) 出土状態



弥生土器(壺)



黑色土器(碗)



弥生土器(甕)



弥生土器(甕), 土師器(高杯)



弥生土器(壺・鉢), 土師器(器台), 須恵器(蓋・高杯)



弥生土器(壺・甕・高杯), 土師器(器台), 土製品(杓子形土器)



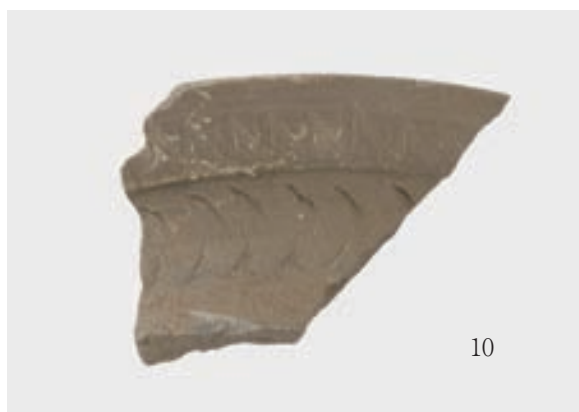
弥生土器(壺・高杯), 土師器(器台)



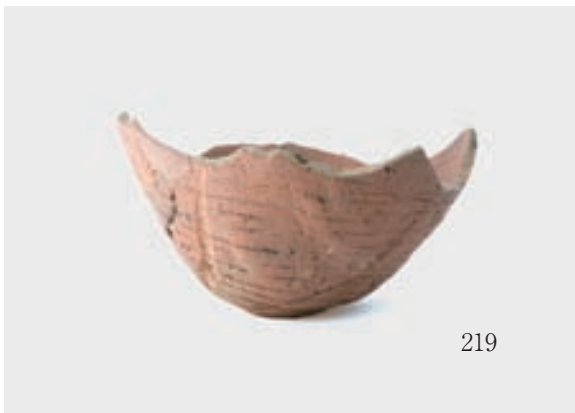
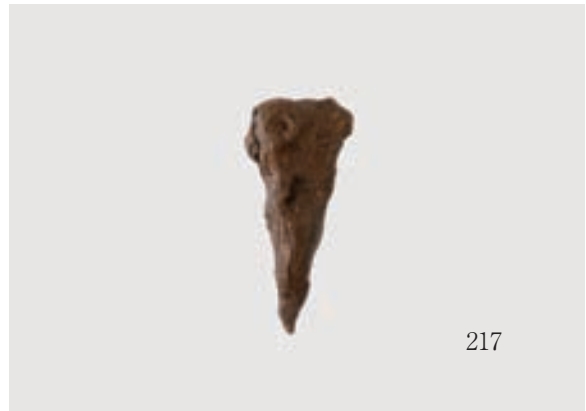
弥生土器(壺・甕), 土師器(甕), 須恵器(甗), 鉄製品(鉄鏃)



弥生土器(甕), 土師器(甕・高杯・甑)



弥生土器(壺・鉢), 須恵器(壺), 土師質土器(蓋・杯), 黒色土器(鉢)



弥生土器(鉢), 土師器(高杯), 鉄製品(鉄鏃)



弥生土器(鉢・手捏ね土器), 土師器(鉢)



弥生土器(鉢・手捏ね土器), 土師器(高杯), 石製品(石包丁), 鉄製品(鉄鋏)



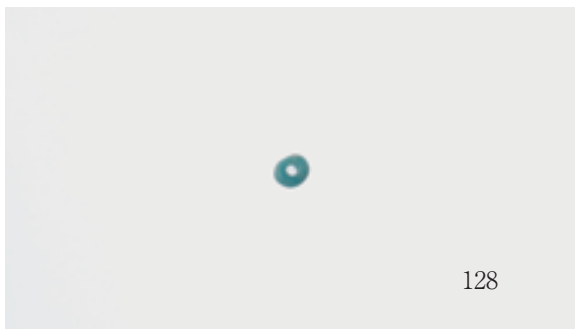
弥生土器(壺・鉢)



弥生土器(壺・鉢)



弥生土器(壺・甕・鉢), 土師器(鉢・高杯), 須恵器(壺・甕)



弥生土器(壺・鉢・高杯・手捏ね土器・ミニチュア土器), 土製品(土錘), ガラス製品(小玉)



弥生土器(甕・鉢), 土師器(鉢), 土製品(有孔円盤・支脚)



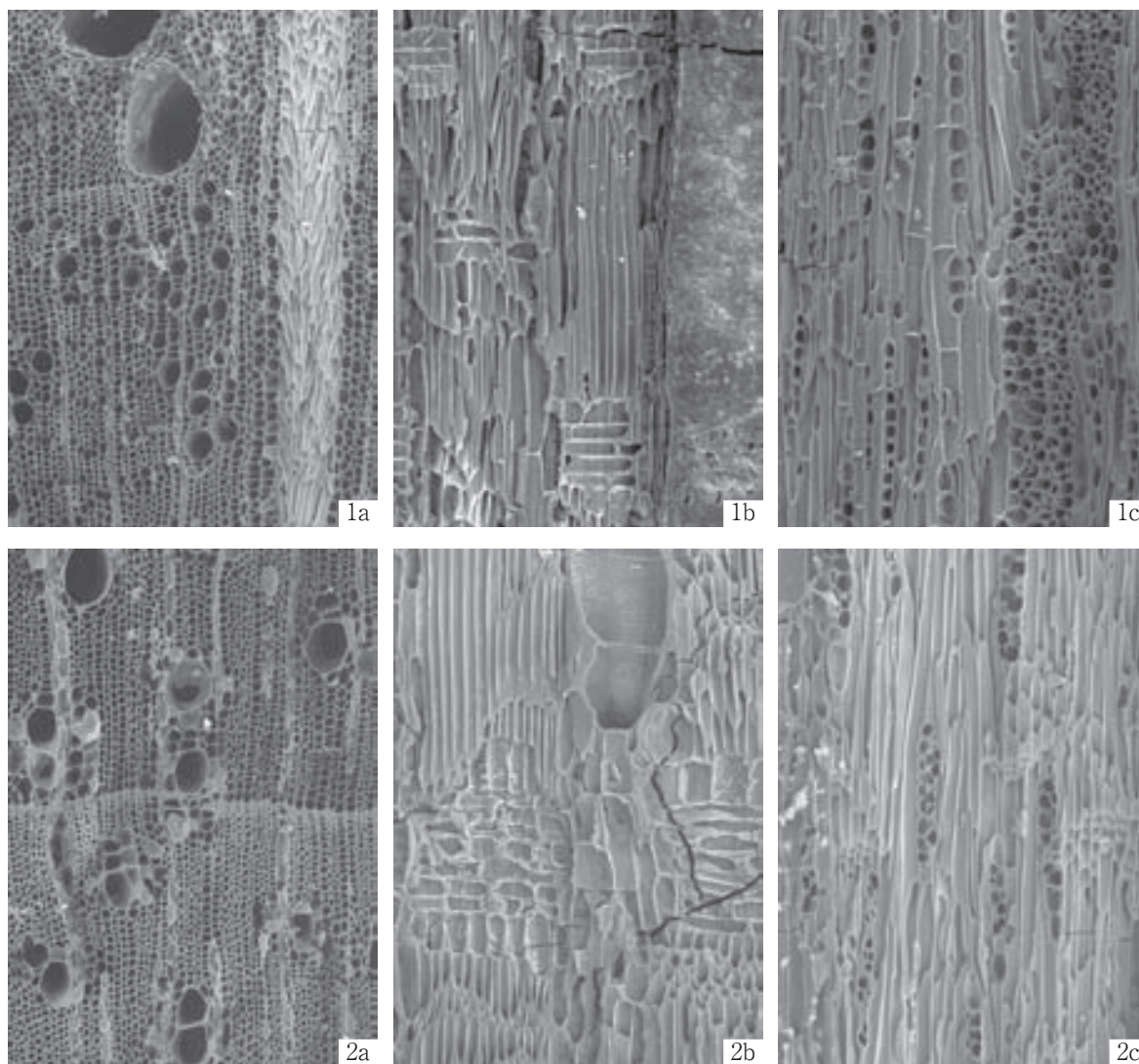
弥生土器(鉢・手捏ね土器), 土師器(鉢), 土製品(土錘)



弥生土器(壺・ミニチュア土器), 土師器(甑), 須恵器(蓋・杯), 鉄製品(短刀)



弥生土器(鉢), 須恵器(蓋・杯・甕), 土師質土器(杯・皿), 鉄製品(刀子)



1. ツブラジイ (No.2)
2. クスノキ科 (No.3)
a: 木口, b: 柁目, c: 板目

200 μ m:a
200 μ m:b,c

炭化材

報告書抄録

ふりがな	ふしはらいせきいち							
書名	伏原遺跡 I							
副書名	都市計画道路高知山田線発掘調査報告書							
巻次	I							
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第108集							
編著者名	徳平涼子							
編集機関	(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター							
所在地	高知県南国市篠原 1437-1							
発行年月日	2010年1月25日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 〃〃	東経 〃〃	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ふしはらいせき 伏原遺跡	〒782-0051 高知県 香美市 土佐山田町 楠目	39323	190119	33° 36' 29"	133° 41' 39"	2006.10.16 } 2007.2.19	1,593㎡	都市計画道路高知山田線建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
伏原遺跡	集落跡	弥生時代	竪穴式住居跡 土坑 溝跡	9棟 30基 2条	弥生土器 土製品 ガラス玉	弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての竪穴式住居跡からは阿波や讃岐からの搬入品が出土している。古墳時代後期の竪穴式住居跡はカマド跡を伴っており、前袖石が残存していた。カマド跡からは土師器の甕や高坏、甌が出土している。		
		古墳時代	竪穴式住居跡 土坑 溝跡	2棟 4基 3条	土師器 須恵器			
		古代	土坑 溝跡	4基 4条	土師器 土師質土器 須恵器 黒色土器			
		近世	土坑 溝跡	2基 4条	陶器 磁器			
要約	弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての竪穴式住居跡9棟を確認した。竪穴式住居跡は円形が1棟、方形が5棟、多角形を呈するものが3棟みられた。多角形を呈する住居跡は五角形が2棟と六角形を呈するとみられるものが1棟である。五角形の住居跡からは杓子形土器が出土している。古墳時代後期の竪穴式住居跡は2棟確認し、カマド跡を伴っていた。古代は掘立柱建物跡や幅2mを測る溝跡、焼土を伴う土坑を確認した。							

本書作成データ

システム：MacOS X (10.5.8)

ソフト：Adobe Photoshop®10.0.1, Adobe Illustrator®13.0.3, Adobe Indesign®5.0.4など

フォント：モリサワOTF基本7書体, MS明朝標準, Times New RomanItalic

データ：図版以外はすべてデジタルデータで入稿

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第108集

伏原遺跡 I

都市計画道路高知山田線発掘調査報告書 I

2010年1月25日

発行 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

高知県南国市篠原1437-1

Tel. 088-864-0671

印刷 株式会社 飛鳥

伏原遺跡 I

付 図

X=67,820m

67,800m

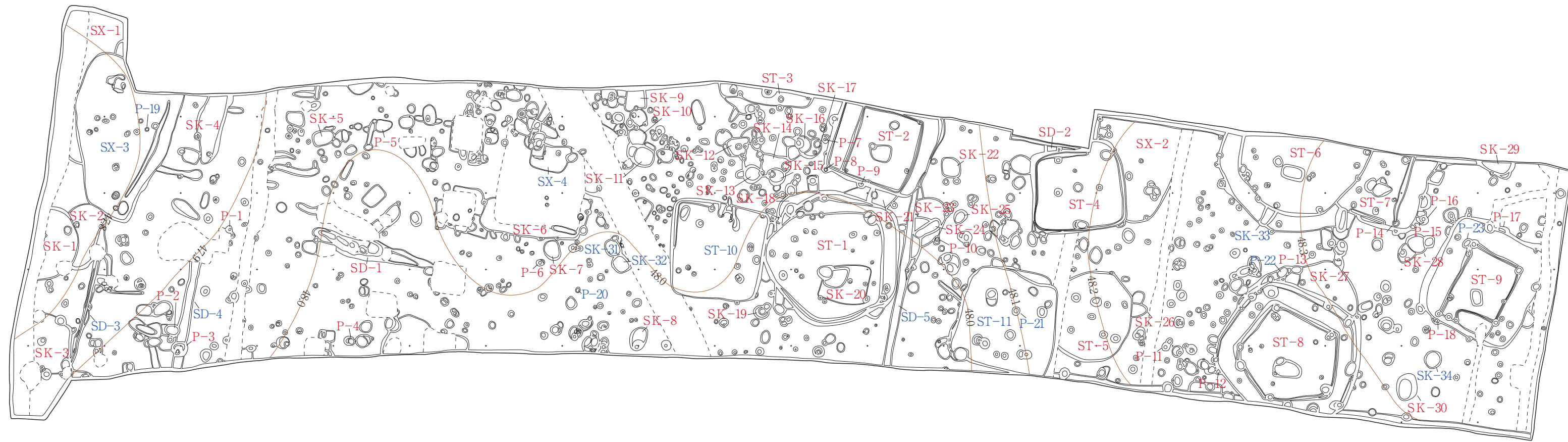
Y=17,880m

17,900m

17,920m

17,940m

17,960m



遺構番号 赤字：弥生時代～古墳時代初頭 青字：古墳時代後期

付図1 伏原遺跡 I 区弥生時代・古墳時代遺構平面図 (S=1/200)

X=67,820m —

67,800m —

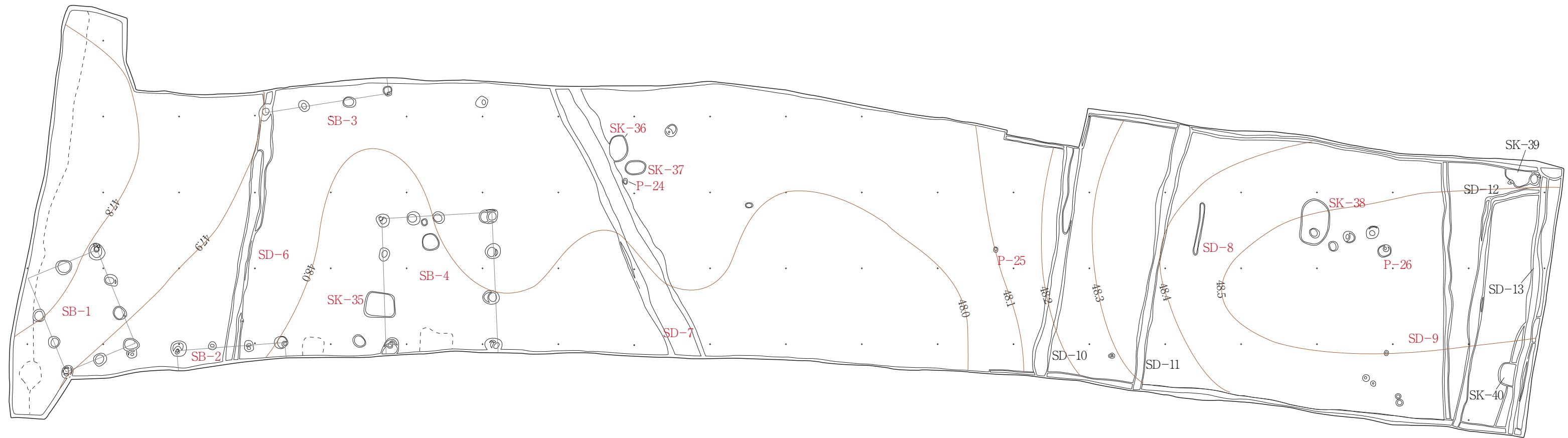
Y=17,880m

17,900m

17,920m

17,940m

17,960m



遺構番号 赤字：古代 黒字：近世

付図2 伏原遺跡 I 区古代・近世遺構平面図 (S=1/200)